

一般国道10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集

上唐原遺跡

II

福岡県築上郡大平村所在上唐原遺跡の調査2

1996

福岡県教育委員会

一般国道10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集

上唐原遺跡

II

福岡県築上郡大平村所在上唐原遺跡の調査2



上唐原遺跡縄文1号住居跡



2a 縄文2号住居跡出土の縄文土器



2b 不整形竪穴出土の石斧類

序

福岡県教育委員会は、建設省北九州工事事務所の委託を受けて、一般国道10号豊前バイパス建設予定地に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和62年度以降実施してまいりました。

豊前バイパス関係の現地での発掘調査は平成6年度に無事完了し、バイパスは平成7年度春に全面開通して一般供与されましたが、本書での報告は昭和63年度に実施した築上郡大平村大字上唐原所在の上唐原遺跡の発掘調査についてのもので、重複した遺構群の下層分をまとめています。

発掘調査の記録としては、すべてを網羅できるものではありませんが、本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、文化財愛護思想の普及、さらには学術研究における活用の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々のご協力を頂いた建設省北九州工事事務所、大平村教育委員会、地元の方々をはじめ関係各位に、深く感謝いたします。

平成8年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光 安 常 喜

例 言

1. 本書は、福岡県教育委員会が建設省北九州工事事務所から委託を受けて、昭和62年度から63年度に発掘調査を行った、築上郡大平村に所在する上唐原遺跡についての調査成果の一部を「一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告」の第5集として取りまとめたものであり、上唐原遺跡のうち、おもに昭和63年度に実施した、下層の縄文時代関係の遺構・遺物を収録した。したがって、既に刊行した第2集の「上唐原遺跡」Iと同一遺跡であり、本書を「上唐原遺跡」IIとするが、本遺跡に関してはこの2冊で完了する。
2. 出土遺物は、県教育庁文化課太宰府事務所および九州歴史資料館において整理したが、実施にあたり岩瀬正信・豊福弥生・平田春美の協力を得た。
3. 掲載写真のうち、遺構写真と遺物写真の殆どを小池史哲が撮影したが、遺物写真撮影では九州歴史資料館写真室の石丸 洋・北岡伸二の協力を得た。なお、空中写真は(有)空中写真企画に撮影委託したものがある。
4. 挿図のうち、遺構実測図は調査担当の小池と有島聖一、植田由美が実測し、遺物実測図は小池が大部分を、平田・岡由美子・田中典子・堀江圭子・棚町陽子・久富美智子・坂田順子・藤原さとみ・江口幸子・堀之内久美子・山本千鶴美・星野恵美が一部分を担当した。また図面の浄書には豊福・原カヨ子の助力を、図面等の整理には関 久江・土山真弓美の助力を得た。
5. 付編として、築上郡椎田町所在の山崎遺跡の複式炉使用土器について報告する。
6. 挿図で使用する方位は、座標北に統一している。
7. 本書の執筆分担は、IVを松谷暁子が執筆した以外は、執筆・編集を小池史哲が担当した。

本文目次

かみとうばる 上唐原遺跡の調査II

I	調査組織と調査の経過	1
II	遺跡の位置と環境	7
III	遺構と遺物	11
1.	住居跡	12
2.	不整形竪穴	84
3.	土坑	93
4.	包含層出土の遺物	104
IV	上唐原遺跡試料の灰像分析	145
V	おわりに	149
付	福岡県椎田町山崎遺跡の複式炉使用土器	155

図 版 目 次

巻頭図版 1 上唐原遺跡縄文 1 号住居跡

2a 縄文 2 号住居跡出土の縄文土器

2b 不整形竪穴出土の石斧類

本文対照頁

図版 1	上唐原遺跡周辺航空写真 (国土地理院提供、KU-92-2XC5-11)	1
2-1	上唐原遺跡東半部全景空中写真 (西上空から)	11
-2	東半部全景 (南上空から)	11
3-1	縄文 1 号住居跡全景 (北上空から)	12
-2	縄文 1 号住居跡全景 (北東から)	12
4-1	縄文 1 号住居跡石囲炉	12
-2	縄文 1 号住居跡石囲炉下部敷石	12
-3	縄文 1 号住居跡遺物出土状況 1	14
5	縄文 1 号住居跡遺物出土状況 2	14
6	縄文 1 号住居跡出土土器 1	16
7	縄文 1 号住居跡出土土器 2	16
8	縄文 1 号住居跡出土土器 3	16
9	縄文 1 号住居跡出土石器 1	35
10	縄文 1 号住居跡出土石器 2・土製品	35
11-1	縄文 2 号住居跡 (北から)	40
-2	縄文 2 号住居跡遺物出土状況 1	41
12-1	縄文 2 号住居跡石囲炉 (北から)	40
-2	縄文 2 号住居跡遺物出土状況 2	41
13	縄文 2 号住居跡出土土器 1	42
14	縄文 2 号住居跡出土土器 2	42
15	縄文 2 号住居跡出土土器 3	42
16	縄文 2 号住居跡出土土器 4	42
17	縄文 2 号住居跡出土土器 5	42
18	縄文 2 号住居跡出土石器 1	67
19	縄文 2 号住居跡出土石器 2	67
20	縄文 2 号住居跡出土石器 3・土製品	67

図版 21-1	不整形竪穴（南西から）	84
- 2	1号土坑（北西から）	93
- 3	1号土坑土製品出土状況	93
22	不整形竪穴出土土器	84
23	不整形竪穴出土石器1	90
24	不整形竪穴出土石器2、1号土坑出土土器・石器・土製品	90
25	2号土坑出土土器、包含層出土土器1	97
26	包含層出土土器2	104
27	包含層出土土器3	104
28	包含層出土土器4・土製品	104
29	包含層出土石器1	123
30	包含層出土石器2	123
31	包含層出土石器3	123
32	包含層出土石器4	123
33	包含層出土石器5	132
34	包含層出土石器6	132
35	包含層出土石器7	134
I 写真	豊前バイパス開通後の上唐原遺跡付近（1995.7撮影）	4
IV 写真1	試料1から検出された不定形の珪酸体	147
	2 試料2から検出された不定形の珪酸体	147
	3 試料3から検出された不定形の珪酸体	147
	4 試料4から検出された不定形の珪酸体	147
	5 試料5から検出された不定形の珪酸体	147
	6 試料6から検出された不定形の珪酸体	147
	7a 試料7から検出されたイネ籾殻類似の灰像	147
	7b 試料7から検出されたイネ藁類似の灰像	147
付 写真a	山崎遺跡2号住居跡	159
	b 2号住居跡の複式炉	159
	c 複式炉使用土器	159

挿 図 目 次

第 1 図	豊前バイパス路線図 (1:500000、道路施設協会「九州自動車道」1994.10を改変)	…1
第 2 図	豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡 (1/20000)	…2
第 3 図	上唐原遺跡地形図 (1/2000)	…折り込み
第 4 図	周辺の遺跡分布図 (1/50000)	…8
第 5 図	地区割図 (1/1500)	…10
第 6 図	遺構配置概略図 (1/1200)	…10
第 7 図	基本土層図 (1/40)	…11
第 8 図	遺構配置図 (1/400)	…折り込み
第 9 図	縄文 1 号住居跡実測図 (1/60)	…13
第 10 図	縄文 1 号住居跡石囲炉実測図 (1/30)	…14
第 11 図	縄文 1 号住居跡遺物出土状況実測図 (1/40)	…15
第 12 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	…17
第 13 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	…18
第 14 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 3 (1/3)	…19
第 15 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 4 (1/3)	…21
第 16 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 5 (1/3)	…23
第 17 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 6 (1/3)	…24
第 18 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 7 (1/3)	…25
第 19 図	縄文 1 号住居跡出土土器拓影 (1/3)	…26
第 20 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 8 (1/3)	…27
第 21 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 9 (1/3)	…28
第 22 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 10 (1/3)	…30
第 23 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 11 (1/3)	…31
第 24 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 12 (1/3)	…32
第 25 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 13 (1/3)	…33
第 26 図	縄文 1 号住居跡出土土器実測図 14 (1/3)	…34
第 27 図	縄文 1 号住居跡出土石器実測図 1 (1/3)	…36
第 28 図	縄文 1 号住居跡出土石器実測図 2 (1/3)	…37
第 29 図	縄文 1 号住居跡出土石器実測図 3 (2/3)	…38
第 30 図	縄文 1 号住居跡出土石器実測図 4 (1/5)	…39

第31 図	縄文1号住居跡出土土製品実測図 (1/3)	40
第32 図	縄文2号住居跡実測図 (1/60)	41
第33 図	縄文2号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	43
第34 図	縄文2号住居跡出土土器実測図2 (1/4)	44
第35 図	縄文2号住居跡出土土器実測図3 (1/3)	45
第36 図	縄文2号住居跡出土土器実測図4 (1/3)	46
第37 図	縄文2号住居跡出土土器実測図5 (1/3)	47
第38 図	縄文2号住居跡出土土器実測図6 (1/3)	48
第39 図	縄文2号住居跡出土土器実測図7 (1/3)	49
第40 図	縄文2号住居跡出土土器拓影1 (1/3)	51
第41 図	縄文2号住居跡出土土器拓影2 (1/3)	52
第42 図	縄文2号住居跡出土土器実測図8 (1/3)	53
第43 図	縄文2号住居跡出土土器実測図9 (1/3)	54
第44 図	縄文2号住居跡出土土器実測図10 (1/3)	56
第45 図	縄文2号住居跡出土土器実測図11 (1/3)	57
第46 図	縄文2号住居跡出土土器実測図12 (1/3)	58
第47 図	縄文2号住居跡出土土器実測図13 (1/3)	60
第48 図	縄文2号住居跡出土土器実測図14 (1/3)	61
第49 図	縄文2号住居跡出土土器実測図15 (1/3)	62
第50 図	縄文2号住居跡出土土器実測図16 (1/3)	63
第51 図	縄文2号住居跡出土土器実測図17 (1/3)	65
第52 図	縄文2号住居跡出土土器実測図18 (1/3)	66
第53 図	縄文2号住居跡出土石器実測図1 (1/3)	68
第54 図	縄文2号住居跡出土石器実測図2 (1/3)	69
第55 図	縄文2号住居跡出土石器実測図3 (1/3)	70
第56 図	縄文2号住居跡出土石器実測図4 (2/3)	70
第57 図	縄文2号住居跡出土石器実測図5 (1/3)	71
第58 図	縄文2号住居跡出土石器実測図6 (1/5)	72
第59 図	縄文2号住居跡出土土製品実測図1 (1/3)	73
第60 図	縄文2号住居跡出土土製品実測図2 (1/3)	74
第61 図	不整形竪穴実測図 (1/50)	84
第62 図	不整形竪穴出土土器実測図1 (1/3)	85
第63 図	不整形竪穴出土土器実測図2 (1/3)	86

第 64 图	不整形竖穴出土土器实测图 3 (1/3)	88
第 65 图	不整形竖穴出土土器实测图 4 (1/3)	89
第 66 图	不整形竖穴出土土器实测图 1 (1/3)	91
第 67 图	不整形竖穴出土土器实测图 2 (1/3)	92
第 68 图	不整形竖穴出土土器实测图 3 (2/3)	93
第 69 图	不整形竖穴出土土製品实测图 (1/3)	93
第 70 图	1 号土坑实测图 (1/50)	94
第 71 图	1 号土坑出土土器实测图 1 (1/3)	95
第 72 图	1 号土坑出土土器实测图 2 (1/3)	96
第 73 图	1 号土坑出土石器实测图 (2/3 · 1/2)	96
第 74 图	1 号土坑出土土製品实测图 (1/3)	96
第 75 图	2 号土坑出土土器实测图 1 (1/3)	98
第 76 图	2 号土坑出土土器实测图 2 (1/3)	99
第 77 图	2 号土坑出土土器实测图 3 (1/3)	101
第 78 图	包含層出土土器实测图 1 (1/3)	105
第 79 图	包含層出土土器实测图 2 (1/3)	106
第 80 图	包含層出土土器实测图 3 (1/3)	107
第 81 图	包含層出土土器实测图 4 (1/3)	108
第 82 图	包含層出土土器拓影 (1/3)	109
第 83 图	包含層出土土器实测图 5 (1/3)	111
第 84 图	包含層出土土器实测图 6 (1/3)	112
第 85 图	包含層出土土器实测图 7 (1/3)	114
第 86 图	包含層出土土器实测图 8 (1/3)	116
第 87 图	包含層出土土器实测图 9 (1/3)	118
第 88 图	包含層出土土器实测图 10 (1/3)	119
第 89 图	包含層出土土器实测图 11 (1/3)	120
第 90 图	包含層出土土器实测图 12 (1/3)	122
第 91 图	包含層出土石器实测图 1 (1/3)	124
第 92 图	包含層出土石器实测图 2 (1/3)	125
第 93 图	包含層出土石器实测图 3 (1/3)	126
第 94 图	包含層出土石器实测图 4 (1/3)	127
第 95 图	包含層出土石器实测图 5 (1/3)	128
第 96 图	包含層出土石器实测图 6 (1/3)	129

第97図	包含層出土石器実測図7 (1/3)	130
第98図	包含層出土石器実測図8 (1/3)	131
第99図	包含層出土石器実測図9 (1/3)	132
第100図	包含層出土石器実測図10 (2/3)	133
第101図	包含層出土石器実測図11 (1/3)	134
第102図	包含層出土石器実測図12 (1/3)	135
第103図	包含層出土石器実測図13 (1/3)	136
第104図	包含層出土土製品実測図1 (1/3)	137
第105図	包含層出土土製品実測図2 (1/3)	137
第106図	打製石斧の着柄想定図 (渡辺誠編1975より引用)	151
付. 図1	山崎・石町遺跡の縄文時代住居跡群 (1/500)	155
図2	山崎遺跡2号住居跡実測図 (1/100)	156
図3	2号住居跡複式炉実測図 (1/40)	156
図4	複式炉使用土器実測図・拓影 (1/3)	157

表 目 次

表1	10号線豊前バイパス関係遺跡一覧表	3
表2	縄文1号住居跡出土土器観察表	76
表3	縄文1号住居跡出土石器一覧表	78
表4	縄文1号住居跡出土土器片円盤一覧表	78
表5	縄文2号住居跡出土土器観察表	79
表6	縄文2号住居跡出土石器一覧表	81
表7	縄文2号住居跡出土土器片円盤一覧表	82
表8	不整形竪穴・土坑出土土器観察表	102
表9	不整形竪穴・土坑出土石器一覧表	103
表10	不整形竪穴出土土器片円盤一覧表	103
表11	包含層出土土器観察表	138
表12	包含層出土石器一覧表	140
表13	包含層出土土器片円盤一覧表	143
表14	上唐原遺跡と周辺遺跡出土石器の器種構成比	153

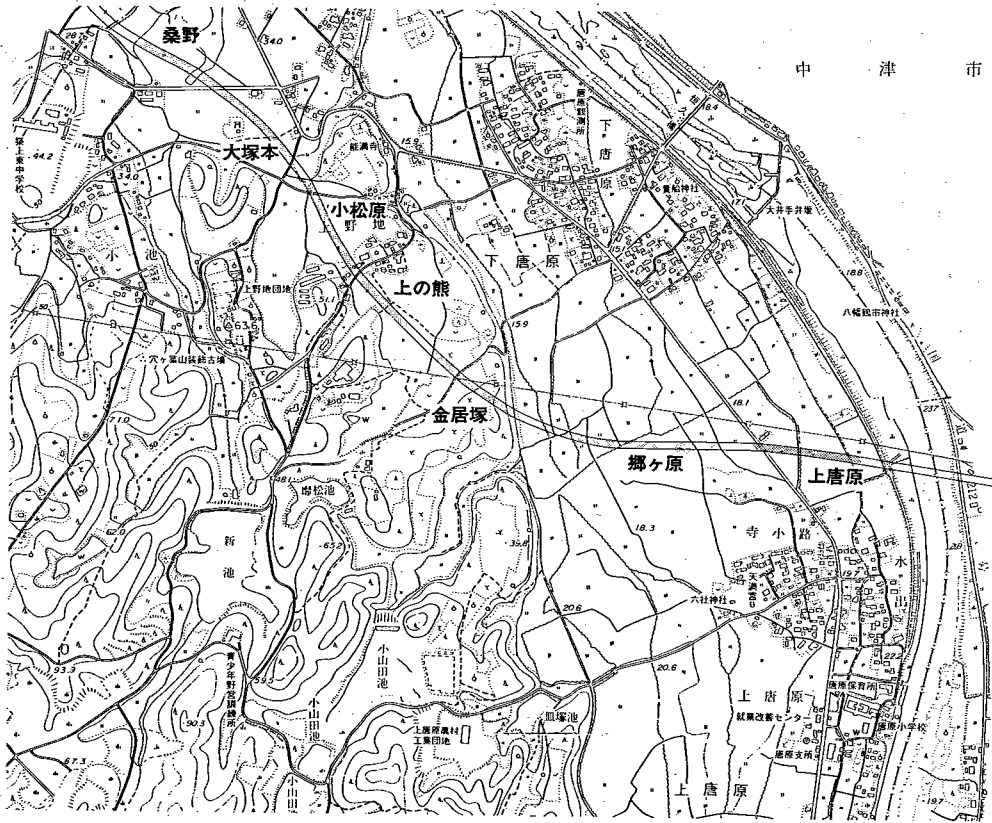
I 調査組織と調査の経過

調査の経過

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局北九州工事事務所の委託を受けて、一般国道10号豊前バイパス(新吉富村大字大瀬～大平村大字上唐原、4.44km、平均復員25m)建設地内の埋



第1図 豊前バイパス路線図 (1 : 500000、道路施設協会「九州自動車道」1994.10を改変)



第2図 豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡 (1/20000)

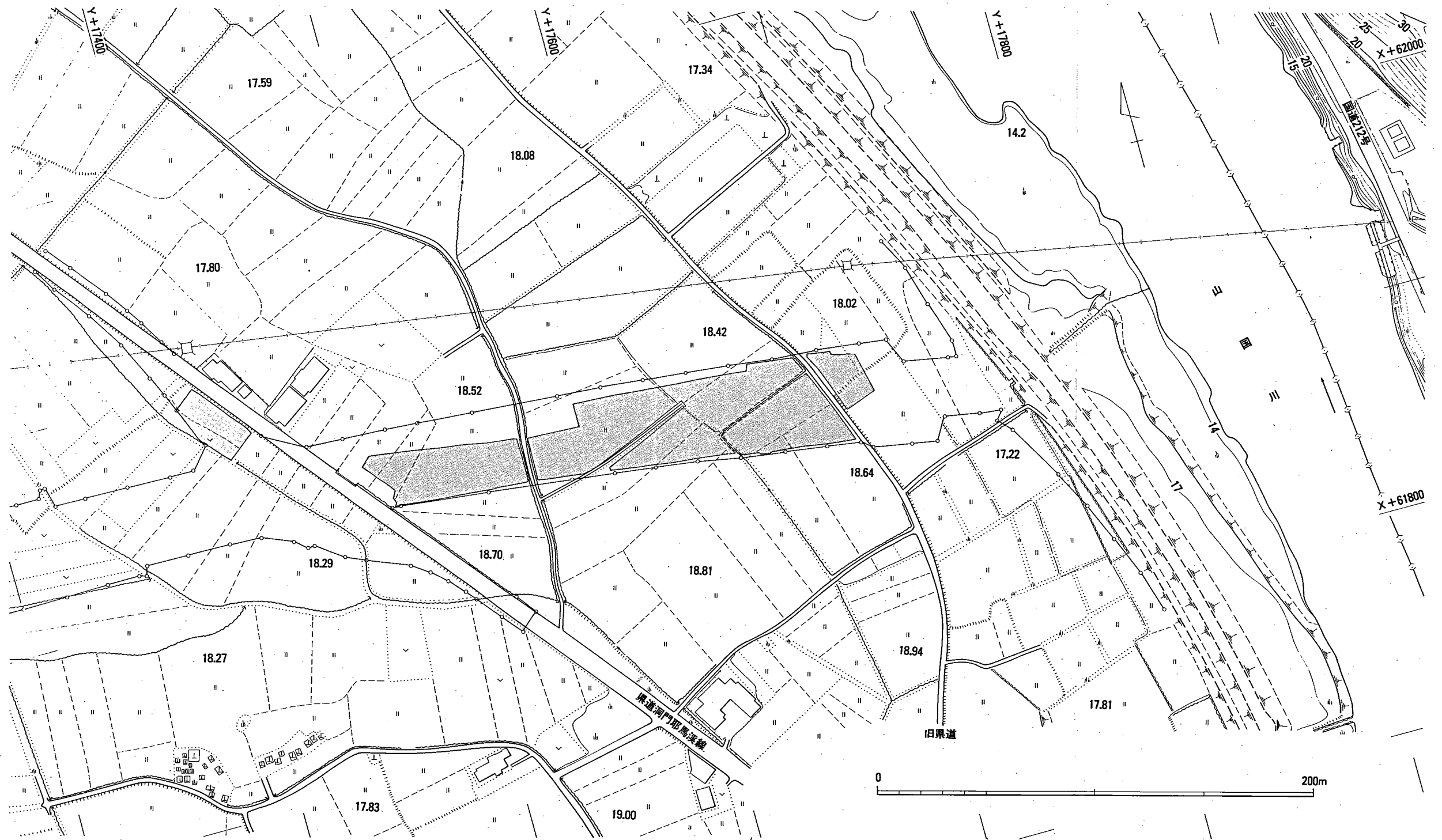
蔵文化財調査を、昭和62年度から平成6年度に実施した。

豊前バイパス建設地内のうち最も早く用地が解決した大平村大字上唐原の部分については、昭和62年秋から文化財調査を開始したが、縄文時代から奈良時代の遺構・遺物が集中する部分を「上唐原遺跡」として全面発掘調査することになり、その概略については「一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集の、上唐原遺跡Iに記載したとおりで、一部土地収容法関係地分と重複した下層遺構については、昭和63年度に継続して調査を実施した。

昭和62年度の調査担当者の小池は、63年度に記念物係へ移動して5月中旬から3ヶ月間の大韓民国文化財研究所出張の予定ながらも、引き続き担当して、約1ヶ月間の予定で実施した。

縄文時代の遺物は、I区～IV区で既に遺構検出面から出土していて、縄文時代の遺構が存在することが予想され、3月の中旬には臆気ながらも縄文1号住居跡のプランが確認できた。しかし、弥生～古墳時代の遺構の調査がかなり残っていて先に済ませる必要があり、VI区の調査もあったために、この住居跡の掘り下げは3月28日から本格的にとりかかった。

4月15日 縄文1号住居跡は床面まで掘り下げが終わり、出土状況の実測を始める。



第3図 上唐原遺跡地形図 (1/2000)

表1 一般国道10号 豊前バイパス関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	分布面積(m ²)	調査			積			報告書	
					62年度	平成元	2	3	4	5		6
1-A		新吉富村垂水	弥生～古墳 集落	40,000								
1-B	池ノ口遺跡	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落						4,000	3,500	2,000	3
1-C		新吉富村垂水	弥生～古墳 集落						3,200	1,800		3
1-D	三ツ溝遺跡	新吉富村垂水	古墳～平安 集落					3,500				
1-E	長田遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落						5,000	1,900		
1-F	宇野垂水遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落						4,000	500		
1-G	竹ノ下遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落						3,000		500	
1-H	宇野代遺跡	新吉富村垂水	縄文～平安 集落・墓地他						2,000	5,000		1
2-A	上桑野遺跡	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落・墓地	4,000					700	9,000		
2-B	上桑野遺跡	新吉富村垂水	近世	1,600					1,600			
3	桑野遺跡	大平村下唐原	弥生 集落	4,800					4,800			
4	大塚本遺跡	大平村下唐原	縄文～江戸 集落・墓地他	16,000					18,000			
5	小松原遺跡	大平村下唐原	縄文～近世	11,200					10,000			
6	上の熊遺跡	大平村下唐原	旧石器～古墳? 集落他	4,500					4,500			
7	金居塚遺跡 (旧カネツキ)	大平村下唐原	縄文～江戸 集落・墓地他	14,000				13,000				4
8-A	上唐原遺跡	大平村上唐原	縄文・弥生～奈良 集落	18,000	10,000	2,000						2・5
8-B	郷ヶ原遺跡	大平村下唐原	弥生～古墳 集落	6,500				6,500				
計				120,600	10,000	2,000	6,500	13,000	39,600	21,700	14,300	4,900

4月22日 縄文1号住居跡をほぼ完掘し、清掃して写真撮影を実施する。

4月24日 全景空中写真を撮影した。

4月27～30日 高橋氏が調査に加わり実測作業が進むなか、住居跡床面の精査を進める。

4月28日 縄文1号住居跡炉跡を実測する。

4月30日 縄文2号住居跡の遺物出土状況を撮影する。

5月2日 8b地点を試掘する。上唐原遺跡との間は落ち込みになって、氾濫原のような部分もあるが、自然堤防状の部分があり、上唐原遺跡と同様に住居跡や溝が確認された。

縄文2号住居跡は完掘できないまま終了せざるを得ず、実測し、器材の大半と出土遺物を撤収する。

5月6日 器材を完全に撤収し、調査を終了する。

調査を終了した部分は、工事が着手され、平成2年には0.3km間が一般供与された。また、豊前バイパスは平成7年3月下旬に全面開通している。

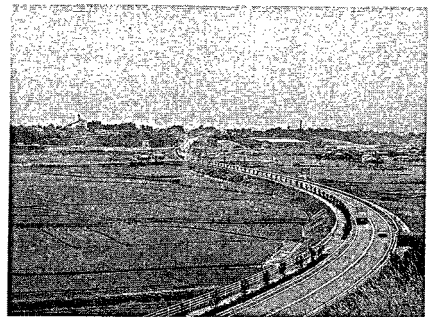
昭和63年度の調査関係者は以下のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

所長	高橋 松男
副所長	竹中 幸生
建設専門官	古賀 秀登
建設監督官	辛島 秀治
工務課長	衛藤 恒利
工務係長	諏訪 憲二
調査課長	久良木 裕
調査係長	田中 敏則
建設技官	池田 稔浩

福岡県教育委員会

総括 教育長	竹井 宏
教育次長	大鶴 英雄
指導第二部長	大平 岩男
文化課長	葉石 勲
参事	森本 精造
課長補佐	平 聖峰
技術補佐	宮小路賀宏



豊前バイパス開通後の上唐原遺跡付近

庶務 管理係長	池原 脩二
事務主査	和田 健作
調査 調査班総括	柳田 康雄
総括補佐	井上 裕弘
技術主査	副島 邦弘
京築教育事務所技術主査	高橋 章
記念物係技術主査	小池 史哲(調査担当)
調査補助	有島 聖一・植田 由美(別府大学)

発掘調査では、地元在住の次の方々の協力を得た。

青佐 静子、榎垣 静子、榎垣 弥生、大森エミ子、金山 定子、金山 幸子、
金山 尚美、狩野 玲子、川原垣明子、川原垣勝子、岸本八重子、久保 一子、
嚙西 操、田城アヤ子、豊永スズ子、豊永スマ子、豊永 初子、中尾 順子、
中里 公子、中里ツヤ子、別府ヨシノ、堀立ヒサエ、松山 幸子、宮崎千恵子、
宮野ヨシ子、村上 君子、村上トミ子、村上 照子、吉村レイ子、今瀬 年夫、
新開 寅雄、田城 光、中里 喜義、中里 文雄、宮吉攻太郎

調査期間中には、福岡県教育庁京築教育事務所社会教育課から種々のご配慮を受けた。また宮本 工(福岡県文化財保護指導委員)、堀 三好(大平村教育委員会)、島田一三・中園富夫・藤井較一(大平村文化財保護委員会)、賀川光夫(大分県文化財保護審議会)、清水宗昭・坂本嘉弘・後藤一重・吉田 寛(大分県文化課)、栗焼憲児(中津市教育委員会)などの方々の来訪があり、現地で有益な指導・助言を得ることができた。

報告書作成の経過

上唐原遺跡からの出土遺物は、パンコンテナ210箱と多量であり、平成4年度から水洗い・接合復原作業を九州歴史資料館において実施したが、諸般の事情で遺物実測作業・報告書作成作業は平成6・7年度に実施することとなった。平成6年度は、主に昭和62年度に発掘調査した、上層の弥生時代から中世にわたる遺構・遺物について報告した(「上唐原遺跡」I)。また平成7年度は、縄文土器・石器類の実測作業・遺物写真撮影を中心に実施して、下層の縄文時代の遺構・遺物について報告書を作成した。

本書作成にかかわる、平成7年度の関係者は次のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

所長	大内 英吉郎	
副所長	高崎 寿男	
建設専門官	安部 純弘	
工務課長	中川 博勝	
工務係長	徳重 栄紀	
調査課長	田中 光助	
調査係長	竹下 卓宏	
建設技官	田辺 稔	井本真樹男
用地課長	桑田 優二	
用地官	馬場 直	

福岡県教育委員会

総括 教育長	光安 常喜		
教育次長	松枝 功		
指導第二部長	丸林 茂夫		
文化課長	松尾 正俊		
参事兼文化財保護室長	柳田 康雄		
文化財保護室長補佐	井上 裕弘		
調査班総括	橋口 達也		
庶務 管理係長	柴田 恭郎		
同 事務主査	久保 正志		
整理 調査班参事補佐	小池 史哲(整理・執筆担当)		
整理指導員	岩瀬 正信(接合復原)	平田 春美(土器実測)	
同	北岡 伸一(写真撮影)	豊福 弥生(製図)	
整理補助	原 カヨ子	関 久江	土山真弓美 岡 由美子
	田中 典子	堀江 圭子	棚町 陽子 久富美智子
	坂田 順子	藤原さとみ	江口 幸子 堀之内久美子
	山本千鶴美	星野 恵美	辻 清子 山田 智子
	穴見 裕子	小国みどり	高島 妙子 坂本恵津子
	安永 啓子	近藤 京子	森 紀子 安武 道子
	有馬 信子	植山 洋子	鬼木美知子 栗栖 絹子

II 遺跡の位置と環境

地理的環境

上唐原遺跡は、福岡県築上郡大平村大字上唐原字塚畑・田法寺・小石原・下川原にまたがり、旧地番の1782～1784・1868・1869・1872～1877・1880～1883・1901・1904・1906～1908・2101～2106・2113～2120番地に所在する。またこの位置は、東経131°11'22"、北緯33°33'30"付近に相当する。豊前バイパス建設に先立ち発掘調査を実施した範囲は、STANo.199～STANo.215の間で、路線幅のうち用地境の0.5～2.0mと、既設道路と水路部分を除いて発掘調査した約12000㎡である。このうち、縄文時代の遺構・遺物の出土する部分は東半部で、字小石原に含まれる部分が中心である。

上唐原遺跡の所在する築上郡大平村は福岡県の東端にあつて、南側には地質学的には^(註1)第三紀末から第四紀はじめに噴出した火山活動で形成された角閃石輝石安山岩や両輝石安山岩の溶岩が浸食された奇岩・崖面の群集する独特の風景の耶馬溪があり、谷底平野が多くみられる。英彦山山塊に源を発する山国川はこのような谷の水系を集めて流下して周防灘に注ぐが、耶馬溪の溪谷部から三光村野路付近で周防灘に面した平野部に抜け、東側には犬丸川沿いにかけて広い扇状地が形成されている。また犬ヶ岳(1130.8m)・雁又山などに源を発する佐井川・岩岳川流域にも扇状地が広がる。中津平野の扇状地堆積面には、約7～9万年前に噴出した阿蘇4火砕流が玖珠・耶馬溪を通じて流入して上に堆積することや、先端部で海成砂が確認されていて、7～9万年前以前の海進期に形成されたと考えられている。山国川本流沿いの沖積地には自然堤防が発達していて、左岸には百留・梶屋・重吉・水出・寺小路・下唐原などの集落が形成されているが、上唐原遺跡は水出集落と下唐原集落の間に位置する自然堤防上に立地する。

歴史的環境

上唐原遺跡をとりまく、山国川下流域周辺の旧上毛郡・下毛郡地域での遺跡・遺物に関する研究史的側面・各時期別の概略は、「上唐原遺跡」Iに簡単にまとめたのでそれに譲るが、近年は国道10号線の北大道路整備や、圃場整備事業などの大規模開発などに伴う発掘調査が増加し、先史・古代・中近世などの遺構・遺物が急激に増加している状況にあり、縄文時代に限って周辺遺跡をみれば、垂水遺跡・植野貝塚は後期前半から中頃の遺跡で、中津高等学校校庭から工事中に出土した土偶^(註2)とともに代表的な遺跡として著名であった。昭和49年から9年間8回にわたって別府大学・長崎大学で合同学術調査された上流域の本耶馬溪町粉洞穴遺跡は、早期から後期にかけての包含層と多数の埋葬人骨出土などで注目された^(註3)。人骨からみた形質では、



第4図 周辺の遺跡分布図 (1/50000)

1. 三毛門遺跡 2. 小石原遺跡 3. 鈴鹿山古墳 4. 輪生山古墳 5. 今吉古墳 6. 離熊山古墳群 7. 緒方古墳群 8. 尻高畑遺跡 9. 山田瓦葺跡 10. 山田竈跡 11. 山田 12. 女枝瓦葺跡 13. 土佐井ノ子遺跡 14. 今城遺跡 15. 土佐井遺跡群 16. 宇野古墳群 17. 吉岡遺跡 18. 巨石塚古墳 19. 大塚古墳 20. 矢頭山遺跡 21. 天神寺古墳 22. 広運寺古墳 23. 垂水庵寺古墳 24. 垂水遺跡 25. 牛頭天王遺跡 26. 中桑野遺跡 27. 桑野代古墳群 28. 穴ヶ藪山南古墳群 29. 穴ヶ藪山南古墳群 30. 穴ヶ藪山遺跡 31. 能満寺古墳 32. 金屋城前方後古墳 33. 上郷古墳群 34. 小山田古墳群 35. 血山古墳群 36. 百曾横穴群 37. 尻井三ノ江遺跡 38. 百留村屋敷遺跡 39. 上原原本屋敷遺跡 40. 下野原屋敷遺跡 41. 下野原屋敷遺跡 42. 川下遺跡 43. 上方山遺跡 44. 高城遺跡 45. 高城遺跡 46. 相模原寺 47. 相模原古墳群 48. 上ノ原横穴群 49. 助野地遺跡 50. 佐知久保遺跡 51. 佐知遺跡 52. 城横穴群 53. 白木古墳群 54. 鎌山遺跡群
 A. 垂水地区遺跡群 B. 宇野代遺跡 C. 上桑野遺跡 D. 桑野遺跡 E. 大塚本遺跡 F. 小松原遺跡 G. 上ノ原遺跡 H. 金居塚遺跡 I. 那ヶ原遺跡 J. 上原遺跡

華奢な四肢骨が特徴で、平均身長で前期例が早期・後期よりも高いとされている。早期の遺跡では豊前市吉木遺跡で押型文土器がまとまって出土した^(註4)が、垂水遺跡など数点出土する例もみられ、今後発見例が増加するであろう。昭和55年に調査された中津市ボウガキ遺跡も後期の住居跡と埋葬人骨の発見で話題になった^(註5)。60年代には椎田町山崎・石町遺跡で後期の住居跡群が発見され、土器埋設の複式炉が存在するなど注目される調査であったが^(註6)、引き続き大平村の上唐原遺跡・原井三ツ江遺跡^(註7)・土佐井遺跡^(註8)、豊前市中村石丸遺跡^(註9)・小石原泉遺跡^(註10)・狭間天神前遺跡^(註11)、三光村佐知遺跡^(註12)・佐知久保畑遺跡^(註13)などで後期住居跡の発見例が急増した。住居形態では、方形プランで石囲炉をもつものから、円形プラン化し、炉に土器埋設複式炉・地床炉などが出現し、石囲炉が消滅するなどの傾向が窺える^(註14)。上唐原遺跡・佐知遺跡・佐知久保畑遺跡はいずれも山国川自然堤防上に立地しているが、中津市上万田遺跡・高瀬遺跡・高畑遺跡、大平村川下遺跡^(註15)などは後・晩期の遺物を出土させる自然堤防上の遺跡である。

註1 地質については、福岡県1971 土地分類基本調査「中津」周防灘周辺開発区域によるところが多い。

2 九州考古学会 1950 北九州古文化圖鑑第1輯 福岡県高等学校教職員組合

3 賀川光夫 1987 原史 本耶馬溪町史 本耶馬溪町

賀川光夫・内藤芳篤他 1977 大分県粉洞穴発掘調査概要—第1・2次調査— 考古学論叢4 別府

4 高橋 章編 1989 吉木遺跡 福岡県文化財調査報告書第84集

5 村上久和編 1992 ボウガキ遺跡 三保の文化財を守る会・中津市教育委員会

6 小池史哲編 1992 山崎遺跡(I)・石町遺跡 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告—7— 福岡県教育委員会

7 小池史哲 1989 原井三ツ江遺跡 大平村文化財調査報告書第5集

8 高橋 章編 1990 土佐井地区遺跡 大平村文化財調査報告書第6集

9 福岡県教育委員会が1988年度に椎田道路建設に先立ち発掘調査を実施した。現在整理中。

10 小池史哲 1993 豊前地方の縄文時代遺跡 豊前市史 考古資料 豊前市

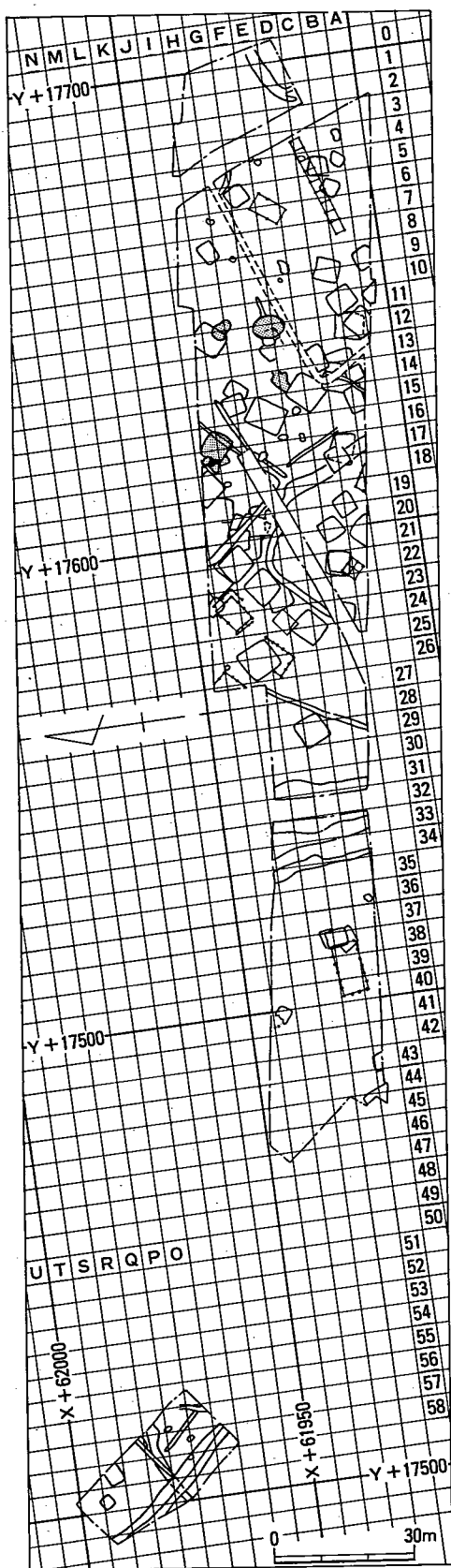
11 豊前市教育委員会が1994年度に圃場整備事業に伴い発掘調査。調査を担当した丹羽博氏よりご教示を得た。

12 坂本嘉弘編 1989 佐知遺跡 大分県文化財調査報告書第81輯

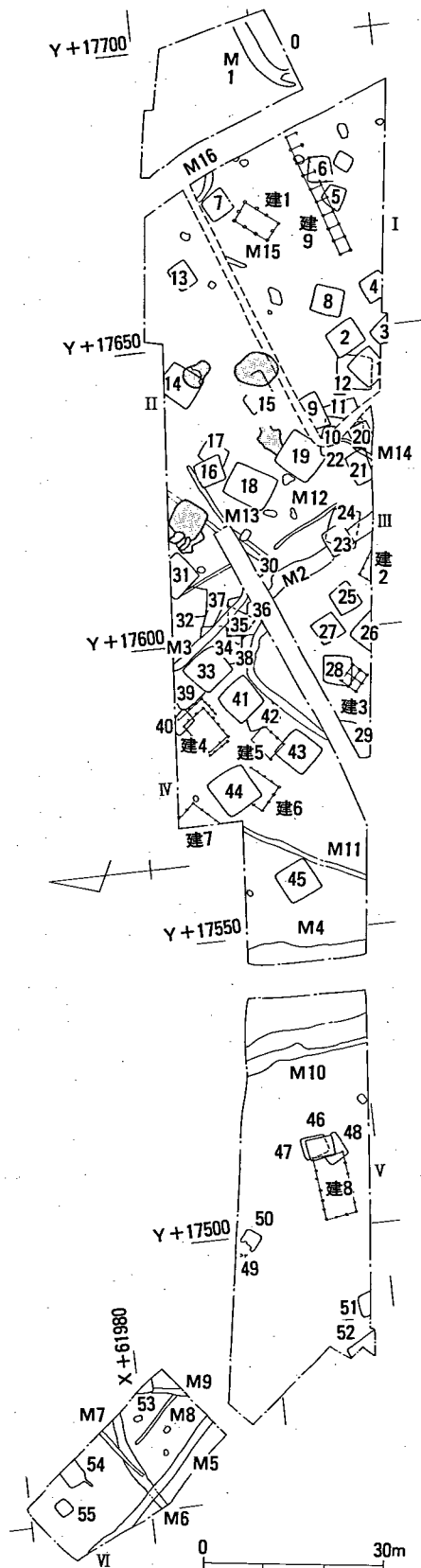
13 三光村教育委員会が1992年度に大型店舗建設に先立ち発掘調査。調査を担当した植田由美氏よりご教示を得た。

14 小池史哲 1993 豊前地域の縄文後期住居跡 古文化談叢 第30集(下) 北九州

15 宮本 工他 1984 山国川流域における縄文時代後・晩期の遺跡 九州考古学59 福岡



第5图 地区割图 (1/1500)



第6图 遺構配置概略图 (1/1200)

III 遺構と遺物

地区割りの設定 (第5図)

上唐原遺跡の調査区域内には、県道・旧県道・農道・水路などがあって、これらを保全したまま発掘調査を実施したが、これらによって区切られた範囲を調査時には便宜上0・I～VI区と区別した。また、新平面直角座標系IIのX=61900～62000、Y=17415～17705の範囲内で、25～40m幅にN85°W方向の調査区域を発掘したことになるが、5m刻みの小地区割りも行った。すなわち調査区東南隅部のX=61900、Y=17700を基点として、北へA・B・C～Tとアルファベットで、西へ1・2・3～61と数で区分してA3区・B4区のように呼ぶことにした。

プランで確認した遺構は、1号住居跡や、1号土坑などの名称を付したが、遺構プランの不明瞭なものは地区名で扱い、遺物収納にもこれを用いている。

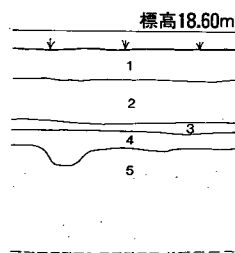
層序 (第7図)

上唐原遺跡の基本的な層序は次のようであった。

第1層は、厚さ15～20cmの水田耕作土。第2層は黄色粘土で厚さ20cm前後の水田床土。第3層は厚さ5～10cmの暗灰褐色砂質粘性土で、III・IV区を中心とした部分とVI区の西半部にみられる。第4層は暗茶褐色砂で厚さ10cm前後。弥生時代から古墳時代の遺物包含層である部分が多い。住居跡内などの堆積土はこの層に近いが、若干色調が濃く粘性が強めである。第5層は淡茶褐色砂で、部分的には淡灰色砂になる。70cm以上の厚さにこの層が堆積しているようだが、縞模様には色調の濃い部分と淡い部分があり、全体的には漸次的に下層の色調が淡くなる傾向はある。大半の部分ではこの層が地山に相当するが、色調が若干濃いめの淡茶褐色砂の部分に縄文時代の遺物包含層がみられた。またVI区の東半部などでは、地山になる黄褐色粘土がみられた。なおI・II区の東半分やV区では第2層の下は直ぐ第5層であった。

遺構の概要 (第6図)

上唐原遺跡では、縄文時代の住居跡2軒と、弥生時代後期～古墳時代の住居跡(一部古代に含まれるものもある)55軒、古墳時代～中世の掘立柱建物跡9軒、土壇22基、甕棺墓1基、溝状遺構17条などの遺構と、縄文時代・古墳時代の遺物包含層を発見した。このうち、本稿では縄文時代の遺構・包含層と出土遺物について報告する。なお、弥生時代以降の遺構・包含層と出土遺物については、6年度報告の「上唐原遺跡I」に報告した。



第7図 基本土層図 (1/40)

縄文時代の遺構としては、住居跡2軒、不整形竪穴1基、土坑2基がある。

包含層は、B～I-10～24区の部分で縄文土器・石器などの遺物が主に出土している。このなかでも、前述の遺構およびその周辺からはより濃密な遺物の出土がみられた。またI20区付近でもややまとまった遺物の出土をみている。しかしI・II区の東半部では地下げを受けたためか耕作土・床土を除去した遺構検出面で既に色調の淡い淡茶褐色砂層が現れて、V区では黄褐色粘土層が現れていて、遺物の出土量は多くない。

1. 住居跡

縄文1号住居跡 (図版3、第9図)

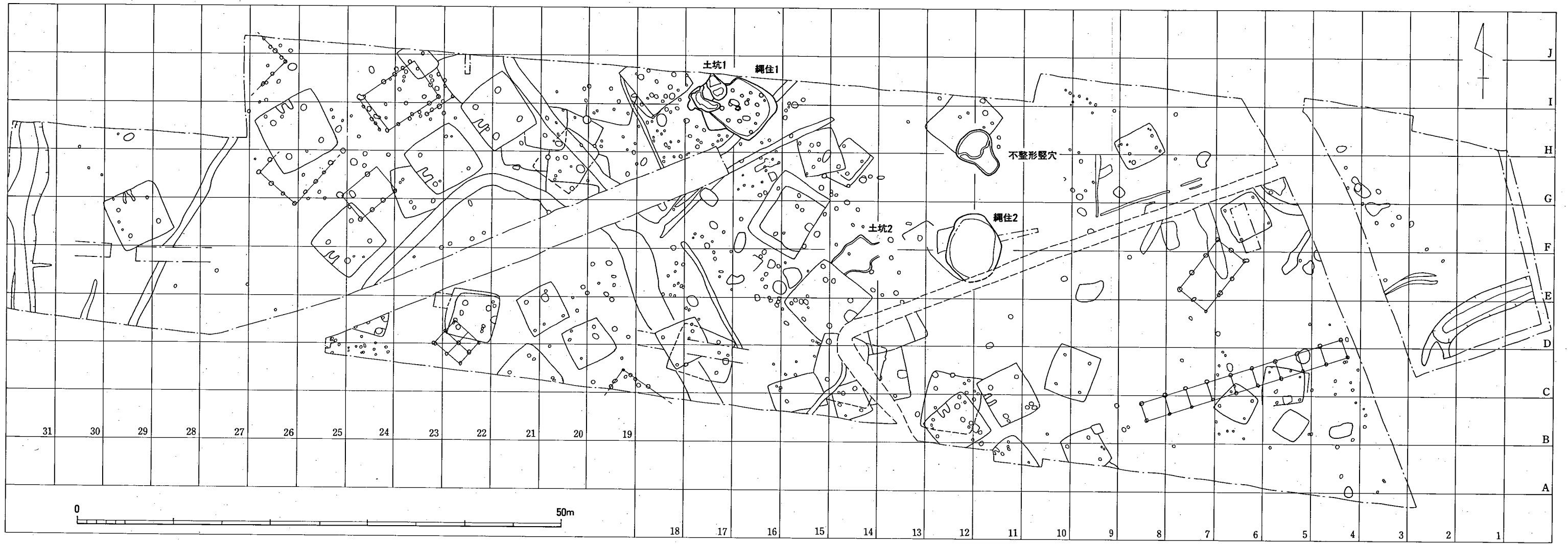
II区とIV区の境で調査区北端に接するG・H-16・17区に発見された竪穴住居跡である。東南側は3号溝によって上部を失い、西側では縄文1号土坑と重複して、輪郭はやや不鮮明だが、主軸方向N55°Wの隅丸方形プランを呈する。南東-北西方向に5.4m、北東-南西方向に5.3mの規模である。重複のために北西壁は確認できないが、周壁の大部分は高さ0.30～0.35mに残り、壁の傾斜は比較的強いが、東側はやや緩傾斜である。竪穴の覆土は木炭・焼土粒などを含んだ茶褐色ないし淡いめの暗茶褐色砂質土で、土器片などを含む。

南西隅部に重複する一辺2.0m、深さ0.15m程の竪穴状の掘り込みは、埋土にほとんど差がなく、当初出入施設の可能性も想定したが、おそらく住居跡の竪穴よりも先行する竪穴状の遺構であろう。

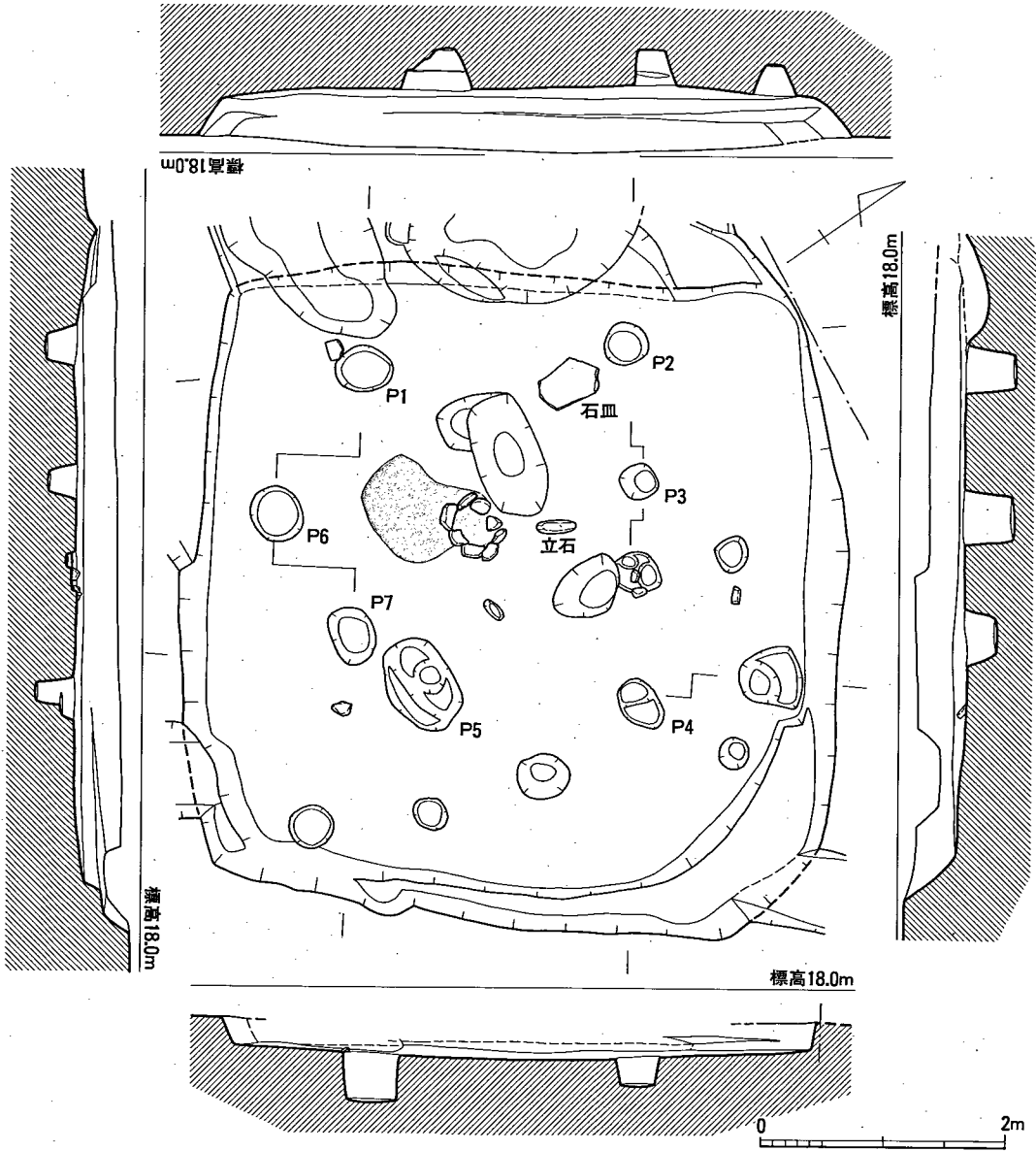
淡黄褐色の粘質砂層を掘り込んだ住居跡の竪穴床面はやや堅緻で、木炭片が散在する。床面の中央のわずかに西寄りに石囲炉が施設されて、炉の0.3m北東側に立石が据え付けられている。柱穴状ピットは、炉と周壁の間にP1～7が並び、深さと配置状況からみてP1～6が支柱穴であろう。P1・6は直径・深さともに0.4m程の規模だが、P2～5は深さ0.2～0.3m程の規模である。その他のピットでは、立石を挟んで位置している深さ0.3・0.5mのピットを除いて、極めて浅い。

炉跡 (図版4-1・2、第10図)

扁平気味な安山岩の川原石らしい円礫などを並べた、花卉状に上が開く形の石囲炉である。上部で東西0.5m、南北0.4m、下部で長径0.35m、短径0.25m、深さ0.1m程の大きさである。掘方は直径0.6mの不整形円で、西南西側に長径0.8m、短径0.6m程の楕円形の焼土の分布範囲がみられた。石囲炉は円礫や石皿などの割石を8個楕円形に並べているが、内に面した側は火を受けて赤変やひび割れを生じている。炉の石は南西側の石が最も大きく、次いでその隣の西端に



第 8 図 上唐原遺跡遺構配置図 (1/400)

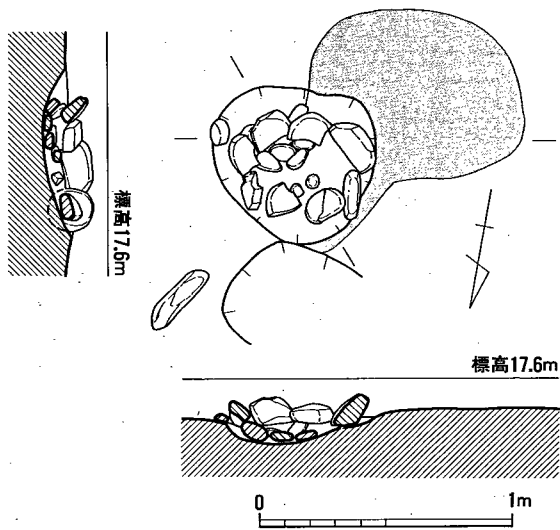


第9図 縄文1号住居跡実測図 (1/60)

位置する石が大きい。石囲いの下端に焼土と炭・灰が堆積し、これらの間層を介した下部の東南側に偏って、拳大の円礫が敷き詰められている。

立石と作業台

炉跡の北東側に0.3mの距離を隔てて立石がある。N35°E方向に軸線に向けて、安山岩の川原石らしい扁平な石が、床面に打ち込まれたように埋まっている。石は直径30cm前後、厚さ10cm



第10図 縄文1号住居跡石囲炉実測図 (1/30)

弱の大きさの石で、そのうち約半分が床面から出ている。石の上面には敲打痕は特にみられないが、磨耗は進んでいる。

また、炉跡から0.9m北側、立石の0.9m北西側に、作業台らしい石皿がみられる。南北に長軸を向けていて、上面の磨耗は顕著である。なお、炉跡と立石・作業台の間に長径1.0m、短径0.3m、深さ0.5m程のピットがみられる。堆積埋土の色調が僅かに異なっていた部分で、住居跡よりも後出する掘り込みの可能性もある。

遺物出土状況 (図版4-3・5、第11図)

住居跡内全体に土器片が含まれていたが、南東側は3号溝によって上部から切り込まれていて遺物の残りは少ない。床面に接して出土する遺物は殆どみられず、僅かに浮いたものや20cm程度浮いて出土した例もある。また、同一個体の破片が一ヶ所にまとまる例も若干あるが、同一個体の破片が約60cm離れて出土した例もある。住居内全体をみても周壁に近接して出土する例は少なく、周縁部が埋没して中央部がなだらかに凹んだ状態の部分に投棄された例が大半であろう。なお、中央部の深い穴の部分では土器片などのまとまりがみられず、上部からの攪乱を被った穴の可能性もある。

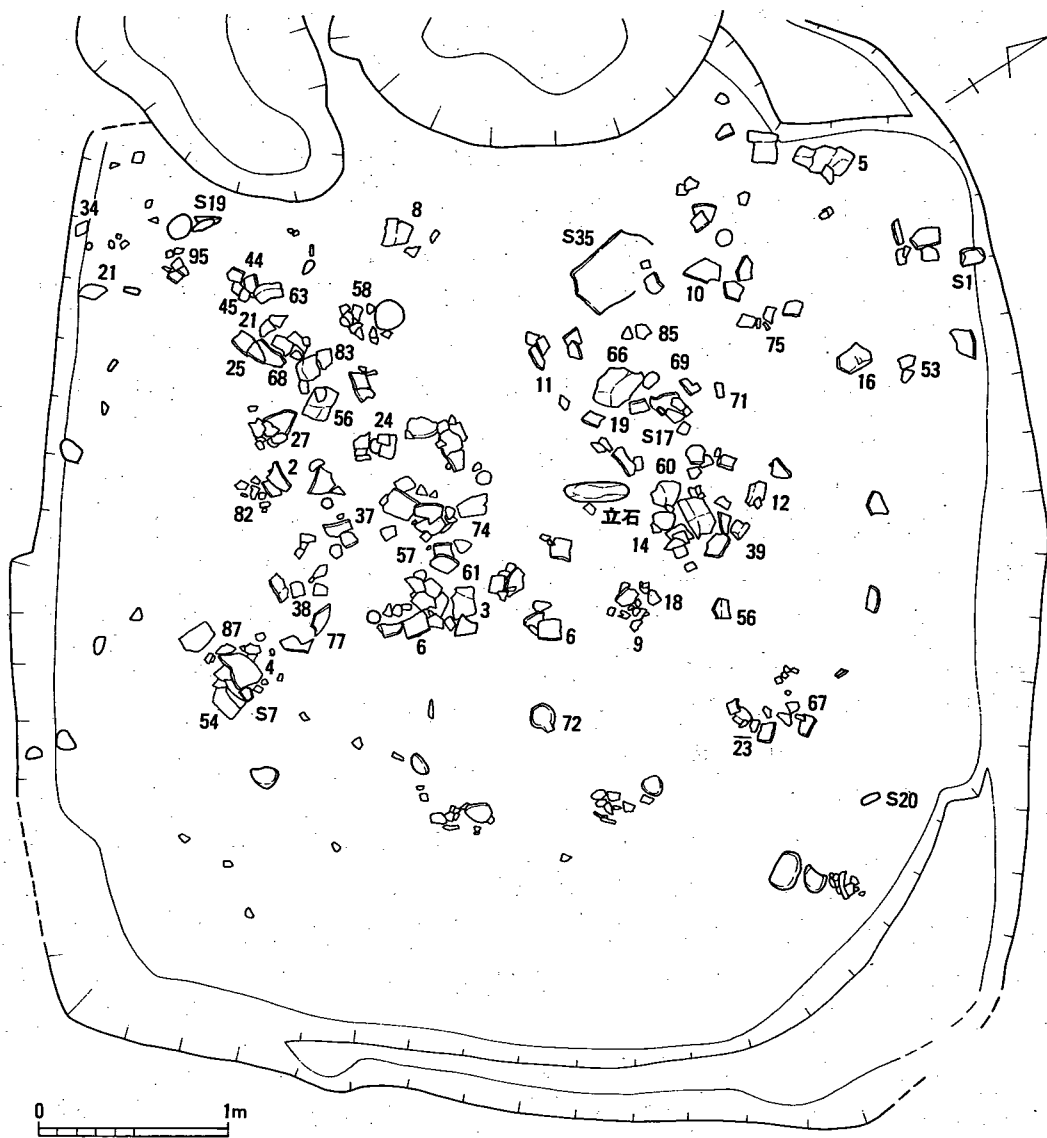
出土遺物

縄文土器 (図版6～8、第12～26図、表2)

85点を図示するが、これ以外にも、約56kgの土器片が出土した。なお7・44～46は南西外側にかかった部分から出土した。土器類については、他の遺構や包含層出土例とともに以下に示す基準で分類した。

縄文土器の分類

住居跡・不整形竪穴・土坑および包含層出土の縄文土器は、先ず有文土器と無文土器に分け、次のような基準で器形を1～15類に分類した。しかし深鉢形・鉢形の区別の困難な例を含むため鉢で一括している。また口縁部の形態ではa～d類に分類し、有文土器で使用する沈線の太い例はa～dをA～Dに変えた。更に縄文を施文するものにJ、疑似縄文を施文するものには



第11図 縄文1号住居跡遺物出土状況実測図 (1/40)

Gを付した。

- 1類 膨らんだ胴部と緩やかに外反する口縁部を有する器形の深鉢および鉢。
- 2類 膨らんだ胴部から頸部に括れるが、口縁部が外反せずに直立する器形の深鉢および鉢。
- 3類 膨らんだ胴部から頸部に括れ、口縁部は肥厚して短く外反する器形の深鉢および鉢。
- 4類 1類に似るが、口縁端部が幅広く肥厚する、縁帯文土器とされる類の深鉢および鉢。

- 5類 膨らんだ胴部と括れた頸部をもつが、口縁部が内彎する器形の深鉢および鉢。
- 6類 膨らんだ胴部と括れた頸部をもち、口縁部は直線的に開いて端部側で屈折して内傾する器形の深鉢および鉢。
- 7類 胴部は殆ど膨らまずに底部からそのまま口縁部に向かって開き、頸部が僅かに括れて、口縁部が緩やかに外反する器形の深鉢および鉢。
- 8類 胴部は殆ど膨らまずに底部からそのまま口縁部に移る器形の深鉢および鉢。
- 9類 胴部は殆ど膨らまずに底部からそのまま口縁部に向かって開き、口縁部が内彎する器形の深鉢および鉢。
- 10類 胴部は膨れるが算盤玉のように稜をもち、口縁部が外反する器形の鉢および浅鉢。
- 11類 底部から口縁部には大きく開き、口縁部が内彎する器形の鉢および浅鉢。
- 12類 底部から口縁部へ直線的に開く器形の鉢および浅鉢。
- 13類 胴部は算盤玉のように膨らみ、口縁部が短めに外反気味に立ち上がる器形の浅鉢。
- 14類 底部から大きく開き、屈折した頸部を介して更に口縁部が直線的に開く器形の浅鉢。
- 15類 膨らんだ胴部から屈曲して頸部が僅かに括れるが、口縁部が緩やかに外反する深鉢。
- a類 口縁端部内側に段や凹みを有するもの。
- b類 口縁端部の上面に沈線があるもの。
- c類 口縁端部が面取りされるもの。
- d類 口縁端部が丸みをもつもの。

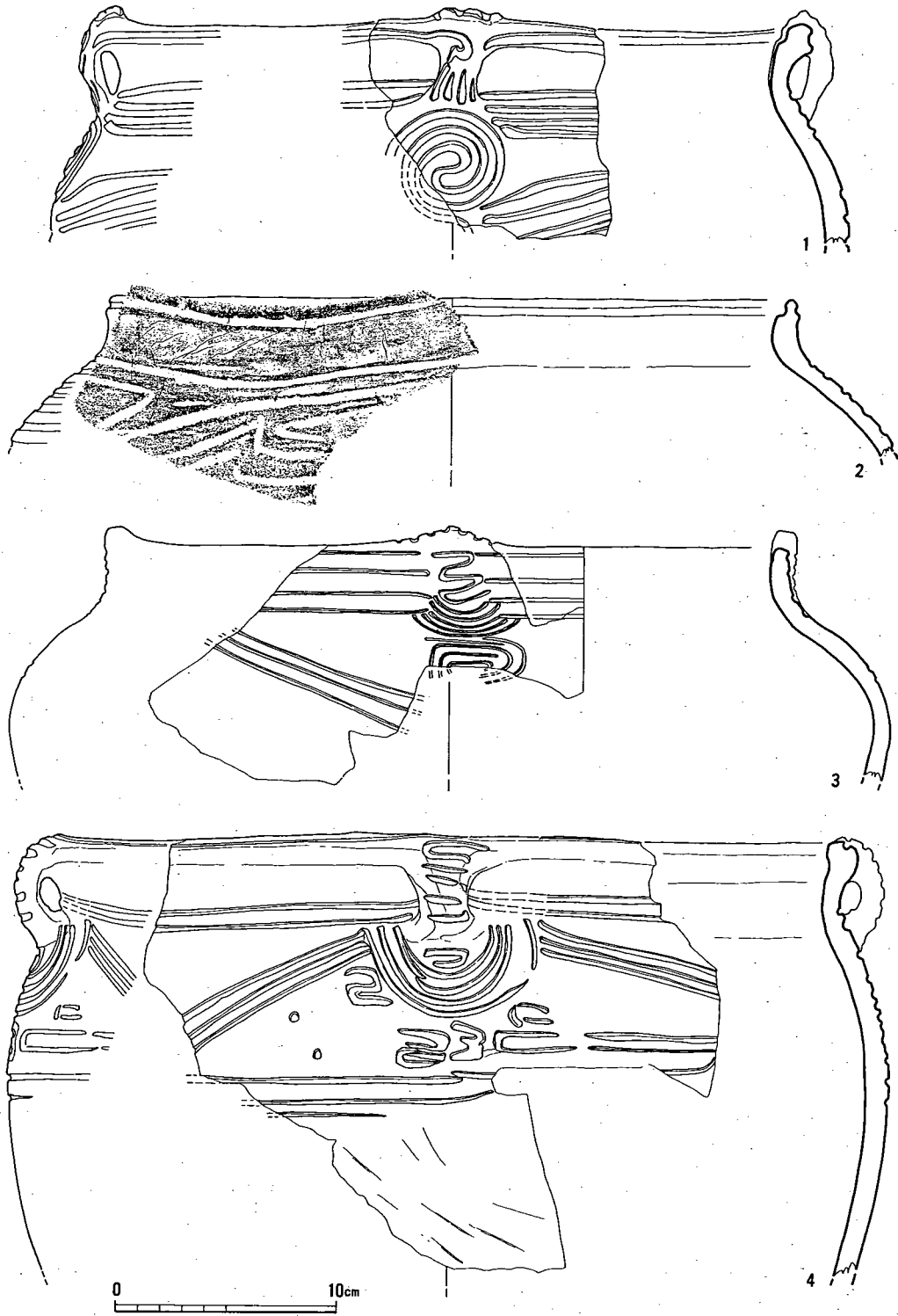
実際の分類には、これらを組み合わせて2 b類や3 aJ類のように表記し、沈線の太い例にはアルファベットの大文字を用いて、3 A類などとした。

有文土器では描かれる文様の構成要素によって分類することもできるが、ここでは特に区分の対象にはしなかった。また無文土器の条痕の種類などでも分類しうるが、これも表に示すに留めて分類基準にはしていない。

有文鉢1 A類 (1・34) 膨らんだ胴部から短く屈曲して口縁部が肥厚気味に外反する鉢で、口縁部内面に沈線状の段がある。文様はやや太めの沈線で描かれる。1では橋状把手下の胴部には、S字の両端を延して巻いた渦巻が、巴紋のように上下2段に配され、横走る平行沈線と斜行する沈線が三角形の空間を作っている。

34は、直に立ち上がる口縁部の内面と上面に凹みを有し、頸部から胴部に太めの沈線が幅広く描かれている。

有文鉢1 a類 (11) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が外反する鉢で、口縁部内面に僅かな段がある。刻み目のある波頂部下には渦巻文が2段にあって、折り返しの沈線文が横側に繋がる文様がみられる。



第12図 縄文1号住居跡出土土器実測図1 (1/3)

有文鉢 1 b 類 (31・36・43) 膨れた胴部から括れた頸部を介して口縁部が外反する鉢で、口縁部上に沈線が巡る。口唇部に刻み目が付けられる波頂部下に、31はZ字状の蛇行文、36は重弧の蛇行文がみられ、横走する平行沈線が続くようである。

有文鉢 1 d 類 (42・48) 短めに外反する口縁部は端部が丸い。口縁部直下から胴肩部に横走するやや細めの平行沈線が巡り、胴部に斜方向の平行沈線がみられる。48は復原口径34.8cmの大きさ。斜行沈線の頂部で横走沈線と接する部分に小巻貝で突いた刺突列点がみられる。

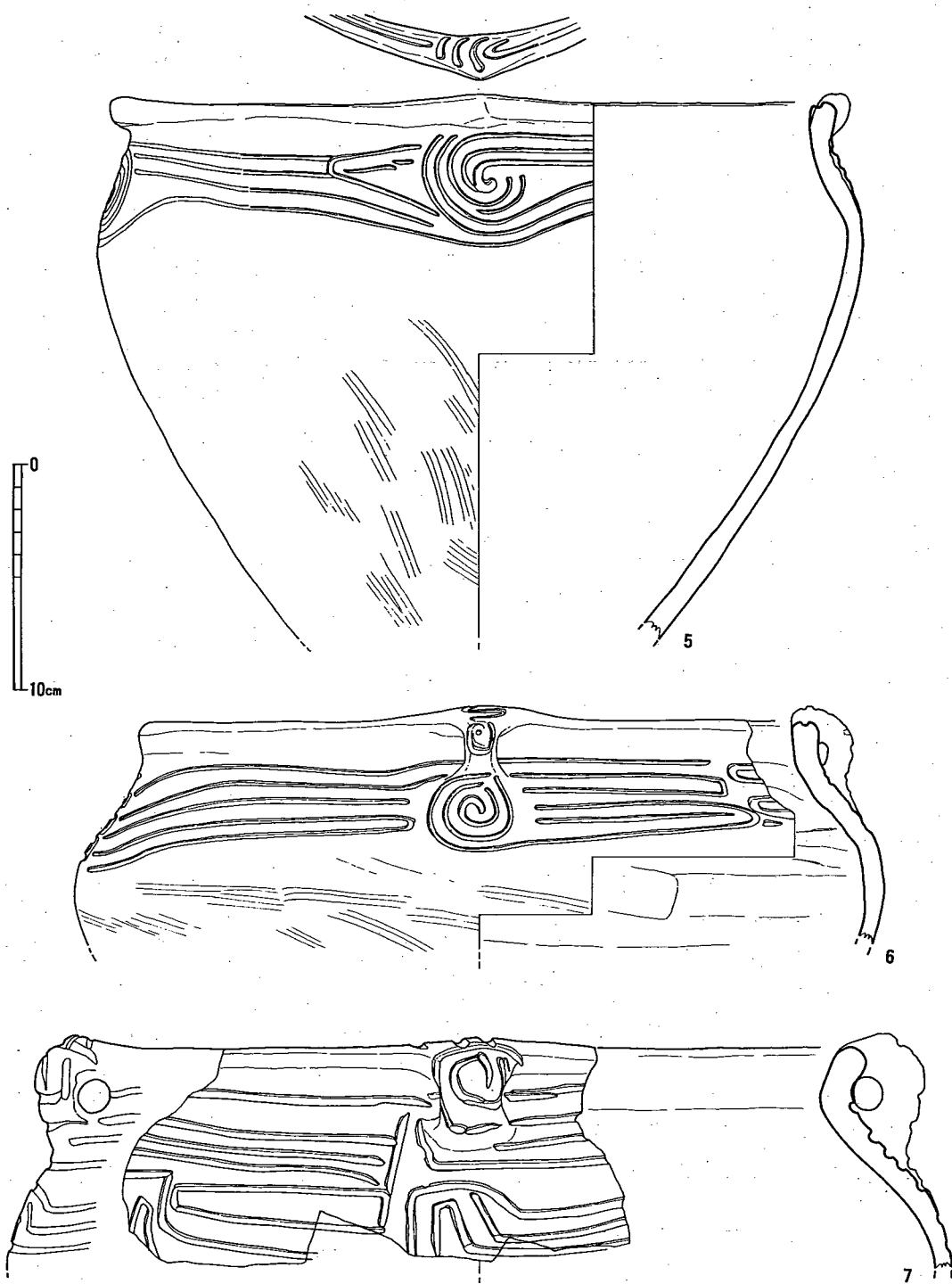
有文鉢 2 A 類 (2) 膨らんだ胴部から頸部は括れるものの口縁部が肥厚気味に立ち上がる鉢で、口縁端部内面に段状の沈線が巡る。波頂部以外の部分の口縁部であり、胴部文様帯との間は僅かに空間がある。胴部文様帯にはやや太めの沈線で鈎形文様が描かれている。

有文鉢 2 B 類 (8) 膨らんだ胴部から頸部は括れるものの口縁部が肥厚気味に立ち上がる鉢で、口唇部上面に沈線が巡る。橋状把手には横方向の刻み目があり、裾を囲む弧線文もみられる。さらに横走する沈線群の中途に長楕円形の区画がみられる。

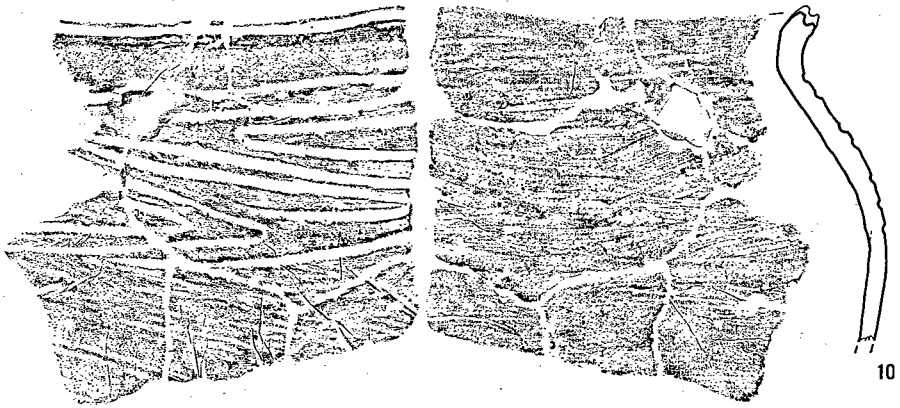
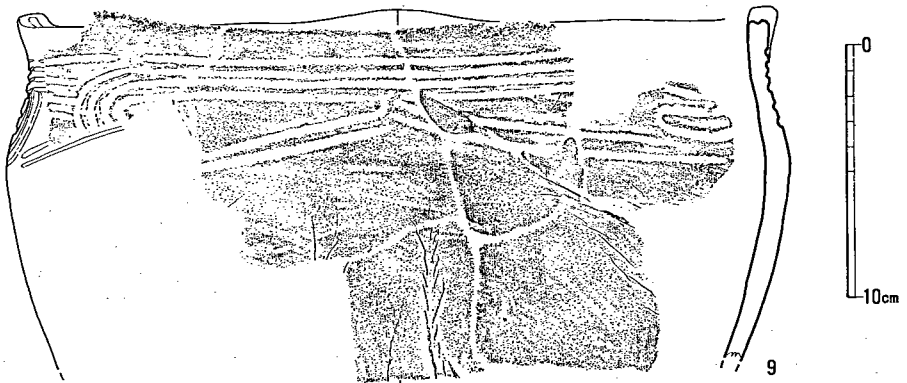
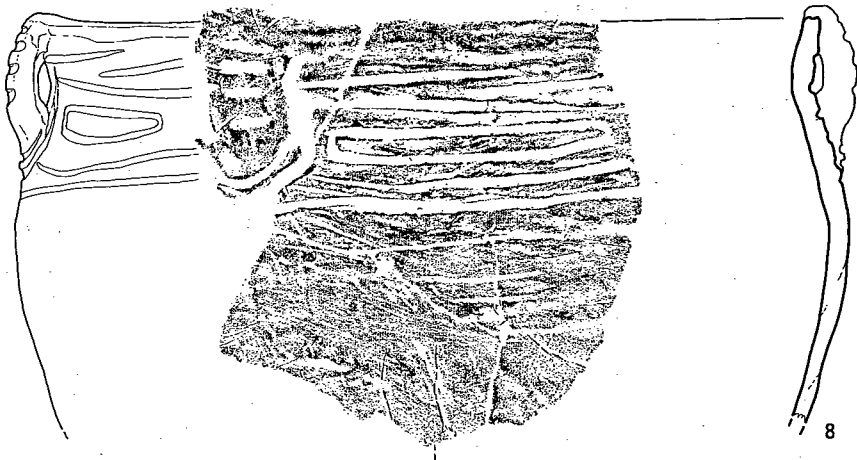
有文鉢 2 a 類 (3・4・23) 膨らんだ胴部から頸部は括れるものの口縁部が肥厚気味に立ち上がる鉢で、口縁端部内面に段状の沈線が巡る。1・2に比して外面に使用される沈線は細い。3では口縁部内面の段が退化している。口縁部直下から胴部にかけて文様が描かれ、口頸部には平行沈線が巡る。口唇部に刻み目が付けられる波頂部の下にはS字状の蛇行文・同心半円文・渦巻文が縦に並び、頸部と胴部を斜方向の平行沈線が繋いでいる。4は、口縁部内面の段はやや退化し、上面に沈線が巡るものの胴部文様帯の沈線ともに細めである。橋状把手には寸断気味のS字状文様が描かれる。把手下には同心半円文があり、斜行する平行沈線と横走する平行沈線の作る空間にS字文様などが配置されている。復原口径37.0cm、胴最大径39.8cm程度の大きさであろう。

23は、復原胴最大径22.0cm程の小形の鉢で、頸部は括れるものの口縁部が肥厚気味に立ち上がる鉢で、口縁端部内面に段がある。橋状把手には渦巻文と刺突点とが施文されて、把手下には渦巻文が描かれて、胴上部に折り返しの沈線が回っている。

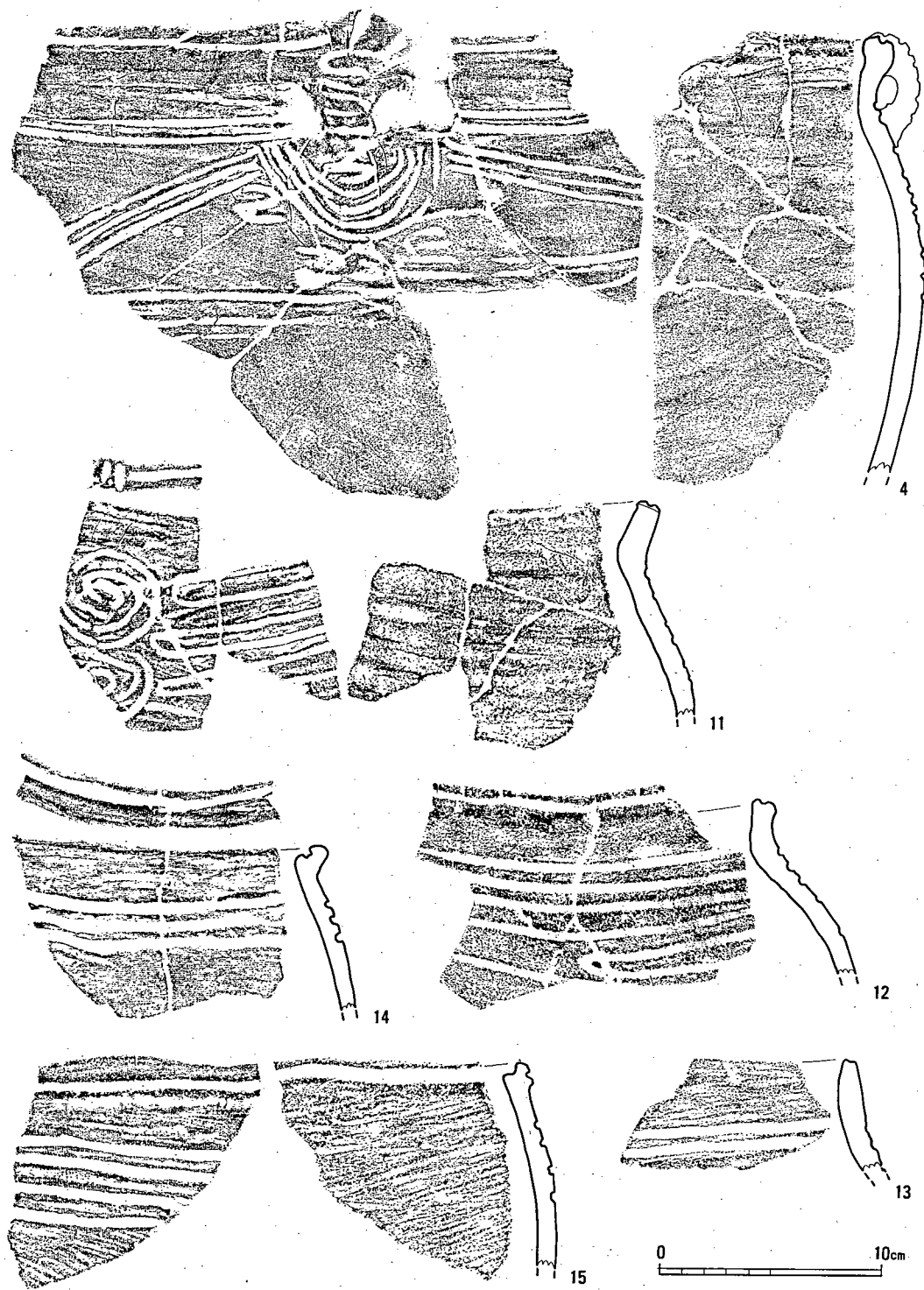
有文鉢 2 b 類 (5・6・9・12・28・33・35・40・41) 膨らんだ胴部から頸部は括れるものの口縁部が直に立ち上がる鉢で、口縁部上に沈線が巡る。5は把手の付かない波頂部で、肥厚して外側に突出気味だが、橋状把手一対に直交する対の波頂部であろう。復原口径31.5cm、胴最大径34.0cm程の大きさである。胴上部に2条単位で蕨状の渦文様が描かれている。6は橋状把手を一対もつ波頂部で、渦巻文が平行線に続き、折り返しているが、破片右端の文様はS字状蛇行文かも知れない。復原胴最大径36.0cmの大きさである。9は波頂部下から少しずれた胴部に細めの沈線で重弧の蕨状渦文が描かれ、頸部に平行沈線が回る。また胴部径を四分割した部分にS字状蛇行文らしい文様がみられる。復原口径29.0cmの大きさである。28は胴部に折り返しの沈線文が描かれている。35はJ字文の変容した渦文と折り返しの沈線文が横走する。ま



第13図 縄文1号住居跡出土土器実測図2 (1/3)



第14図 縄文1号住居跡出土土器実測図3 (1/3)



第15図 縄文1号住居跡出土土器実測図4 (1/3)

た40・41の胴部文様帯には三角形の区画をつくる平行斜線がみられる。

有文鉢 2 c 類 (13) 膨らんだ胴部から頸部は括れるものの口縁部が直に立ち上がる鉢で、口縁部上面は凹み気味に整えられている。胴部文様帯には平行沈線がみられる。

有文鉢 2 d 類 (17・18・32) 直に立ち上がる口縁部の端部が丸くおさまるもので、頸部から胴部に平行沈線を巡らせている。18では渦巻文が橋状把手上のものと合わせて3段に描かれ、横走る沈線には折り返しもあるが2条単位で引かれている。32には渦巻文がみられる。

有文鉢 3 B 類 (10) 膨らんだ胴部から屈曲して口縁部が外反する鉢で、口縁端部は内面側に段を有さず、上面に沈線が巡る。波頂部に近い部分の破片だが、4よりもやや太い沈線が用いられ、折り返し文は幾分か複雑である。

有文鉢 3 a 類 (14・15・24・29) 14・15は膨れた胴部に口縁部がそのまま付くのか、内彎した体部の浅めの鉢なのか区別し難いが、口縁部内面に沈線が巡り、胴部外面には平行沈線が巡る。24・29の内面側には凹みがあり、24では波頂部下に重弧の蕨状渦巻文が描かれて横走る平行沈線に続く文様がみられる。

有文鉢 3 b 類 (26・27・37~39) 膨らんだ胴部から屈曲して口縁部が外反する鉢で、口縁端部は内面側に段を有さず、上面に沈線が巡る。沈線は10などに比して細い。26は浅めの小形鉢であろうが、重弧の蕨状渦巻文が波頂に描かれて、胴部には逆J字形文の変容した渦文が描かれている。また27は、肥厚する口縁部上面に2条の沈線が巡る。

37では橋状把手を有して頸部に僅かな無文部分を残し、胴部に蕨状渦巻をもつが、38では頸部まで文様帯に使われて折り返しの沈線文がみられる。39は口縁部が直に立ち上がる部類との区別が困難だが、橋状把手を有し、胴部に同心半円と折り返し文様が描かれている。

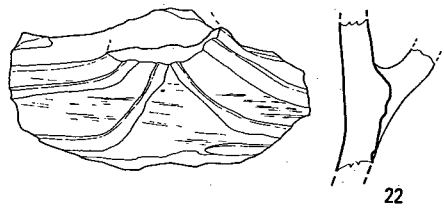
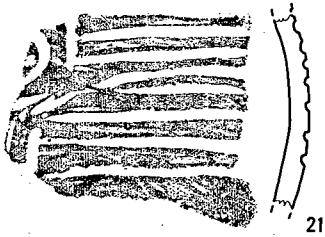
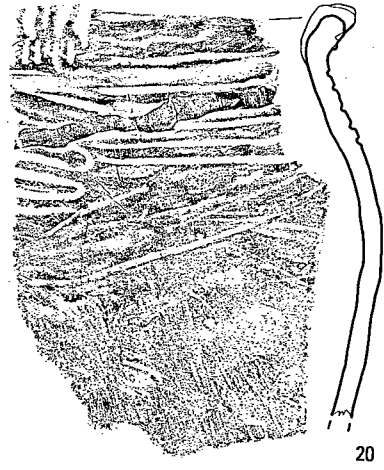
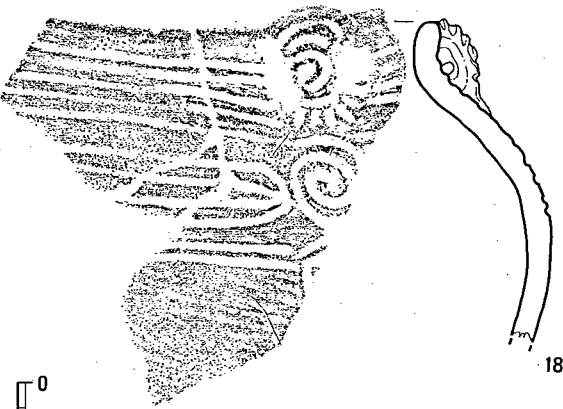
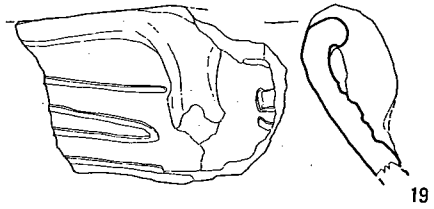
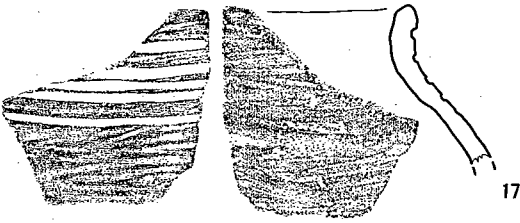
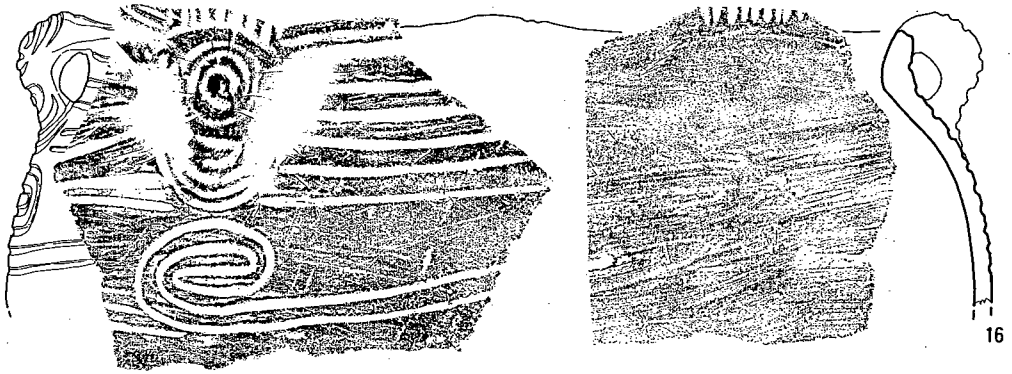
有文鉢 3 d 類 (7・19・20) 肥厚気味に短く外反する口縁部は端部が丸く、直下の頸部から胴部に鈎状文を伴った横走沈線列がみられる。また波頂部には一対と思われるが橋状把手が付き、渦巻文が描かれている。19・20は、波頂部で文様のない橋状把手と肥厚した頂部に短沈線を刻み目のように並べる文様があり、20ではS字状の蛇行文様が付けられている。

有文鉢 3 c 類 (16) 膨らんだ胴部から頸部は括れて、肥厚気味に短く口縁部が外反する。口縁部上面は凹み気味に整えられている。口縁直下から胴部にかけて沈線が巡り、橋状把手に渦巻文と把手下に折り返しの蕨状渦巻文が描かれて、三角形の空間になっている。

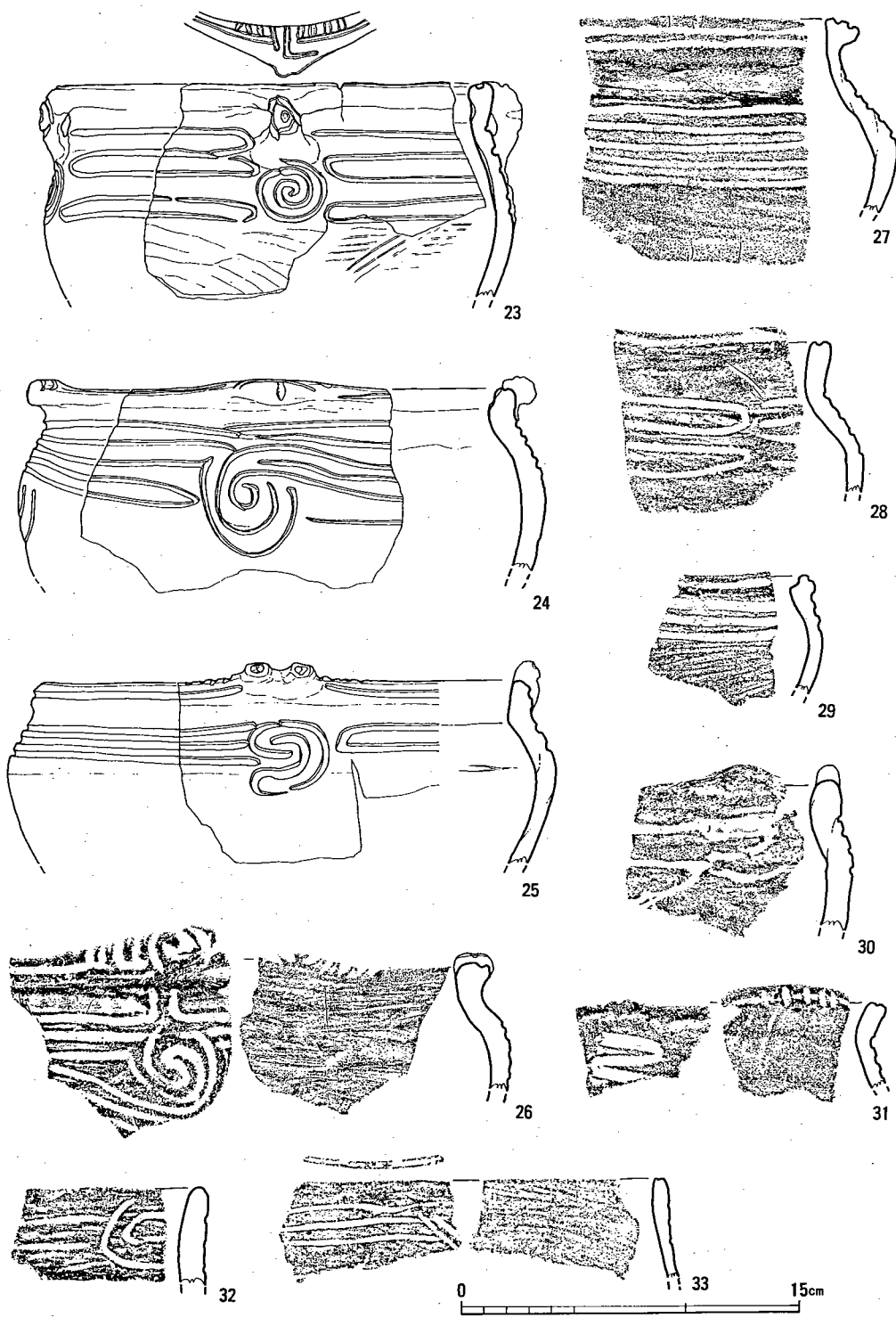
有文鉢 5 類 (49~51) 口縁部が内彎する鉢で、括れる頸部以下を欠く。49は端部が丸くおさまるが、下方からの刺突列点が口縁部外面に6段程密集する。

50・51は内彎する深鉢の口縁部片で、前者は肥厚気味で丸くおさまる端部、後者は上面が平坦に面取りされる端部をもち、外面に平行沈線が巡っている。

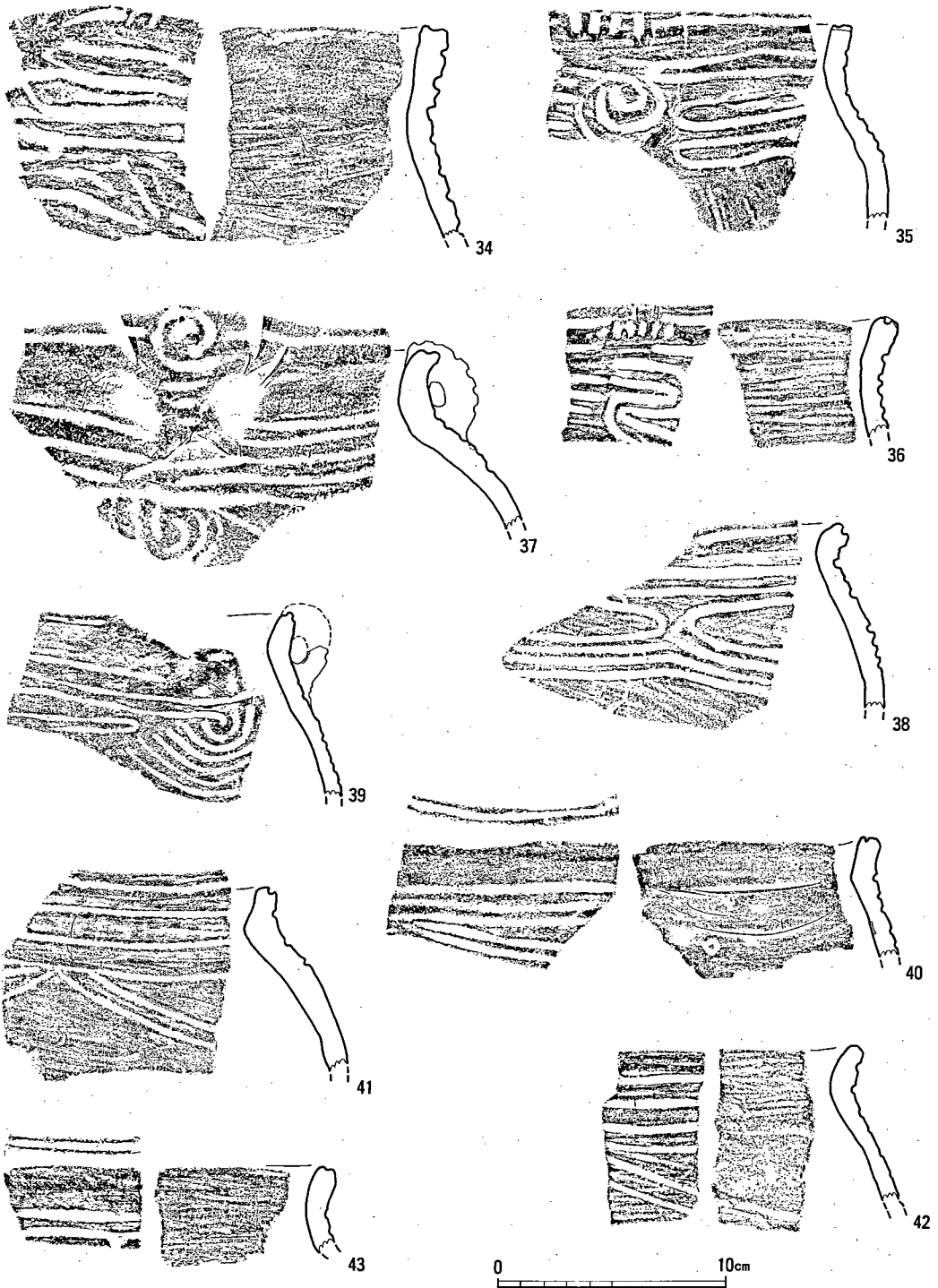
有文鉢 9 dJ 類 (52) 内彎気味に立ち上がる小形鉢の口縁部片で、口縁直下の平行沈線と胴部の沈線との間に不鮮明ながら縄文の施文がみられる。



第16図 縄文1号住居跡出土土器実測図5 (1/3)



第17图 縄文1号住居跡出土土器实测图6 (1/3)

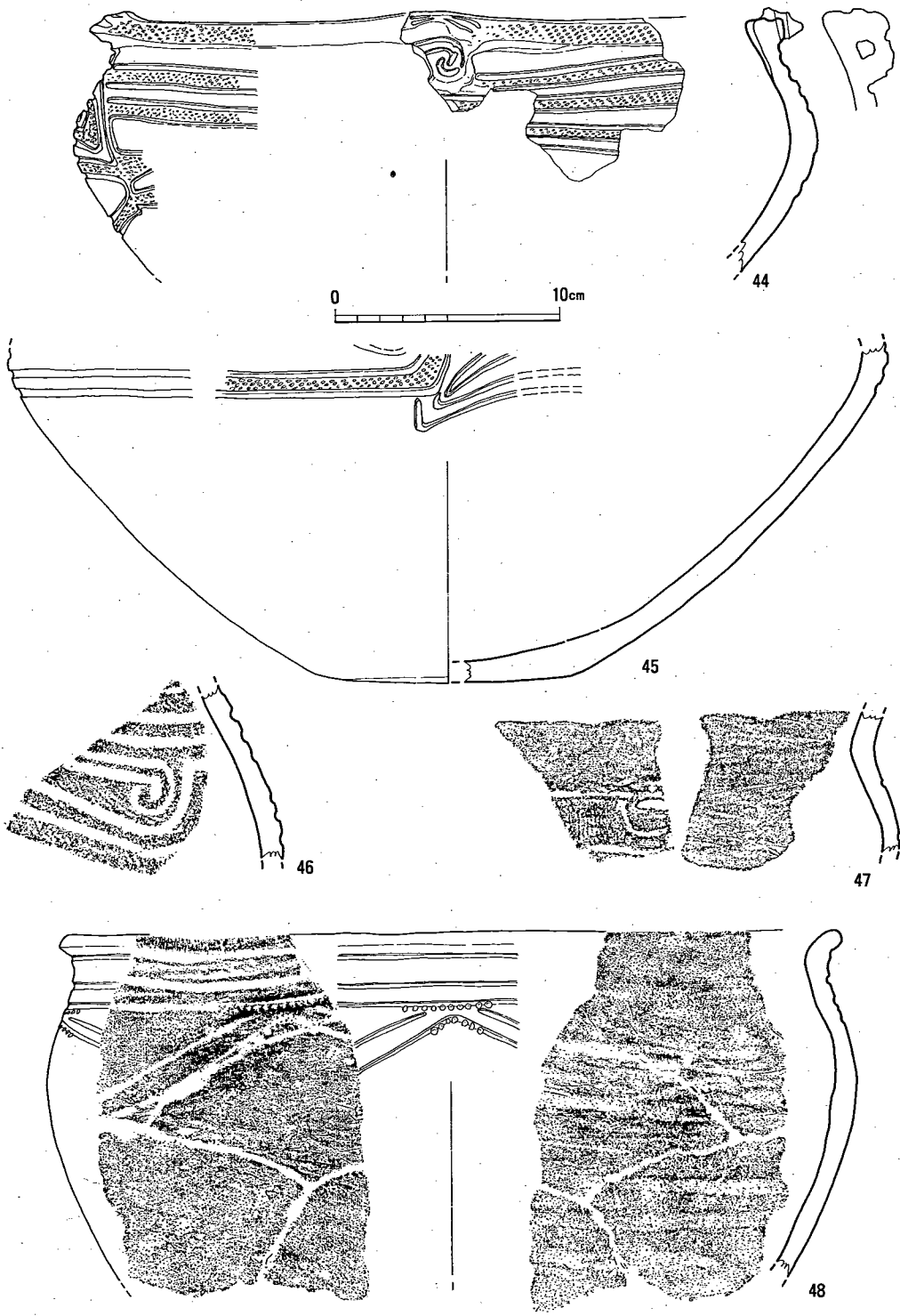


第18図 縄文1号住居跡出土土器実測図7 (1/3)

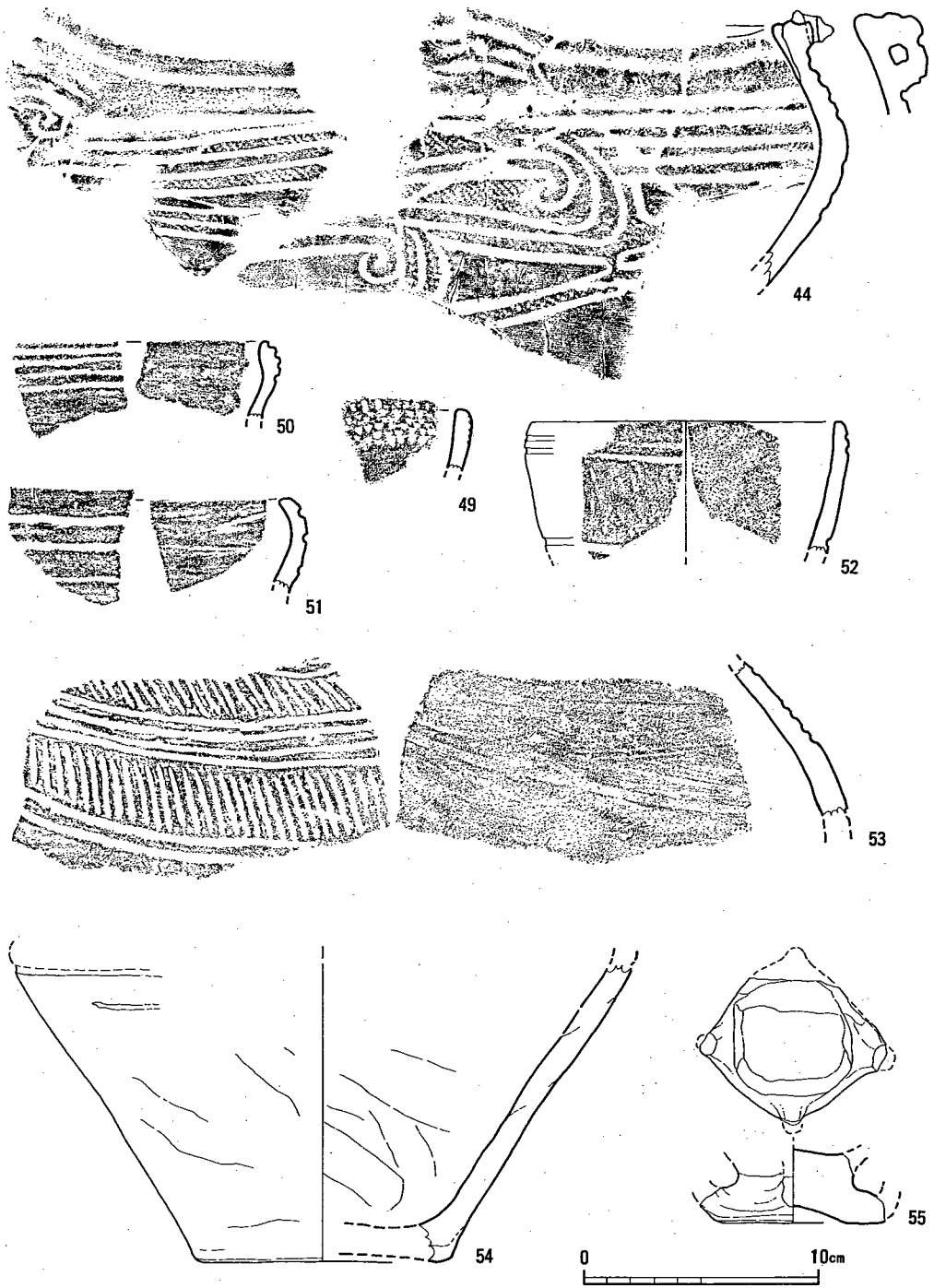


第19図 縄文1号住居跡出土土器拓影 (1/3)

有文鉢J類 (44~46) いずれも磨消縄文手法をとる鉢で、南西外側部分から出土し、縄文1号住居跡フク土出土破片と接合する。44は、復原胴最大径33.2cmの大きさの浅めの鉢で、膨れた胴部から頸部が括れて口縁部は短く外反するが、口縁部が内彎して立ち上がり端部が肥厚するようにもみえる。波頂部は4ヶ所らしく、橋状把手の付く部分が一對と、外方につまみ出して上面から丸穴を穿孔した部分が一対付くものと思われる。口縁部上面に沈線が巡り、胴部の文様は重弧の蕨状文と2条単位の斜行沈線・折り返し文などで文様が描かれている。45・46は口縁部を欠くが、44と同様な文様が使われている。



第20図 縄文1号住居跡出土土器実測図8 (1/3)



第21図 縄文1号住居跡出土土器実測図9 (1/3)

有文鉢G類 (47・53) 疑似縄文が用いられる例である。47は平行沈線と退化した渦文にヘナタリ疑似縄文が充填される、鉢か深鉢の胴部片である。

53は横走する平行沈線の間に短沈線を斜方に連続させたもので、鉢の胴部肩片である。

脚台付土器 (55) 杯部を失うが脚台付杯か浅鉢あるいは高杯のような器種であろう。脚台部の四隅に杯部に繋がる橋状の装飾把手が付くようである。

有文胴部破片 (21・22) 21は横走する平行沈線と渦巻文などからなる広めの文様帯を有し、22は大きめの橋状把手があり、把手に続くための沈線で描かれた文様がみられる。22が時期的に先行するのであろう。

有文底部 (54) 胴から上側を欠く底部破片で、胴部側に横走する沈線がみられる。

無文鉢1類 (59～61・65) 膨らんだ胴部から頸部が括れて口縁部が外反する器形の鉢。65は肥厚した口縁端部は面取りされるが内面に凹みがあり、波頂部上面に平行短沈線が付けられる。61は口唇端部が面取りされているが、59・60の口唇端部は丸い。

無文鉢2c類 (56・57) 膨らんだ胴部から頸部が括れて口縁部が直に立ち上がる鉢で、口唇部は面取りされ、波頂部は軽くつまみ上げられている。56は復原胴最大径34.4cmの大きさ。

無文鉢3a類 (58) 膨らんだ胴部から頸部が括れて口縁部が短く外反する鉢で、口唇部内面に僅かな凹みがある。つまみ上げられた波頂部の上面には短沈線が刻まれている。

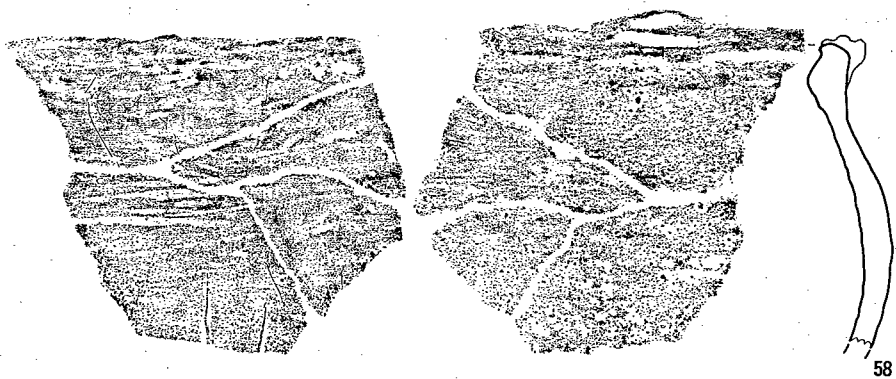
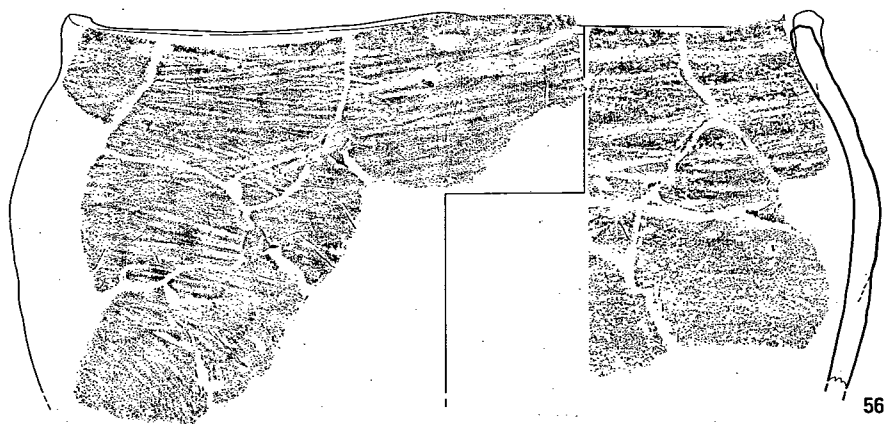
無文鉢3d類 (62・63・66・67) 膨らんだ胴部から頸部が括れて口縁部が短く外反する器形の鉢である。このうち67は波頂部が分からないが、他の例では波頂部がつまみ上げられている。62の波頂部上面は山字形に短沈線が刻まれ、66の波頂部は内彎気味に立ち上がっている。62の復原胴最大径は24.5cm、66の復原胴最大径は45.6cmである。

無文鉢7d類 (68・69・80) 胴部から殆ど括れずに口縁部が緩やかに外反する器形の深鉢あるいは鉢で、口縁端部は丸くおさまり、68では波頂部はつまみ上げられている。68の復原口径は16.4cmである。80は復原口径9.0cmの大きさで、器面はナデ調整される。

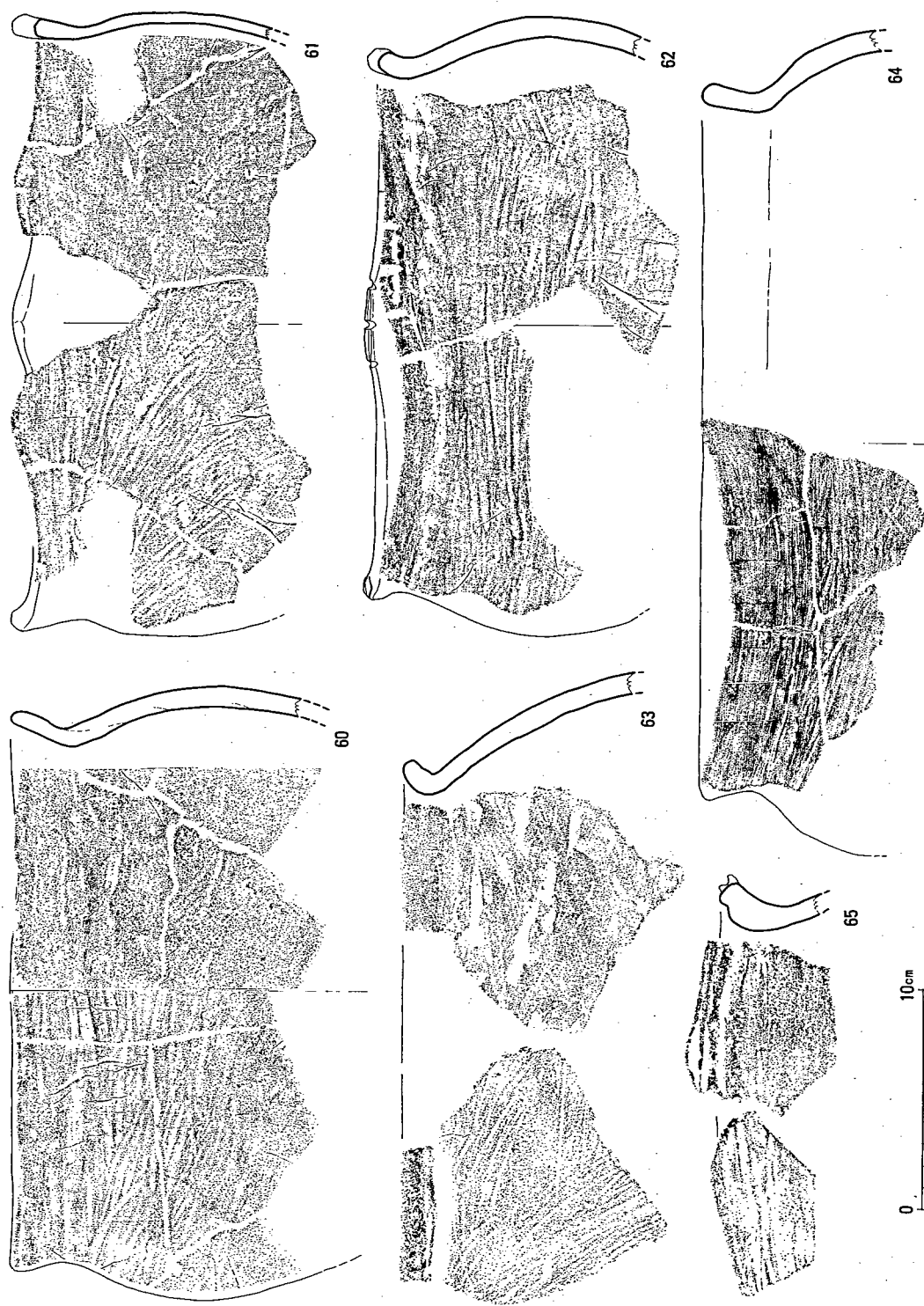
無文鉢8c類 (75・82・84) 75は口径17.2cm、器高13.3cmの大きさである。底部から口縁部が内彎気味ながらも直線的に開く鉢で、口縁端部はやや肥厚する。82は復原口径31.4cmの大きさで、口縁部は面取りされ、波頂部はつまみ上げられている。84は浅めの鉢で、口径13.8cm、器高7.0cm前後の大きさである。

無文鉢9c類 (76・85) 底部から口縁部が内彎して立ち上がる小形鉢である。75は復原口径21.0cmの大きさで、口唇部はやや肥厚する。85は復原口径が19.0cmで、口縁端部は面取りされている。

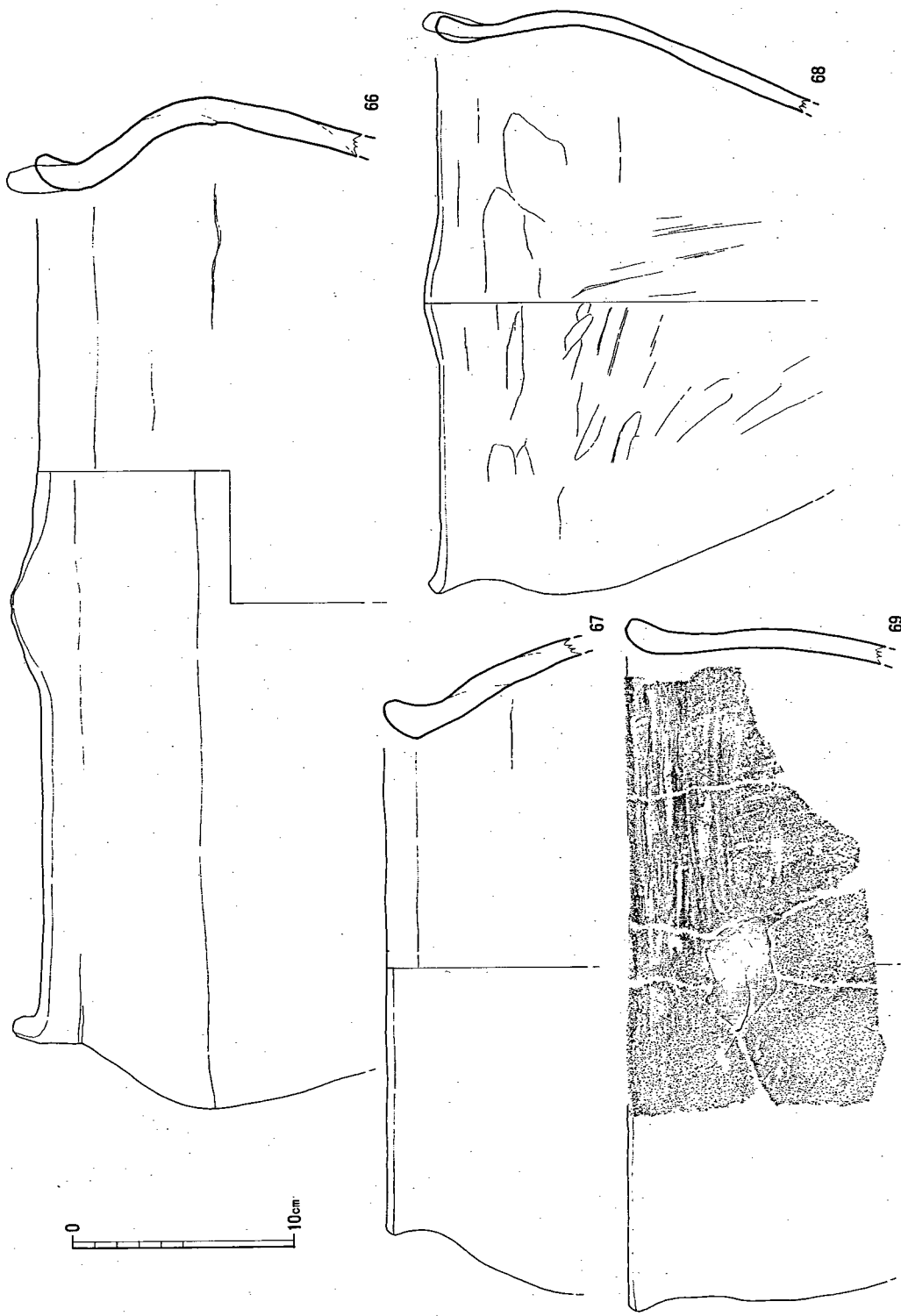
無文鉢9d類 (78・79・83・86) 底部から口縁部が内彎して開く小形の鉢で、78・79の器面はナデ調整される。79は復原口径13.0cmの大きさで、波頂部はつまみ上げたように肥厚する。83は復原口径23.2cmの大きさで、波頂部はつまみ上げられている。86は復原口径16.0cm、器高



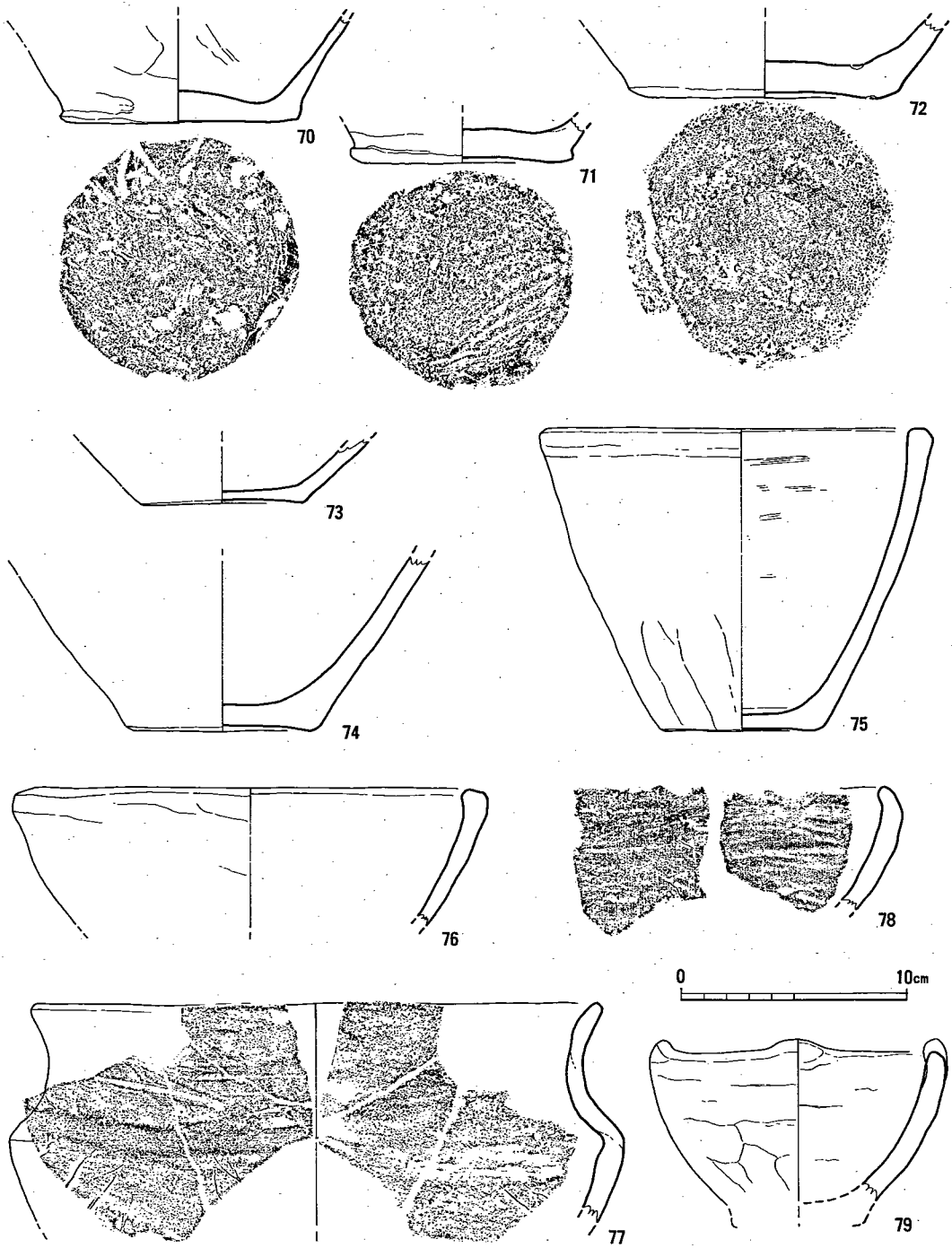
第22図 縄文1号住居跡出土土器実測図10 (1/3)



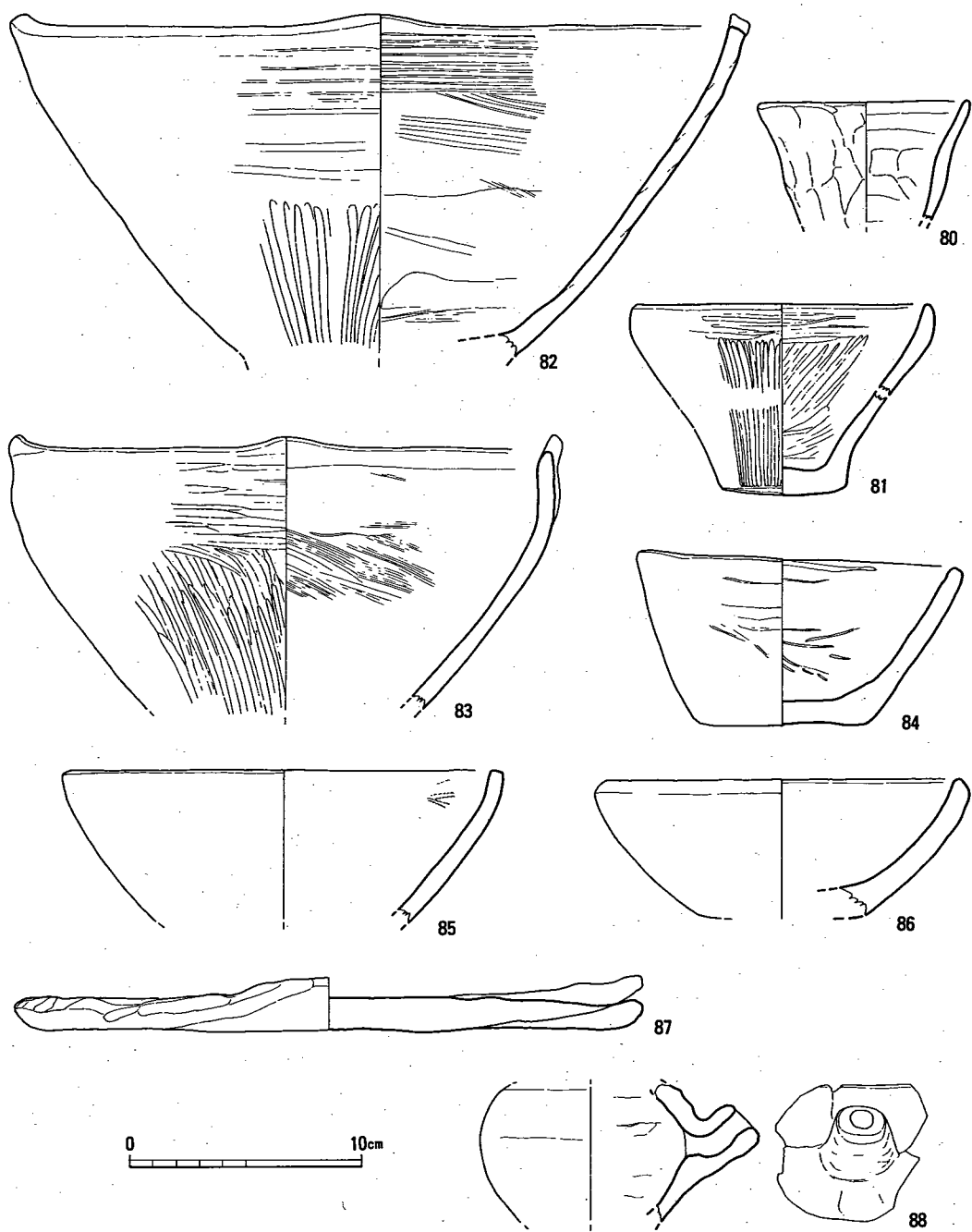
第23图 縄文1号住居跡出土土器実測图11 (1/3)



第24図 縄文1号住居跡出土土器実測図12 (1/3)



第25图 縄文1号住居跡出土土器実測図13 (1/3)



第26図 縄文1号住居跡出土土器実測図14 (1/3)

6.0cm程の大きさである。

無文鉢10d類 (77) 膨らんだ胴部から口縁部が外反する浅めの鉢で、復原口径25.0cmの大きさ。口縁端部は面取りされている。

無文底部 (70~74) 70・71は条痕とナデ調整のみられる底部だが、72~74は丁寧なナデ調整や研磨調整がみられる有文鉢などの底部であろう。

皿形土器 (87) 復原径27.0cm、厚さ1.0cm前後の円盤状の皿で、内外面ともナデ調整されて、口縁部は捻ったような形状になつている。

注口土器 (88) 注口部と胴部の一部が残るのみで、全体の形状は不明である。復原胴最大径9.8cm程の大きさで、注口部は胴最大径の位置に付くが、短く上側に反る。文様はみられず、注口部の基部にも特に装飾はみられない。

石器 (図版9・10、第27~30図、表3)

打製石斧 (1~6)

7点出土したうち6点を図示する。いずれも安山岩製である。1はやや緻密な材質で、横長な剥片の周囲から調整剥離を加えている。2は片面が剥落していて、素材の剥離方向は確認できないが、3・4・6ともに横方向の剥離面が確認できる。6は厚みのある石斧で、片面に剥落がみられ、風化して鬆が入ったような面をみせる。5は薄めの扁平な剥片の周囲に調整剥離がみられる。

使用痕のある剥片 (7・8)

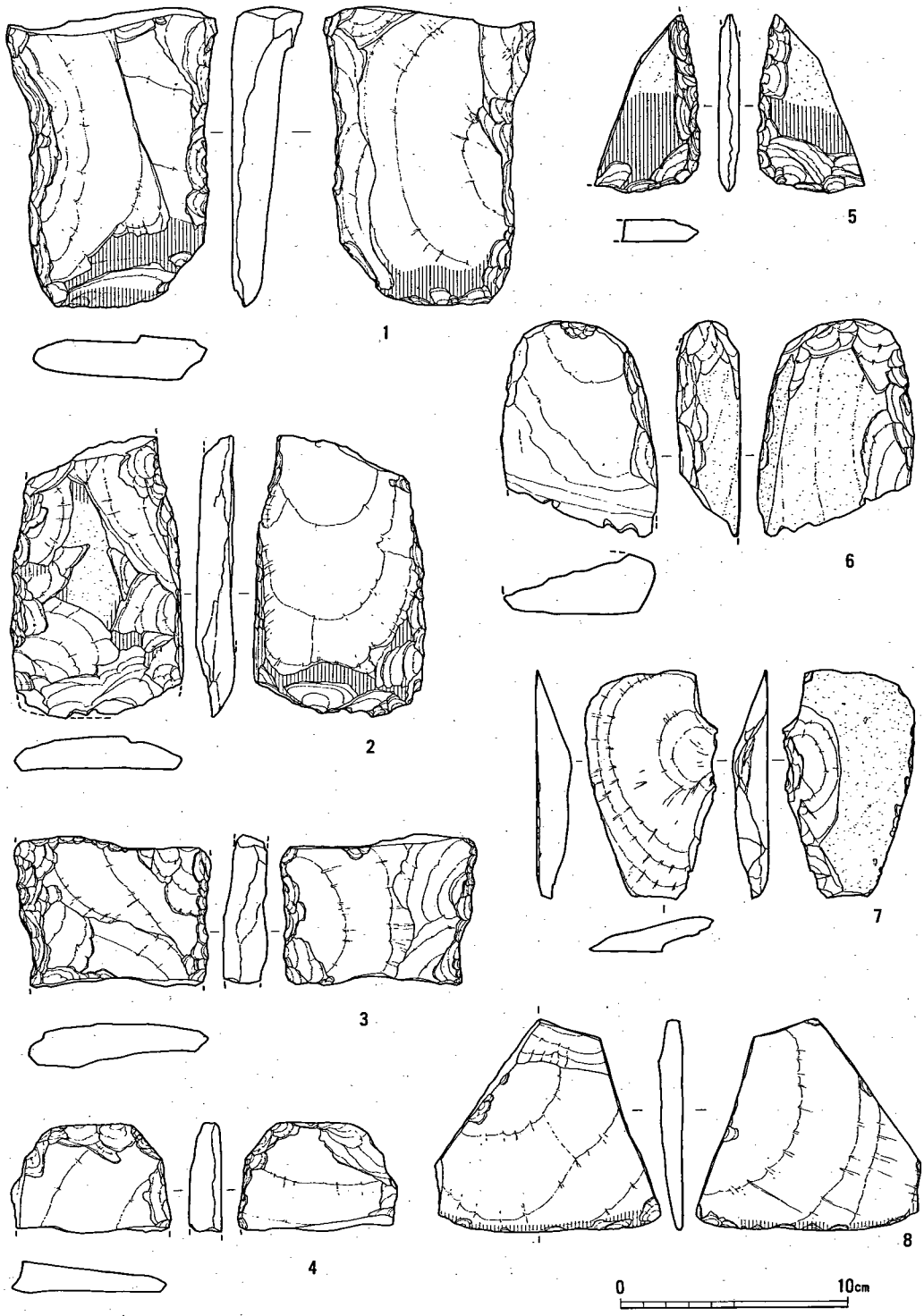
7は安山岩製の石皿あるいは作業台に使用されていたとみられる磨耗痕の残る素材を、瀬戸内技法の翼状剥片のように横割ぎした剥片で、先端側の薄くなった縁に刃こぼれ状の使用痕がみられる。打製石斧製作工程で剥離した際に偶然小さめに剥離された素材であろうか。8も打製石斧の素材としてはやや小さいが、扁平な剥片の尖った縁部に刃こぼれ痕がみられる。

打欠石錘 (9~17)

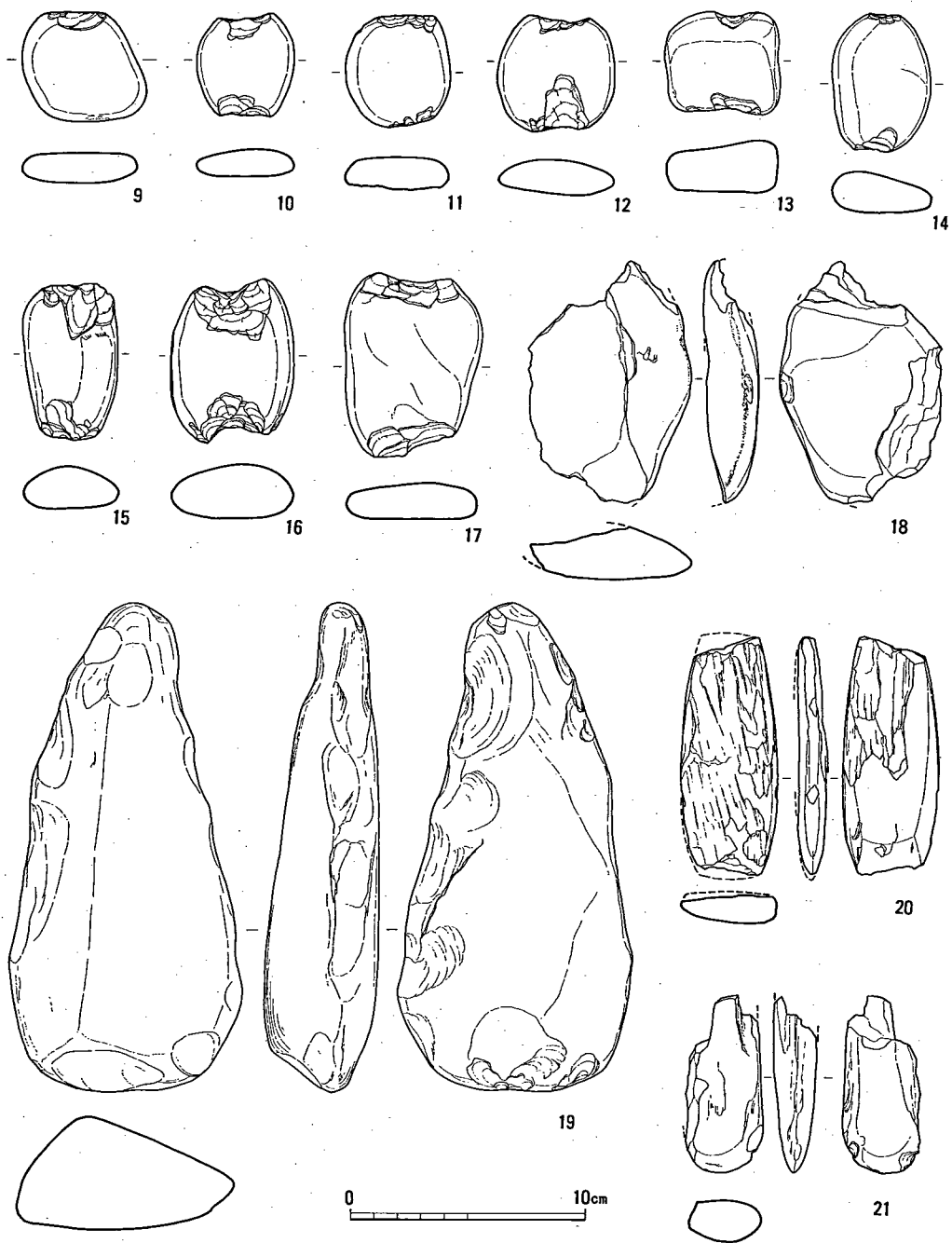
10点出土したうち9点を図示する。14と不掲載の1点が砂岩で、他は安山岩の川原石らしい円礫を素材にし、長軸側両端を打ち欠いた抉りを紐掛けにしているが、13の1点のみは短軸側に打ち欠きがみられる。小形品は円形に近く、法量のやや大きな例は長楕円形に近い。重量は30g~103gの幅をもつが50g前後の例がやや多い。

敲石 (18・19)

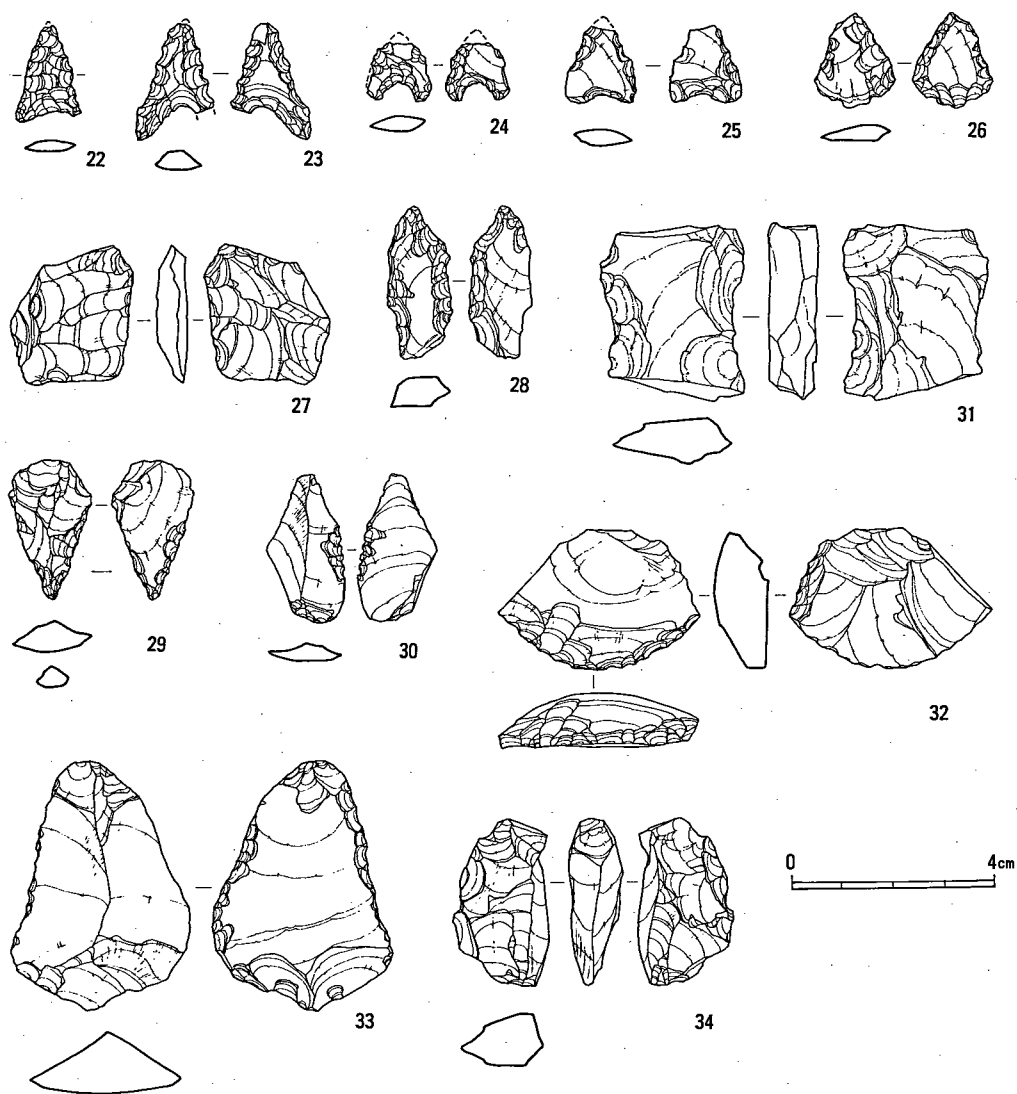
18は片側を失うために全体の形状は不明だが、あまり厚くない安山岩円礫の縁に敲打痕が集中する。掌中に収まり易い大きさで、平らな面の端部近くには磨耗痕もみられる。19は少し厚みのある安山岩を素材にするが、乳棒状石斧や撥形の打製石斧に似た形をもち、礫器のような調整剥離が加えられて握り易い形状を呈している。石斧であれば刃部に相当する部分は厚めで、敲打痕・磨耗痕がみられる。



第27图 縄文1号住居跡出土石器実測図1 (1/3)



第28図 縄文1号住居跡出土石器実測図2 (1/3)



第29図 縄文1号住居跡出土石器実測図3 (2/3)

磨製石斧 (20・21)

緑泥片岩に近い蛇紋岩製の磨製石斧で、基部側を欠損するが、20は本来の長さにほぼ近い状態に残り、やや薄めの体部をもつ。

打製石鏃 (22~26)

22の1点が黒色黒曜石製である他は4点ともに姫島産黒曜石製である。石鏃は5点のみだが、他の黒曜石の剥片・剥片石器類の大半を姫島産黒曜石が占めている。形態的には26が凸基式に含めうるもののやや不定形である。22・25は凹基式だが挟りが少なく、平基式に近い。

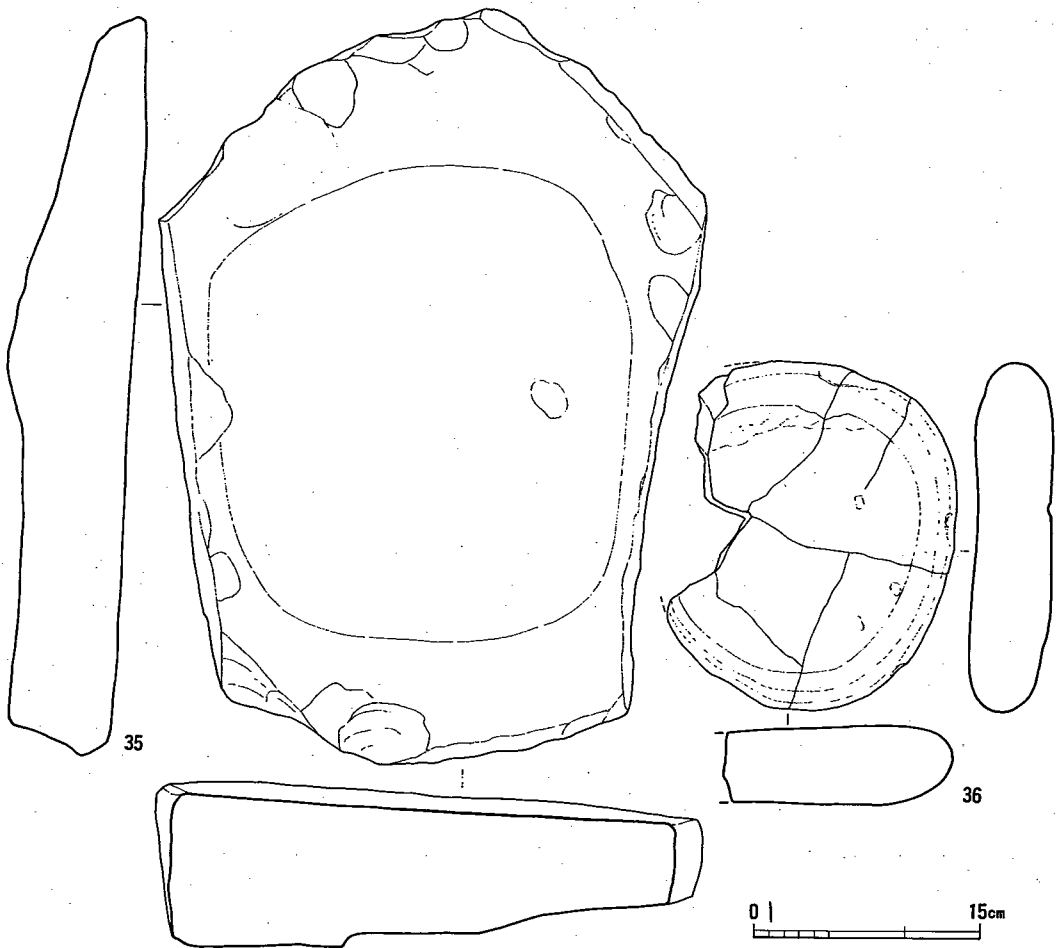
石 錐 (27) 姫島産黒曜石の不定形な剥片の一端を調整して刃部にしたものである。

削 器 (28) 黒色黒曜石の小さな縦長剥片を用いた削器で、打瘤部を除去して側縁を刃部に用いている。

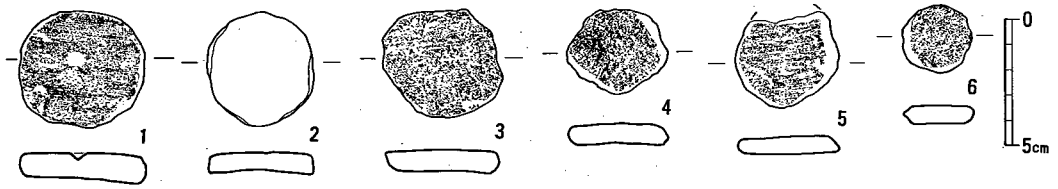
搔 器 (29~33) 31がサヌカイト質の安山岩製である他は姫島産黒曜石製である。29・33は縦長剥片に近いものの不定形な剥片を素材にし、打瘤部を調整剥離などで除去している。

彫 器 (34) 姫島産黒曜石のやや厚みのある剥片の両面に調整剥離がみられ、端部側から刃部面が作られている。

石 皿 (35・36) 35は石囲炉の約1m北側から出土した作業台らしい石皿である。安山岩のやや扁平な角礫を用いたもので、使用面は磨耗するもののさほど凹まない。裏面は起伏があるためか使用されていない。36は石囲炉に使用されていた石材が接合したもので、火熱を受けて、



第30図 縄文1号住居跡出土石器実測図4 (1/5)



第31図 縄文1号住居跡出土土製品実測図 (1/3)

亀裂を生じながら割れて一部を欠く。両面の平坦面は使用されて磨耗し、僅かに凹む。黒雲母を含む安山岩の扁平な円礫を素材にするが、石皿としてはやや小振りである。このほかにも、やはり石囲炉に使用されていた石皿片が1点出土している。

土製品 (図版10、第31図、表4)

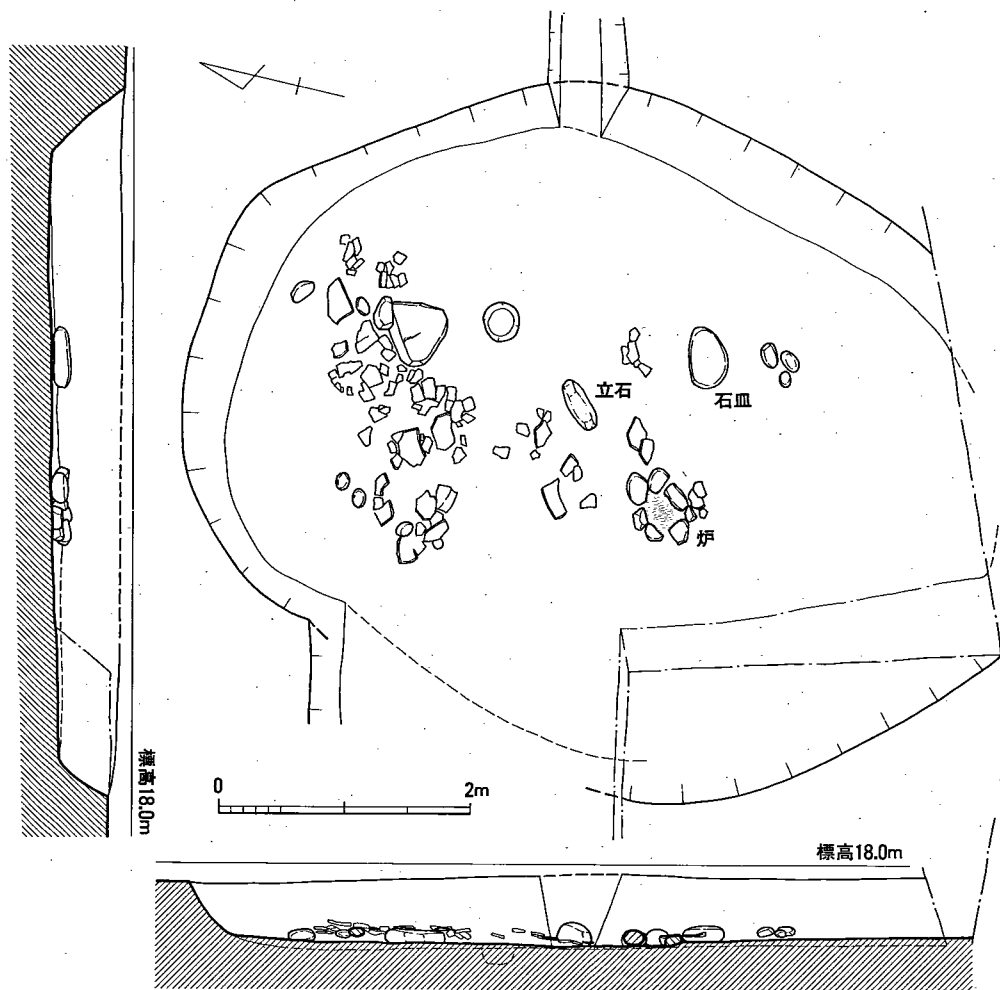
土器片円盤 (1～6) 土器片を打ち欠き調整して、円形あるいは円形に近い三角形などの形にしたもので、周囲を打ち欠いた後に研磨を加えたものと、打ち欠きのまま放置するが磨耗痕のみられるものがある。1は土器の外面にあたる面の中央に中途までの穿孔がみられる。重量では6.6g～36.0gの幅があり、20g以上の2点とも周縁が研磨されている。

縄文2号住居跡 (図版11-1、第32図)

II区とIII区の境の水路があり、未掘の畦部分にも接し、調査期間の問題もあって全掘出来なかったが、E・F-21・22区で発見された竪穴住居跡である。南西部が未掘のため全体の形状は分からないが、主軸方向N9°Eの楕円形もしくは隅丸方形プランで、南北方向に6.8m、東西方向に5.2mの規模である。住居跡の竪穴は、淡黄褐色と淡茶褐色の砂が互層に堆積する砂層に掘り込まれ、周壁は高さ0.4～0.5mに残るが、全体にやや傾斜が緩やかである。竪穴の覆土は木炭などを含んだ茶褐色の砂質土で、土器片などを含む。床面はやや堅緻だが、床面と互層の地山にある茶褐色を帯びた硬めの砂部分との区別は困難である。床面中央のわずかに南西寄りに石囲炉が施設されていて、炉の0.5m北東側には立石が据え付けられている。柱穴状ピットは、うまく検出し得なかった。

炉跡 (図版12-1)

安山岩の川原石らしい円礫や割石を並べた、花卉状に上が開く形の石囲炉である。上部で南北0.6m、東西0.4m、下部では直径0.4・0.3m、深さが0.1m程の大きさである。掘方は直径0.7mの不整円形で、7個の石を楕円形に配して並べている。北東側の石が最も大きく、東側隣の石がこれに次ぐ。内部には焼土と木炭がみられるものの、それ以外の部分では顕著でない。内



第32図 縄文2号住居跡実測図 (1/60)

部の下部に敷石はみられない。

立石と作業台

炉跡の北東側に0.5mの距離を隔てて立石がある。N48°E方向に軸線に向けた、安山岩の川原石らしい扁平な石が、床面に打ち込まれたように立っている。直径40cm強、厚さ10cm弱の大きさの石で、そのうちほぼ半分が床面に埋まる。石の上面には敲打痕は特にみられないが、磨耗している。

また、炉跡の0.8m東側、立石の0.8m南東側に、作業台らしい石皿がみられる。東西に長軸を向けていて、石の上面は平坦で磨耗が顕著である。

遺物出土状況 (図版11-2・12-2)

住居跡プラン検出時には堆積土上部に中凹みの状態で土器片が散乱していた。堆積土を急い

で掘りさげたために十分な観察は成し得ていないが、全体に土器片が含まれ、床面に近い高さでは北東部にやや集中していた。炉跡や作業台の南側ではまとまった遺物の出土はみられず、周壁に沿った部分からも出土遺物は少ない。なお床面の精査は不十分だが、床面に接して出土した遺物は僅かである。

出土遺物

縄文土器（図版13～17、第33～52図、表5）

119点を図示するが、これ以外にも約104.5kgの土器片が出土した。

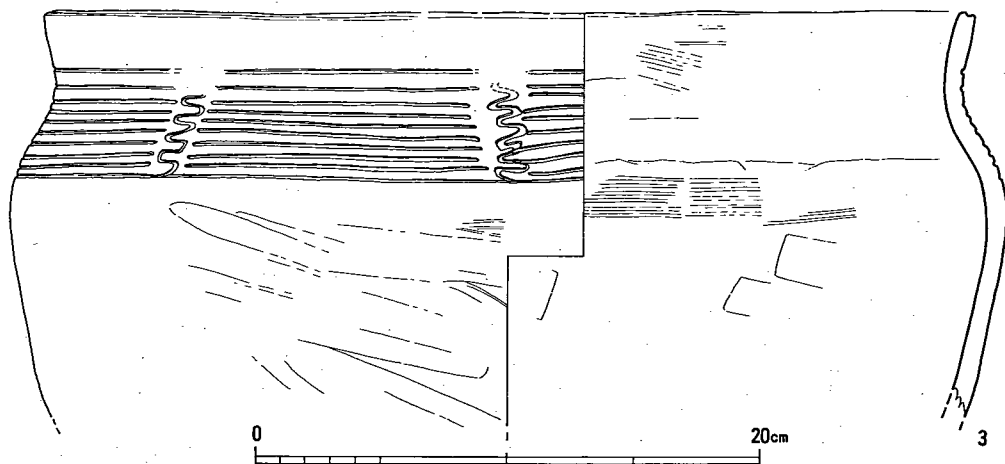
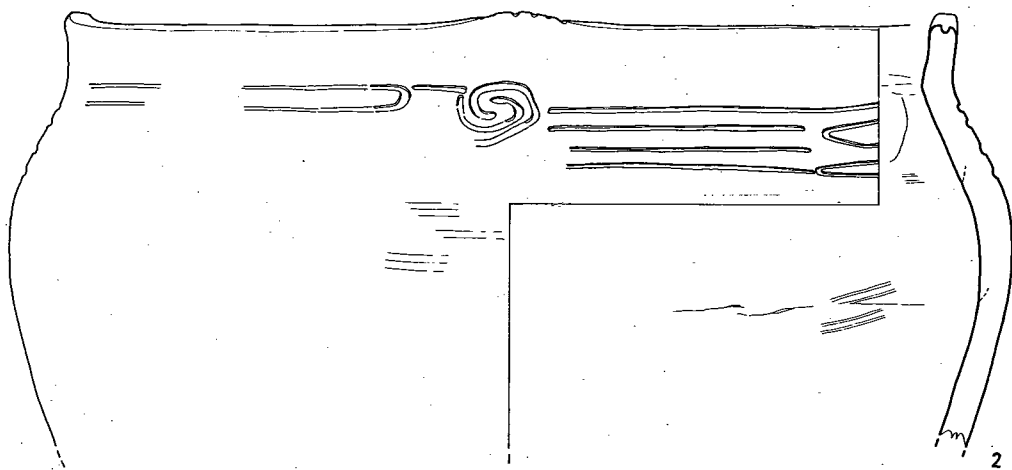
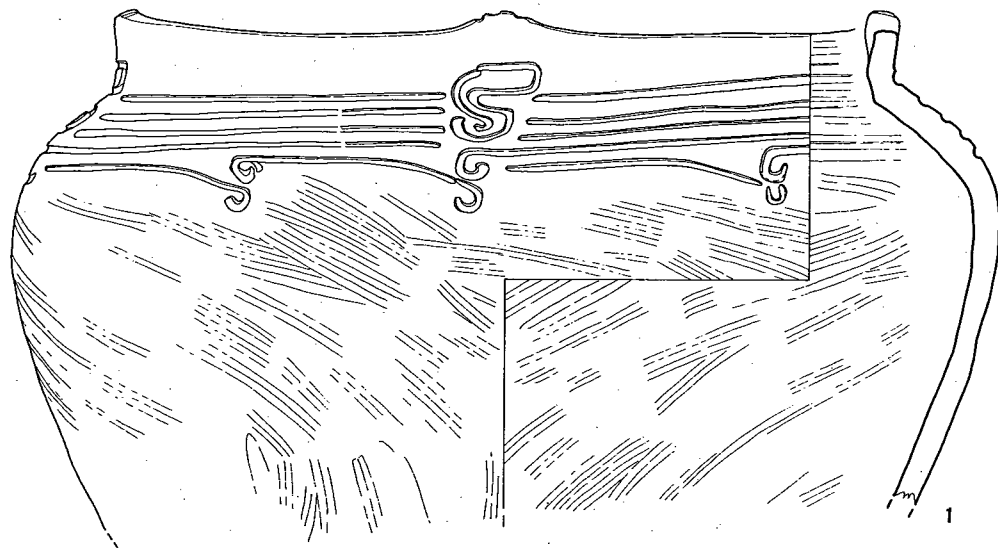
有文鉢1 b類 (26) 膨れた胴部から括れる頸部を介して口縁部が外反する器形だが、口唇部上面に沈線が巡る。波頂部上面には刻み目が付され、頸部から胴肩部に重弧のS字文が配されて、折り返しの平行沈線が両側にのびる。

有文鉢1 c類 (15) 膨れた胴部から括れる頸部を介して口縁部が外反する器形だが、口唇部上面が面取りされる。口縁直下と頸部・胴部に2条の平行線が走り、口唇部に刻み目の付く波頂部下では口縁部と胴部の沈線に続く蕨状渦文が描かれている。

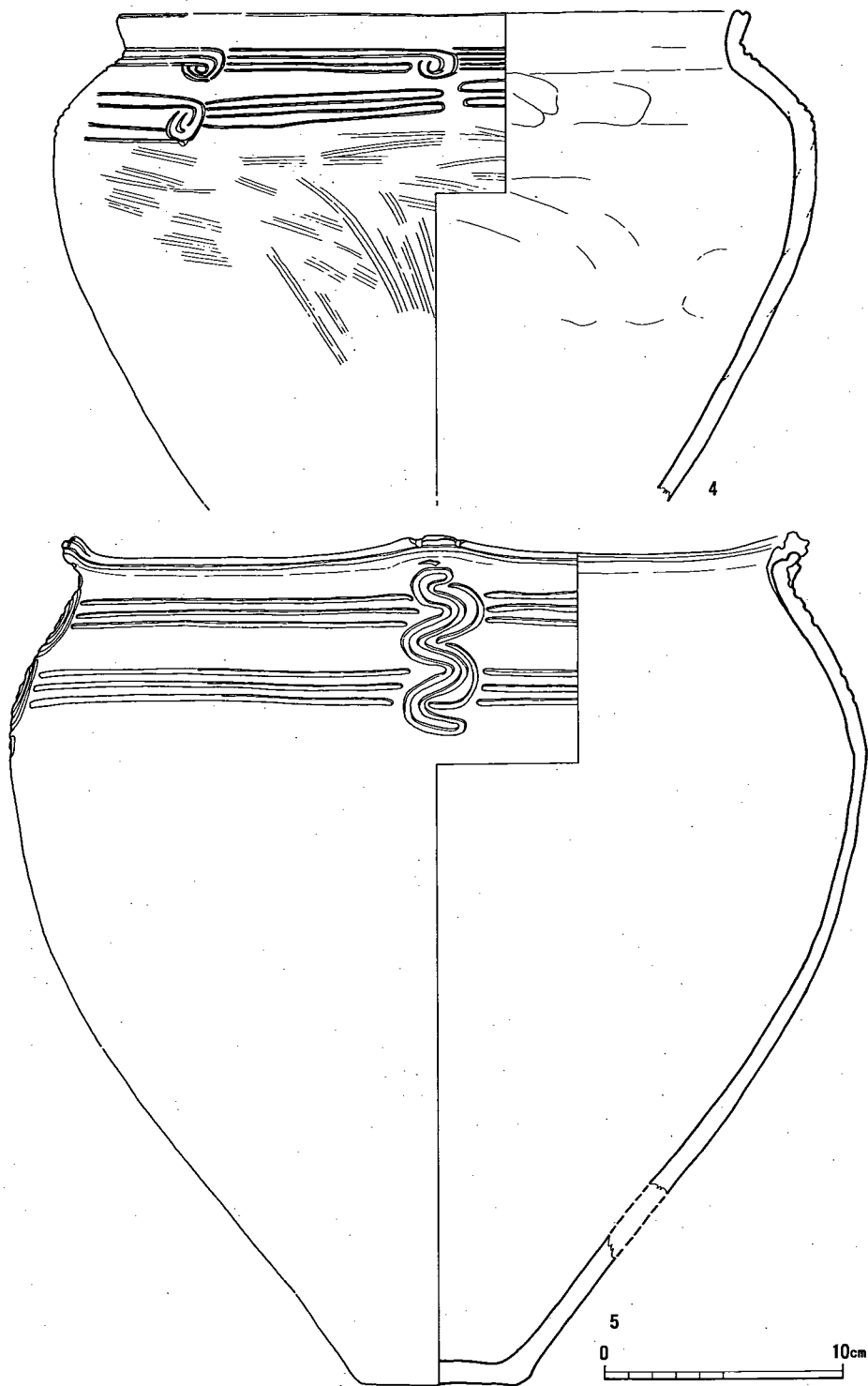
有文鉢1 d類 (14・16・17) 膨れた胴部から括れる頸部を介して口縁部が外反する器形だが、口唇部上面が丸い。14は頸部と胴部に4・5条の平行沈線列があり、両者を繋ぐ形に蛇行文が配置されている。16は、14が外反気味の口縁部なのに対して内彎気味に立ち上がるが、頸部から胴部にかけて、折り返しのある平行沈線が巡る。17は波頂部外面に間延びしたS字状蛇行文が並ぶ破片である。

有文鉢2 a類 (1) 膨らんだ胴部から頸部が括れて口縁部はそのまま直に立ち上がる器形の鉢で、口唇部上面は面取りされている。波頂部はつまみ上げられてやや肥厚するが刻み目が刻まれている。波頂部下の胴肩部には重弧の蛇行文と蕨状文が描かれ、横走する平行沈線が繋いでいる。復原口径31.2cm、胴最大径49.0cmの大きさである。

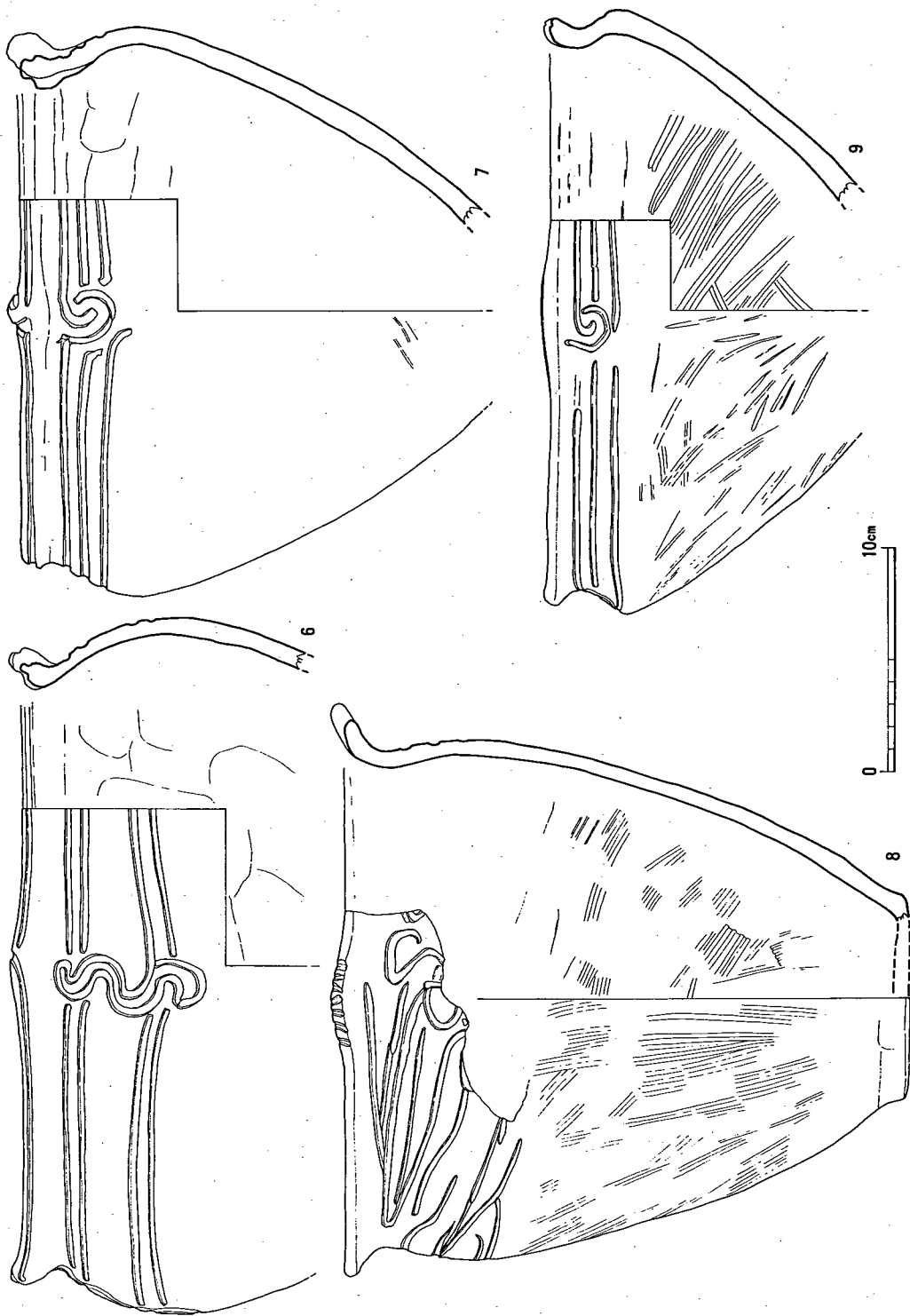
有文鉢2 b類 (2～4・10・18～24・28・29) 膨らんだ胴部から頸部が括れて口縁部はそのまま直に立ち上がる器形の鉢で、口唇部上面には沈線が巡る。2は復原口径35.2cmの大きさで、刻み目のある波頂部下の胴肩部に重弧渦巻文らしい文様が描かれ、平行沈線で繋がれるが、中間部分に沈線の折り返しもみられる。3は復原口径37.0cmの大きさで、頸部から胴部に横走する平行沈線列があり、波頂部の中間に相当する部分の胴部にS字蛇行文が配されている。4は復原口径35.8cm、胴最大径43.0cmの大きさで、波頂部は分からないが、胴肩部に重弧の蕨状渦巻文と折り返しの平行沈線文が描かれている。10は復原口径16.0cmの大きさである。頸部と胴部に2条の平行沈線を走らせている。波頂部下では平行沈線に続く重弧の蕨状渦巻を下向けに2段描く部分と、胴部の平行沈線から頸部の平行沈線部分に上がる蕨状渦巻文を描く部分がある。18は波頂部破片だが単線の渦巻文と横にのびる沈線がみられる。20は波頂部下の蕨状渦巻



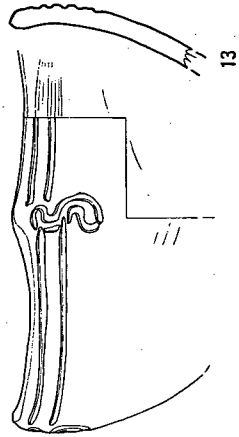
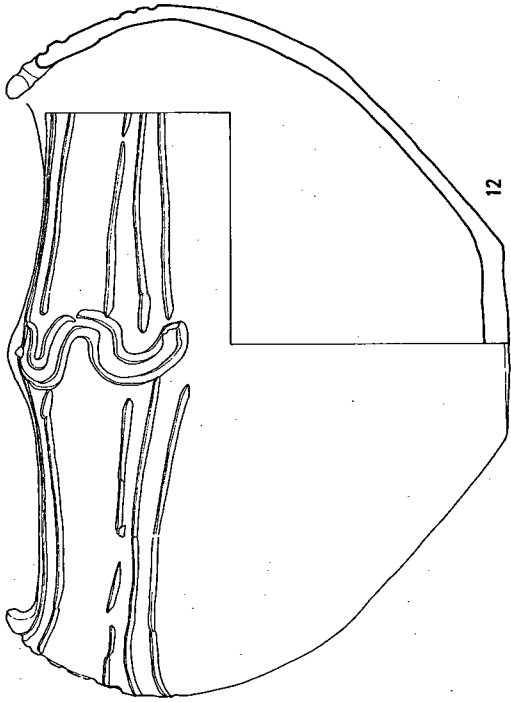
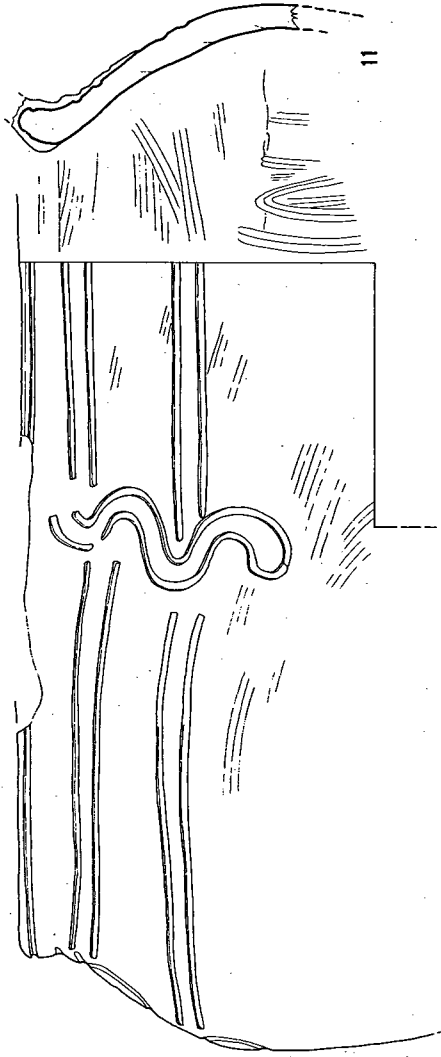
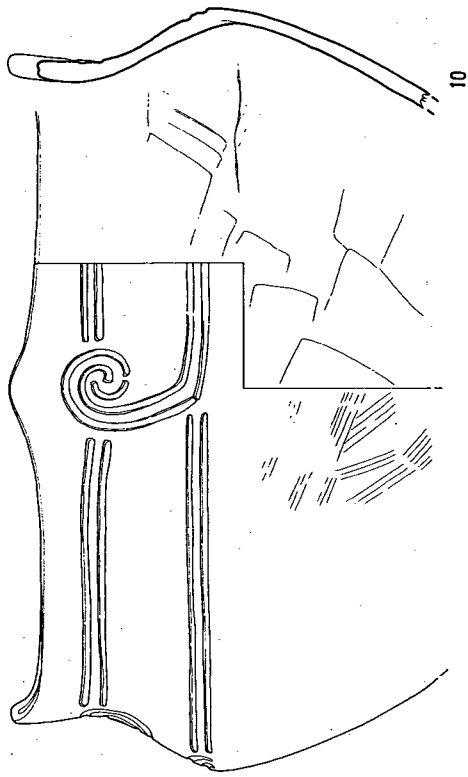
第33図 縄文2号住居跡出土土器実測図1 (1/3)



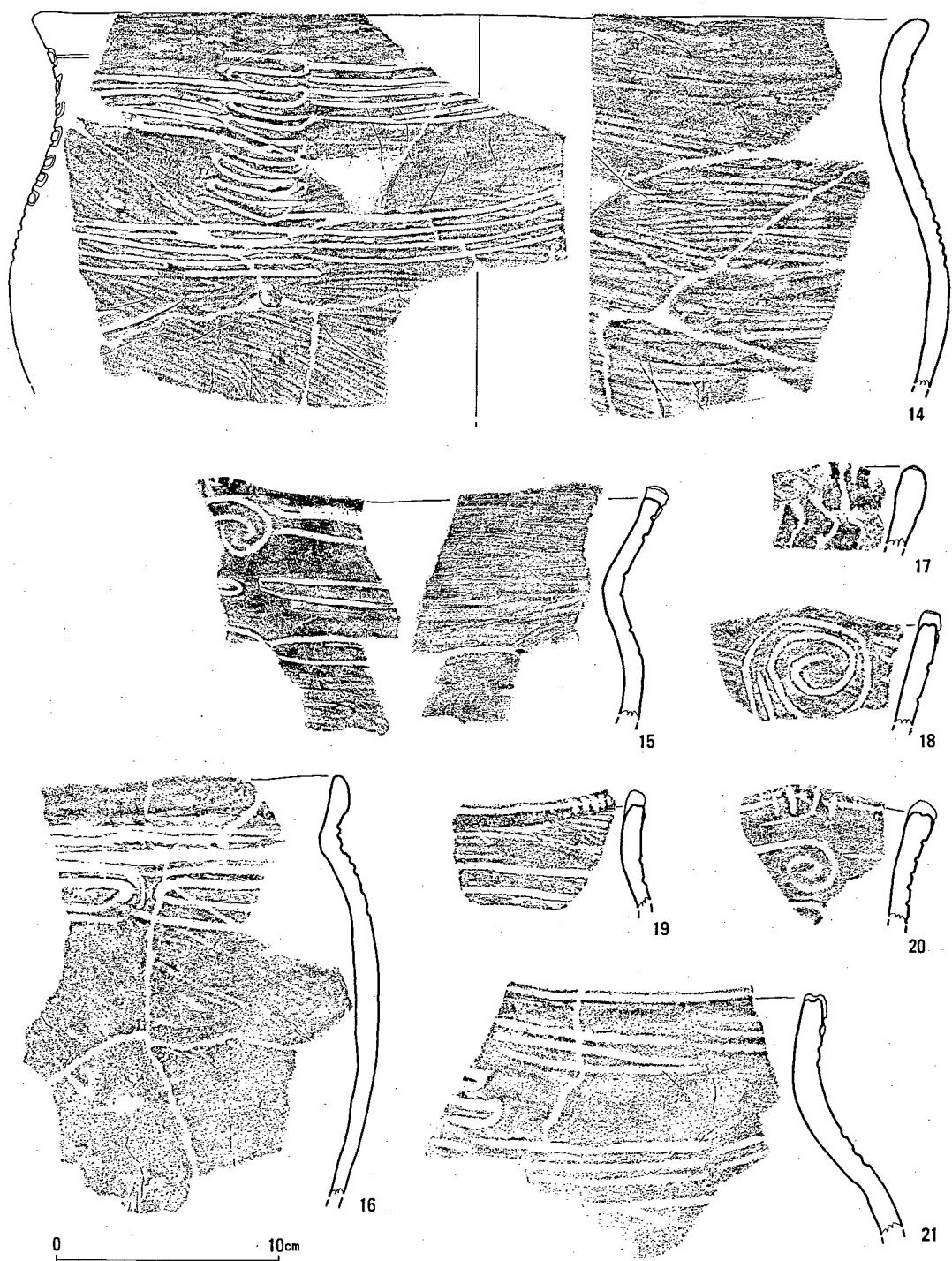
第34図 縄文2号住居跡出土土器実測図2 (1/4)



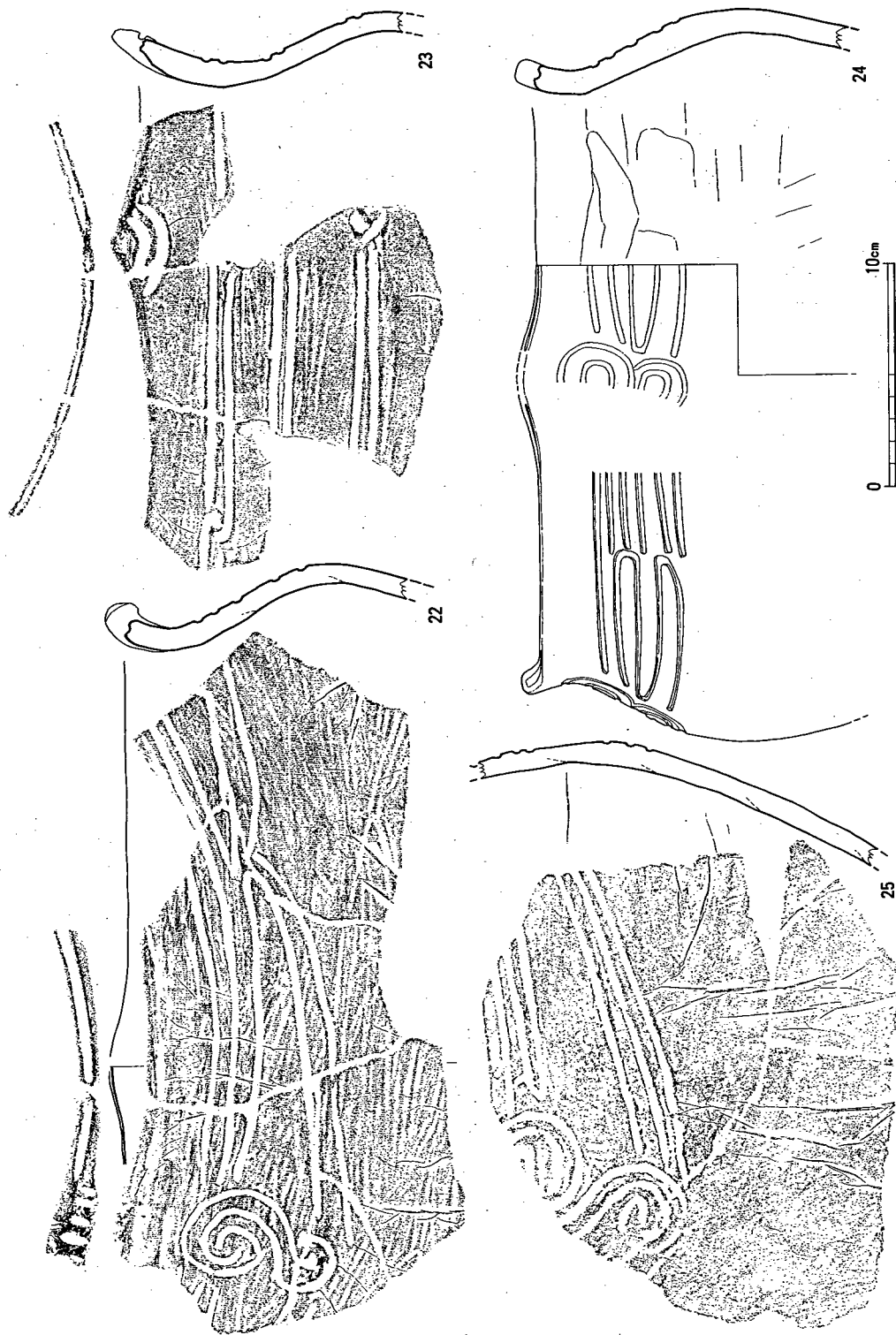
第35图 繩文2号住居跡出土土器実測图3 (1/3)



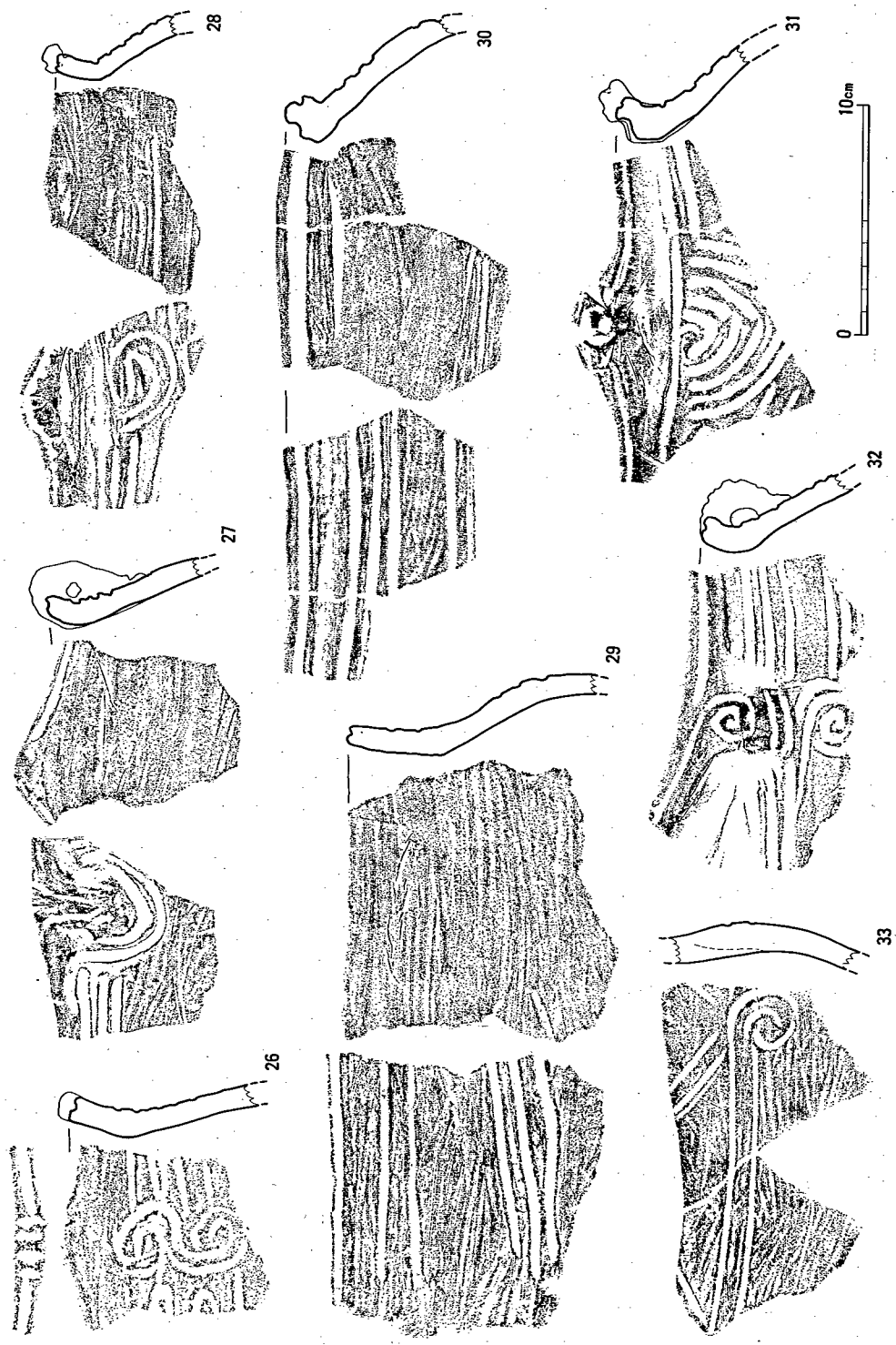
第36图 縄文2号住居跡出土土器実測图4 (1/3)



第37図 縄文2号住居跡出土土器実測図5 (1/3)



第38图 縄文2号住居跡出土土器実測図6 (1/3)



第39图 縄文2号住居跡出土土器実測图7 (1/3)

が単線で2段に描かれている例で、21は波頂部下にS字蛇行文、22は重弧の逆S字文が描かれている。23は、波頂部外面に重弧の短沈線、その下の頸部から胴部にかけて重弧S字文?が描かれて、S字文に繋がる2条単位3段の平行沈線が走り、平行沈線は波谷部の中間位置で巴状の文様になっている。24は波頂部下に2段の重弧渦巻文?が配されて、横長の蛇行折り返しの沈線・平行沈線が続く。28は口唇部上面の沈線内に刺突列点が付され、胴肩部には鈎形に近い重弧の渦文と平行沈線が描かれている。

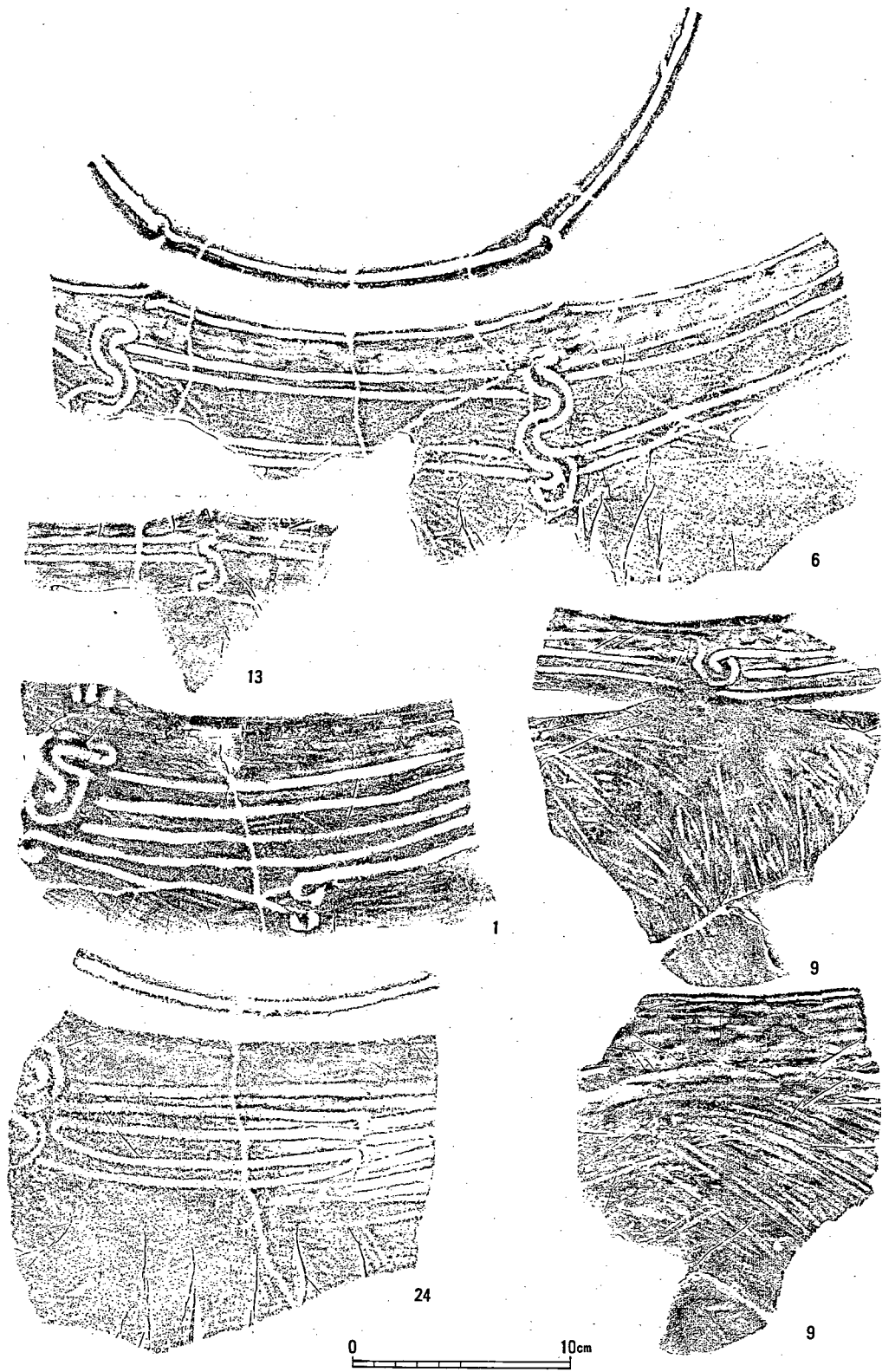
有文鉢3 a類 (5・7・11・30・31・37・38) 膨らんだ胴部から頸部が括れて、口縁部は短く外反する器形の鉢あるいは深鉢で、口縁部内面に段をもつ。5は完形に復原できて、写真図版の土器は長胴に復原しているが、接合で歪みを生じるなどしているため、実測図は歪みを補正して作成した。復原口径41.6cm、胴最大径48.6cm、器高48.0cmの大きさで、口縁部内面に段状の沈線が巡る。波頂部はつまみ上げられて上面はキ字形に沈線が刻まれ、頸部から胴肩部に重弧のS字状蛇行文が描かれて、蛇行文を繋ぐように頸部と胴部に平行沈線が巡っている。6では復原口径28.2cmの大きさ、7では復原口径23.0cm、胴最大径25.6cm、残存器高22.0cmの大きさで、口縁部内面の段は明瞭である。波頂部は肥厚して、口縁部外面に巡る沈線が斜方向に頂部をのり越える。胴肩部には重弧のS字蛇行文あるいは重弧の蕨状文が波頂部下に描かれて、平行沈線がこれを繋いでいる。11は復原口径34.0cm前後の大きさで、波頂部は分からないが、口縁部内面に微かに段状沈線の名残を留めている。重弧のS字蛇行文とこれを繋ぐ頸部と胴肩部の平行沈線は、6の文様に酷似している。31は波頂部上面に小さな渦文、内面の段の部分に刻み目を付けている。頸部下には渦巻文を半裁したような同心半円が描かれている。

有文鉢3 b類 (27・32・34) 膨らんだ胴部から一旦頸部が括れて、口縁部が外反する器形の鉢あるいは深鉢であるが、口縁部の外反度が低く、直に立ち上がる器形との境界は微妙である。口唇部上面に沈線を巡らせている。27は橋状把手の裾に同心半円の重弧線を描き、頸部に平行沈線が巡る。32は橋状把手部分に単線の、胴肩部に重弧線の蕨状渦巻文が描かれている。34は波頂部下にS字状蛇行文が描かれ、3条の平行沈線が頸部付近を横走する。

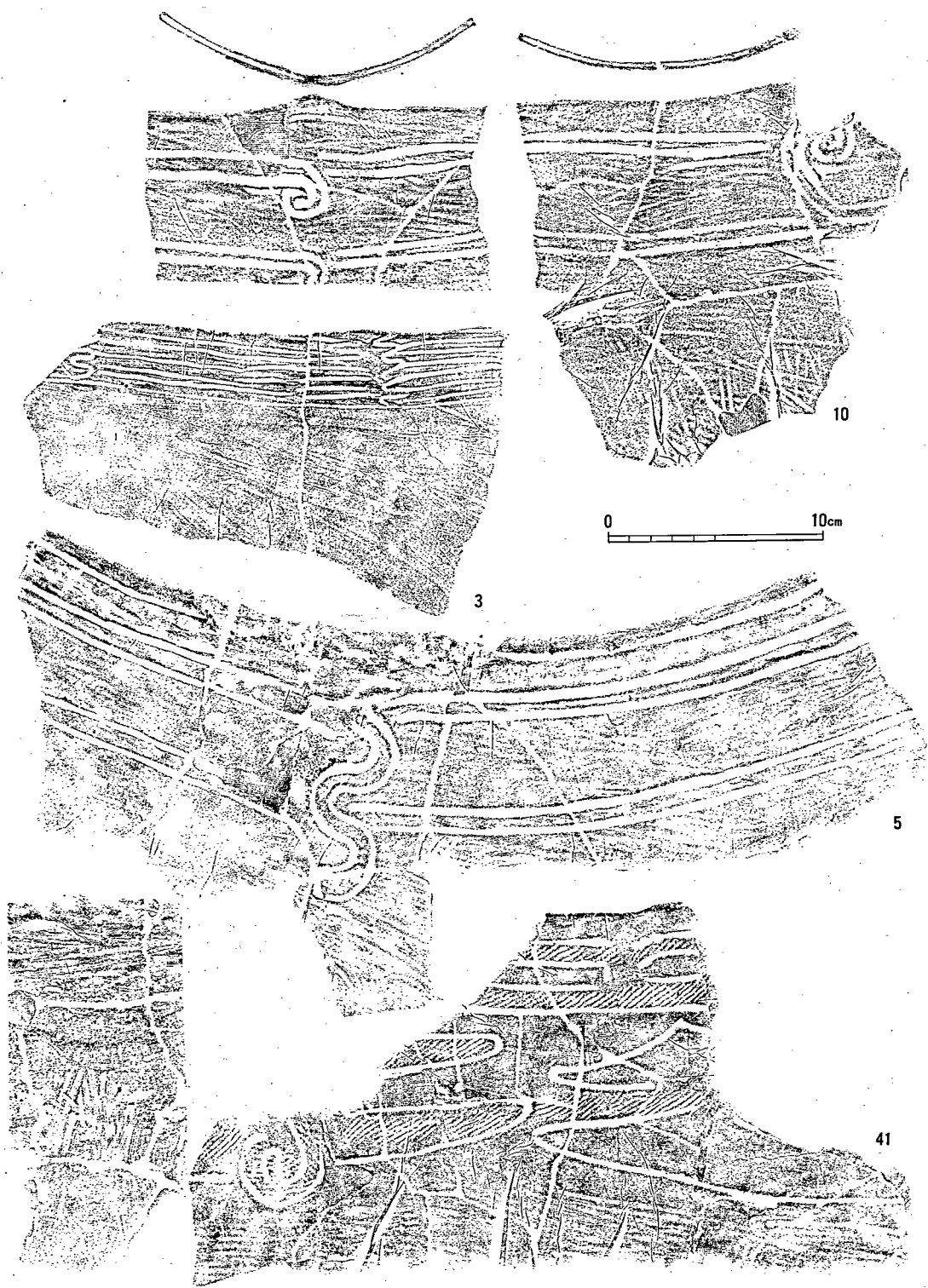
有文鉢3 c類 (35・36) 膨らんだ胴部から頸部が殆ど括れずに口縁部が外反する浅めの鉢で、口唇部は面取りされている。35では頸部外面は平行沈線と沈線間を結ぶ斜行沈線が山形をなし、口縁部内面に逆S字形の貼り付け文がみられる。36は復原口径26.0cmの大きさで、肥厚する波頂部に刻み目が付され、胴部にはS字状蛇行文と沈線の折り返しがみられる。

有文鉢7 d類 (8) 底部から胴部へ膨らみ、頸部が殆ど括れずに口縁部が外反する器形の深鉢である。胴部内外面ともにアナグラ属の貝殻腹縁の条痕で調整された後に半研磨の状態に調整される。波頂の口縁端部には刻み目が付され、文様は頸部下にS字状文と折り返しの沈線がやや幅広く描かれている。復原口径25.0cm、器高25.8cmの大きさである。

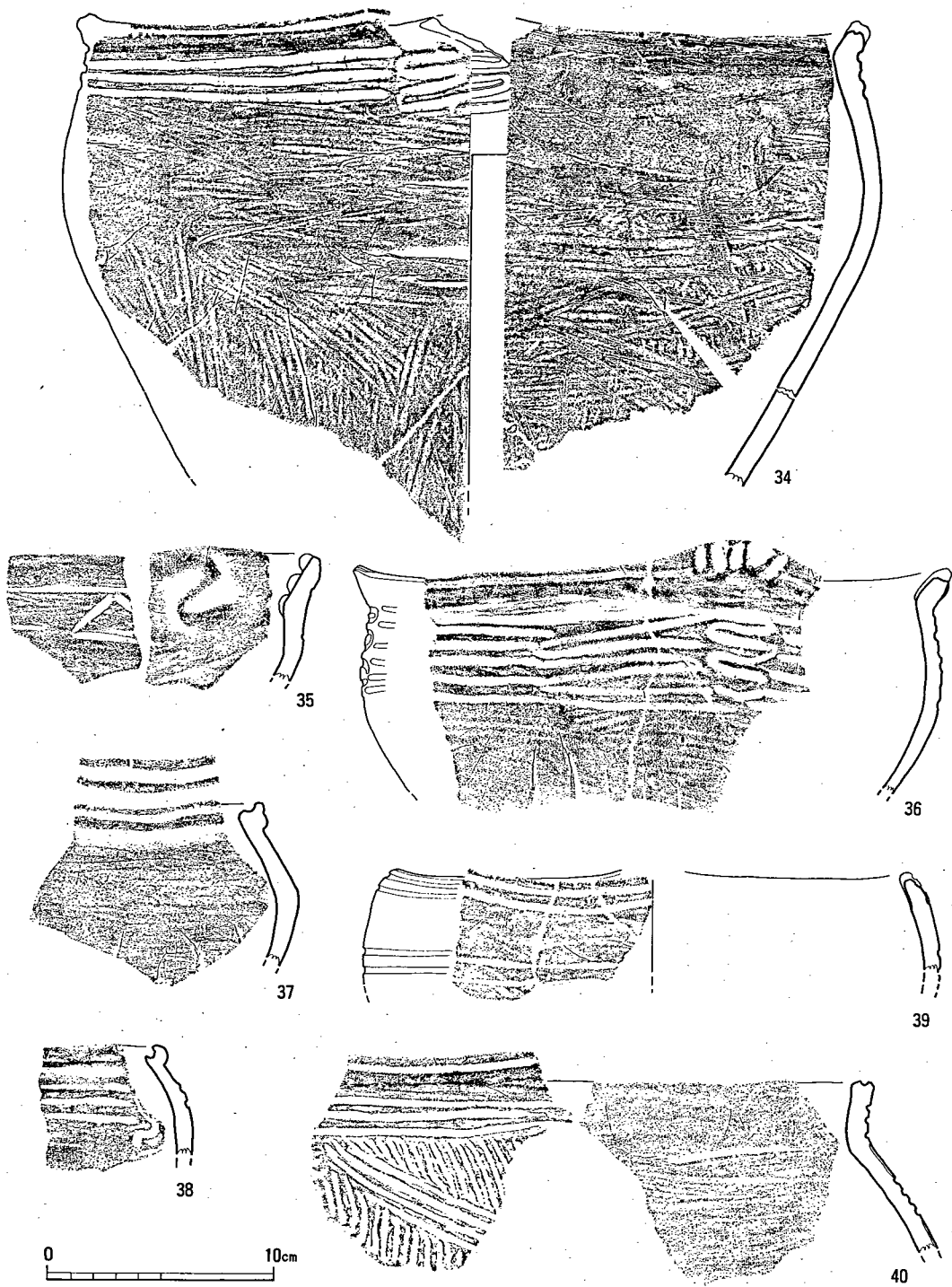
有文鉢9 d類 (12・13・39・41) 底部から内彎して胴部が膨らみ、口縁部が内彎する鉢であ



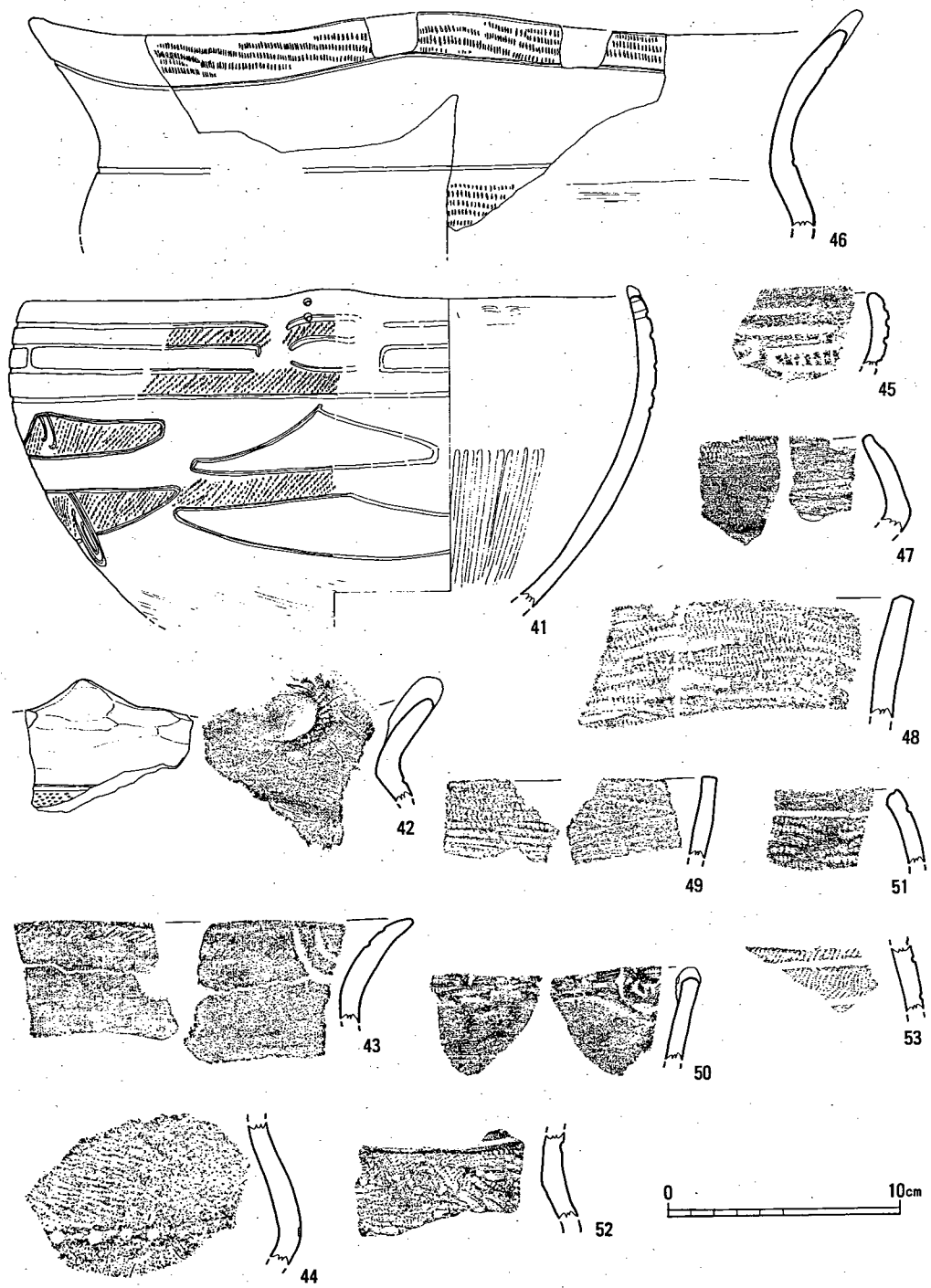
第40図 縄文2号住居跡出土土器拓影1 (1/3)



第41図 縄文2号住居跡出土土器拓影2 (1/3)



第42図 縄文2号住居跡出土土器実測図8 (1/3)



第43图 縄文2号住居跡出土土器実測図9 (1/3)

る。12は復原口径23.0cm、器高19.8cmの大ききで、口縁部はかなり彎曲する。波頂部には小さな丸穴が穿孔され、文様は重弧のS字状蛇行文を、口縁部に2条、胴部に3条の沈線が繋いでいる。13は復原口径16.5cmと小振りだが、12と似たような文様が描かれている。41は復原口径27.0cmの大ききの磨消縄文で飾る鉢である。口縁部波頂に小さな丸穴が上下に穿孔され、対になる可能性もある。胴部の磨消縄文部分には2条単位の沈線でJ字状文様などが描かれている。

有文鉢13b類 (9) 胴部が算盤玉のように稜をもって膨らみ、口縁部が短く外反する浅めの鉢である。復原口径26.0cmの大ききで、重弧の蕨状文が波頂部下に描かれて、平行沈線がこれを繋ぐ文様は7と酷似している。

有文鉢1dJ類 (42~44) 41と同様、縄文を施文する例である。42は外反する口縁部を有して、波頂部内面に付された三日月形の突出部分と、頸部外面に巡る沈線で区画された胴部側に、縄文が施文されている。43は外反する口縁部の外面端部に縄文が施文され、内面に同心半円が沈線で描かれている。また44は胴部に縄文が幅広く施文される例で、最大径の位置に刺突列点がみられる。

有文鉢2aG類 (40) 膨らんだ胴部から頸部が括れて、口縁部がそのまま上に立ち上がる鉢。3条の沈線が頸部を横走し、胴部にかけて斜方向4条の平行沈線で区画した部分を短沈線を刻んで充填している。

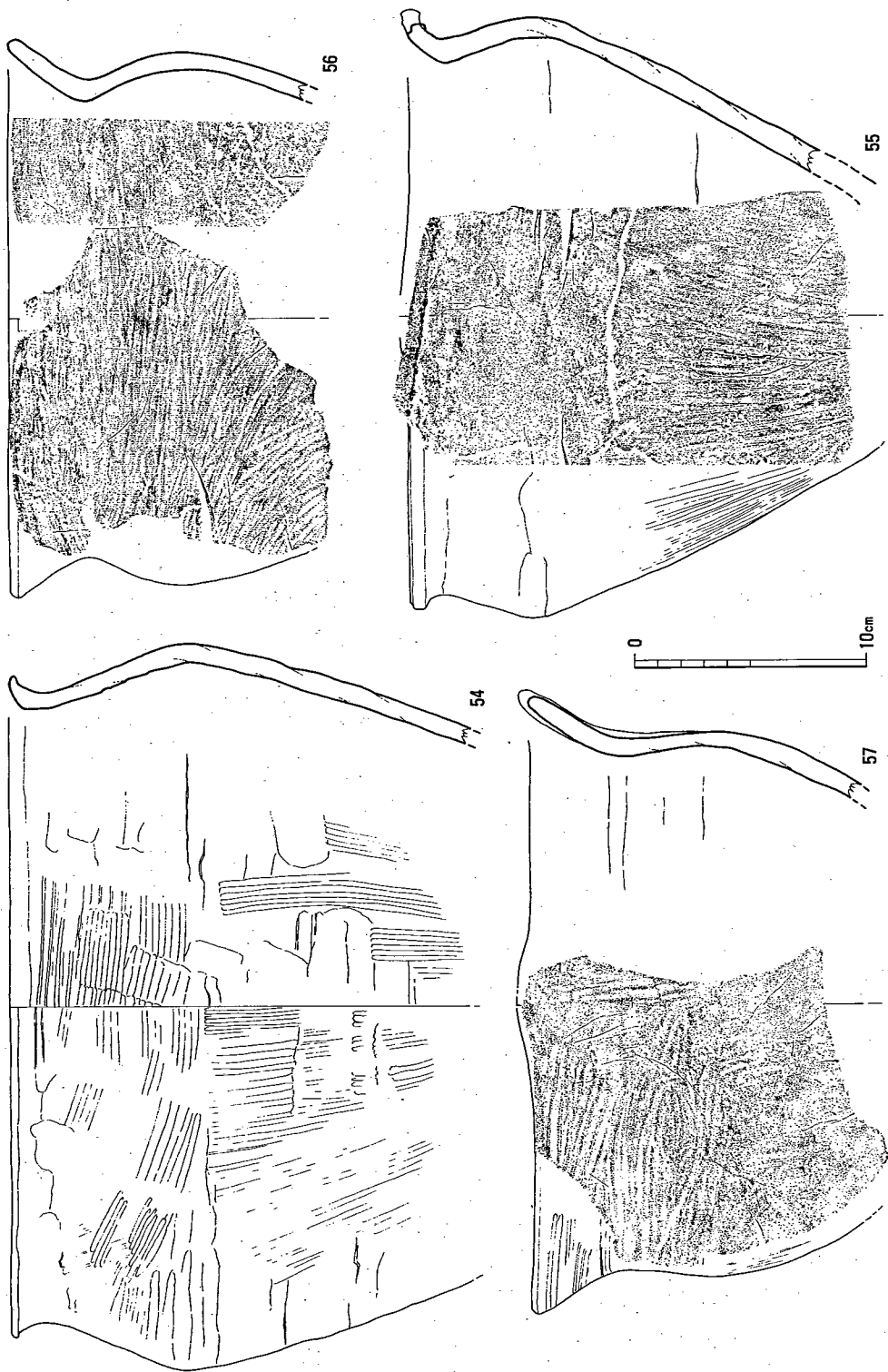
有文鉢5dG類 (5) 内彎する口縁部片で、平行沈線と沈線区画内に刻み目を施して疑似縄文の効果を得ている。

有文鉢G類 (46~52・53) 46~52は緩やかに外反する口縁部を有する鉢で、頸部と口縁部下に巡らされた沈線で区画された口縁部文様帯と胴部文様帯には、へナタリ疑似縄文が充填施文されている。沈線の区画が無いものもあるが、同様なへナタリ疑似縄文が施文される47~52例がある。47・52は内傾する口縁部を有して、前者は端部外面に、後者は沈線で区画された下側に施文されている。また50では口唇部内面に貼り付けた瘤に渦文が描かれ、内外面にへナタリ疑似縄文が施文されている。

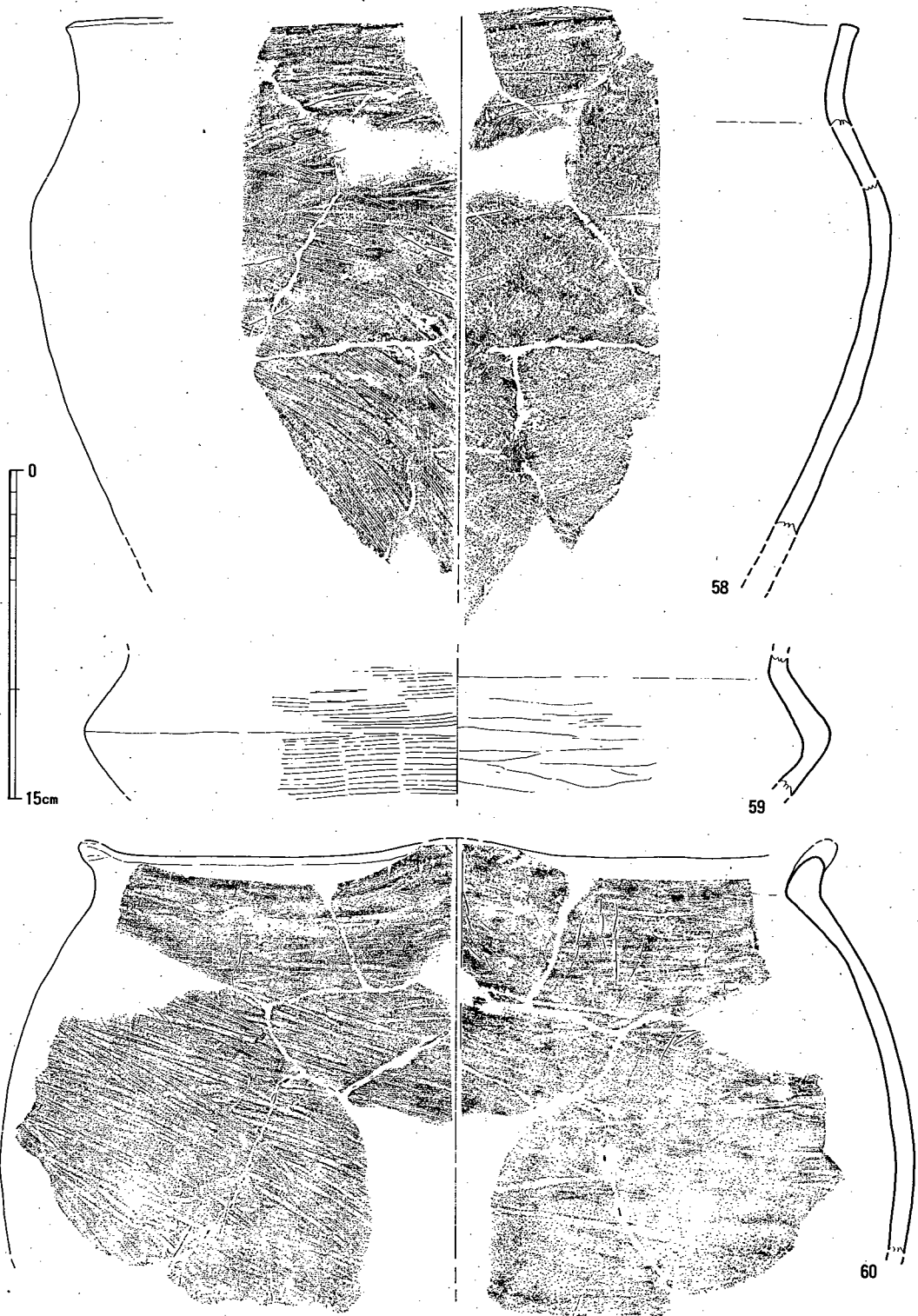
53は、平行沈線のある胴部片だが、上側の沈線を跨いでアナグラ属貝殻を用いたとみられる疑似縄文が施文され、下側の沈線の外は研磨されている。

無文鉢1d類 (56・61・62・65~67・86・87・95~97) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が緩やかに外反する鉢である。口縁端部は丸くおさまる例が多いものの、62は口唇部上面に沈線が巡る。56・61・62・65~67・87・96は内外面をへナタリなどの小巻貝の条痕で調整されて、内面を中心にはナデ調整が加わる例もある。また86は指先の痕が凹凸で残るナデ調整で、97は研磨調整されていて、口縁部の反りは強い。57・67・96では波状口縁であることを知れるが、他は波頂部以外の口縁部の可能性もあって分からない。

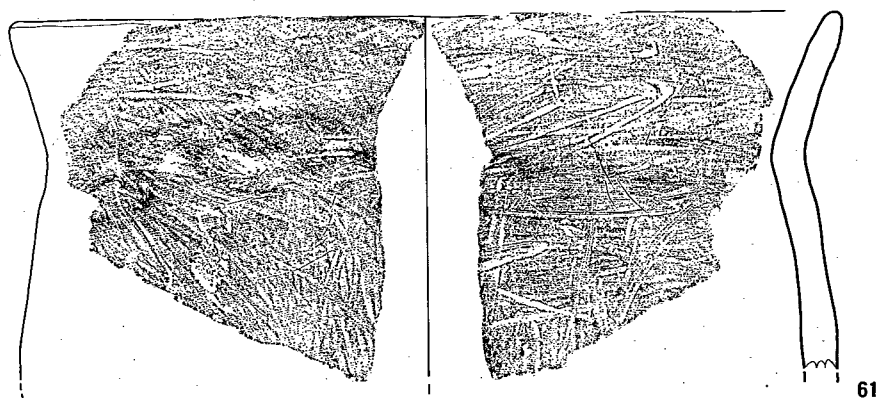
無文鉢2b類 (63) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が直に立ち上がる深鉢であ



第44图 繩文2号住居跡出土土器実測图10 (1/3)



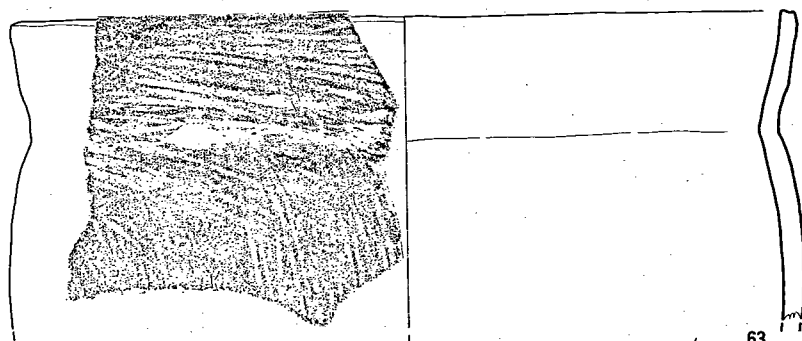
第45図 縄文2号住居跡出土土器実測図11 (1/3)



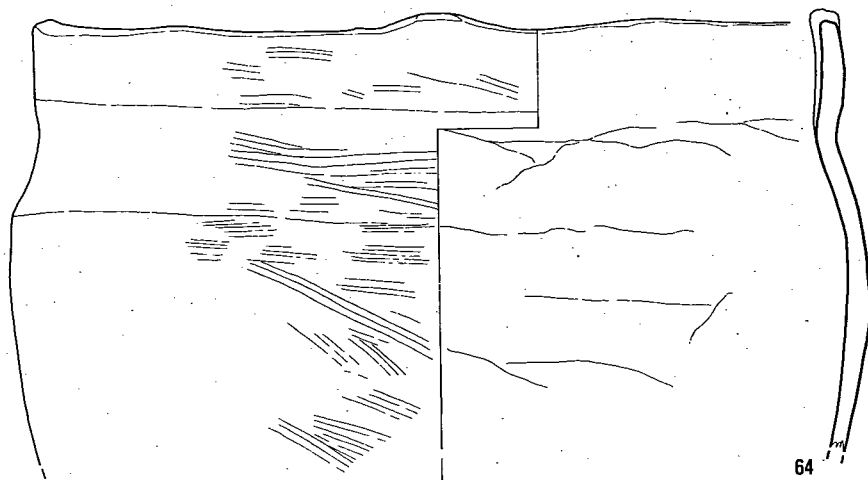
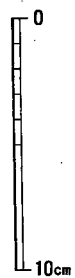
61



62



63



64

第46图 縄文2号住居跡出土土器実測図12 (1/3)

る。口縁部はやや内彎気味に立ち上がり、口唇部上面に沈線が巡る。外面はヘナタリなどの小巻貝の条痕、内面は条痕の後ナデ調整されている。

無文鉢 2 c 類 (58・64) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が直に立ち上がる鉢あるいは深鉢で、64の口縁端部はやや内彎気味に立ち上がる。58・64ともに口唇端部は面取りされている。外面はヘナタリなどの小巻貝の条痕、内面は条痕の後ナデ調整される。

無文鉢 2 d 類 (92) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が直に立ち上がる鉢で、口唇部は丸い。内外面ともにナデ調整されるが、胴部内面は板状原体を使用したナデで削り調整に近い。

無文鉢 3 c 類 (55) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が短く外反する鉢で、口唇部は面取りされる。復原口径25.5cm程の大きさで、内面に段状の沈線が付く波状口縁を有すが、波頂部を欠く。ヘナタリなどの小巻貝による条痕で調整されてナデ調整が加わっている。

無文鉢 3 d 類 (54・60) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が短く外反する鉢である。口唇部は丸い。54は復原口径28.4cmの大きさで、内外面ともにアナグラ属貝殻腹縁による条痕で調整されるが、外面の一部では半研磨状態になっている。60も波状口縁を有するが、口縁部は肥厚し、波頂部はつまみ上げたような形状である。60はヘナタリなどの小巻貝による条痕で調整されてナデ調整が加わっている。

無文鉢 5 d 類 (93・94) 胴部から頸部はさほど括れずに、口縁部が内彎して立ち上がる鉢である。頸部内面には稜をもつ。内外面ともにナデ調整されているが、93は復原口径34.5cmの大きさである。

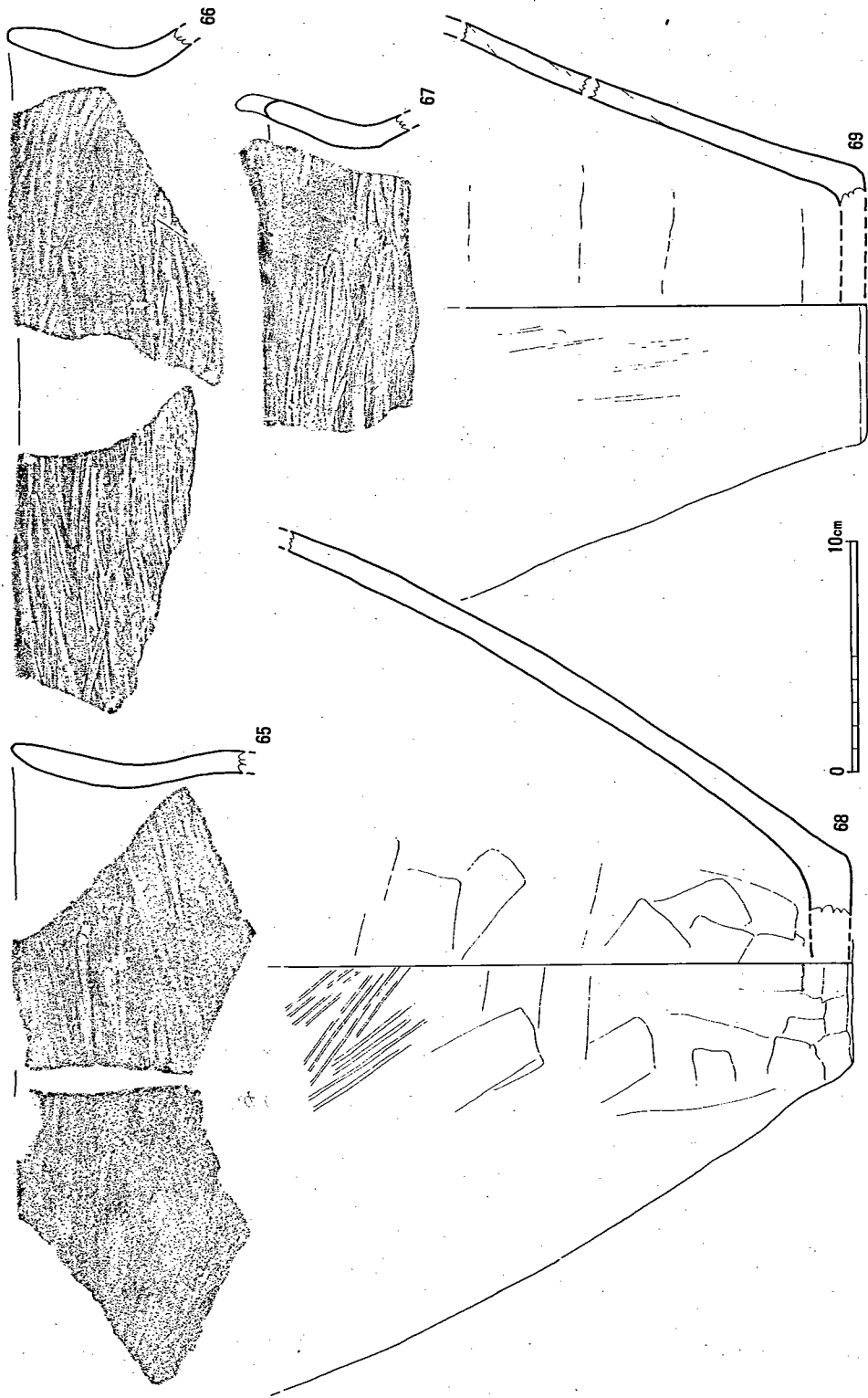
無文鉢 8 d 類 (90・98) 底部からそのまま口縁が内彎気味に開く器形の鉢で、器高が口径の2/3程度の器形である。90は復原口径21.0cm、98は復原口径20.0cm程の大きさである。いずれも内外面をナデ調整で仕上げている。

無文鉢 10 d 類 (85・88) 胴部の膨らみに稜があり、口頸部が強めに彎曲して反る器形の鉢である。口縁端部は丸みをもっておさまる。内外面はナデあるいは板状原体によるナデで調整されている。88は波状口縁の小形鉢で、復原口径15.0cm前後の大きさである。また59は算盤玉のように膨らむ胴部片で、口縁部側の形状は不明だが浅い鉢であろうか。外面は二枚貝の条痕、内面は条痕の後ナデられている。

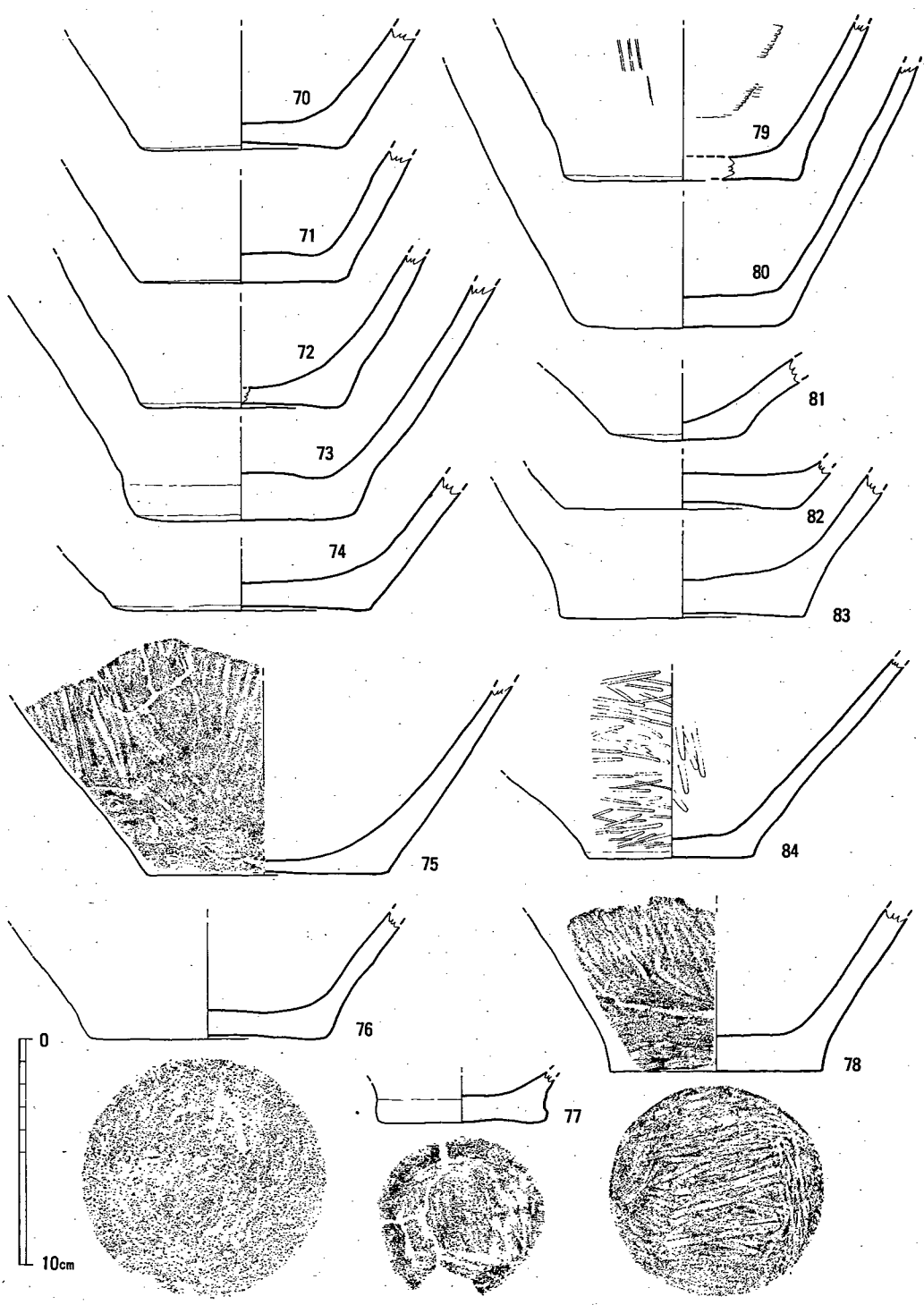
無文鉢 11 a 類 (89) 復原口径21.4cmの大きさの浅い鉢である。口縁部は内彎気味に開き、口唇部内面に凹みがあり、上面には沈線が巡るために、端部はつまみ上げられたような形状になっている。内外面ともにナデ調整されている。

無文鉢 11 d 類 (91) 底部からそのまま口縁部に開く器形の鉢だが、口径が器高の2倍程度になるであろう。復原口径は20.0cm程である。内外面をナデ調整で仕上げている。

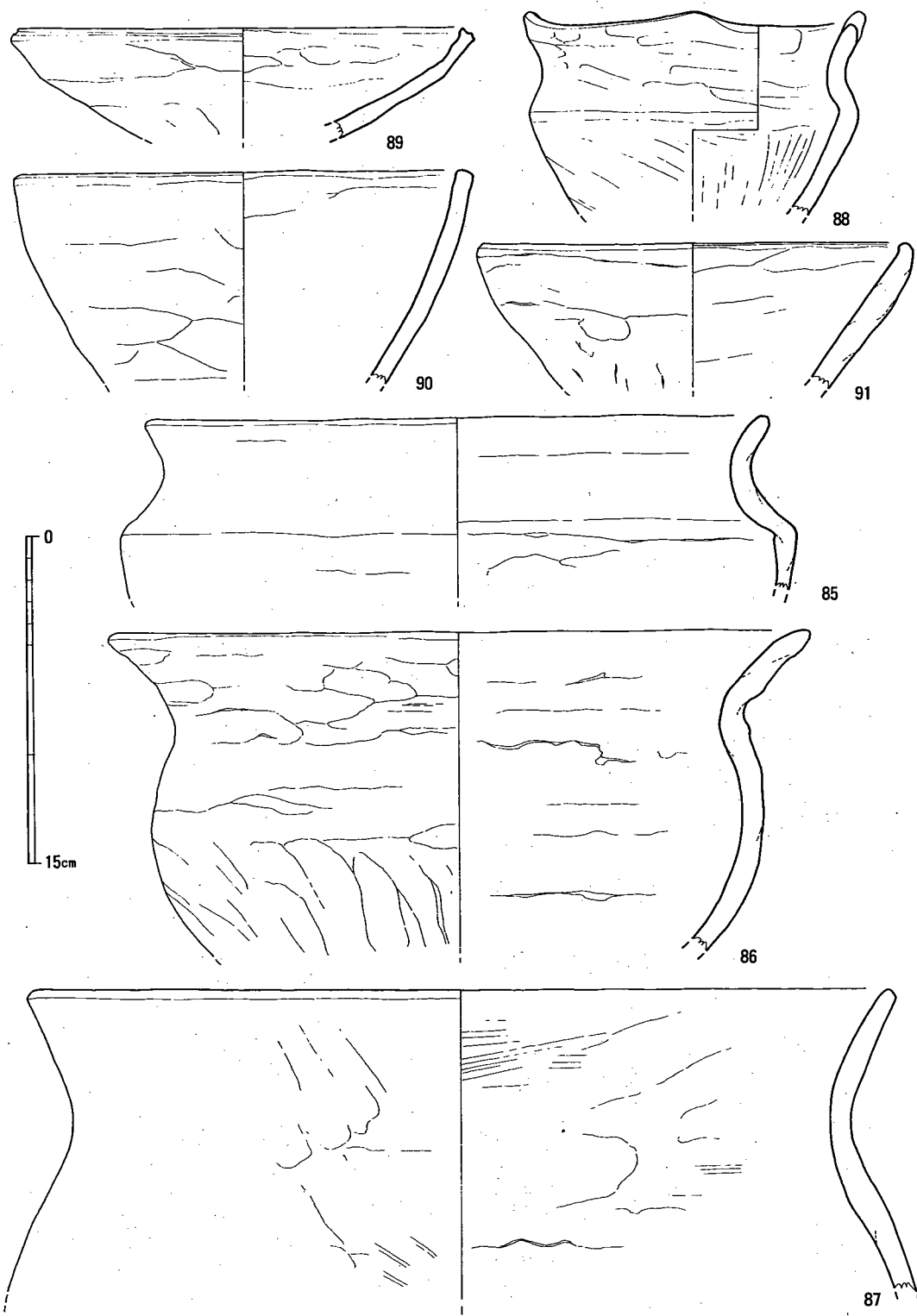
底部 (68~84) 平底あるいは僅かに上げ底気味の平底が多い。底部付近の器面調整は、条



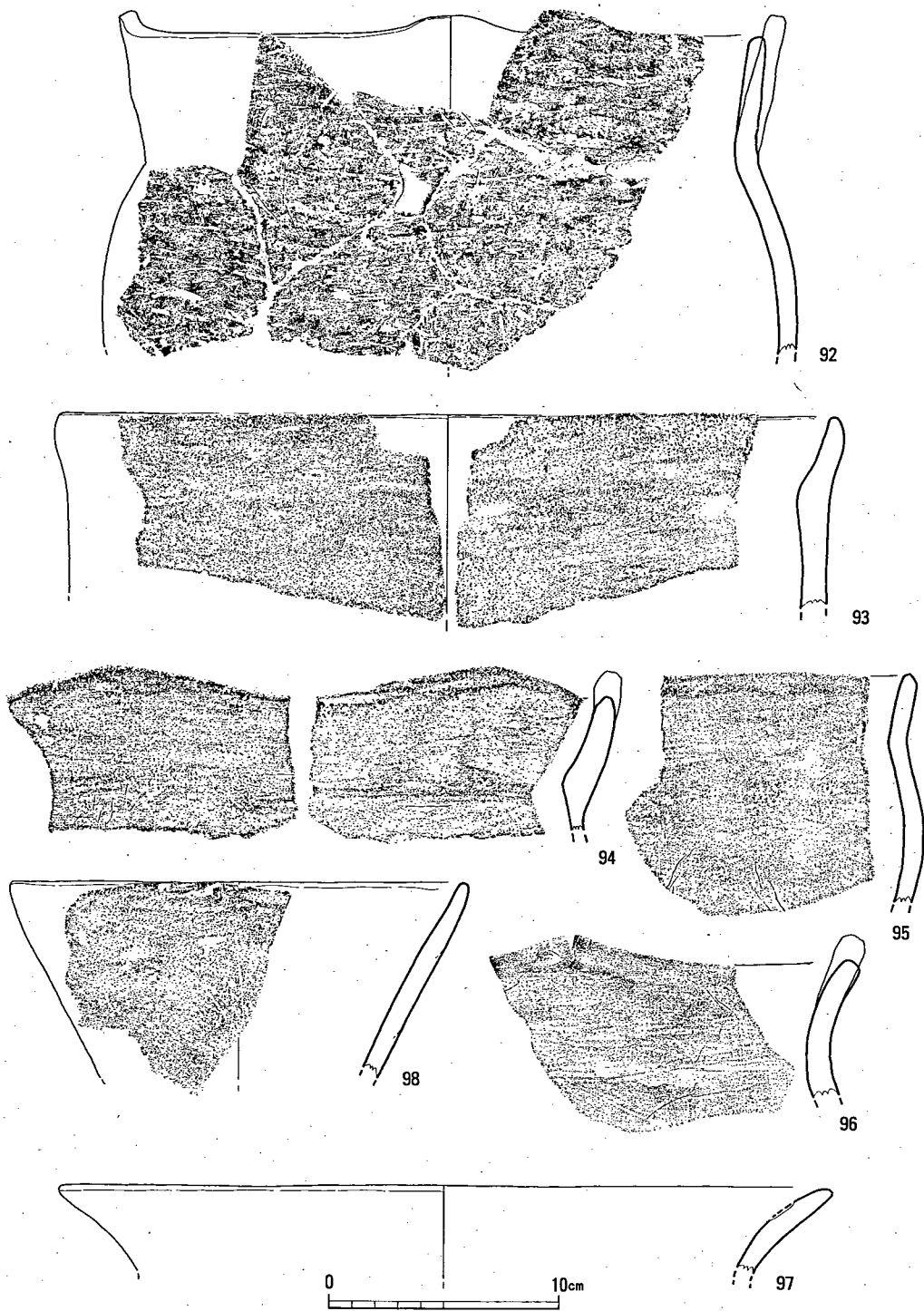
第47图 縄文2号住居跡出土土器実測図13 (1/3)



第48図 縄文2号住居跡出土土器実測図14 (1/3)



第49図 縄文2号住居跡出土土器実測図15 (1/3)



第50図 縄文2号住居跡出土土器実測図16 (1/3)

痕や条痕後のナデ調整などのみられる例が多く、81・84や幾分長胴気味を思わせる69には研磨調整がみられ、68などには削りに近い板状ナデ調整がみられる。外底面はナデ調整される例が多いものの、なかには78のようにへナタリ条痕で調整される例もある。

覆土上層出土土器

有文鉢1 b類 (99) 膨らんだ胴部と緩やかに外反する口縁部を有する鉢で、口唇部に沈線が巡る。二枚貝の腹縁部による条痕で調整され、ナデ調整の加わる器面に横走する平行沈線と渦文の一部らしい沈線がみられる。

有文鉢1 c類 (103) 膨らんだ胴部と緩やかに外反する口縁部を有する鉢で、口唇部は面取りされる。波頂部から胴部にかけて蛇行文が延びて、口頸部に平行沈線が横走する。

有文鉢2 b類 (100~102) いずれも口唇部上面に沈線が巡る破片で、101はやや内彎気味に立ち上がる。口頸部に横走する平行沈線が巡り、重弧の渦文や蕨状渦巻文が描かれている。

有文鉢J類 (113) 平行沈線を跨いで縄文が充填施文される胴部破片である。研磨部分の下側にも細めの沈線があり、内面はへナタリ条痕がみられる。覆土出土の41例も内面はへナタリ条痕で調整されているが、縄文はLRであり、113はRLが用いられている。

有文鉢1 dG類 (116) 口径14.0cm、器高9.6cmの大きさの鉢で、括れた頸部から口縁部が外反する。胴部全体と口唇部にへナタリ疑似縄文が施文され、僅かに上げ底の外底部と口頸部および内面全体は研磨調整されるが、胴部上側の境は押し引き列点で区画されている。なお内面の口縁部に三日月形の貼り付けがみられ、胴部上位には条痕が一部残る。

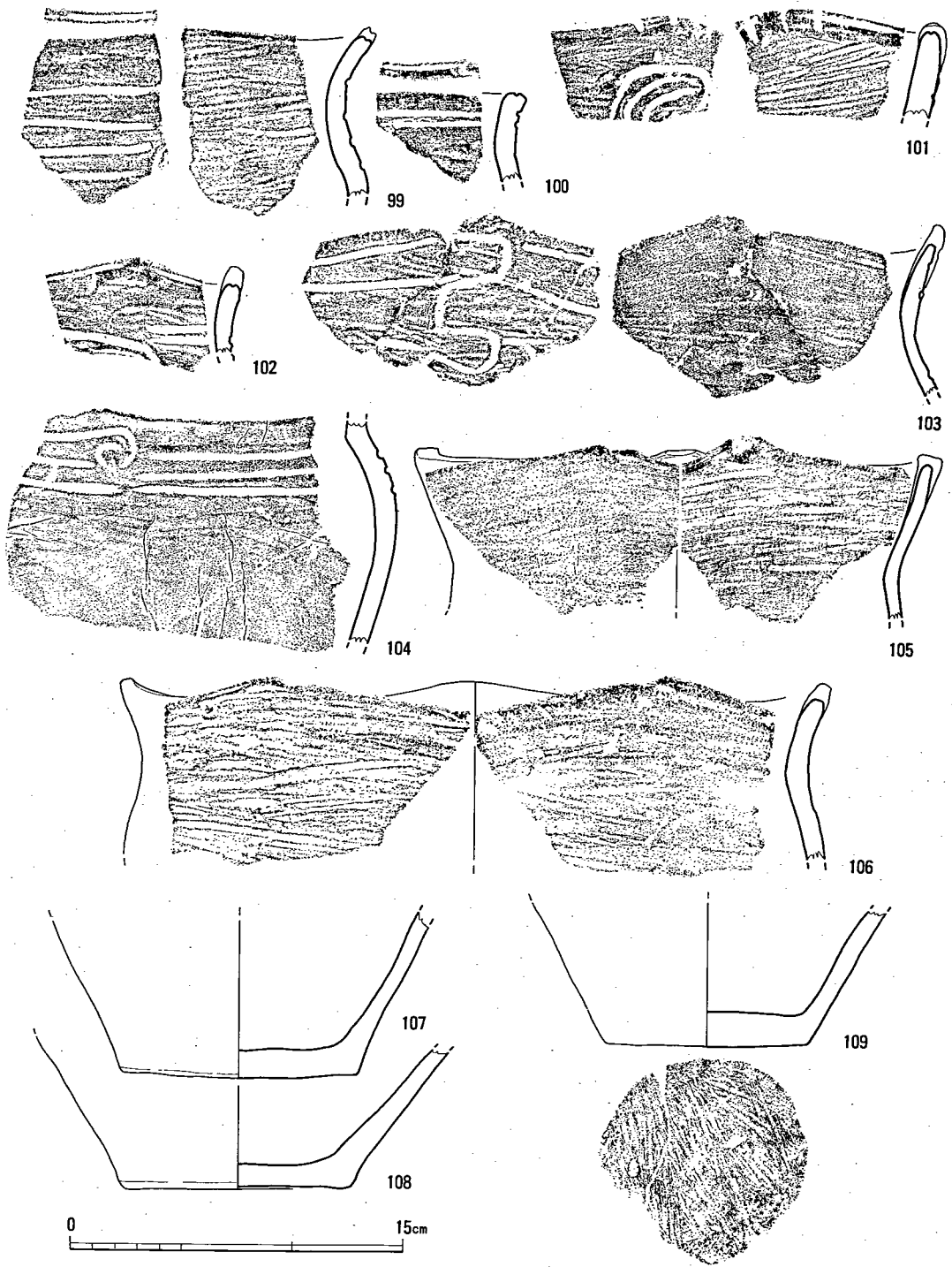
有文鉢2 cG類 (114) 復原口径27.0cm、胴最大径32.2cm程の大きさの浅めの鉢である。胴部は算盤玉のように稜をもって膨らみ、頸部から口縁部が直に立ち上がってやや肥厚する。頸部と胴部に横走する平行沈線は蛇行文を繋ぎ、蛇行文の上端とその上の口唇部上面に刺突点がみられる。内外面ともにへナタリ条痕の後に研磨調整が加わり、胴部文様帯と口縁部文様帯は平行沈線で区画されるが、それぞれへナタリ疑似縄文が充填施文されている。

有文鉢5 cG類 (117) 内傾する口縁部破片で、ボウル形の鉢かも知れない。外面は研磨されるが、口縁部に折り返しのある平行沈線が描かれ、へナタリ疑似縄文が充填施文されている。

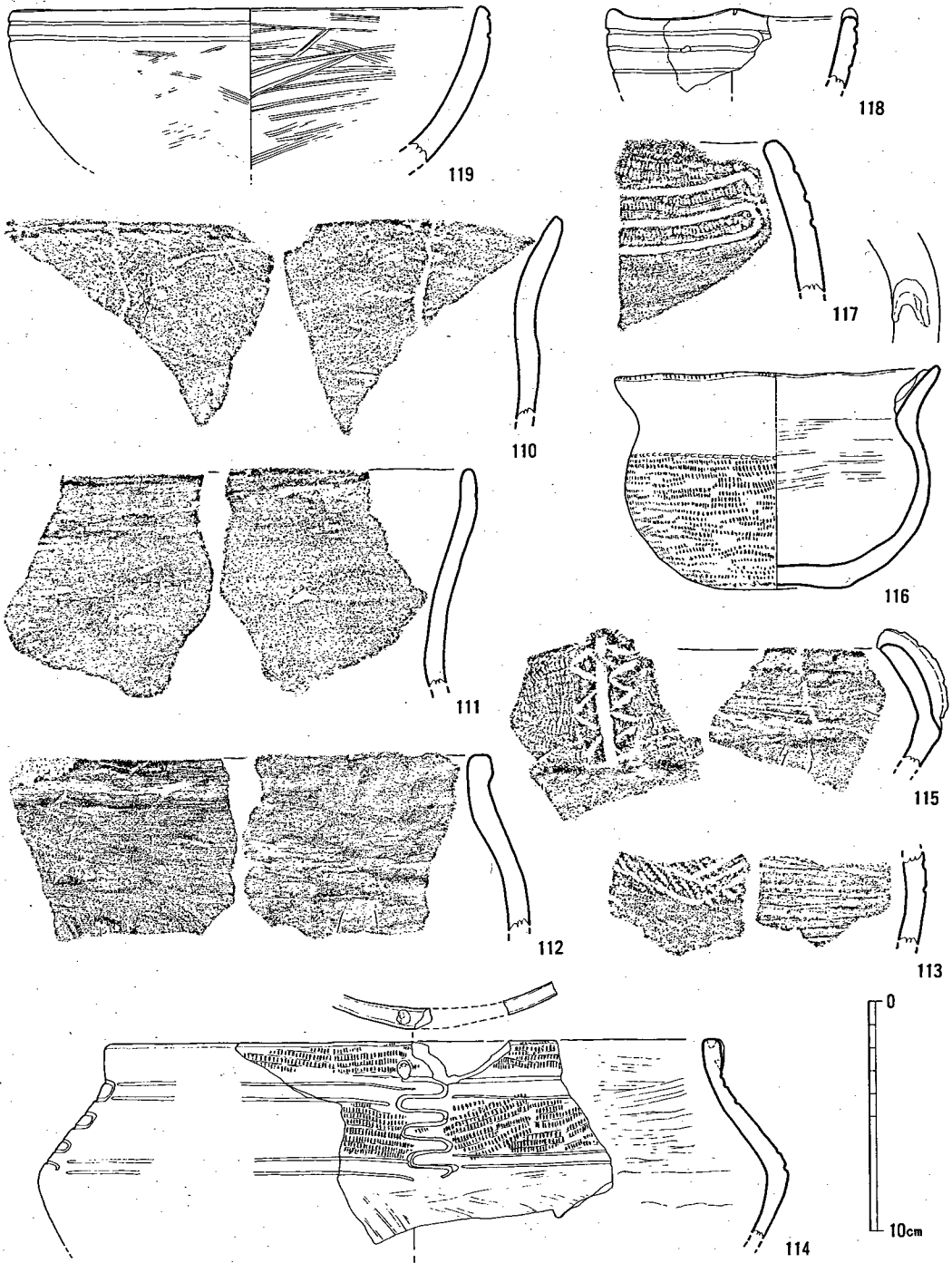
有文鉢6 dG類 (115) 稜をもって屈折して内傾する口縁部破片で、深鉢であろう。内彎する幅広の口縁部外面にへナタリ疑似縄文が施文されるが、波頂部には縦長の蒲鉾形の帯が貼り付いている。貼り付けられた帯には、真ん中に太めの垂線が刻まれ、左右に稲妻模様が描かれている。

有文鉢9 d類 (118・119) 内彎気味に口縁部が立ち上がる椀に近い浅めの鉢で、口縁部に平行沈線が巡る。119は復原口径21.0cmの大きさだが、118は復原口径11.0cmと小形である。

無文鉢5 d類 (105・111) 膨れた胴部から頸部を介して口縁部が緩やかに外反するが端部で



第51図 縄文2号住居跡出土土器実測図17. (1/3)



第52図 縄文2号住居跡出土土器実測図18 (1/3)

内彎する器形の鉢で、口唇部は丸い。105の波頂部上面には押点が付されていて、器面は条痕とナデで調整されている。一方111の器面は丁寧なナデもしくは研磨調整されている。

無文鉢1c類 (110) 膨れた胴部から頸部を介して口縁部が緩やかに外反する鉢で、口唇部は微かに面取りされており、内外面は板状原体でナデ調整されている。

無文鉢1d類 (106) 膨れた胴部から頸部を介して口縁部が緩やかに外反する鉢で、内外面は条痕で調整されている。

無文鉢3c類 (112) 内彎した胴部から頸部は括れるがそのまま口縁部が肥厚気味に短く外反する鉢で、内外面ともにナデ調整されている。

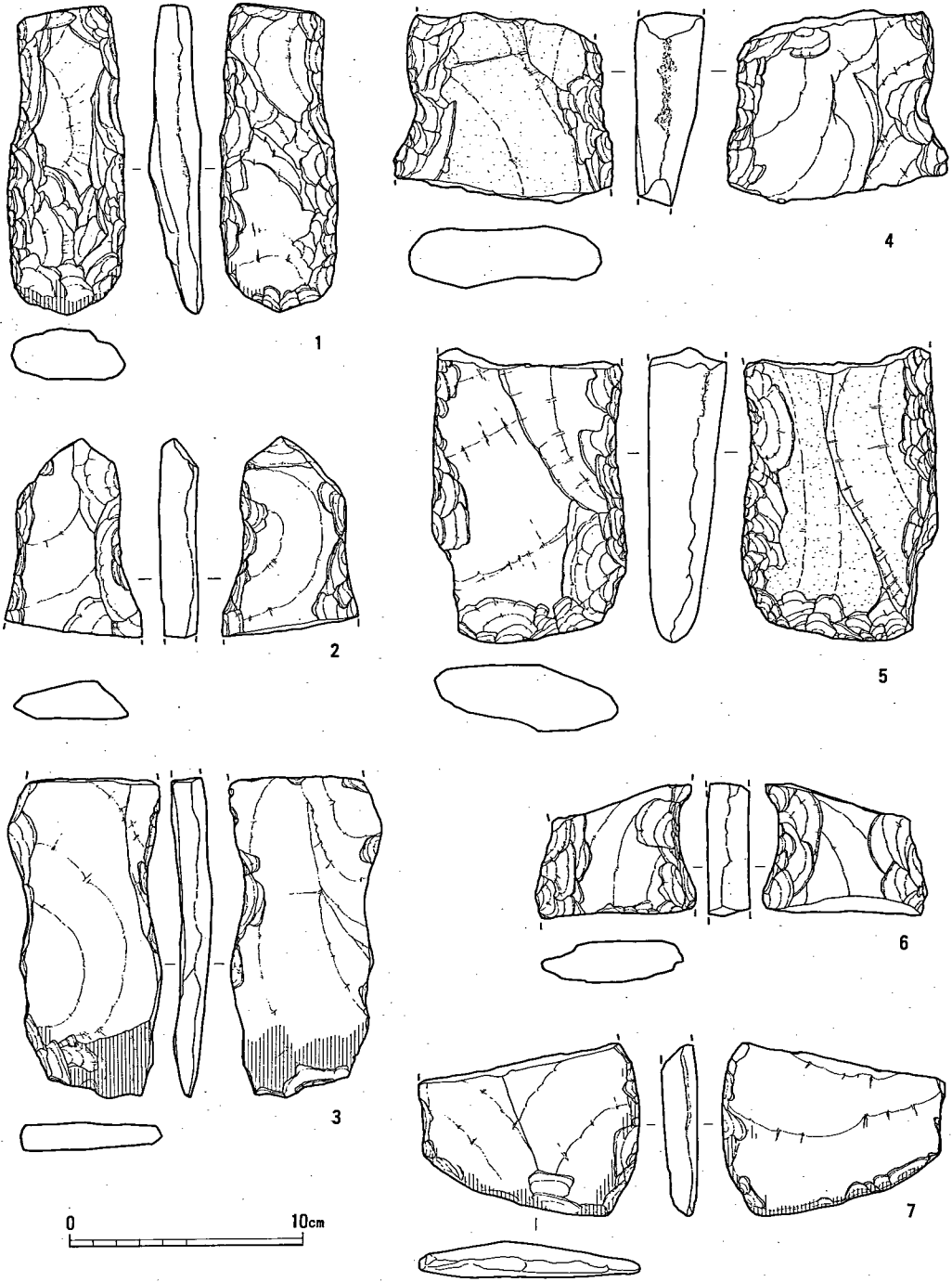
底部 (107~109) いずれも鉢形土器の底部で平底。109の外底面はヘナタリ条痕で調整されている。

石器 (図版18~20、第53~58図、表6)

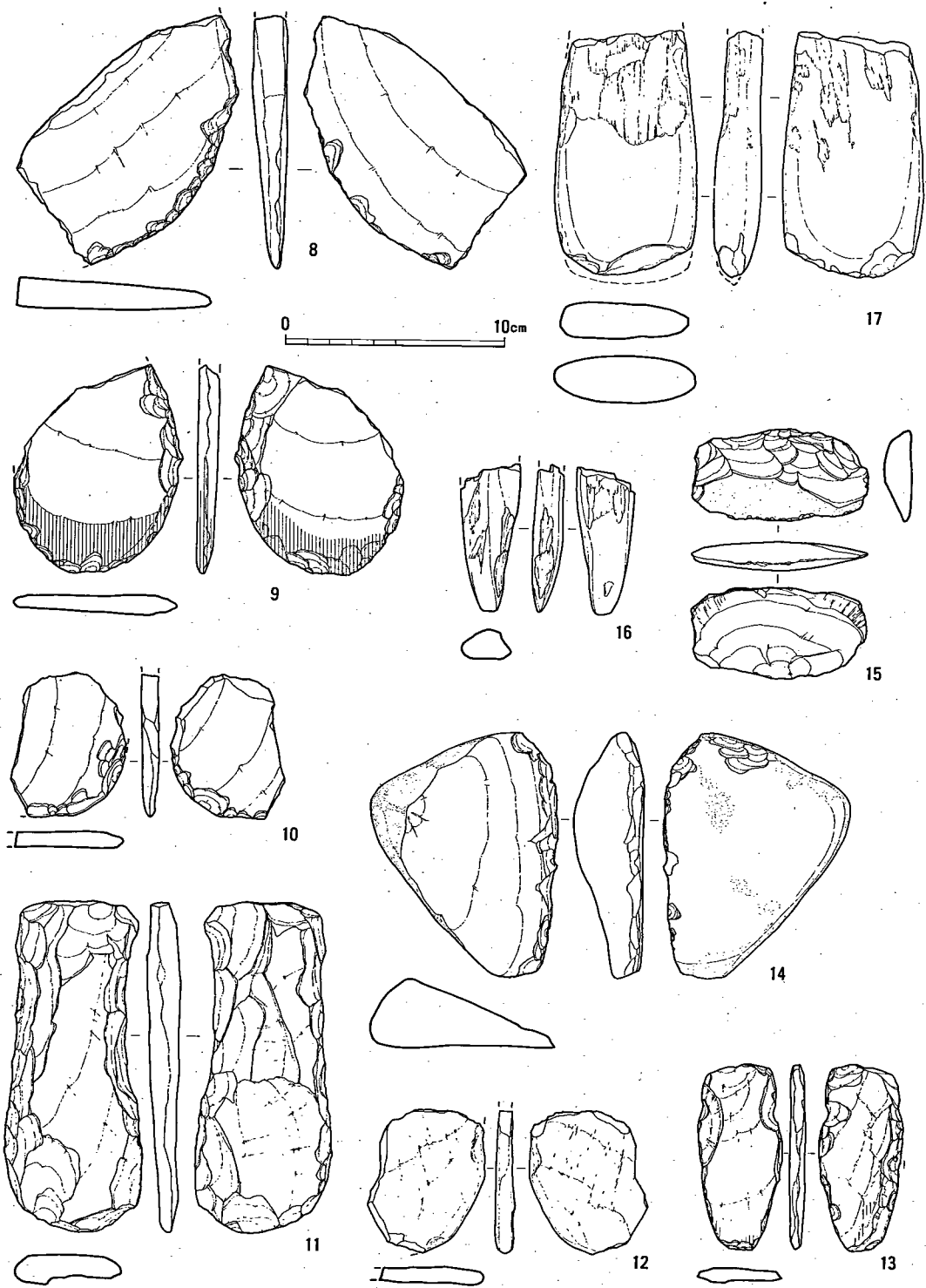
打製石斧 (1~13) 15点出土したうち13点を図示する。3点が緑泥片岩製で他は安山岩製である。1は横長剥片の周囲から調整剥離を加えているが、やや厚みが残り、幅が狭い。2は横長剥片を用いて、刃部側を失うが撥形に近い形である。両側縁は抉りにもみえるが、抉りにみえる部分の側縁は磨耗する。3は横長剥片を素材にし、僅かな調整剥離で整形されているが、刃部には使用による磨耗痕がみられ、抉り部分の側縁も磨耗気味である。4の胴部片と5の刃部片は同一個体であろうが、4の側縁には敲打による抉りがみられ、縁は磨耗する。横方向の剥離面が確認でき、やや厚みのある体部をもった短冊形に近い打製石斧である。6は両側縁に抉りのある胴部破片でやや厚みをもつが、やはり横剥ぎの面がみられ、抉りの側縁は磨耗している。7・8は扁平な刃部破片で、調整剥離は少ないものの刃部は磨耗する。8~10や12の例が扁平な刃部で、平面形は丸みをもつことからみれば、7は側縁にみている部分が刃部かも知れない。この場合では完形ということになろう。11・13は僅かに両側縁が括れる、短冊形で扁平かつ幅が狭い打製石斧である。抉りの側縁部の磨耗痕は確認し難い。緑泥片岩という素材に影響されるものであろうか。

使用痕のある剥片 (14・15) 14は安山岩の円礫を半分ほどの厚みに敲打剥離した剥片で、先端側の縁に刃こぼれ状の使用痕がみられる。15は石皿に用いられていたと思われる面を背面に残す安山岩の横長剥片で、先端側と打面側の縁に敲打による刃こぼれがみられる。15は形態からして収穫具の可能性もあろう。

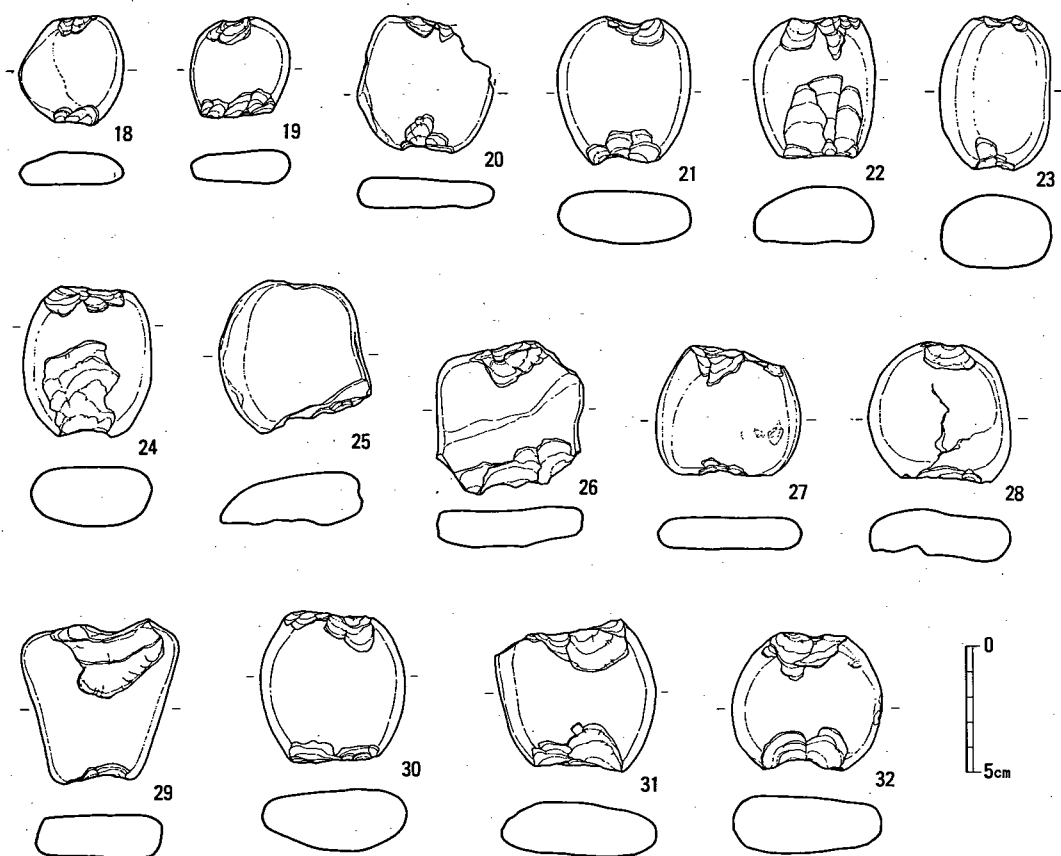
磨製石斧 (16・17) 16は狭い片刃の刃部が鑿状を呈する蛇紋岩製の磨製石斧で、欠損する基部側の方が幅が広い。17は蛇紋岩製の両刃の磨製石斧で、体部はやや幅が広く扁平気味だが、基部寄りの片面は剥離を生じて薄めになり、刃部は鈍く欠けている。このほかに1点緑泥片岩製の磨製石斧胴部片が出土している。



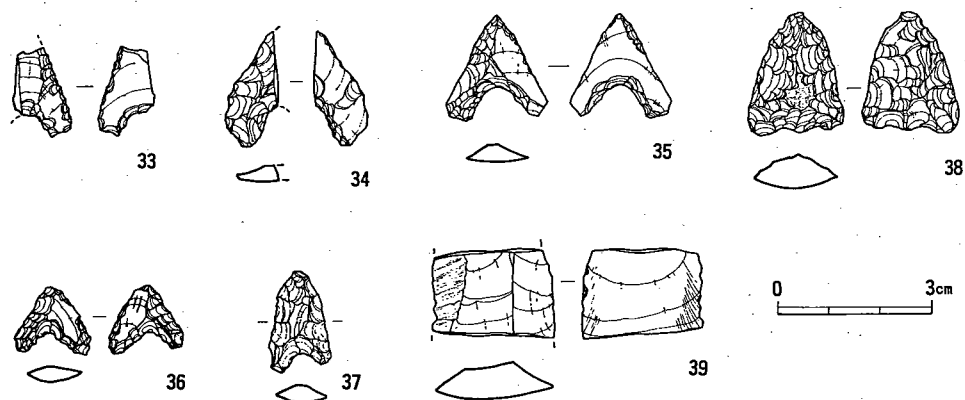
第53図 縄文2号住居跡出土石器実測図1 (1/3)



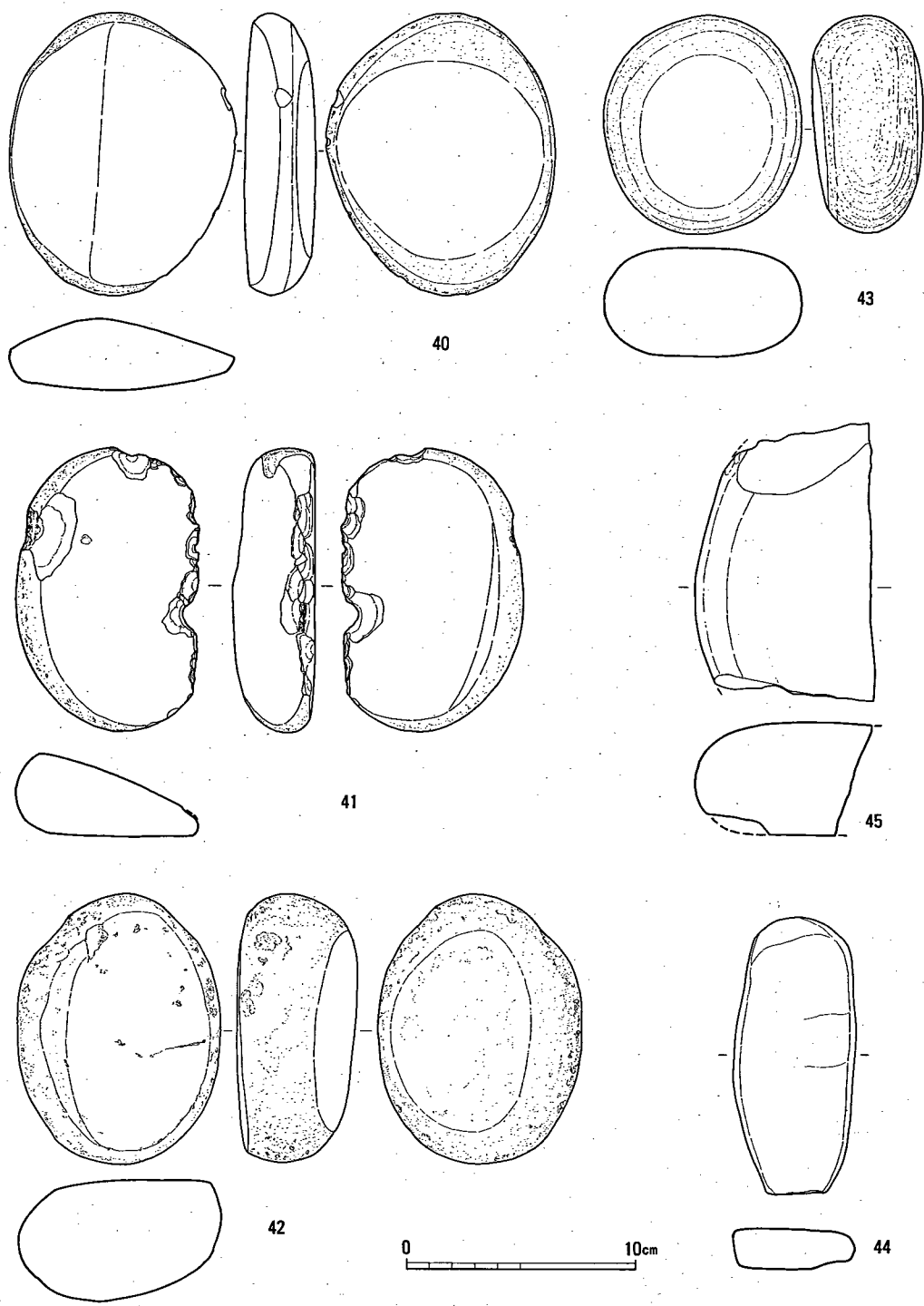
第54図 縄文2号住居跡出土石器実測図2 (1/3)



第55图 縄文2号住居跡出土石器実測图3 (1/3)



第56图 縄文2号住居跡出土石器実測图4 (2/3)



第57図 縄文2号住居跡出土石器実測図5 (1/3)

打欠石錘 (18~32) 17点出土したうちの15点を図示する。21・23・29の3点が砂岩で、他は安山岩の川原石らしい円礫を素材にし、長軸側両端を打ち欠いた袂りを紐掛けにしているが、打ち欠きの結果、紐掛け側の長さが幅よりも短くなっている例もある。重量では26g~114gの幅があり100g前後が多い。

敲石 図示しない資料に2点ある。

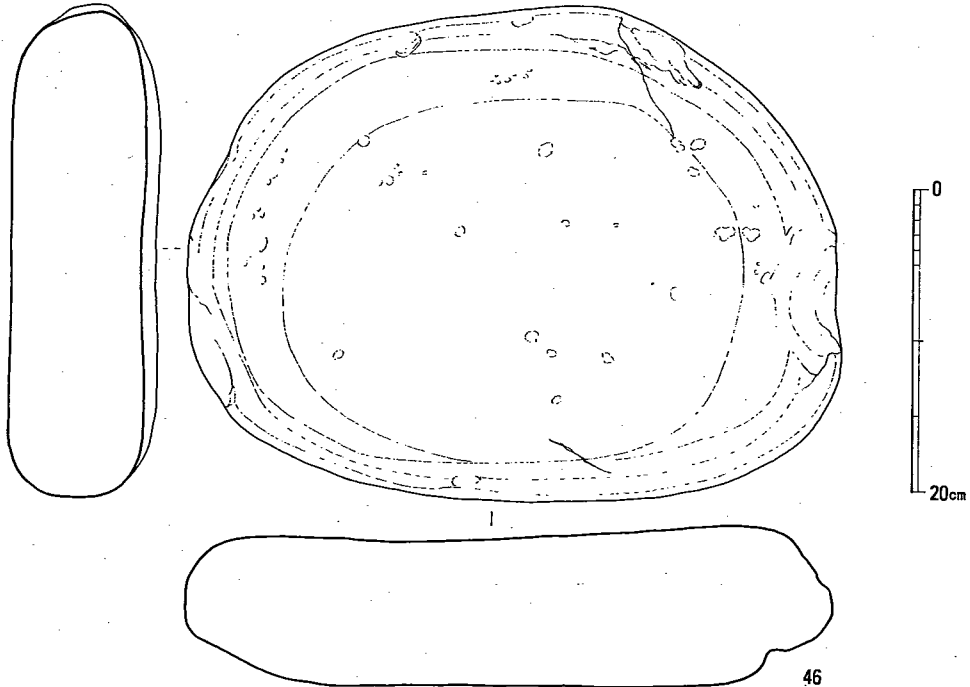
丸弾 図示していないが、卵形を呈する安山岩の円礫が2点あり、周囲は擦れている。

削器 図示していないが、サヌカイト製の削器が1点出土している。

打製石鏃 (33~38) 33の1点が黒色黒曜石、37の1点がサヌカイトであるほかは4点ともに姫島産黒曜石製である。石鏃は6点のみだが、他の黒曜石の剥片・剥片石器類の大半を姫島産黒曜石が占めている。形態的には38が平基式である他は凹基式で、33~35は広義の剥片鏃に含められ、33・35ともに打点を基部側に向けて打癭を除去している。

石刃状剥片 (39) 姫島産黒曜石製の、主要剥離面と背側の剥離面が同一方向の縦長剥片であったとみられ、原面の残らない側縁からの打撃によって基部側・先端側が折断されている。

すり石 (40~44) 7点出土したうち5点を図示する。40~42は平坦な面が両面にあり、頻度の使用からか、扁平あるいは片刃石斧のように両面が近接する形状を呈する。41ではさらに刃に似た縁に敲打痕と磨耗痕がともにみられ、敲石の機能を併せもつらしい。43はやや小振りな

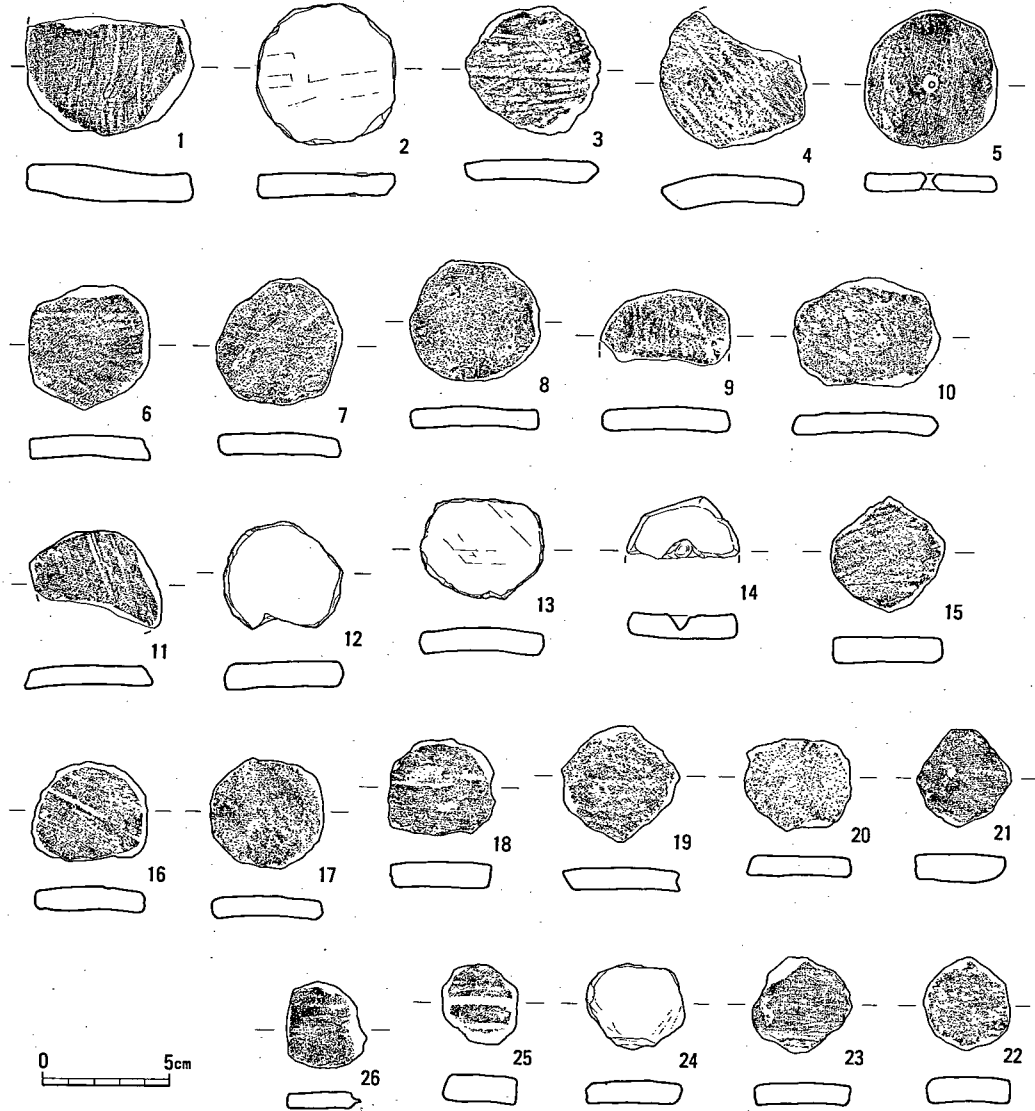


第58図 縄文2号住居跡出土石器実測図6 (1/5)

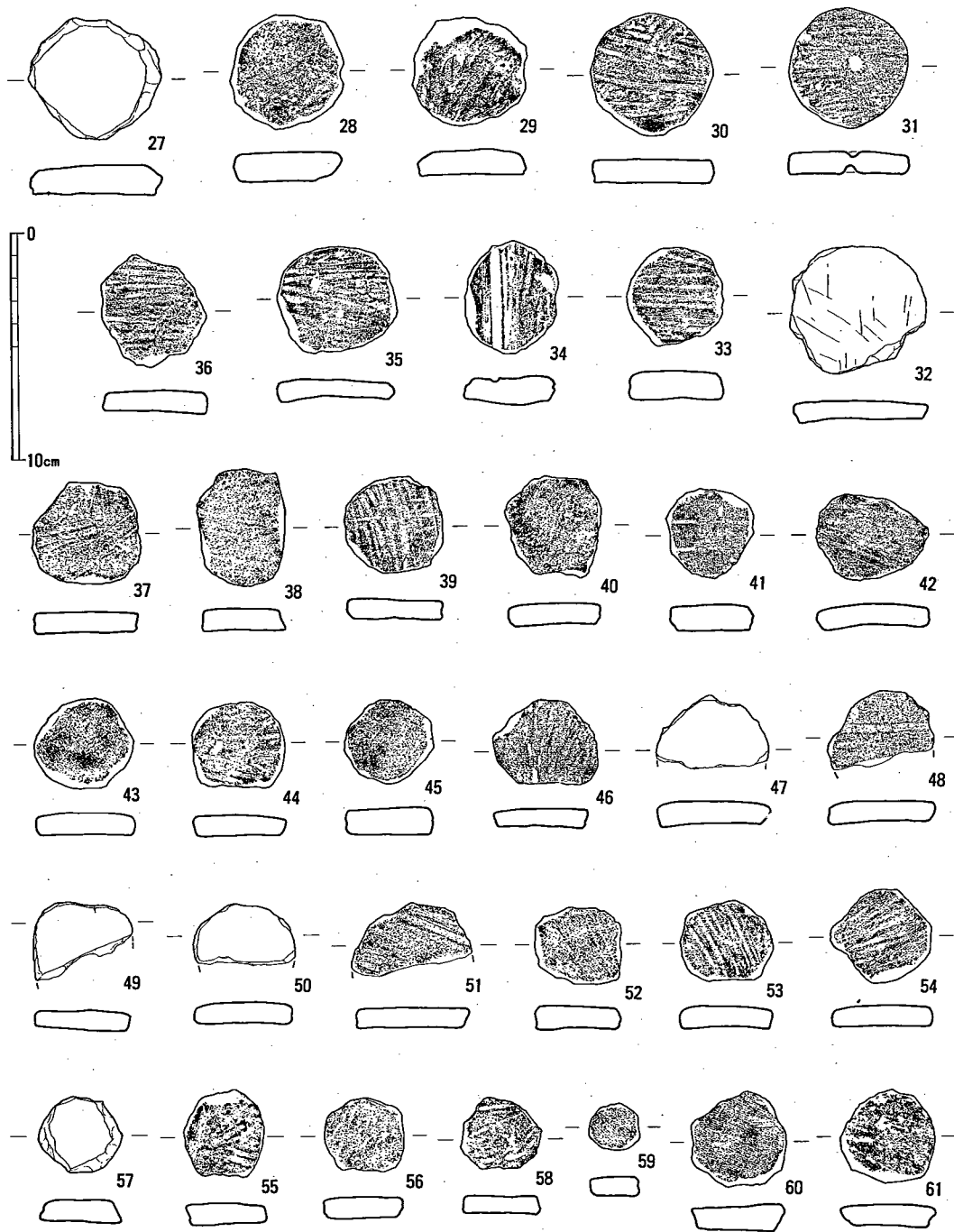
はあるが、40～42の例よりは平坦度が弱いものの両面に磨耗面がみられる。これらはもともと、掌中に取りやすい安山岩のやや扁平な川原石を素材にしたものと思われるが、42の例は磨滅の進行の中途段階で、41の例は終焉段階であろうか。

44は砂岩の扁平な長楕円形の体部の両面が磨耗する。

石 皿 (45・46) 45は安山岩の扁平な縁部破片である。両面ともに磨耗する。46は石囲炉の約0.8m東側から出土した作業台らしい石皿である。硬めの安山岩の扁平な円礫を用いたもの



第59図 縄文2号住居跡出土土製品実測図1 (1/3)



第60図 縄文2号住居跡出土土製品実測図2 (1/3)

で、両面の使用面は磨耗して僅かに凹むが、裏面側はさほど凹まない。

土製品（図版20、第59・60図、表7）

上層出土土器片円盤（1～26） 土器片を打ち欠き調整して、円形あるいは円形に近い三角形などの形にしたもので、周囲を打ち欠いた後に研磨を加えたものと、打ち欠きのまま放置するが磨耗痕のみられるものがある。5は中央に丸穴が内外面からの穿孔で貫通していて、14は片面の中央に中途までの穿孔がみられる。重量には10g前後～56g程の幅がある。

下層出土土器片円盤（27～59） 31は中央に丸穴が内外面から穿孔されるが、中途までで貫通しない。30・31と43・44・49・50の周縁は、打ち欠き調整のあと研磨されている。小形の例である59は重量5g程であり、他は10g～45gの重量幅をもつ。

床面出土土器片円盤（60・61） 2点ともに周縁を打ち欠き調整したものである。

縄文1号・2号住居跡では、いわゆる鐘崎Ⅲ式に含まれる縄文土器が多数出土した。互いに同種類の土器を含んでいて接近する時期に考えることができる。しかし、傾向として時期的に先行する類の例は2号住居跡よりも1号住居跡に僅かに多めである。

1号住居跡の有文鉢の文様では、鐘崎式を代表するJ字状や蕨状渦巻の鈎文や、稻妻のように折り返す文様が、残ってはいるものの省略化あるいは形骸化した文様の例が主体を占めている。これらの土器は椎田町山崎遺跡の7号住居跡出土土器（小池史哲編 1992 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告—7— 上巻 福岡県教育委員会）の時期に近く、鐘崎Ⅲ式の範疇に含まれる。なお頸部から胴部にかけて巡らされた平行沈線の間を連続斜線文で埋め尽くす文様は、大阪府仏並遺跡87-00遺構出土土器（岩崎二郎編 1986 仏並遺跡 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第5集）に通じる要素ともみることができる。

2号住居跡の有文鉢に多くみられる文様では、横走する平行沈線が上下に巡り、これを繋ぐ蛇行文や複合S字文などの文様がある。S字文様は、関東地方では堀ノ内Ⅰ式の新しい段階から出現するようだが、近畿地方の北白川上層3式（泉拓良 1981 近畿地方の土器 縄文土器Ⅱ 雄山閣）のメルクマールにもなっている。S字状文様は大分県田村谷遺跡（高橋信武編 1986 朝地田村遺跡 朝地町史談会）や、北九州市下吉田遺跡（前田義人他編 1985 下吉田遺跡 北九州市埋蔵文化財調査報告 第39集）、椎田町山崎遺跡などに類似した文様をみることができ、小池原上層式の下に反転する鈎文が省略化して、横走する沈線を跨いだS字文が成立したか、二段の渦文から変容したとみることが可能である。しかし、蛇行文とともにS字文が京都府桑飼下遺跡出土土器（渡辺誠編 1975 京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書）に多くみられることを重視したい。また、口頸部に逆三角状の文様とS字の可能性のある文様のみられる深鉢は、口縁部が外反して波頂部に刻目が付されている。このような深鉢から胴部文様が単純化した例は、春日市柏田遺跡（小池史

哲編 1977 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第4集 上巻 福岡県教育委員会)の北久根山式に類似をみれるので、北久根山式に近い時期であることが知れよう。なお、覆土上層にはヘナタリ疑似縄文を胴部外面全体に施文する鉢や、ヘナタリ疑似縄文を充填する例など、北久根山式に含まれるべき例も含まれている。2号住居跡出土土器は、椎田町山崎遺跡2号住居跡や、石町遺跡1号住居跡出土土器に近い要素をみることもできるが、それよりも先行するものであり、山崎遺跡のⅢ期の範疇に含めるが、Ⅲ期のなかでは新しい要素を備えているといえよう。

表2 縄文1号住居跡出土土器観察表

No.	文様の特徴と器面調整				分類	胎 土					備 考 登録No.
	外面		色調	内面		砂	角	雲	褐	英	
1	ナデ→沈線	S字渦巻	茶褐色	ナデ	1 A	○	○	○			
2	ナデ→沈線	稻妻	暗黄褐色	削り→ナデ	2 A	○	○		○	○	14
3	条痕→ナデ→沈線	蛇行・重弧	赤茶褐色	条痕→ナデ	2 a	○	○		○	○	484
4	条痕→研磨→沈線	重弧	茶褐色	削り→ナデ	2 a	○	○		○		424
5	へ条痕→ナデ→沈線	蕨状重弧	暗茶褐色	ナデ	2 b	○	○			○	420・476
6	へ条痕→ナデ→沈線	蕨状渦巻	暗黄褐色	削り・ナデ	2 b	○	○		○		463
7	ナデ→沈線	稻妻	茶褐色	条痕→ナデ	3 d	○	○		○		492
8	条痕→ナデ→沈線		茶褐色	削り・ナデ	2 B	○	○		○		438
9	へ条痕→ナデ→沈線	蕨状重弧	暗茶褐色	条痕→ナデ	2 b	○	○		○	○	449
10	ア条痕→ナデ→沈線		暗茶褐色	板ナデ状の条痕	3 B	○		○			432
11	へ条痕→ナデ→沈線	上下渦巻	茶褐色	ナデ	1 a	○	○			○	
12	ナデ→沈線		灰茶褐色	削り→ナデ	2 b	○	○			○	474
13	へ条痕→ナデ→沈線		茶褐色	ナデ	2 c	○	○			○	194
14	研磨→沈線		灰茶褐色	へ条痕→研磨	3 a	○	○		○	○	
15	へ条痕→研磨→沈線		暗茶褐色	へ条痕	3 a	○	○			○	
16	条痕→ナデ→沈線	蕨状重弧	暗黄褐色	へ条痕→ナデ	3 c	○	○		○	○	142
17	へ条痕・ナデ→沈線		淡明褐色	へ条痕→ナデ	2 d	○	○				197
18	へ条痕・ナデ→沈線	上下渦巻	淡褐色	ナデ	2 d	○			○	○	
19	ナデ→沈線		茶褐色	ナデ	3 d	○	○		○	○	497
20	板状ナデ→沈線	蛇行	茶褐色	板状ナデ	3 d	○	○			○	448
21	研磨→沈線	渦巻・垂線	暗茶褐色	研磨	胴部	○	○			○	513
22	条痕→ナデ→沈線		茶褐色	ナデ	胴部	○	○				16
23	へ条痕→ナデ→沈線	渦巻	褐色	へ条痕	2 a	○	○			○	12
24	ナデ→沈線	蕨状渦巻	茶褐色	ナデ	3 a	○	○			○	1
25	板ナデ→沈線	逆S・c字	茶褐色	板ナデ	2 d	○	○		○	○	469・475
26	ナデ→沈線	逆J字渦	暗茶褐色	へ条痕	3 b	○	○			○	116
27	条痕・ナデ→沈線		暗茶褐色	ナデ	3 b	○	○			○	462
28	へ条痕→ナデ→沈線		茶褐色	へ条痕	2 b	○	○				6
29	ア条痕→沈線		茶褐色	ナデ	3 a	○	○				193
30	ナデ→沈線		淡明褐色	ナデ	2 d	○			○	○	
31	ナデ→沈線	蛇行	暗黄褐色	ナデ	1 b	○	○			○	
32	条痕→ナデ→沈線	渦巻?	暗茶褐色	ナデ	2 d	○	○			○	198
33	ナデ→沈線		暗茶褐色	ア条痕→ナデ	2 b	○	○				
34	ナデ→沈線		暗茶褐色	へ条痕・ナデ	1 A	○	○				84
35	へ条痕→ナデ→沈線		暗茶褐色	ナデ	2 b	○	○				461
36	ア条痕→沈線	蛇行	暗灰茶褐色	ア条痕	1 b	○				○	195
37	ナデ→沈線	蕨状渦巻	灰茶褐色	条痕→ナデ	3 b	○	○			○	446
38	へ条痕→ナデ→沈線		暗黄褐色	へ条痕→ナデ・削り	3 b	○	○			○	11
39	ナデ→沈線	重弧	暗茶褐色	ナデ	3 b	○	○		○		
40	条痕→ナデ→沈線		茶褐色	ナデ	2 b	○	○			○	
41	条痕→ナデ→沈線		暗褐色	板ナデ	2 b	○	○		○		102

42	へ条痕→ナデ→沈線		茶褐色	へ条痕→ナデ	1 d	○	○	○						
43	へ条痕→ナデ→沈線		明褐色	へ条痕	1 b	○	○	○	○					
44	ナデ→縄文→沈線→研磨		暗茶褐色	ア条痕→ナデ	3 a J	○	○						19	
45	ナデ→縄文→沈線→研磨		暗黄褐色	研磨	J	○		○	○				485	
46	縄文→沈線	蕨状	淡褐色	研磨	J	○		○	○	○			19	
47	研磨→沈線→へ疑縄文		茶褐色	研磨	G	○	○							
48	板ナデ→沈線・刺突列点		茶褐色	ナデ	1 d	○	○	○	○				456	
49	ナデ→刺突列点		灰茶褐色	研磨	5 d G	○			○				400	
50	ナデ→沈線		淡茶褐色	ナデ	5 d	○	○							
51	ナデ→沈線		淡茶褐色	ナデ	5 c	○	○	○				○		
52	ナデ→縄文→沈線→研磨		淡明褐色	ナデ	9 d J	○	○		○	○			153	
53	ナデ→沈線		暗茶褐色	ナデ	胴部	○	○		○	○			141	
54	ナデ→沈線		淡茶褐色	板ナデ	底部	○	○		○				603	
55	ナデ		明褐色	ナデ	底部	○	○	○	○					
56	へ条痕		茶褐色	板ナデ	2 c	○	○		○	○			455・515	
57	へ条痕		暗茶褐色	へ条痕	2 c	○	○	○					3	
58	条痕→ナデ		茶褐色	ナデ?	3 a	○	○		○	○			428	
59	へ条痕		黄褐色	へ条痕・ナデ	1 d	○			○	○			21	
60	へ条痕		茶褐色	ナデ	1 d	○	○						479	
61	へ条痕・ナデ		暗茶褐色	ナデ	1 c	○	○				○		442	
62	へ条痕		暗茶褐色	へ条痕	3 d	○	○	○			○		444	
63	ア条痕		茶褐色	ナデ	3 d	○			○	○			10	
64	へ条痕		茶褐色	へ条痕・ナデ	2 d	○	○		○	○			498	
65	条痕→ナデ		茶褐色	条痕→ナデ	1 a	○	○							
66	ナデ		茶褐色	ナデ	3 d	○	○				○		598	
67	ナデ		黄褐色	ナデ	3 d	○	○		○				633	
68	板ナデ		暗茶褐色	板ナデ	7 d	○	○		○	○				
69	へ条痕→ナデ		暗茶褐色	へ条痕→ナデ	7 d	○	○						610	
70	ナデ		茶褐色	へ条痕→ナデ	底部	○	○		○				486	
71	へ条痕・ナデ		暗黄褐色	ナデ	底部	○	○		○				638	
72	研磨・ナデ		明茶褐色	ナデ	底部	○		○	○				625	
73	研磨・ナデ		灰黄褐色	ナデ	底部	○	○				○		600	
74	研磨・ナデ		赤褐色	ナデ	底部	○	○						617	
75	ナデ		淡褐色	ナデ	8 c	○	○				○		577	
76	ア条痕→ナデ		茶褐色	ナデ	9 c	○	○				○		604	
77	板ナデ・ナデ		茶褐色	ナデ	10 d	○	○		○	○			606	
78	条痕→ナデ		淡茶褐色	条痕→ナデ	9 d	○	○				○			
79	ナデ		褐色	ナデ	9 d	○	○		○	○			138	
80	ナデ		暗茶褐色	ナデ	7 d	○	○				○		569	
81	研磨		茶褐色	研磨	9 d	○	○		○	○	○		109	
82	へ条痕→ナデ・研磨		茶褐色	へ条痕・ナデ	8 c	○	○						483	
83	へ条痕→ナデ・研磨		茶褐色	へ条痕→研磨	9 d	○	○		○	○				
84	条痕→ナデ		暗黄褐色	条痕→ナデ	8 c	○	○		○	○			534	
85	ナデ・研磨		暗黄褐色	ア条痕→ナデ	9 c	○		○					554	
86	ナデ		暗黄褐色	ナデ・研磨?	9 d	○	○						632	
87	ナデ		淡明褐色	ナデ	皿	○	○		○	○	○		464	
88	ナデ		暗黄褐色	ナデ	注口	○	○				○		268	

表のなかで扱う、器面調整で、へ条痕はへナタリ条痕、ア条痕はアナグラ条痕、板ナデは板状原体によるナデの略である
また、へ疑縄文はアナグラ疑似縄文、へ疑縄文はへナタリ疑似縄文の略である。

表の胎土のうちで、砂は砂粒、角は角閃石、雲は雲母、褐は褐色粒、英は石英粒の略である。

表3 縄文1号住居跡出土石器一覧表

(単位cm・g)

登録番号	出土位置	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
14	縄住1号	フク土	基部欠	打製石斧	安山岩	13.3	9.4	2.7	341.6	第27図1
26	縄住1号	フク土	基部欠	打製石斧	安山岩	12.5	7.7	1.6	187.6	2
16	縄住1号	フク土	胴部片	打製石斧	安山岩	6.6	8.6	1.9	160.0	3
(H6)	縄住1号	フク土	基部片	打製石斧	安山岩	4.7	7.0	1.4	53.4	4
41	縄住1号	フク土	刃部片	打製石斧	安山岩	7.8	4.5	0.9	37.0	5
49	縄住1号	フク土	基部片	打製石斧	安山岩	9.5	6.7	2.7	211.4	6
58	縄住1号	フク土	完形	使用痕剥片	安山岩	10.2	5.7	1.2	72.8	7
56	縄住1号	フク土	完形?	使用痕剥片	安山岩	9.9	9.4	1.1	131.0	8
173	縄住1号	フク土	完形	打欠石錘	安山岩	5.0	4.6	1.4	62.0	第28図9
197	縄住1号	フク土	完形	打欠石錘	安山岩	4.4	4.2	1.2	29.6	10
195	縄住1号	フク土	完形	打欠石錘	安山岩	4.7	4.5	1.3	49.7	11
194	縄住1号	フク土	完形	打欠石錘	安山岩	5.0	5.0	1.5	54.7	12
200	縄住1号	フク土	完形	打欠石錘	安山岩	4.3	4.9	2.2	69.7	13
196	縄住1号	フク土	完形	打欠石錘	砂岩?	5.9	4.2	1.7	55.9	14
212	縄住1号	フク土	完形	打欠石錘	安山岩	6.7	4.0	1.8	63.9	15
201	縄住1号	フク土	完形	打欠石錘	安山岩	6.6	5.3	2.3	100.3	16
206	縄住1号	フク土	完形	打欠石錘	安山岩	7.9	5.9	1.5	103.0	17
146	縄住1号	フク土	破片	敲石?	安山岩	10.3	6.8	2.3	150.3	18
274	縄住1号	フク土	完形	敲石?	安山岩	20.9	9.8	4.9	1040.4	19
126	縄住1号	フク土	端部欠	磨製石斧	蛇紋岩	10.1	4.1	1.2	79.2	20
(880320)	縄住1号	フク土	刃部片	磨製石斧	蛇紋岩	7.5	3.2	1.9	58.6	21
	縄住1号	フク土	ほぼ完形	打製石鏃	黒色黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.5	第29図22
	縄住1号	フク土	片脚欠	打製石鏃	姫島黒曜石	2.3	1.6	0.4	0.9	23
	縄住1号	フク土	先端欠	打製石鏃	姫島黒曜石	1.1	1.3	0.3	0.3	24
(A3)	縄住1号	フク土	先端欠	打製石鏃	姫島黒曜石	1.5	1.4	0.3	0.6	25
	縄住1号	フク土	完形	打製石鏃	姫島黒曜石	1.8	1.6	0.3	0.6	26
	縄住1号	フク土	完形	石錘	姫島黒曜石	2.8	1.6	0.6	1.9	27
	縄住1号	フク土	完形	削器	黒色黒曜石	2.9	1.5	0.3	1.2	28
	縄住1号	フク土	完形	搔器	姫島黒曜石	2.7	2.5	0.6	3.5	29
	縄住1号	フク土	完形	搔器	姫島黒曜石	3.0	1.3	0.6	2.3	30
	縄住1号	フク土	破片	搔器	サヌカイト	3.5	2.8	1.0	11.2	31
(880320)	縄住1号	フク土	完形	搔器	姫島黒曜石	4.0	2.7	1.1	10.3	32
	縄住1号	フク土	完形	搔器	姫島黒曜石	5.0	3.4	1.2	15.9	33
	縄住1号	フク土	完形	彫器	姫島黒曜石	3.4	1.9	1.0	6.2	34
	縄住1号	床面	ほぼ完形	石皿	安山岩	50.2	36.3	10.1	24400.0	第30図35
278	縄住1号	炉跡	一部欠	石皿	安山岩	23.2	19.0	2.8	3250.0	36
36	縄住1号	フク土	刃部片	打製石斧	安山岩	6.5	6.8	1.8	77.5	不掲載
	縄住1号	フク土	完形	打欠石錘	砂岩	4.8	3.2	1.8	45.7	不掲載
	縄住1号	フク土	剥片	すり石	安山岩	6.8	5.4	0.9	31.5	不掲載
145	縄住1号	フク土	剥片	石皿	安山岩	10.8	9.5	2.6	262.0	不掲載
284	縄住1号	炉跡	破片	石皿	安山岩	14.8	5.6	7.5	740.4	不掲載

表4 縄文1号住居跡出土土器片円盤一覧表

(単位cm・g)

登録番号	出土位置	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
277	縄住1号	フク土	完形	A-1 途	条痕	5.0	4.6	1.1	30.0	第31図1
335	縄住1号	フク土	完形	A-1	ナデ	4.5	4.2	0.8	21.0	2
331	縄住1号	フク土	完形	B-2	ナデ	4.8	4.4	0.8	24.0	3
330	縄住1号	フク土	完形	B-2	ナデ	4.5	3.4	0.8	11.7	4
329	縄住1号	フク土	一部欠	B-2	ナデ	(3.8)	4.1	0.7	11.9	5
328	縄住1号	フク土	完形	A-2	ナデ	2.6	2.6	0.7	6.6	6

表5 縄文2号住居跡出土土器観察表

No.	文様の特徴と器面調整			胎土	備考	位置					
	外 面	色 調	内 面				分類	砂角	雲	褐	英
1	へ条痕→ナデ→沈線	重弧S字・蕨状	暗黄褐色	へ条痕	2a	○	○		○	411・454	床
2	ア条痕・ナデ→沈線	重弧渦文	淡茶褐色	ア条痕→板ナデ状	2b	○	○		○	445	床
3	板ナデ→沈線	蛇行	淡明褐色	ア条痕→板ナデ状	2b	○	○		○	493・510	フ
4	へ条痕→研磨・ナデ→沈線	重弧蕨状	茶褐色	板ナデ・ナデ	2b	○	○		○	504	床
5	へ条痕→研磨・ナデ→沈線	重弧蛇行	灰黄褐色	条痕→ナデ	3a	○	○		○	503	フ
6	へ条痕→ナデ→沈線	重弧蛇行	淡灰茶褐色	削り・ナデ	3a	○	○		○	31・413	フ
7	ナデ→沈線	逆J字・蕨状	暗茶褐色	ナデ	3b	○	○		○	61・418	床
8	へ条痕→研磨・ナデ→沈線	S字?	茶褐色	ア条痕・研磨	7d	○	○		○	490	フ
9	へ条痕→ナデ→沈線	蕨状	茶褐色	へ条痕・ナデ	13b	○	○		○	433	フ
10	へ条痕→ナデ→沈線	蕨状	茶褐色	板ナデ・ナデ	2b	○	○		○	440・447	フ
11	へ条痕→ナデ→沈線	重弧蛇行	暗黄褐色	へ条痕	3a	○	○			489	床
12	ナデ・研磨→沈線	重弧蛇行	褐色	条痕→ナデ	9d	○	○		○	465	床
13	ナデ・研磨→沈線	重弧蛇行	茶褐色	ア条痕・研磨	9d	○	○			487	床
14	へ条痕→ナデ→沈線	蛇行	茶褐色	へ条痕	1d	○	○		○	431	フ
15	ア条痕→ナデ→沈線	蕨状	明茶褐色	ア条痕	1c	○	○		○	472	フ
16	ナデ→沈線		暗茶褐色	板ナデ・ナデ	1d	○	○		○		フ
17	ナデ→沈線		暗黄褐色	ナデ	1d	○	○			44	フ
18	ナデ→沈線	渦巻	茶褐色	ナデ	2b	○	○		○	28	フ
19	へ条痕→ナデ→沈線		淡茶褐色	条痕→ナデ	2b	○	○		○	43	フ
20	ナデ→沈線	蕨状	淡茶褐色	ナデ	2b	○	○		○	47	フ
21	ナデ→沈線	蛇行	淡茶褐色	ア条痕・研磨	2b	○	○		○	415	フ
22	へ条痕→ナデ→沈線	逆S字	暗黄褐色	へ条痕→ナデ	2b	○	○		○	34・453	フ
23	へ条痕→研磨→沈線	S字・蕨状	茶褐色	へ条痕→ナデ	2b	○	○			25・458	フ
24	ナデ→沈線	S字渦巻	茶褐色	板ナデ・ナデ	2b	○	○		○	33	床
25	板ナデ→沈線	S字渦巻	茶褐色	ナデ	胴部	○	○		○		フ
26	ナデ→沈線	逆S字渦巻	茶褐色	板ナデ・ナデ	1b	○	○		○		フ
27	へ条痕→沈線	重弧	暗茶褐色	へ条痕	3b	○	○		○	58	フ
28	へ条痕→沈線	逆J字渦巻	暗茶褐色	へ条痕	2b	○	○		○	54	フ
29	へ条痕→ナデ→沈線		茶褐色	へ条痕	2b	○	○		○	59	フ
30	へ条痕→ナデ→沈線		暗灰黄褐色	へ条痕・ナデ	3a	○	○		○	231	フ
31	ナデ→沈線	重弧	灰黄褐色	ナデ	3a	○	○		○	60	床
32	ナデ→沈線	蕨状?	淡褐色	ナデ	3b	○	○			188	フ
33	へ条痕→沈線	蕨状	暗黄褐色	板ナデ・ナデ	胴部	○	○		○	471	フ
34	へ条痕→沈線	蛇行	暗茶褐色	へ条痕・ナデ	3b	○	○		○	425	フ
35	ナデ		暗黄褐色	ナデ	3c	○	○		○	38	フ
36	へ条痕→ナデ→沈線	蛇行	茶褐色	ナデ	3c	○	○		○	470	床
37	へ条痕→研磨→沈線		暗茶褐色	ナデ	3a	○	○		○	22	フ
38	ナデ→沈線	重弧蛇行?	茶褐色	ナデ	3a	○			○	51	フ
39	条痕→研磨→沈線		暗茶褐色	ナデ	9d	○	○		○	53	フ
40	ナデ→沈線	連続斜行	暗茶褐色	ナデ	2aG	○	○		○	69	フ
41	条痕→研磨→沈線→縄文	J字	暗茶褐色	へ条痕→ナデ	9dJ	○	○		○	491	フ
42	研磨→沈線・縄文		茶褐色	研磨→縄文	1dJ	○	○		○	46	フ
43	研磨→縄文		淡明褐色	研磨→沈線	1dJ	○	○		○		フ
44	ナデ→縄文・刺突列点		暗褐色	ナデ	J	○	○				フ
45	ナデ→沈線		黄茶褐色	ナデ	G	○	○		○	45	フ
46	研磨→沈線→へ疑縄文		暗茶褐色	研磨	4aG	○	○		○	467	フ
47	研磨→へ疑縄文		暗黄褐色	ナデ	5cG	○	○			225	床
48	へ疑縄文		暗茶褐色	ナデ	4cG	○	○		○	39	フ
49	へ条痕・へ疑縄文		淡茶褐色	へ条痕	4cG	○	○				フ
50	ナデ・へ疑縄文		淡茶褐色	ナデ・へ疑縄文	4dG	○	○		○	417	床
51	研磨→沈線・へ疑縄文		褐色	ナデ	5cG	○	○			402	フ
52	研磨→沈線・へ疑縄文		茶褐色	条痕→ナデ	G	○	○			40	フ
53	研磨→沈線→疑縄文		暗黄褐色	ナデ	G	○	○		○		フ
54	ア条痕→ナデ・研磨		暗黄褐色	ア条痕・ナデ	3d	○	○		○	430	フ

No	文様の特徴と器面調整			色調	内面	分類	胎土					備考	位置
	外面						砂	角	雲	褐	英		
55	へ条痕・ナデ			暗黄褐色	ナデ	3c	○	○	○			481	フ
56	へ条痕			暗茶褐色	板ナデ	1d	○	○	○	○		427	フ
57	へ条痕			淡褐色	へ条痕→ナデ	1d	○	○	○	○		91	フ
58	へ条痕			暗灰茶褐色	板ナデ・ナデ	2c	○	○	○	○		410	フ
59	ア条痕→ナデ			黄褐色	条痕→ナデ	10	○	○		○			フ
60	へ条痕			茶褐色	へ条痕→板ナデ	3d	○	○	○			468	フ
61	へ条痕→半研磨			淡明褐色	へ条痕→半研磨	1d	○	○	○	○		36	フ
62	へ条痕→ナデ			黒褐色	へ条痕	1d	○	○		○		32	フ
63	へ条痕			暗茶褐色	へ条痕→ナデ	2b	○	○		○			フ
64	へ条痕			淡明褐色	板ナデ	2c	○	○	○	○		488	フ
65	へ条痕			暗茶褐色	へ条痕	1d	○	○		○			フ
66	へ条痕			淡灰黄褐色	へ条痕→ナデ	1d	○	○					フ
67	へ条痕			暗黄褐色	へ条痕→ナデ	1d	○	○				30	フ
68	ア条痕・板ナデ			橙褐色	板ナデ	底部	○	○	○	○		597	フ
69	板ナデ・研磨			暗黄褐色	板ナデ	底部	○	○		○			フ
70	へ条痕→ナデ			淡茶褐色	ナデ	底部	○	○		○		640	フ
71	ナデ			橙褐色	ナデ	底部	○	○	○	○		620	フ
72	条痕→ナデ			茶褐色	ナデ	底部	○	○		○		601	フ
73	ナデ			橙褐色	ナデ	底部	○	○	○	○		626	床
74	条痕→ナデ			茶褐色	ナデ	底部	○	○	○	○		623	フ
75	へ条痕			淡茶褐色	ナデ	底部	○	○	○	○		561	フ
76	条痕→ナデ			灰黄褐色	条痕→ナデ	底部	○	○		○		56	床
77	条痕→ナデ			茶褐色	ナデ	底部	○	○		○		49	フ
78	へ条痕			茶褐色	条痕→ナデ	底部	○	○		○		482	フ
79	ア条痕→ナデ			暗黄褐色	ア条痕→ナデ	底部	○	○		○			フ
80	条痕→ナデ			黄橙褐色	ナデ	底部	○			○		562	床
81	研磨			橙褐色	ナデ	底部	○	○		○		646	フ
82	ナデ			淡茶褐色	ナデ	底部	○	○		○		637	フ
83	条痕→ナデ			茶褐色	条痕→ナデ	底部	○	○		○		642	フ
84	研磨			赤褐色	研磨	底部	○	○		○		305	フ
85	ナデ・研磨			暗黄褐色	ナデ	10d	○	○		○		613	フ
86	ナデ			茶褐色	ナデ	1d	○	○		○		496	床
87	ナデ			暗黄褐色	へ条痕→ナデ	1d	○	○		○		29・624	フ
88	ナデ・板ナデ			暗茶褐色	ナデ・板ナデ	10d	○	○		○		611	フ
89	ナデ			暗黄褐色	ナデ	11a	○	○				35	フ
90	ナデ・研磨			茶褐色	ナデ	8d	○	○		○		631	フ
91	ナデ			暗黄褐色	ナデ	11d	○	○		○		612	フ
92	ナデ・板ナデ			褐色	板ナデ	2d	○			○		512	フ
93	ナデ			暗黄褐色	ナデ	5d	○	○		○		629	フ
94	ナデ			暗黄褐色	ナデ	5d	○	○		○			フ
95	ナデ			暗灰茶褐色	ナデ	1d	○	○					フ
96	へ条痕→ナデ			淡茶褐色	ナデ	1d	○	○		○		42	フ
97	研磨			灰茶褐色	研磨	1d	○	○		○			フ
98	ナデ			茶褐色	ナデ	8d	○	○		○		26	フ
99	条痕→ナデ→沈線			暗茶褐色	ア条痕	1b	○	○		○		611	上
100	ナデ→沈線			茶褐色	ナデ	2b	○	○		○			上
101	条痕→沈線			茶褐色	ナデ	2b						191	上
102	条痕→ナデ→沈線			暗灰茶褐色	ナデ	2b	○	○		○		189	上
103	条痕→ナデ→沈線			茶褐色	条痕→ナデ	1c	○	○		○		186	上
104	条痕→ナデ→沈線			淡明褐色	ナデ	胴部	○	○		○		90	上
105	へ条痕→ナデ			暗茶褐色	へ条痕	5d	○	○		○		187	上
106	へ条痕			淡茶褐色	へ条痕	1d	○	○					上
107	へ条痕→ナデ			橙灰褐色	ナデ	底部	○	○		○		622	上
108	条痕→半研磨			灰茶褐色	ナデ	底部	○	○		○		619	上
109	条痕→半研磨			橙褐色	ナデ	底部	○	○		○		536	上

No.	文様の特徴と器面調整				胎土				備考	位置		
	外	面	色調	内面	分類	砂	角	雲			褐	英
110	板ナデ		暗灰褐色	板ナデ	1c	○	○				628	上
111	ナデ・研磨		暗茶褐色	ナデ	5d	○	○			○		上
112	ナデ・研磨		暗茶褐色	ナデ	3c	○	○			○	89	上
113	研磨→沈線→縄文		暗黄褐色	へ条痕	J	○				○		上
114	へ条痕→沈線→へ疑縄文	蛇行	暗黄褐色	へ条痕→研磨	2cG	○	○			○	192	上
115	ナデ→へ疑縄文・沈線	垂線・稻妻	淡明褐色	へ条痕→ナデ	6dG	○	○				82	上
116	へ疑縄文・研磨・刺突列点		茶褐色	条痕→研磨	1dG	○	○	○			466	上
117	研磨→へ疑縄文→沈線		灰茶褐色	ナデ	5cG	○	○					上
118	ナデ→沈線		茶褐色	ナデ	9d	○	○			○		上
119	へ条痕→研磨→沈線		褐色	へ条痕→研磨	9d	○	○			○	83	上

表のなかで扱う、器面調整で、へ条痕はへナタリ条痕、ア条痕はアナダラ条痕、板ナデは板状原体によるナデの略である
また、へ疑縄文はアナダラ疑似縄文、へ疑縄文はへナタリ疑似縄文の略である。

表の胎土のうちで、砂は砂粒、角は角閃石、雲は雲母、褐は褐色粒、英は石英粒の略である。
また、位置の床は床面附近、フは覆土、上は覆土上層出土の略である。

表6 縄文2号住居跡出土石器一覧表

(単位cm・g)

登録番号	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
42	上層	完形	打製石斧	安山岩	13.2	5.0	2.2	177.4	第53図1
33	上層	基部欠	打製石斧	安山岩	8.5	5.8	1.6	101.6	
1		完形	打製石斧	安山岩	13.7	6.5	1.3	175.1	3
59	上層	胴部片	打製石斧	安山岩	7.5	9.4	2.9	268.1	4
22	上層	基部欠	打製石斧	安山岩	12.5	8.2	3.2	415.1	5
3		胴部片	打製石斧	安山岩	5.5	7.0	1.8	104.4	6
29		刃部片	打製石斧	安山岩	7.4	9.5	1.6	130.5	7
23		刃部片	打製石斧	安山岩	11.5	10.0	1.6	179.6	第54図8
47	上層	刃部片	打製石斧	安山岩	9.5	7.7	1.0	82.7	
21	床面	刃部片	打製石斧	安山岩	6.5	5.1	0.8	44.4	10
25	上層	完形	打製石斧	緑泥片岩	15.1	6.3	1.5	187.4	11
601		刃部片	打製石斧	緑泥片岩	6.5	5.0	0.8	45.1	12
2		完形	打製石斧	緑泥片岩	8.5	3.8	0.7	36.8	13
54	上層	完形	敲石	安山岩	11.2	8.5	3.2	263.4	14
57		完形	敲石	安山岩	8.0	4.2	1.3	49.7	15
129		基部欠	磨製石斧	蛇紋岩	6.7	2.7	1.4	32.4	16
124	上層	基部欠	磨製石斧	蛇紋岩	11.2	6.4	2.2	278.2	17
193	上層	完形	打欠石錘	安山岩	4.3	4.1	0.3	25.6	第55図18
184		完形	打欠石錘	安山岩	4.0	4.0	0.3	30.2	
182	上層	一部欠	打欠石錘	安山岩	1.7	5.4	1.2	39.6	20
181		完形	打欠石錘	砂岩?	5.9	5.2	2.1	93.7	21
		完形	打欠石錘	安山岩	5.7	4.8	2.2	68.7	22
205	上層	完形	打欠石錘	砂岩?	6.1	4.5	2.9	95.6	23
210		完形	打欠石錘	安山岩	6.0	5.1	2.4	104.8	24
207		完形	打欠石錘	安山岩	6.0	5.8	2.1	94.1	25
203	床面	完形?	打欠石錘	安山岩	5.8	5.8	1.5	86.9	26
204	上層	完形	打欠石錘	安山岩質	5.0	5.8	1.2	63.3	27

登録番号	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
209		完形	打欠石錘	安山岩	5.5	5.5	1.8	95.5	28
178		完形	打欠石錘	砂岩	6.3	6.3	1.7	95.0	29
192	上層	完形	打欠石錘	安山岩	6.0	5.7	2.5	114.1	30
213	フク土	完形	打欠石錘	安山岩	6.0	6.1	2.1	101.9	31
211	フク土	完形	打欠石錘	凝灰安山岩	5.4	5.9	2.3	95.2	32
	上層	半欠	打製石鏃	黒色黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.5	第56図33
	フク土	半欠	打製石鏃	姫島黒曜石	2.3	1.0	0.3	0.6	34
	フク土	完形	打製石鏃	姫島黒曜石	2.1	2.0	0.4	0.8	35
	フク土	完形	打製石鏃	姫島黒曜石	1.3	1.5	0.3	0.3	36
	フク土	完形	打製石鏃	サヌカイト	2.0	1.2	0.4	0.7	37
	フク土	完形	打製石鏃	姫島黒曜石	2.4	1.9	0.7	2.7	38
	フク土	破片	石刃状剥片	姫島黒曜石	1.3	2.0	0.7	4.1	39
150	フク土	完形	すり石	角閃安山岩	12.4	10.0	3.1	498.1	第57図40
151	フク土	完形	すり石	安山岩	11.9	8.1	3.4	411.7	41
162	フク土	完形	すり石	安山岩	11.9	8.9	5.3	845.2	42
163	フク土	完形	すり石	角閃安山岩	9.6	8.7	4.8	627.6	43
273	フク土	完形	すり石	砂岩?	12.2	5.3	1.8	201.9	44
279	フク土	破片	石皿片	安山岩	12.2	7.7	5.0	720.4	45
	床面	完形	石皿	安山岩	43.2	32.8	10.5	23500.0	第58図46
52	上部	基部片	打製石斧	安山岩	8.5	6.0	3.0	151.6	不掲載
600	上部	刃部片	打製石斧	安山岩	5.1	7.0	1.6	64.3	不掲載
198	上部	完形	打製石錘	安山岩	5.9	5.0	1.5	53.6	不掲載
	上部	完形	打欠石錘	安山岩	4.3	3.7	1.8	35.7	不掲載
	上部	胴部片	磨製石斧	緑泥片岩	7.8	3.3	0.9	29.2	不掲載
148	上部	半欠	敲石	安山岩	9.4	6.2	3.4	290.0	不掲載
141	上部	完形	丸弾	安山岩	3.9	3.3	2.8	47.3	不掲載
142	フク土	完形	丸弾	安山岩	3.0	2.9	2.6	27.4	不掲載
238	フク土	完形?	敲石	安山岩	7.9	7.4	2.4	253.0	不掲載
55	フク土	剥片	すり石	安山岩	6.1	6.1	2.3	64.0	不掲載
157	フク土	完形	すり石	安山岩	12.6	11.5	5.2	998.5	不掲載
611	フク土	完形	削器	サヌカイト	5.2	3.7	1.3	28.4	不掲載

表7 縄文2号住居跡出土土器片円盤一覧表

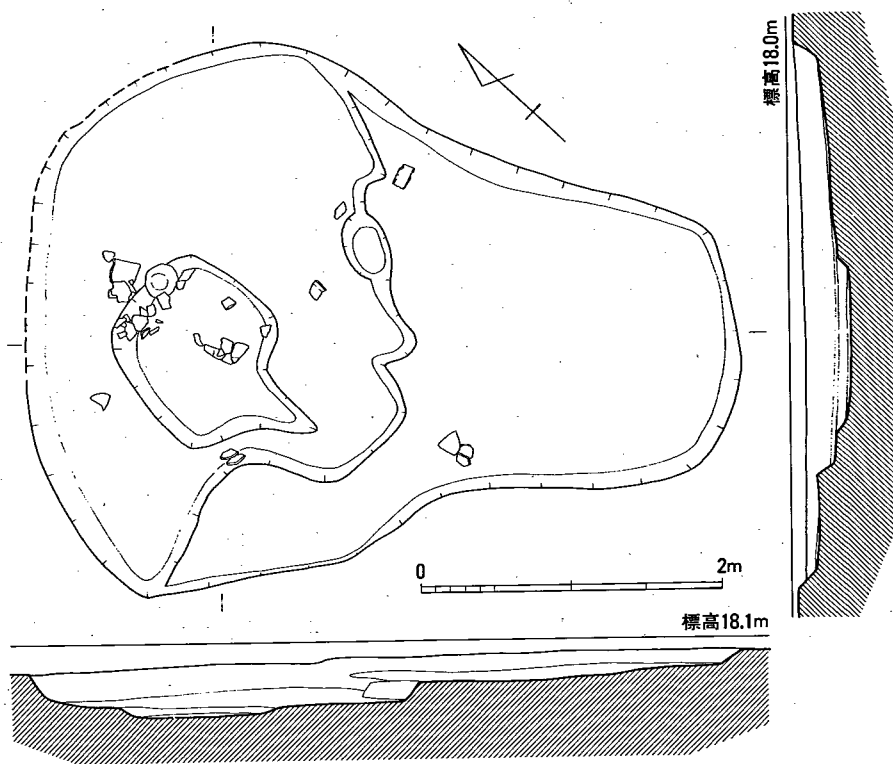
(単位cm・g)

登録番号	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
313	上層	一部欠	A-2	条痕	(4.7)	6.6	1.4	55.9	第59図1
246	上層	完形	A-2	ナデ	5.6	5.5	1.0	38.2	2
327	上層	完形	A-2	条痕	5.2	5.0	0.9	37.9	3
320	上層	一部欠	A-2	条痕	(5.3)	5.7	1.2	29.0	4
315	上層	完形	A-1孔	ナデ	5.4	5.2	0.7	28.6	5
322	上層	完形	A-2	条痕	5.0	4.8	0.9	28.0	6
323	上層	完形	A-2	ナデ	5.1	4.6	0.8	27.4	7
311	上層	完形	A-2	ナデ	5.1	4.8	0.7	27.4	8
316	上層	半欠	A-2	ナデ	(2.9)	5.1	0.9	18.6	9
255	上層	完形	B-2	ナデ	5.8	4.4	0.8	26.3	10
318	上層	一部欠	B-2	条痕	(3.9)	5.2	0.8	17.6	11
247	上層	一部欠	A-2	ナデ	(4.2)	4.8	1.0	25.8	12
244	上層	完形	B-2	ナデ	4.9	4.0	0.9	25.0	13
274	上層	半欠	A-2途	ナデ	(2.3)	4.6	0.9	12.0	14
239	上層	完形	B-2	条痕	4.5	4.5	1.0	23.3	15
309	上層	完形	A-2	ナデ	4.6	3.9	0.9	22.1	16
312	上層	完形	A-2	ナデ	4.6	4.3	0.8	21.8	17
308	上層	完形	B-2	ナデ	4.2	3.8	1.0	20.7	18

登録番号	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
324	上層	完形	B-2	ナデ	4.6	4.6	0.8	18.8	19
325	上層	完形	B-2	ナデ	4.2	3.6	0.8	16.5	20
310	上層	完形	B-2	ナデ	3.8	3.8	1.1	15.0	21
317	上層	完形	A-2	ナデ	3.7	3.4	1.0	14.4	22
271	上層	完形	B-2	条痕	3.9	3.8	0.8	14.0	23
275	上層	完形	B-2	ナデ	3.9	3.4	0.9	13.3	24
319	上層	完形	B-2	ナデ・沈線	3.1	3.0	1.1	12.8	25
326	上層	完形	B-2	ナデ	3.9	3.2	0.7	9.0	26
303	下層	完形	B-2	ナデ	5.8	5.4	1.3	45.0	第60図27
306	下層	完形	A-2	ナデ	5.0	5.0	1.3	38.2	28
295	下層	完形	B-2	ナデ	5.0	4.7	1.1	36.3	29
298	下層	完形	A-1	条痕	5.4	5.4	1.0	36.0	30
332	下層	完形	A-1途	条痕	5.2	5.2	1.0	35.2	31
260	下層	完形	B-2	ナデ	5.9	5.7	0.9	34.6	32
294	下層	完形	A-2	条痕	4.2	4.2	1.2	28.5	33
290	下層	完形	A-2	ナデ・沈線	5.0	4.1	1.2	27.3	34
297	下層	完形	A-2	条痕	5.0	4.6	0.9	26.5	35
268	下層	完形	B-2	条痕	5.0	4.7	1.0	25.7	36
291	下層	完形	B-2	ナデ	4.7	4.4	0.9	24.9	37
296	下層	完形	B-2	ナデ	5.2	3.9	1.0	24.6	38
304	下層	完形	A-2	条痕	4.2	4.2	0.9	21.4	39
286	下層	完形	B-2	ナデ	4.5	4.3	0.9	21.4	40
305	下層	完形	B-2	ナデ	3.9	3.8	1.1	20.7	41
250	下層	完形	B-2	条痕	4.8	3.8	0.9	20.4	42
289	下層	完形	A-2	ナデ	4.4	3.9	1.0	20.1	43
314	下層	完形	A-2	ナデ	4.0	3.8	0.9	19.1	44
302	下層	完形	A-2	ナデ	3.8	3.7	1.2	18.7	45
266	下層	完形	B-2	ナデ	4.7	3.8	0.8	18.5	46
270	下層	半欠	B-2	ナデ	(3.3)	4.9	1.0	17.8	47
252	下層	一部欠	B-2	ナデ	(3.3)	4.6	1.0	15.2	48
253	下層	一部欠	B-2	ナデ	(3.4)	4.3	0.8	14.8	49
258	下層	一部欠	A-1	ナデ	(3.2)	4.4	0.9	13.8	50
261	下層	半欠	B-2	条痕	(2.8)	5.3	0.9	16.6	51
299	下層	完形	B-2	ナデ	3.8	3.3	1.1	17.7	52
287	下層	完形	B-2	条痕	4.1	3.5	0.9	17.5	53
288	下層	完形	B-2	条痕	4.3	4.1	0.9	17.4	54
307	下層	完形	B-2	条痕	3.8	3.5	1.0	15.3	55
251	下層	完形	B-2	ナデ	3.5	3.2	0.9	13.7	56
292	下層	完形	A-2	ナデ	3.7	3.4	1.0	13.4	57
264	下層	完形	B-2	条痕	3.6	3.2	0.8	10.4	58
301	下層	完形	A-2	ナデ	2.2	2.0	0.8	4.7	59
300	床面	完形	B-2	ナデ	4.2	4.1	1.2	23.3	60
293	床面	完形	B-2	ナデ	4.1	4.1	1.0	19.1	61

2. 不整形竪穴 (図版21-1、第61図)

縄文2号住居跡の約5m北側に相当するG・H-11・12区で発見された。主軸方向をN44°Wにとり、北西側に開く撥形に似た不整形のプランに残るが、弥生後期の14号住居跡の南隅部と重複して上部を失う。南東-北西方向1.0m、北東-南西方向0.8mの広さで、北西部の深さ0.2m、南東部の深さ0.1mの規模である。周壁は緩やかに傾斜する部分もあり、14号住居跡埋土にも縄文土器片が多数含まれていることから、本来14号住居跡内部側に広がっていたのかも知れない。竪穴は、淡黄褐色と淡茶褐色の砂が互層に堆積する砂層に掘り込まれ、覆土は木炭などを含んだ茶褐色の砂質土である。床面はやや堅緻だが、互層に堆積する地山のなかで茶褐色を帯びた硬めの砂部分との区別は困難である。

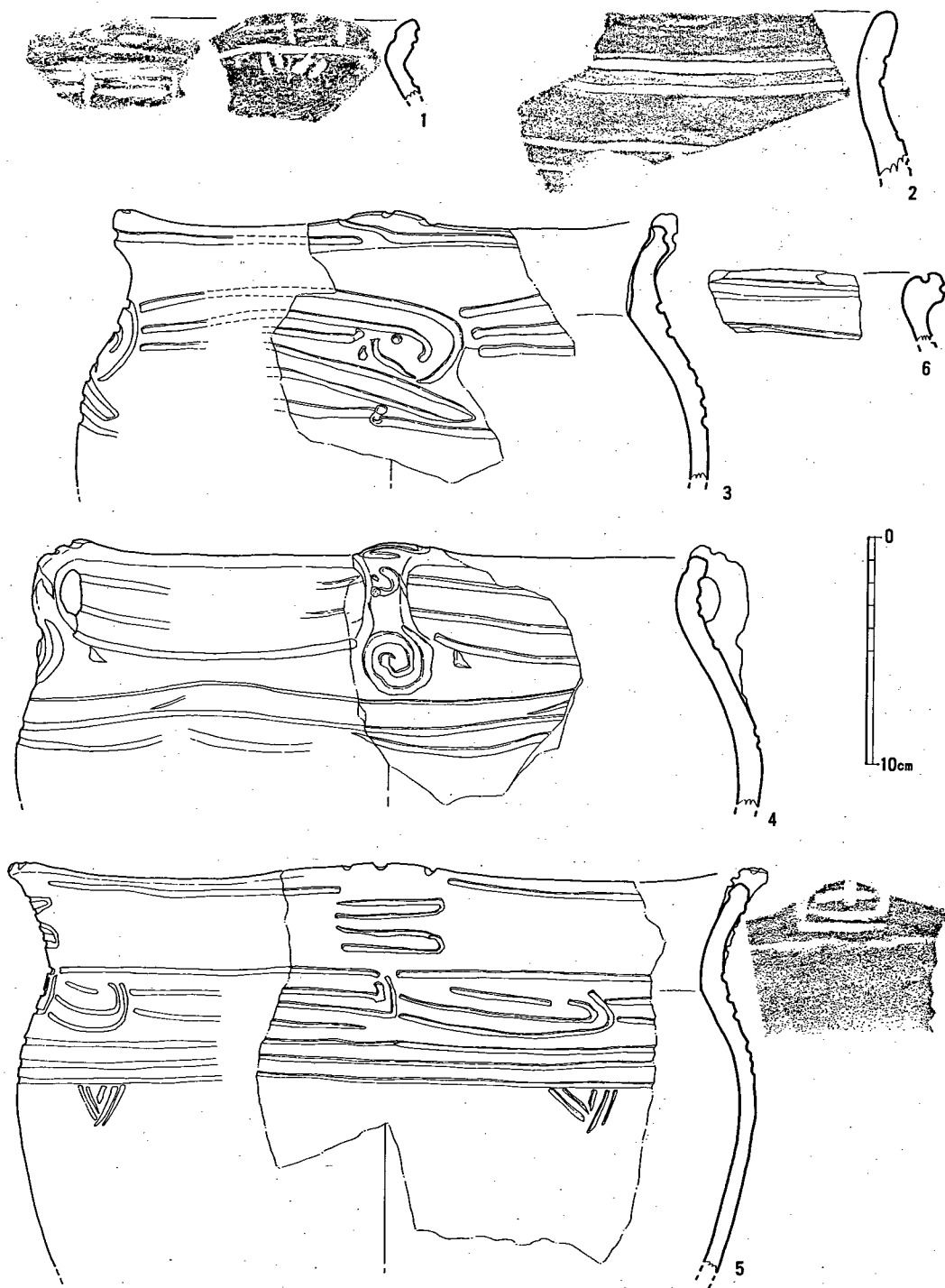


第61図 不整形竪穴実測図 (1/50)

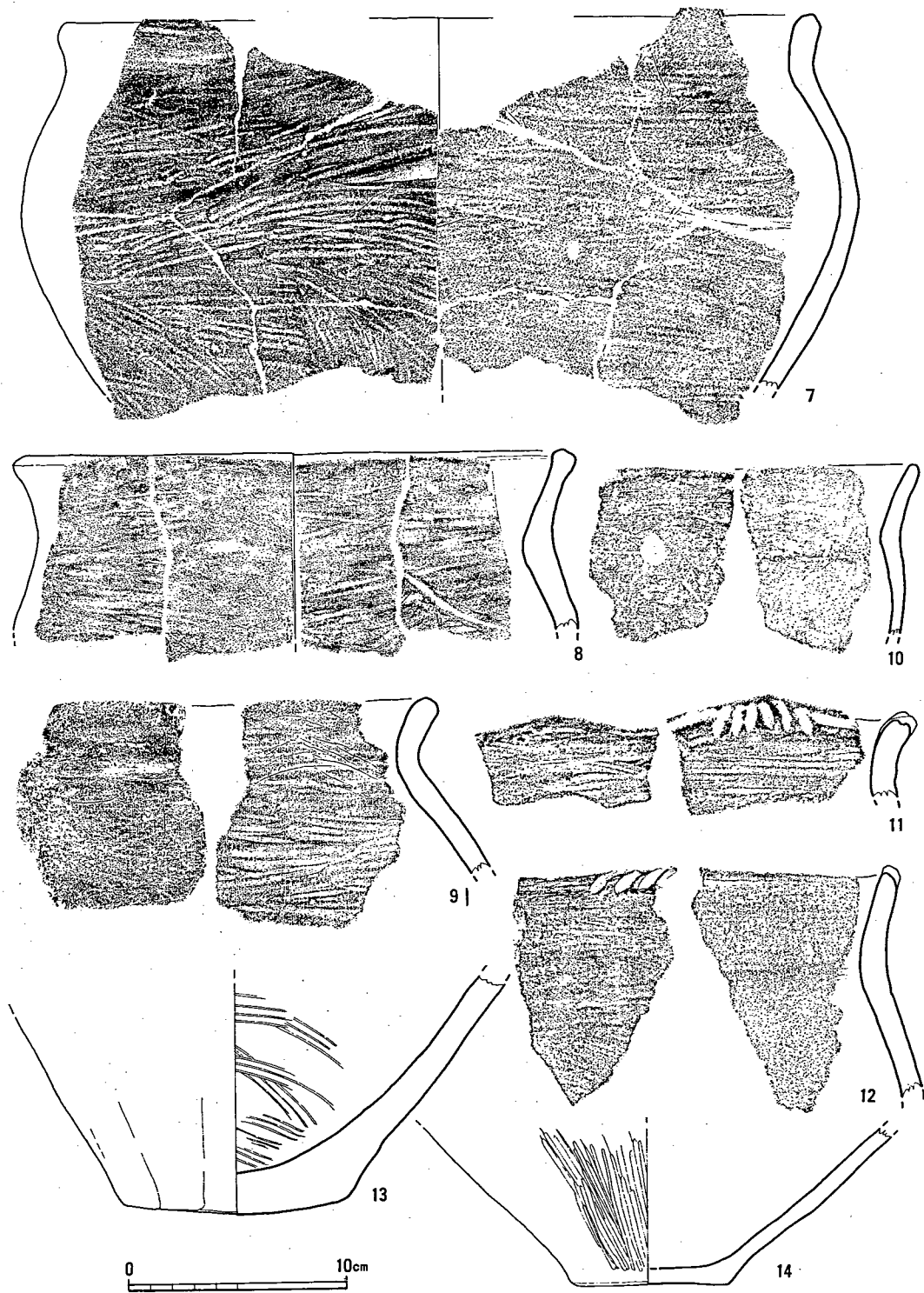
出土遺物

縄文土器 (図版22、第62~65図、表8)

有文鉢1A類 (3) 膨らんだ胴部から頸部を介して口縁部が外反する鉢で、口縁端部内面に



第62图 不整形豎穴出土土器实测图1 (1/3)



第63图 不整形竖穴出土土器实测图2 (1/3)

段がある。口縁内面の段が明瞭で、外面に施される沈線はやや太めであり、1条単位で描いた蕨状の文様が波頂部下の胴部肩にみられるが、沈線原体は小巻貝らしく端部などに小さな丸点が刺突される。

有文鉢1a類 (1・4・5) 膨らんだ胴部から頸部を介して口縁部が外反する鉢で、口縁端部内面に段がある。小形鉢とみられる1では、外側につまみ出したような波頂部の内外面に、縦方向の短い沈線を施して箱形の区画を作っている。4では口縁部内面に僅かな段があり、頸部に沈線が巡る。波頂部には橋状把手が付き、S字状文と渦巻き文様が描かれている。5は口縁部内面の段が4よりも明瞭であり、口縁部外面に沈線が1条巡る。3本の短沈線が平行・交差して田の字状の小さな文様が波頂部内面側に付される。橋状把手はなく復原図には示せないが、おそらく橋状把手の付く波頂部が対峙し、これに直交した2ヶ所にこのような波頂部が設けられたものと推定される。波頂部下の頸部外面には蛇行文様が付され、胴部には2条単位に1条加わる平行沈線の文様が描かれている。復原胴最大径32.4cmの大きさである。

有文鉢1d類 (2) 膨らんだ胴部から頸部を介して口縁部が外反する鉢で、口縁部内面や上面に沈線や段がみられず、頸部や胴部肩に2条単位らしい沈線が巡る。

有文鉢3a類 (17) 膨らんだ胴部から頸部は括れ、口縁部が肥厚して短く外反する鉢で、口唇部内面に段状の沈線が巡る。外面の頸部に横走沈線と胴肩部に斜行する平行沈線がみられる。

有文鉢3b類 (6) 膨らんだ胴部から頸部は括れ、口縁部が肥厚して短く外反する鉢で、口唇部上面に近い内面に沈線が巡り、外面にも沈線が巡る。

17は口縁部が括れた頸部から短く直に立ち上がる鉢にも近く、明確な区別をし難い。

有文鉢3aj類 (18) 膨らんだ胴部から頸部を介して口縁部が外反する鉢で、殆ど外反しない口縁部外面に沈線が1条巡り、胴部は2条単位とみられる直線的な磨消縄文で飾られる。

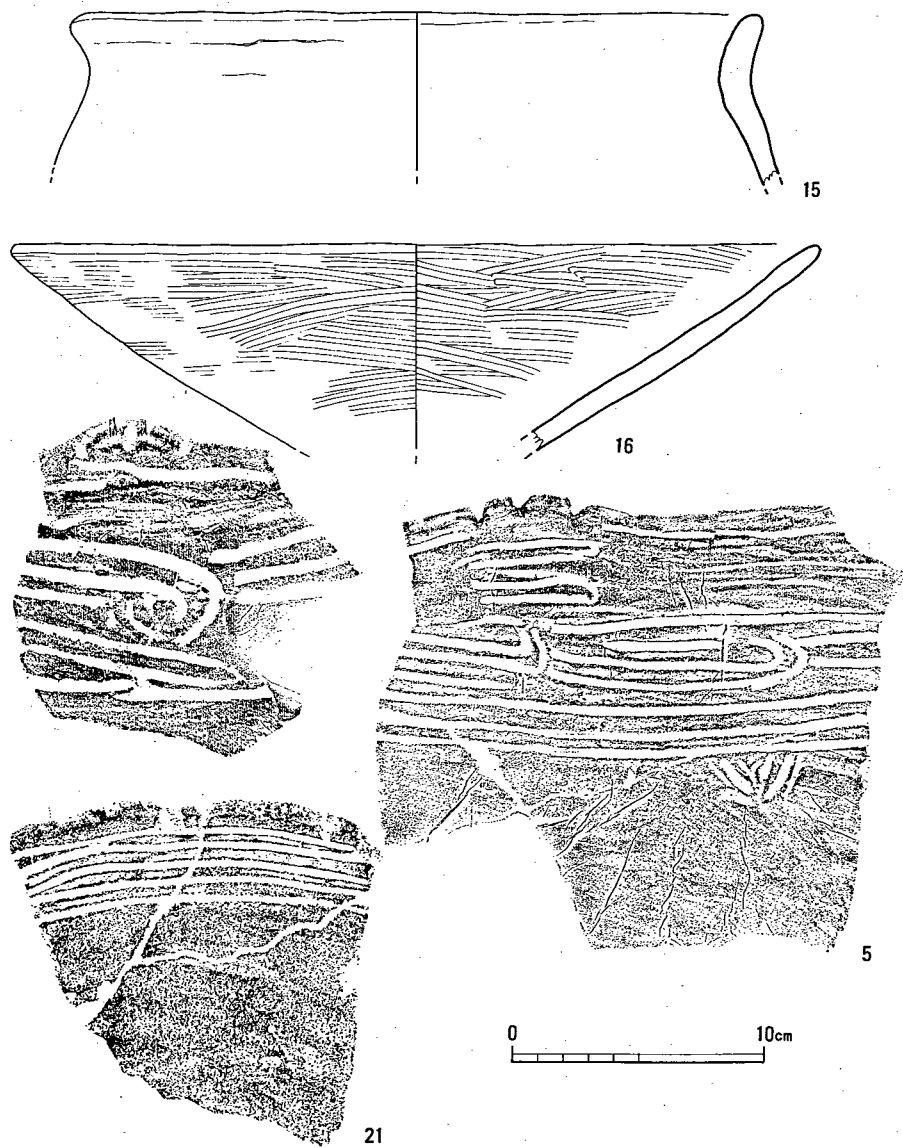
19・21~23は重複する14号住居跡の床面から出土した。

有文鉢9b類 (19) 口縁部が底部から内彎して立ち上がる鉢で、口唇部上面に沈線が巡り、口縁部外面に2条の沈線が巡る。内外面ともに削りのような板ナデ調整と研磨で調整されている。復原口径29.5cmの大きさ。

有文鉢12d類 (21) 口縁部が底部から直線的に開く浅鉢で、端部に丸味をもつ口縁部の外面に5条の沈線が巡る。復原口径35.0cmの大きさである。

有文鉢14類 (23) 内外面とも研磨調整される磨研土器で、頸部から口縁部が長めに外反し、口縁部外面に、細い沈線で弧が対称的に反る文様が描かれている。

注口土器 (22) 口縁部や注口部分を欠くため全体の器形は分からないが、口縁部は外反し、注口部はやや上に向くようである。胴部に巡る平行沈線の間に長楕円あるいは長方形の区画を4ヶ所ほど並べるものと推定される。注口部の基部には2条の沈線が取り巻くように描かれる。また復原図では胴下半分を示しているが、3割程度の破片で復原していて、注口基部下側は欠

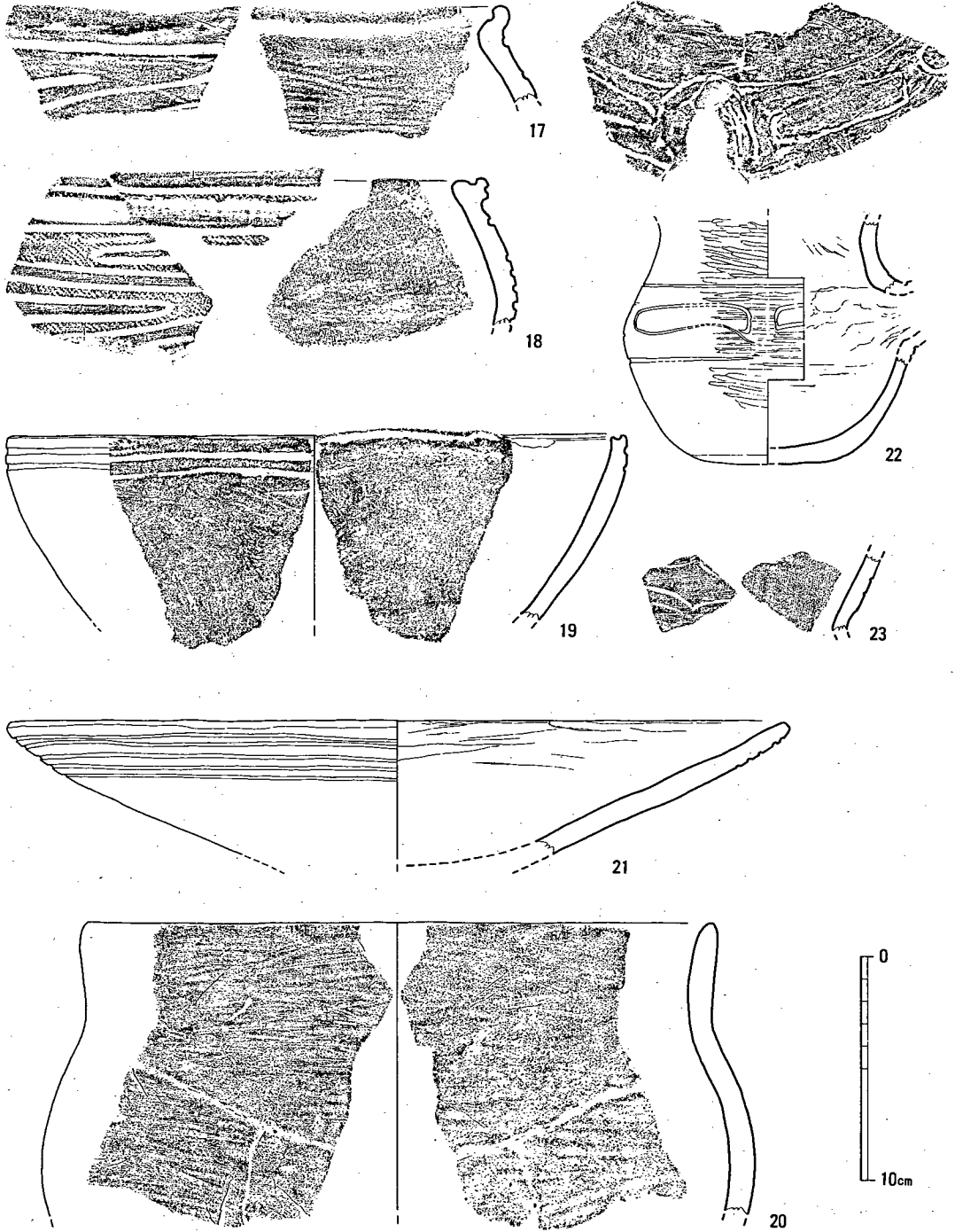


第64図 不整形竪穴出土土器実測図3 (1/3)

失している。復原胴最大径13.0cmの大きさである。

無文鉢1b類(11) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が外反する鉢で、口唇部上に沈線がみられる。波頂部には内面側に開く放射状の刻み目が付されている。

無文鉢1c類(8・12) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が外反する鉢で、8は口唇部が面取りされて、内面側に幾分か迫り出している。また12は波頂部から外面側へ放射状



第65图 不整形竖穴出土土器实测图4 (1/3)

に開く刻み目が施されている。

無文鉢1d類 (9・10) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が外反する鉢で、端部に丸みをもつ。

無文鉢2d類 (7・15・20) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部は直に立ち上がる。口唇部は面取りされずに丸くまとまる。7の器面にはへなタリらしい小巻貝の条痕で調整され、なかには半ば研磨にもみえる部分もある。20は口縁部が幾分か長めに立ち上がる鉢で、口径28.5cm程の大きさである。

無文鉢12d類 (16) 口縁部が底部から直線的に開く浅い鉢で、内外面を小巻貝の条痕で調整している。復原口径32.0cmの大きさだが、底部付近は、欠失して不明である。

底部 (13・14) 13は板ナデ状の痕跡が外面に残る深鉢の底部で、内面には条痕がみられる。底面は少し膨れる。14は有文鉢などの底部であろうか。平底で、薄めの器壁の内面側は風化するが外面には研磨痕がみられる。

石器 (図版24、第66～68図、表9)

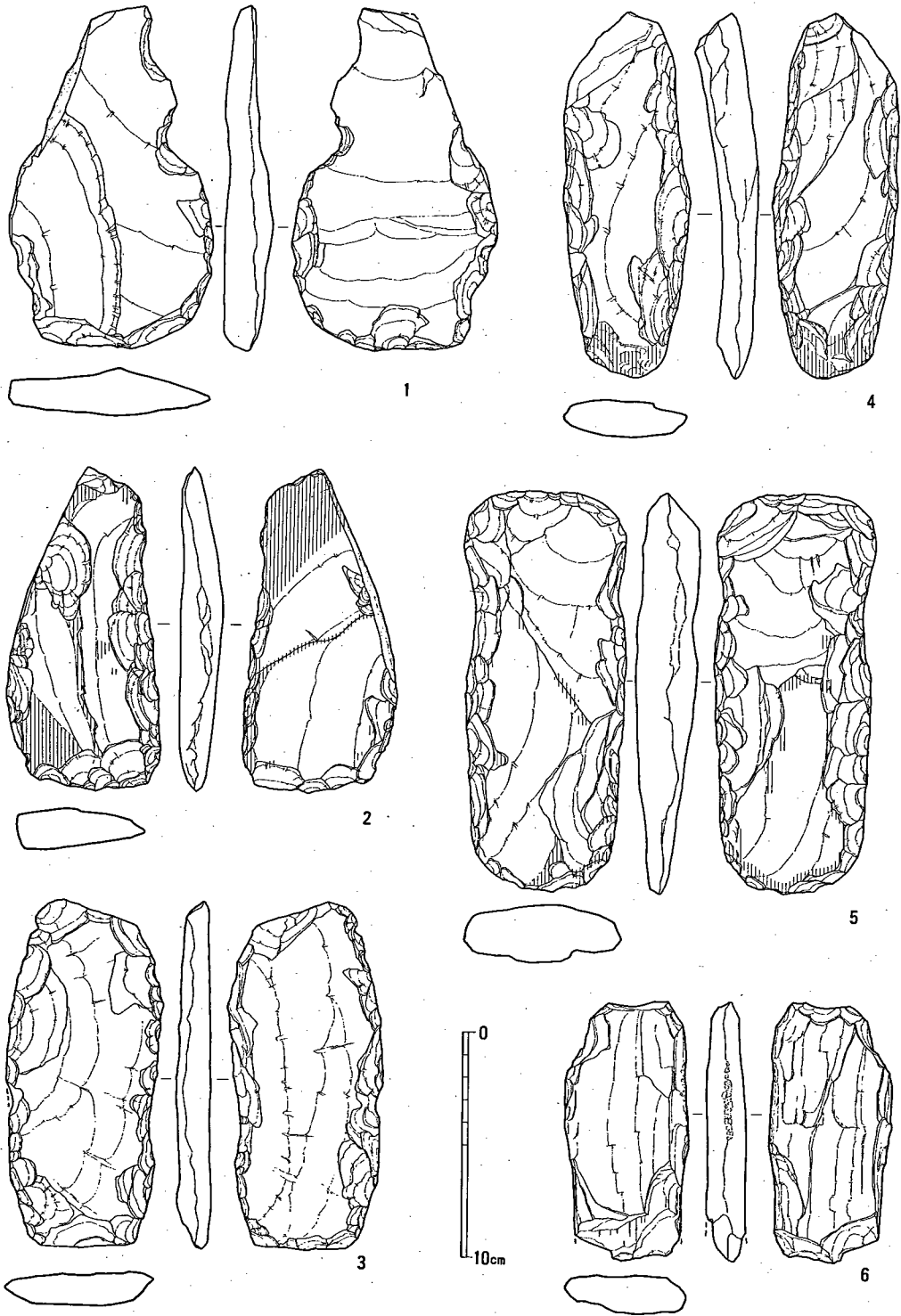
打製石斧 (1～6) 1～5は安山岩製、6は緑泥片岩製の打製石斧である。1・2は基部よりも刃部の幅が広い撥形タイプの扁平打製石斧である。基部側の側縁には調整剥離が加えられないで、片側の側縁に素材の平坦面が残るものの、均整のとれた形状をなしている。2では中程より少し基部側の側縁に小さな剥離痕と磨耗痕がみられる。3～5は短冊形タイプの打製石斧で、両側縁に磨耗痕がみられる。いずれも横剥ぎの剥片を調整剥離しているが、3・4の扁平さに比して5はやや厚みがあり、重量も約484gと重めである。6はやや扁平で細めの体部を有し、横剥ぎの素材に若干調整剥離を加えたもので、側縁の一部に敲打痕にもみえるが磨耗痕がみられる。なお図示しない資料のなかにも安山岩製の打製石斧基部片が1点ある。

打欠石錘 (7～26) 20点出土したが、いずれも川原石の長軸側両端を打欠いて紐掛けにしたもので、10・18・26の3点が砂岩製である他は安山岩製である。17.8g～111.3gの重量幅があり、40～60gの範囲内にやや集中している。

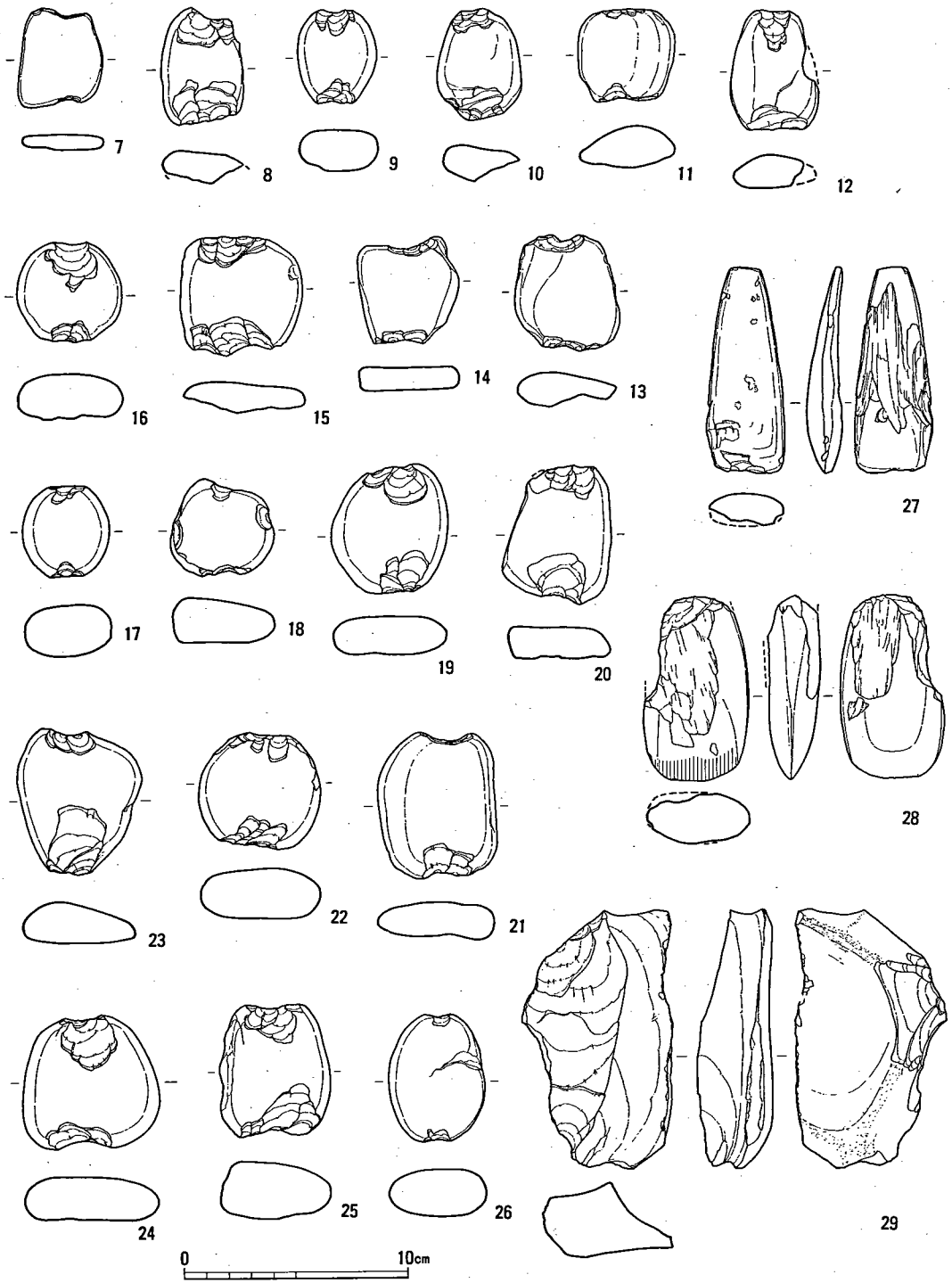
磨製石斧 (27・28) 27は蛇紋岩製のやや扁平な磨製石斧で、基部側の幅が狭い。28は基部側を欠くが、やや厚みのある両刃の磨製石斧である。

敲石 (29) 安山岩の横剥ぎ剥片に若干の調整剥離を加えて、掌のなかに握り易い形状に整えられたもので、剥片の先端側の縁の尖った部分に敲打痕と磨耗痕がみられる。また図示しない資料で細い棒状石の端部が磨滅した敲石とすり石を兼ねたようなものもみられる。

打製石鏃 (30・31) 黒色黒曜石製の石鏃が2点出土していて、ともに広義の剥片鏃で、凹基式である。30は打瘤部を残して幾分厚みをもつが、31は縦長剥片の打瘤部を調整剥離して抉りにしている。



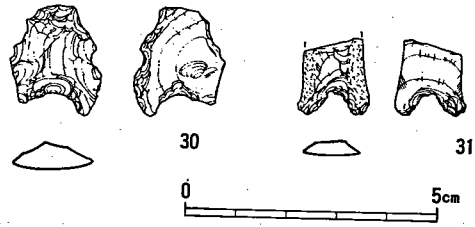
第66图 不整形竖穴出土石器实测图1 (1/3)



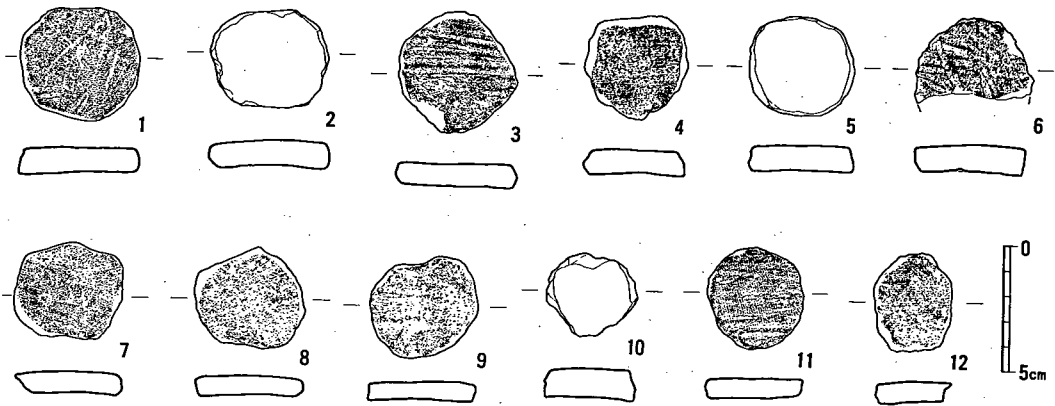
第67图 不整形竖穴出土石器实测图2 (1/3)

土製品 (図版24、第69図、表10)

土器片円盤 (1~12) 土器片を打ち欠き調整して、円形あるいは円形に近い三角形の円盤状に整形したもので、1・5・11のように周縁を研磨する例と、周縁を打ち欠きのままにする例があり、打ち欠き面が磨耗する例もある。重量では13.5g~38.2gの幅を有する。



第68図 不整形竪穴出土石器実測図 3 (2/3)



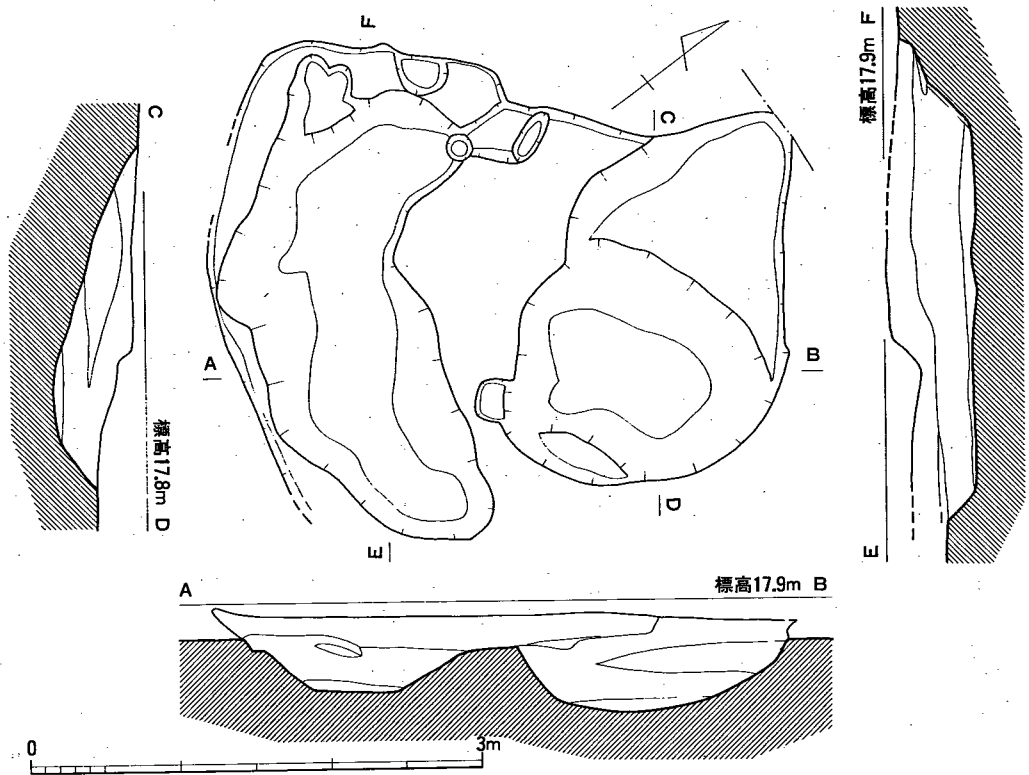
第69図 不整形竪穴出土土製品実測図 (1/3)

3. 土 坑

1号土坑 (図版21-2、第70図)

I 17区にあり、1号縄文住居跡の西側に重複する遺構である。プランの端部は不明確ながら住居跡より先行するようである。残された部分の平面形は撥形に似ていて、南西側が広い不整形形状プランを呈している。主軸方向はN37°Eをとり、北東-南西方向3.8m、北西-南東方向3.2mの規模である。

淡黄褐色の粘質砂層を掘り込んだ土坑の中央部は0.1~0.2mの深さだが、東部と南西部はピットのように深い。北東側のピット状部分は、長径2.8m、短径1.7m、深さ0.6mの規模で、緩やかな傾斜の周壁をもつ。南西側のピット状部分は、長さ3.2m、幅1.3m、深さ0.6m規模の三日月形に掘り込まれていて、やはり周壁は緩やかである。淡茶褐色砂層ないし淡黄褐色砂層にまで達する床面は僅かな凹凸をもち、やや堅緻である。覆土には焼土粒や木炭片が若干混じり、



第70図 1号土坑実測図 (1/50)

中央部の浅い部分の床面では木炭片がやや顕著にみられた。

出土遺物

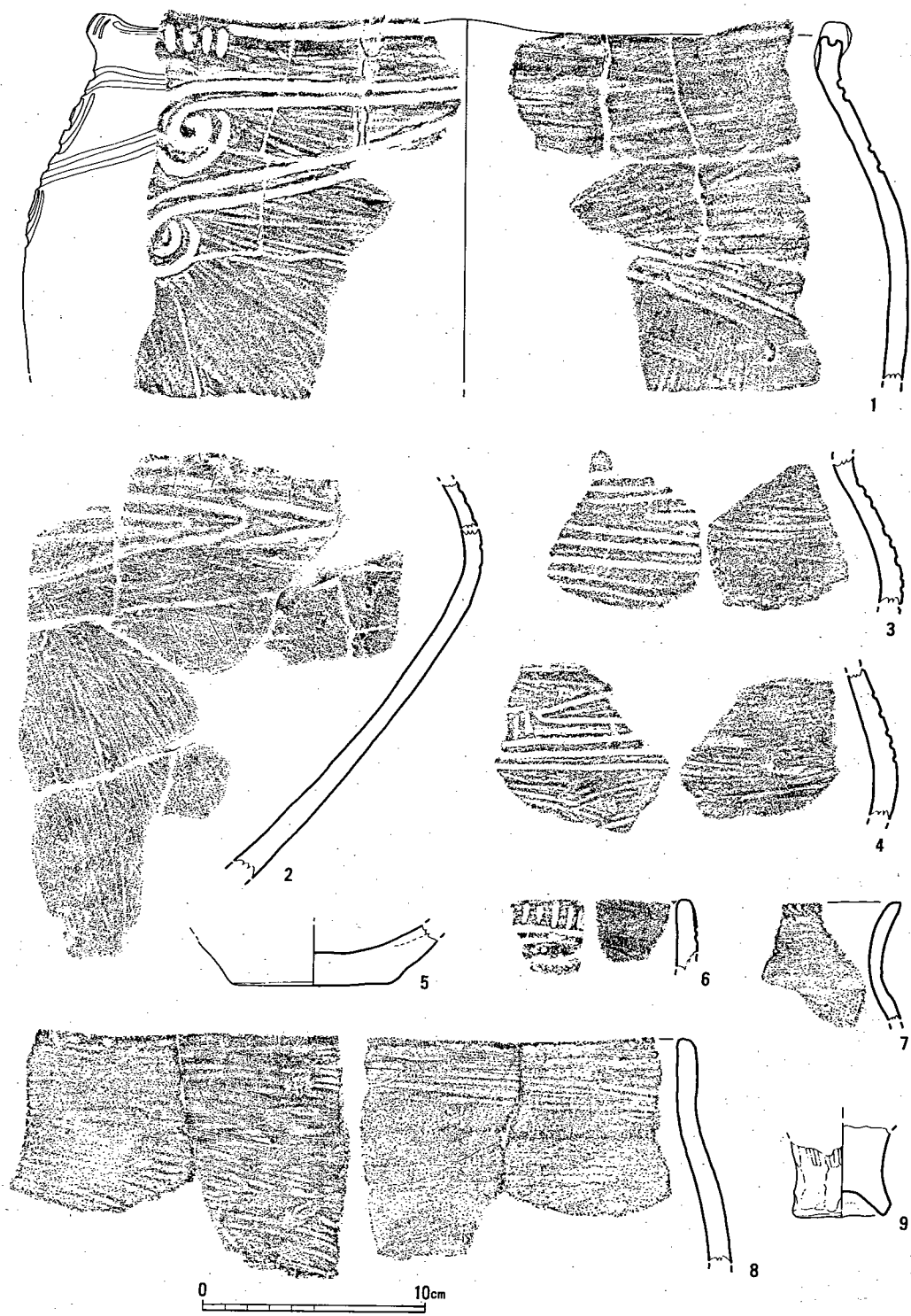
縄文土器 (図版24、第71~72図、表8)

有文鉢2 A類 (1) 膨らんだ胴部から頸部を介して口縁部がそのまま短く上に立ち上がる鉢で、口縁端部内側に段状の凹みを有する。波頂部の外面側に縦方向の短沈線で刻み目が付されている。胴部には波頂部下を中心に2条単位の沈線で三角形の空間を作り、蕨状の文様が2段に描かれて、渦巻の中心に刺突点が付く。器面は内外面ともに二枚貝条痕で調整され、沈線はやや太めである。

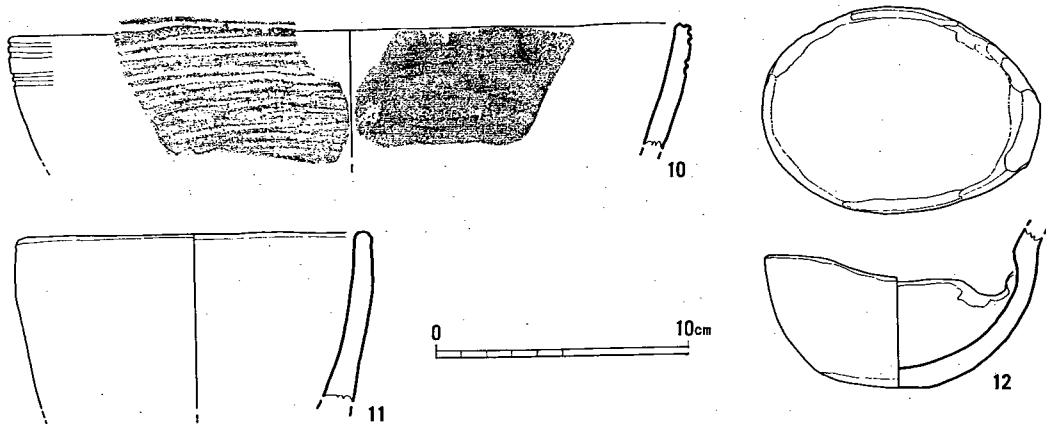
2は、二枚貝条痕で調整された器面に2条単位らしいやや太めの沈線文様が描かれるが、胴部上側を失う。

3・4は、やや細めの沈線で2条単位の1条加わる直線的な文様のみられる胴部破片である。北側上部から出土した。

有文鉢4 d類 (6) 口縁部が内彎気味に立ち上がる鉢の口縁部破片である。肥厚した口縁部外面に2条の細めの沈線が横走り、丸みをもつ口唇部との間に縦方向の短沈線が刻み目のよう



第71图 1号土坑出土土器实测图1 (1/3)



第72図 1号土坑出土土器実測図2 (1/3)

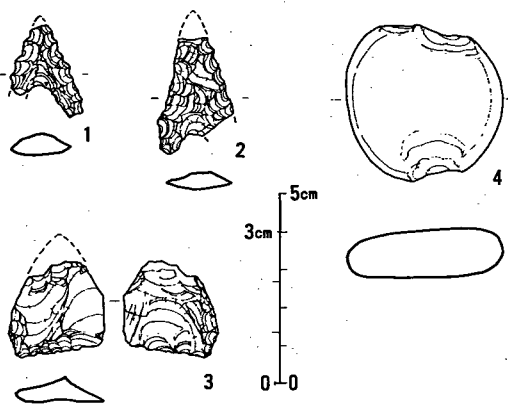
に並ぶ。北側上部で出土した。

有文鉢1dJ類(7) 膨らんだ胴部から頸部は緩やかに括れて口縁部が外反する鉢で、さほど肥厚しない口縁部外面での縄文施文幅は5cm以下で狭い。北側上部で出土した。

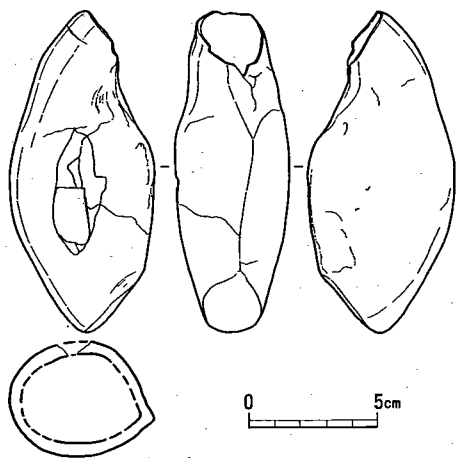
有文鉢9b類(10) 口縁部が底部から内彎して立ち上がる鉢で、口唇部上面に1条と、外面に2条単位で2段の沈線が巡る。外面には小巻貝条痕がみられ、内面は研磨ないし板ナデ調整されている。

無文鉢2c類(8) 南側部分から出土した。膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部がそのまま直立気味に立ち上がる鉢で、口縁端部は内面が僅かに凹み、口唇部は面取り気味に整えられている。

無文鉢8c類(11) 口縁部が底部から内彎気味に立ち上がる小形の鉢で、復原口径14.0cm、7.0cm程の残存高である。外面は条痕の残るナデ調



第73図 1号土坑出土石器実測図(2/3・1/2)



第74図 1号土坑出土土製品実測図(1/3)

整だが、内面は研磨されている。南側部分から出土した。

杓子形土器 (12) 土製品として区別すべきかもしれない。柄部と体部の一部を失うが、長さ10.8cm、幅8.2cm、深さ4.5cm程の大きさで、やや深い。柄部は幅3.0cm程で、45°前後の角度に付くが本来の長さはあまり長くないのかも知れない。南側部分から出土した。

底部 (5・9) 5は南側、9は北側で出土した。5は鉢の底部であろうが、内底面に小巻貝による研磨に近い調整痕がみられる。9は製塩土器の底部のように細く高めのもので、外底部は凹む。ナデ調整されるが、外面の一部に小巻貝の条痕がみられる。

石器 (図版24、第73図、表9)

打製石鏃 (1～3) いずれも姫島産黒曜石を用いている。1・2は全面に調整剝離の及ぶ凹基式の石鏃、3は不定形な剝片に若干調整剝離を加えたのみの平基式の石鏃である。

打欠石錘 (4) 安山岩の扁平な川原石の両端を打ち欠いて紐掛けにしたもので、26gの重量がある。

土製品 (図版24、第74図)

用途不明土製品 中央部西よりの肩部で、やや炭化物や焼土粒が多めに散乱する部分から出土した。長さ12.7cm、中程での幅5.8cm、厚み4.6cmの大きさのラグビーボールの形に似た形状の中空の土製品で、器壁は0.1～0.5cmと薄めである。一方の端部に直径2.5cm程の口縁が付き、他方の端部は2.5×3.5cm程の楕円形の平坦面をもつが、口縁と平坦面は平行せずむしろ延長線が直交する方向を向く。また口縁と平坦面との短い側縁は背縁の如くつまみ出されて尖っている。単なる容器とは考え難く、用途は不明だが、猪などの動物をモチーフにしたものであろうか。砂粒・角閃石・石英を含む胎土で、全体にナデで整形され、暗茶褐色に焼成されているが、二次的に火を受けた痕跡や顔料塗布の痕跡はみられない。

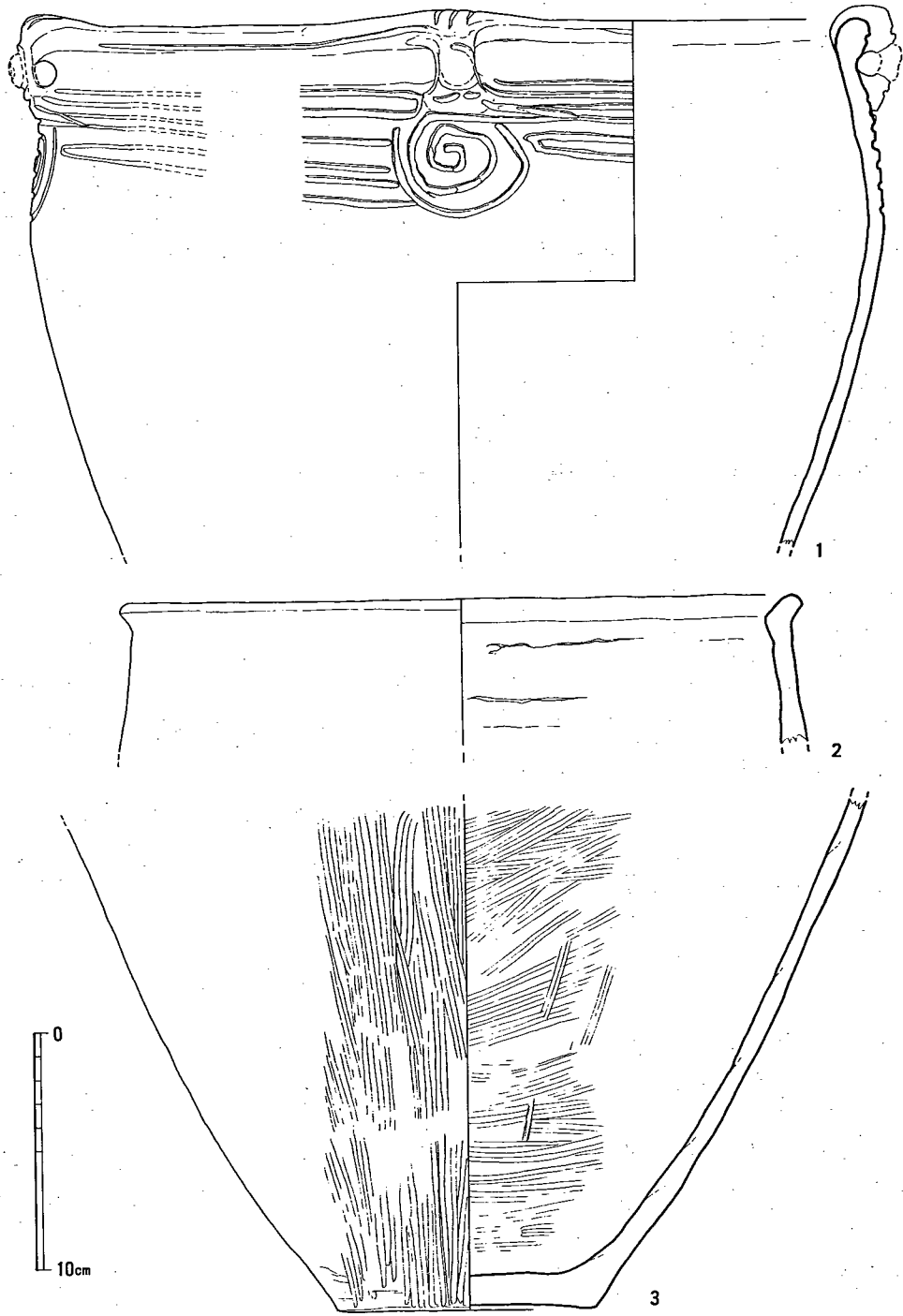
2号土坑 (上唐原遺跡Iの図版54-3、第132図)

2号縄文住居跡の約6m西側にあり、19号住居跡に南西側を切られる不整形の土坑である。「上唐原遺跡I」では、10号土坑として報告した。深さ0.15mの床面下にも、中凹みに茶褐色砂が堆積していて、上部の暗茶褐色砂の部分と同様に縄文土器片が出土している。

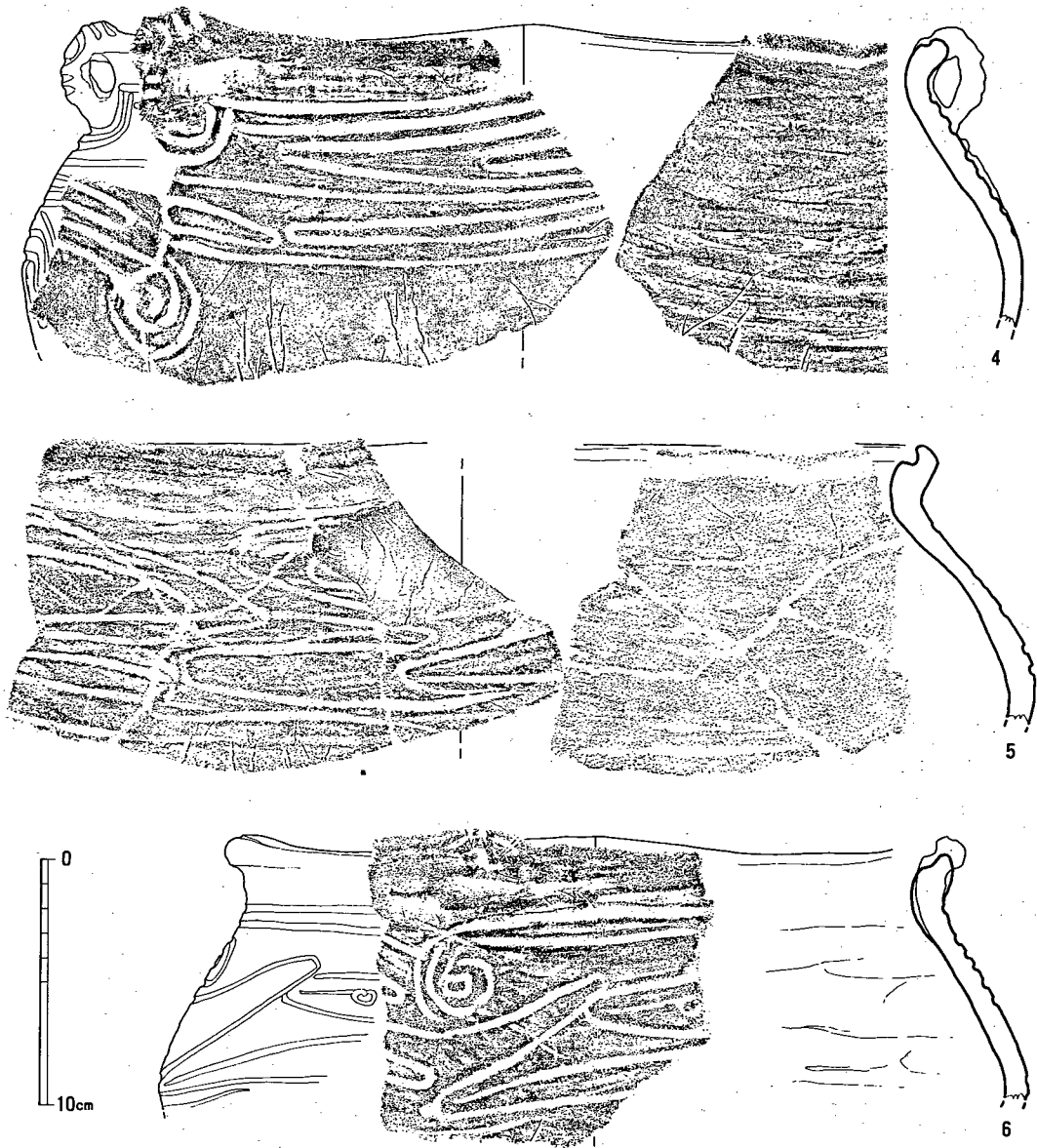
出土遺物

縄文土器 (図版25、第75～77図、表8)

有文鉢 1b類 (13) 膨らんだ胴部から頸部を介して、口縁部は緩やかに外反する鉢で、口唇



第75图 2号土坑出土土器实测图1 (1/3)



第76図 2号土坑出土土器実測図2 (1/3)

部上面に沈線が巡る。口頸部の文様は2条単位に1条加わった沈線が直線的に横走り、口縁部が波頂にならない部分の胴部で蛇行文様を描いていることが知れる。

有文鉢2a類(8) 膨らんだ胴部から頸部を介して、口縁部はそのまま直に立ち上がる鉢で口唇部上面に沈線が巡る。波頂部は外側に引き出したような形状で、直下には直線的な短沈線の文様が見られる。

有文鉢 2 d 類 (9) 膨らんだ胴部から頸部を介して、口縁部はそのまま直に立ち上がる鉢で、口唇部は丸くおさまる。頸部外面にコ字形に囲む文様・己字形の文様がみられる。

有文鉢 3 a 類 (4～6) 膨らんだ胴部から頸部を介して、口縁部は肥厚して短く外反する鉢で、口縁端部内面は段状に凹む。3点は文様構成で共通する部分が多い。波頂部下の胴部では、蕨状の渦巻文様が断線的に描かれて、外側に同心円のような弧線を伴いながら2条単位のような沈線が続き、折り返し文様をなす。

有文鉢 3 b 類 (7) 膨らんだ胴部から頸部を介して、口縁部は肥厚して短く外反する鉢で、口唇部上面に沈線が巡る。波頂部のすぐ脇の破片で、蕨状の渦巻文様が2段に配されて三角形の空間を作るが、沈線は2条単位に1条加わって描かれている。

有文鉢 3 d 類 (1) 膨らんだ胴部から頸部を介して、口縁部は肥厚して短く外反する鉢で、口唇部は丸くおさまる。口縁部外面に沈線が1条巡り、復原図には橋状把手が4ヶ所の配置で波頂部に付くように示しているが、一対2ヶ所の配置であろう。橋状把手の中央部分を失うが渦巻文様が描かれ、把手下の胴部にも渦巻文様が蕨手のように横走沈線と繋がっている。

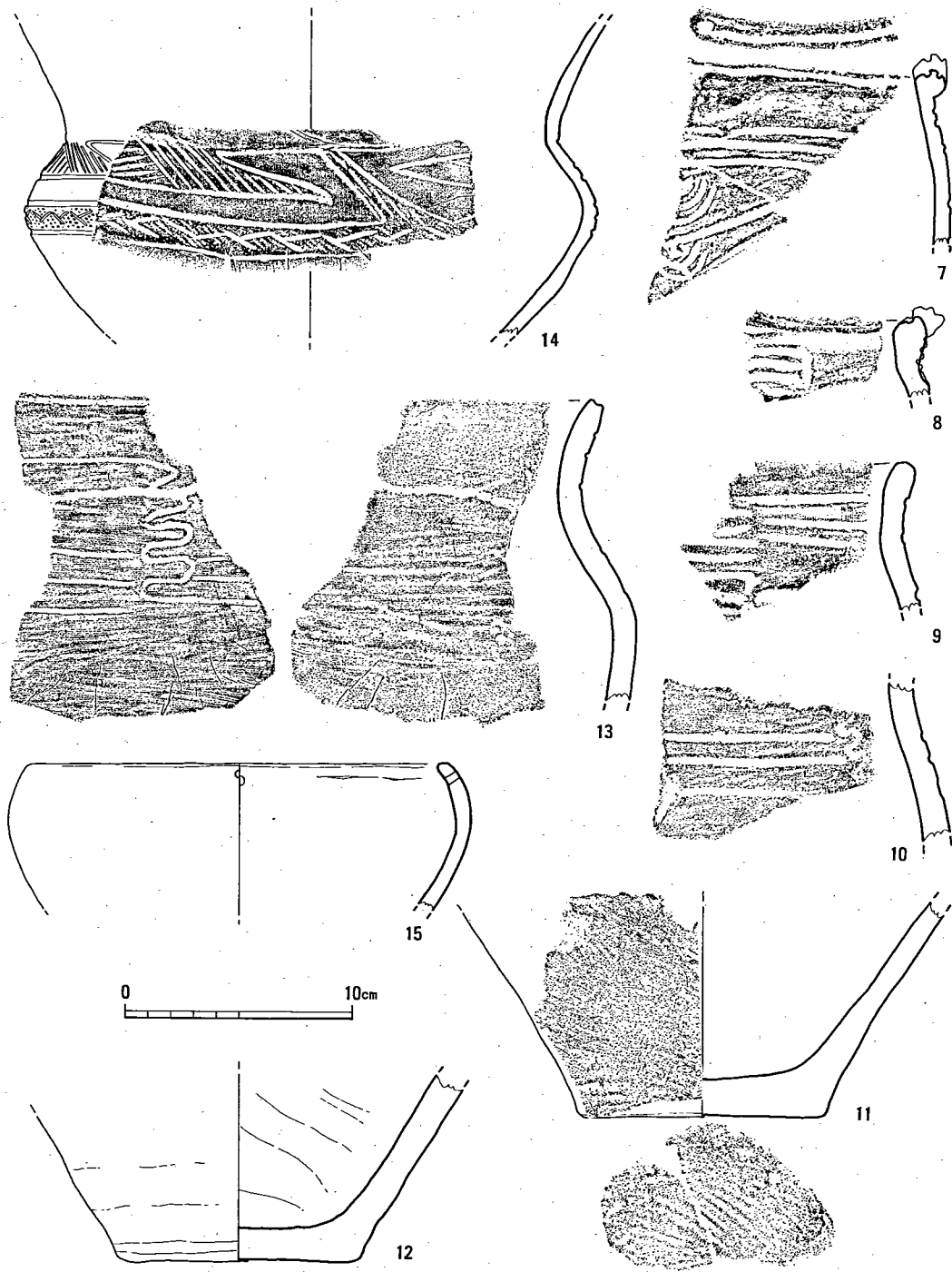
有文鉢 J 類 (14) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して、口縁部が外反する鉢で、口縁端部を欠く。胴部文様帯には磨消縄文手法をとるものの、文様はやや直線化していて、連続斜行の短沈線が区画内に充填され、疑似縄文的な手法もみられる。全体に丁寧な研磨調整が加えられ、器壁も薄めである。

無文鉢 3 c 類 (2) 膨らんだ胴部から頸部は括れて、口縁部が肥厚気味に短く外反する鉢で、口縁端部は面取されている。

無文鉢 9 d 類 (15) 口縁部が内彎して立ち上がる鉢で、内外面ともに研磨調整されて、口縁部直下に丸い小さな穿孔がある。

底部 (3・11・12) 3は深鉢形土器の底部で内外面ともに小巻貝の条痕で調整されるが、外面は研磨に半ば近い。11・12は鉢形土器の底部で、11では小巻貝条痕のあと一部ナデ調整が加わり、12では内外面ともにナデ調整されている。

不整形竪穴では、いわゆる鐘崎Ⅲ式に含まれる縄文土器が多く出土しているが、有文鉢 1 b 類の存在に若干新しい要素をみる。また有文鉢 14 類は晩期前半の滋賀里式系統の浅鉢にみる文様で、重複する後世の住居跡に混入したものかも知れないが、一部晩期までの生活の痕跡をみることができる。1号・2号土坑にはここまで下降する例はないが、1号土坑は1号住居跡に先行する可能性が高く、2号土坑は2号住居跡の時期に近いであろう。1号土坑の出土遺物では杓子形土器と用途不明土製品の存在も注目される。汁杓子は、粉食・団子の食物のみならず、身のある汁類(粥や雑炊など)の食物や酒類のような特殊な食物を想定させ、用途不明土製品は日常容器でなく特殊な用途に供せられたものであろう。



第77图 2号土坑出土土器实测图3 (1/3)

表 8 不整形竪穴・土坑出土土器観察表

	No.	文様の特徴と器面調整			胎 土					備 考 登録No.			
		外 面		色 調	内 面	分類	砂	角	雲		褐	英	
不 整	1	ナデ→沈線		赤褐色	ナデ	1 a	○	○				181	
	2	条痕→ナデ		暗茶褐色	条痕→ナデ	1 d	○	○		○			
	3	ナデ→沈線	蕨状	暗茶褐色	板ナデ	1 A	○	○		○	○	460	
	4	ナデ→沈線	渦巻	淡茶褐色	へ条痕→ナデ	1 a	○	○			○		
	5	ナデ→沈線	蛇行	茶褐色	板ナデ	1 a	○	○			○	441	
	6	ナデ→沈線		暗茶褐色	条痕→ナデ	3 b	○	○			○		
	7	へ条痕→研磨・ナデ		暗黄褐色	へ条痕	2 d	○	○		○		452	
	8	へ条痕		暗灰茶褐色	へ条痕	1 c	○	○	○			499	
	9	へ条痕・ナデ		淡茶褐色	へ条痕	1 d	○	○		○		169	
	10	へ条痕・ナデ		淡茶褐色	板ナデ	1 d	○	○			○	171	
	11	ア条痕→沈線		茶褐色	ア条痕	1 b	○		○	○	○		
	12	ア条痕→ナデ→刻み		茶褐色	ナデ	1 c	○	○			○		
	13	ナデ		暗茶褐色	ア条痕	底部	○	○		○	○	557	
	14	研磨		茶褐色	研磨	底部	○	○			○	615	
	15	ナデ		暗茶褐色	条痕→ナデ	2 d	○	○			○		
	16	へ条痕		淡茶褐色	へ条痕	12 d	○	○			○	484	
	17	ナデ→沈線		淡明褐色	へ条痕・ナデ	3 a	○	○	○		○	180	
	18	縄文→沈線→研磨		淡茶褐色	板ナデ	3 a J	○	○		○		176	
	19	研磨→沈線		暗黄褐色	研磨	9 b	○	○				418	
	20	へ条痕		暗茶褐色	へ条痕→ナデ	2 d	○	○			○	430	
	21	研磨→沈線		暗茶褐色	板ナデ	12 d	○	○				457	
	22	研磨→沈線	重弧	淡茶褐色	ナデ・研磨	注口	○	○			○	267	
	23	研磨→沈線		暗灰褐色	研磨	14	○	○				108	
1 土	1	ア条痕→沈線	蕨状	暗黄褐色	ア条痕	2 A	○	○		○		412	
	2	ア条痕→ナデ→沈線		明褐色	ア条痕	胴部	○	○		○		495	
	3	ナデ?→沈線		暗黄褐色	ア条痕→ナデ	胴部	○	○			○	659	
	4	ア条痕→ナデ→沈線	列点状垂線	暗黄褐色	ア条痕	胴部	○	○			○	658	
	5	ナデ?		褐色	研磨?	底部	○	○		○	○	636	
	6	ナデ→沈線	列点状垂線	暗茶褐色	ナデ	4 d	○	○				661	
	7	研磨・縄文		暗茶褐色	研磨	1 d J	○	○				174	
	8	へ条痕		茶褐色	へ条痕→ナデ	2 c	○	○			○	99	
	9	へ条痕・ナデ		暗灰茶褐色		底部	○	○			○	184	
	10	へ条痕→沈線		暗黄褐色	研磨?	9 b	○	○			○	97	
	11	条痕→ナデ		淡茶褐色	研磨	8 c	○	○		○	○		
	12	ナデ		淡茶褐色	ナデ	杓子	○	○	○	○	○		
	2 土	1	ナデ→沈線	蕨状・重弧	淡茶褐色	ナデ	3 d	○	○	○		○	434
		2	ナデ		暗茶褐色	ナデ	3 c	○	○	○			86
		3	へ条痕→研磨		暗黄褐色	へ条痕	底部	○	○				516
4		ナデ→沈線	蕨状・重弧	茶褐色	板ナデ	3 a	○	○	○			443	
5		ナデ→沈線		暗茶褐色	へ条痕→ナデ	3 a	○	○		○	○	426	
6		へ条痕→ナデ→沈線	蕨状・重弧	茶褐色	ナデ	3 a	○	○		○	○	88	
7		ナデ→沈線	蕨状・重弧	暗茶褐色	板ナデ	3 b	○	○			○	87	
8		ナデ→沈線		茶褐色	ナデ	2 a	○	○			○	204	
9		ナデ→沈線	鈎状蛇行?	茶褐色	ナデ	2 d	○	○		○		202	
10		ナデ→沈線	蛇行	淡茶褐色	へ条痕→ナデ	胴部	○	○			○	200	
11		ア条痕→ナデ		淡褐色	ア条痕→ナデ	底部	○	○		○	○	602	
12		ナデ		茶褐色	ナデ	底部	○	○	○			618	
13		へ条痕→ナデ→沈線	蛇行	茶褐色	条痕→ナデ	1 b	○	○				436	
14		研磨→縄文→沈線	連続斜行	淡茶褐色	研磨	J	○		○		○	85	
15		研磨		暗茶褐色	研磨	9 d	○	○			○	614	

表9. 不整形竪穴・土坑出土石器一覧表

(単位cm・g)

登録番号	出土位置	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
(H1)	不整形竪穴	フク土	完形	打製石斧	安山岩	15.3	9.1	2.1	284.4	第66図1
10	不整形竪穴	フク土	完形	打製石斧	安山岩	14.5	6.8	1.9	181.9	2
24	不整形竪穴	フク土	完形	打製石斧	安山岩	15.5	6.7	2.0	230.2	3
9	不整形竪穴	フク土	完形	打製石斧	安山岩	16.2	5.6	2.0	234.5	4
8	不整形竪穴	フク土	完形	打製石斧	安山岩	17.9	7.1	2.7	483.8	5
34	不整形竪穴	フク土	刃部片	打製石斧	緑泥片岩	11.6	5.5	1.7	179.9	6
188	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	4.4	3.7	0.6	17.8	第67図7
189	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	凝灰安山岩	5.2	3.7	1.2	24.1	8
(012)	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	4.1	3.5	1.8	33.6	9
187	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	砂岩	4.9	3.8	1.5	36.5	10
	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	4.1	4.3	1.9	36.1	11
(08)	不整形竪穴	フク土	一部欠	打欠石錐	安山岩	5.3	3.9	1.5	41.1	12
191	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	5.2	4.7	1.5	45.5	13
	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	4.8	4.5	1.1	43.8	14
186	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	凝灰安山岩	5.3	5.4	1.4	46.8	15
185	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	4.5	4.7	2.1	42.0	16
(09)	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	4.8	3.9	2.3	53.0	17
(06)	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	砂岩	4.3	4.6	2.1	55.4	18
183	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	5.7	5.3	1.7	58.4	19
(01)	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	6.2	4.7	1.4	63.5	20
(02)	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	6.5	5.2	1.6	82.8	21
170	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	5.1	5.4	2.2	84.9	22
(03)	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	6.4	5.6	1.9	82.1	23
(04)	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	5.9	6.2	2.0	111.3	24
(07)	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	5.9	5.0	2.5	107.6	25
(05)	不整形竪穴	フク土	完形	打欠石錐	砂岩	5.7	4.2	2.1	65.4	26
133	不整形竪穴	フク土	完形?	磨製石斧	蛇紋岩	9.2	3.5	1.5	58.9	27
128	不整形竪穴	フク土	一部欠	磨製石斧	蛇紋岩	8.2	4.6	2.2	124.8	28
50	不整形竪穴	フク土	完形	敲石	安山岩	11.5	6.7	3.3	240.8	29
	不整形竪穴	フク土	完形	打製石鏃	黒色黒曜石	2.2	1.8	0.6	1.9	第68図30
(A1)	不整形竪穴	フク土	先端欠	打製石鏃	黒色黒曜石	1.5	1.5	0.3	0.7	31
38	不整形竪穴	フク土	基部片	打製石斧	安山岩	7.7	6.7	1.8	130.1	不掲載
599	不整形竪穴	フク土	完形	端部磨耗	安山岩	8.9	3.9	1.1	34.1	不掲載
612	不整形竪穴	フク土	完形?	使用痕剥片	姫島黒曜石	4.0	3.1	1.3	11.3	不掲載
	土坑1	フク土	端部欠	打製石鏃	姫島黒曜石	1.8	1.4	0.4	0.5	第73図1
	土坑1	フク土	端部欠	打製石鏃	姫島黒曜石	2.3	1.6	0.4	0.8	2
	土坑1	フク土	先端欠	打製石鏃	姫島黒曜石	1.9	1.9	0.5	1.6	3
	土坑1	フク土	完形	打欠石錐	安山岩	4.1	4.1	1.3	26.1	4

表10. 不整形竪穴出土土器片円盤一覧表

(単位cm・g)

登録番号	出土位置	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
269	不整形竪穴	フク土	完形	A-1	ナデ	4.8	4.5	1.0	28.2	第69図1
263	不整形竪穴	フク土	完形	B-2	ナデ	4.7	3.9	1.0	26.8	2
272	不整形竪穴	フク土	完形	B-2	条痕	4.8	4.7	1.0	24.4	3
336	不整形竪穴	フク土	完形	B-2	ナデ	4.1	4.0	1.0	22.5	4
265	不整形竪穴	フク土	完形	A-1	ナデ	4.2	3.9	1.0	21.5	5
257	不整形竪穴	フク土	一部欠	A-2	条痕	(3.2)	4.6	1.1	19.7	6
321	不整形竪穴	フク土	完形	B-2	ナデ	4.3	3.8	0.9	18.7	7
338	不整形竪穴	フク土	完形	B-2	ナデ	4.4	4.1	0.7	18.7	8
337	不整形竪穴	フク土	完形	B-2	ナデ	4.4	3.9	0.7	17.1	9
262	不整形竪穴	フク土	完形	B-2	ナデ	3.5	3.2	1.2	16.5	10
254	不整形竪穴	フク土	完形	A-1	ナデ	4.0	3.8	0.8	15.7	11
339	不整形竪穴	フク土	完形	B-2	ナデ	3.9	3.6	0.8	13.5	12

4. 包含層出土の遺物 (図版25~35)

縄文土器 (図版25~28、第78~90、表11)

I 20区付近包含層の土器 (第78~81図)

遺構として把握できなかったが、縄文土器がやや集中して出土している。これらの土器の分類は縄文1号住居跡の項で前述した分類基準で分類した。

有文鉢1b類 (5) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が外反する鉢である。口唇部上面に沈線が1条巡り、波頂部は外側に引き出したような形状に拡張されるが、波頂部内外に刻み目が付されている。胴肩部には重弧の渦巻文と横走る平行沈線が描かれている。

有文鉢1d類 (1) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が外反する鉢である。波状になる口縁の端部は丸い。波頂部には刻み目が付され、胴肩部には折り返しの沈線文様が描かれているが、波頂部の下にあたる部分は短い折り返しで蛇行文に似た文様になっている。

有文鉢2b類 (3) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が直に立ち上がる鉢で、口唇部上面に沈線が巡る。橋状把手の裾を弧線が囲み、巴文のような蕨状文と横走る平行沈線がみられる。

有文鉢2d類 (34) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が直に立ち上がる鉢で、口唇部は丸みをもつ。内外面ともに条痕のあとナデ調整されるが、内面にはアナグラ属貝殻腹縁による条痕の跡が残る。

有文鉢3a類 (4・9~11) 口縁部が頸部から肥厚気味に短く外反する鉢である。4は復原口径22.2cmの大きさ。口唇部内面に段をもち、波頂部は外側に引き出したように拡張され沈線が刻まれる。胴部には重弧の半円にステッキ状文が組み合わさった渦巻文と稲妻状折り返しの沈線が繋がった文様が描かれている。9・11は口唇部上面と外面に沈線が各1条と胴部に平行沈線が横走る。11では端が刺突点になる沈線が用いられている。また10は口縁端部内面に沈線が巡り、斜方向の平行沈線で作る三角形の空間に、渦巻文と削ったような点がみられる。

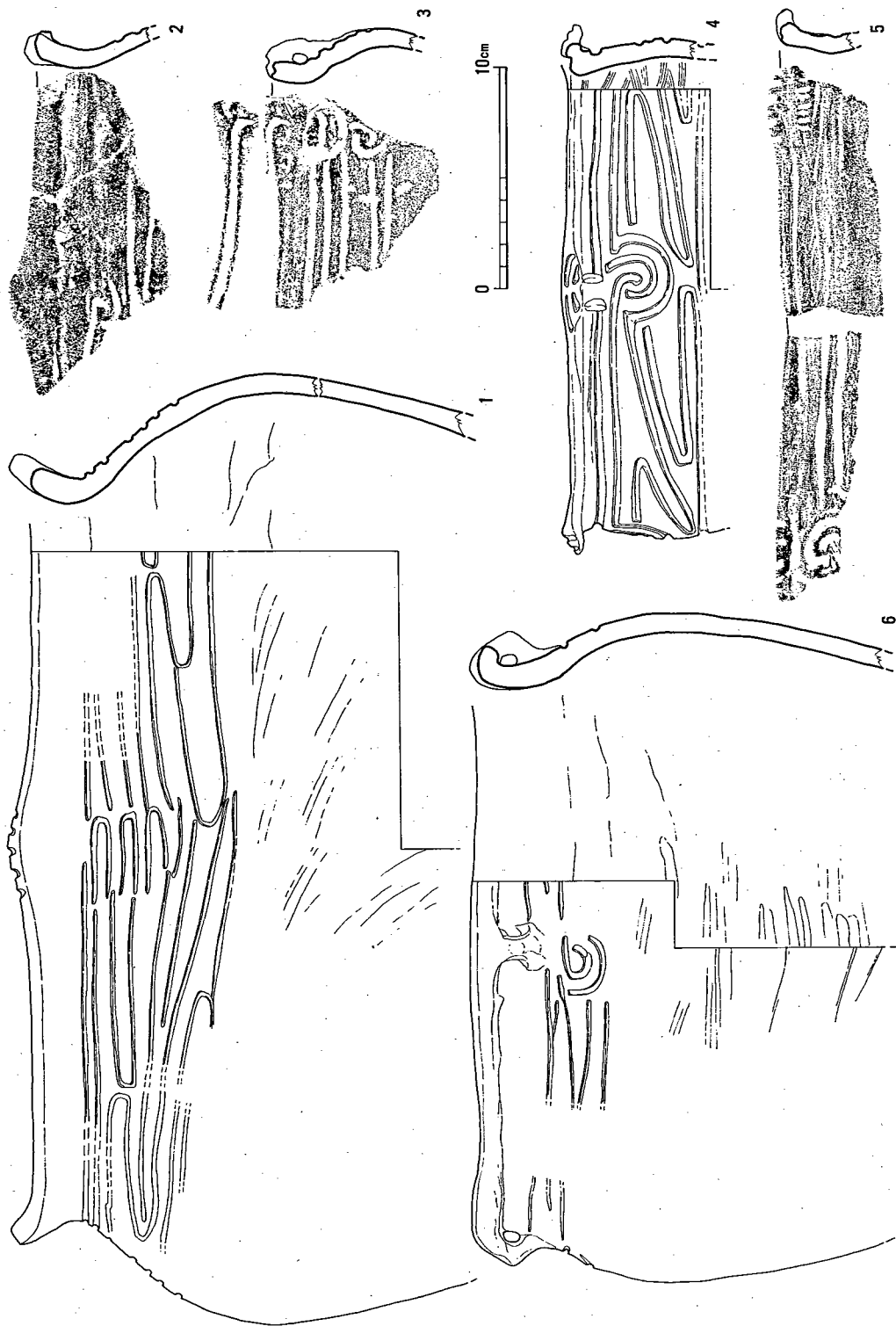
有文鉢3d類 (2・6) 1・5と同様に口縁部が外反する鉢で、口縁端部が強く反る。6は文様が施されない橋状把手が付き、把手の下に重弧の蕨状文様が描かれ、横走る沈線が続く。

有文鉢5c類 (15) 口縁部が頸部から緩やかに外反するが屈曲して内傾する器形の鉢で、波状口縁になる。口縁部には幅広く縄文が施文され、点と引っかいたような線が僅かにみられる。

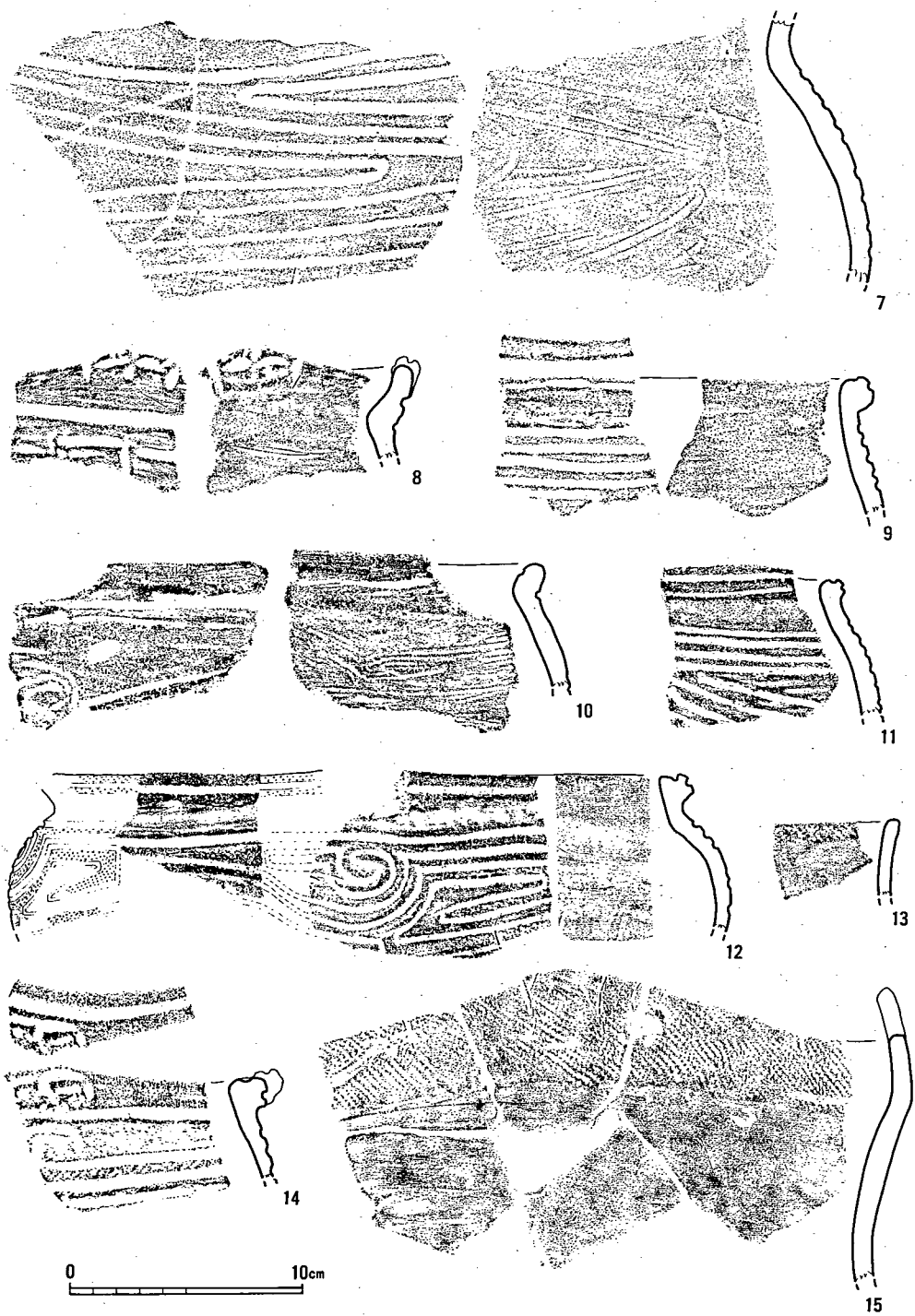
有文鉢5d類 (8) 括れた頸部から外反した口縁部が端部で内彎する鉢である。波頂部に短沈線で刻んだ文様、胴部に四角っぽい文様が描かれている。

有文鉢1cJ類 (14) 口縁部が緩やかに外反し、口唇部は面取りされる。口縁端の外面に縄文が施文されるものの幅は狭い。

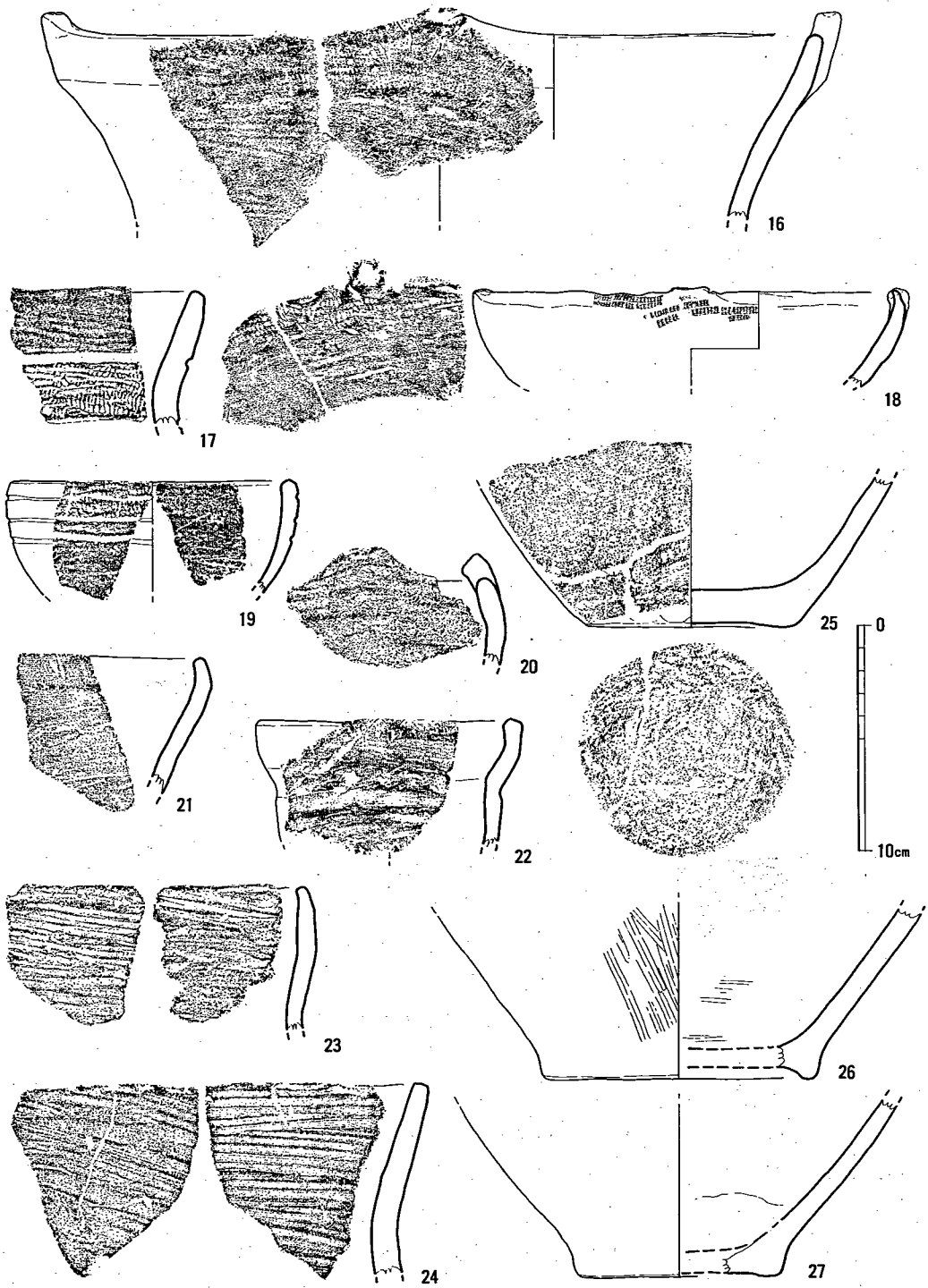
有文鉢1cG類 (17) 口縁部が緩やかに外反し、沈線で区画された部分にヘナタリ疑似縄文が



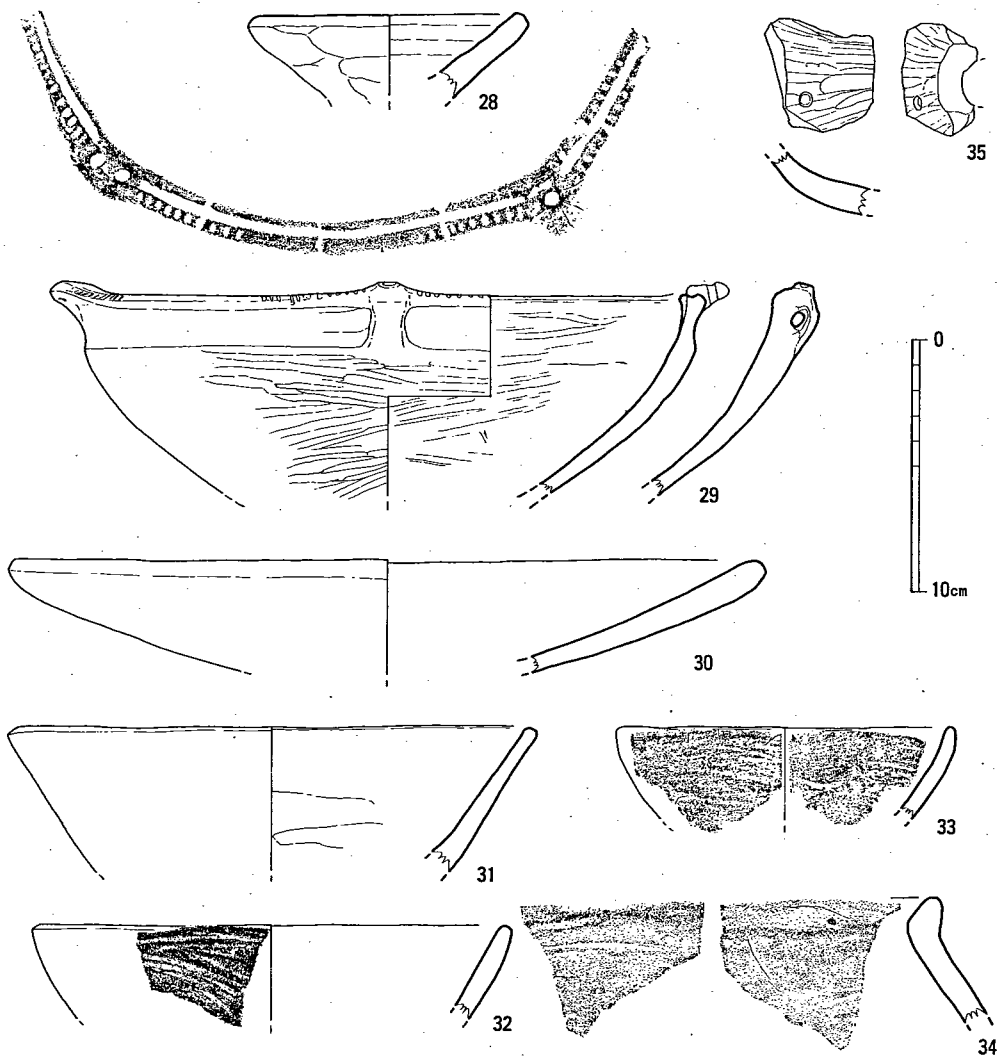
第78图 包含层出土器美测图 1 (1/3)



第79图 包含層出土土器実測图2 (1/3)



第80图 包含層出土土器実測図3 (1/3)

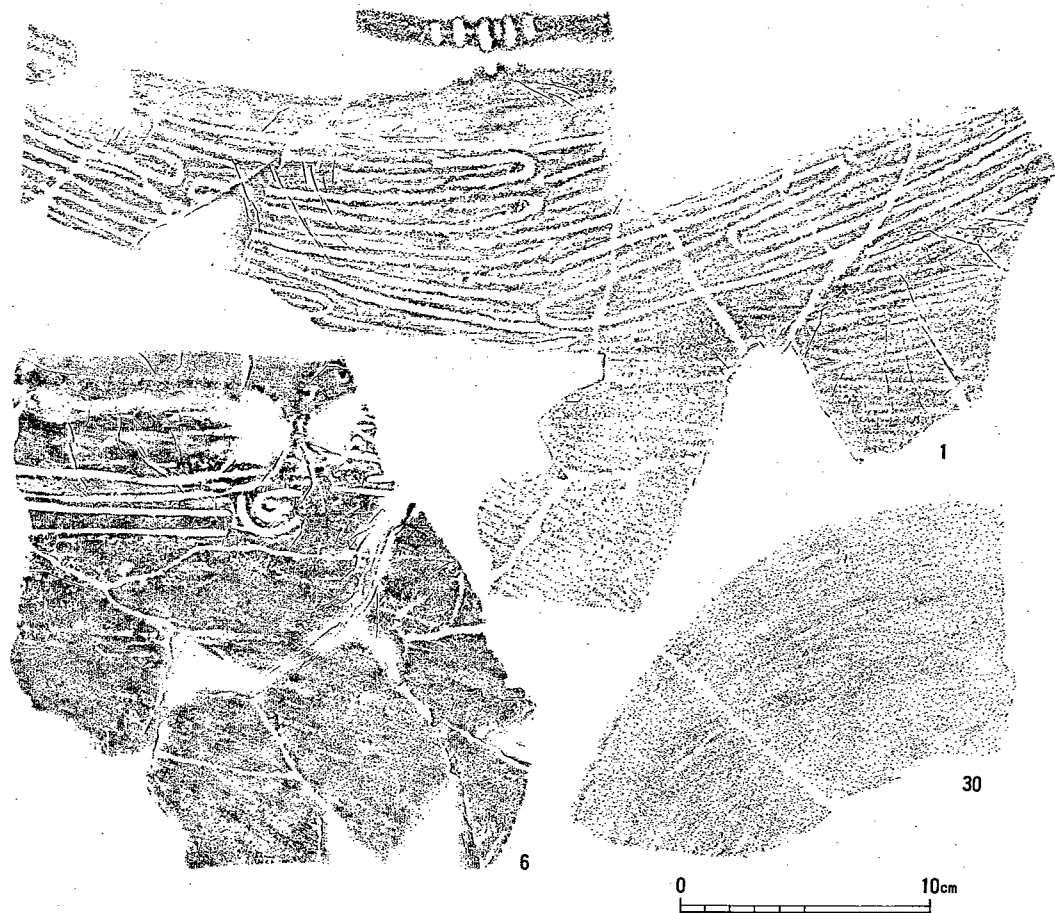


第81図 包含層出土土器実測図4 (1/3)

充填施文されている。

有文鉢 3 aJ類 (12・13) 口縁部が頸部から肥厚気味に短く外反する鉢で、口唇部上面の内側に段がある。文様は磨消縄文手法をとり、12では重弧のJ字状文と鈎状文を中心とした文様が描かれ、13にはJ字文がみられる。12は復原口径28.0cmの大きさだが、外面に赤色顔料を塗布した痕跡があり、波頂部付近の口唇上の段の内側に刻み目が付されている。

有文鉢 4 cG類 (16) 口縁部が頸部から緩やかに外反するが端部付近で屈曲する器形の鉢で、波状口縁になる。口縁部には幅広くへナタリ疑似縄文が施文され、波頂の上面に凹点が付され



第82図 包含層出土土器拓影 (1/3)

ている。

有文鉢11dG類 (18) 復原口径19.0cm弱の大きさの、口縁部が内彎する椀形の浅い鉢である。口縁端部はつまんだように薄く尖り、口縁部外面にへナタリ疑似縄文が施文されている。また波頂部に相当する部分は肥厚して上面に凹点が付されている。

有文鉢9cG類 (19) 口径が器高の2倍程度になる椀形の鉢で、復原口径13.0cmの大きさ。口縁部に沿った3条の平行沈線が巡り、沈線を跨いでへナタリ疑似縄文が充填施文されている。

無文鉢1c類 (24) 口縁部が緩やかに外反する鉢の口縁部で、口唇部は平らに面取りされている。内外面ともにへナタリなどの条痕で調整されている。

無文鉢5d類 (20~23) 口縁部が内彎あるいは内傾する鉢の口縁部で、内外面ともに条痕調整や条痕の後にナデ調整されるが文様はみられない。20は波頂部上面が押さえられて平らな面をもつ。22は復原口径12.0cm弱の大きさで小形の深鉢であろう。23はへナタリなどの小巻貝の

条痕で調整されている。

無文鉢11d類 (31~33) 31は口縁部が直線的に開く椀形の鉢で、ナデと研磨で調整されている。32はやや内彎気味に立ち上がる椀形の鉢で、内外面ともにヘナタリ条痕の後にナデ調整が加わっている。

無文鉢12d類 (28・30) 口縁部が底部から直線的に開く、皿に似た浅い鉢で、28は復原口径11.0cmの大きさ。30は復原口径30.0cmの大きさと、内面は器面が風化して不明だが、外面は条痕の後に研磨された痕跡が残る。

無文鉢13b類 (29) 底部を欠くが、復原口径25.0cm、残存器高8.2cmの大きさの浅い鉢で、内外面ともに研磨調整されている。一對2ヶ所の波頂部に橋状把手があり、頂部に刺突点が付けられているが、もう一對の波頂部は外側に拡張されて、丸穴が2つ穿孔されている。口頸部は狭く、外反する口縁部は端部が肥厚して上面に沈線が巡り、波頂部付近の外側には刻み目が付されている。

注口土器 (35) 注口部破片で、外面は研磨調整され、丸棒状の刺突点がみられる。

底部 (25~27) 25・27は僅かに上げ底になる底部で、内外面ともにナデ調整されている。26は上げ底の底部で、胴部外面はヘナタリ条痕、内面はナデ調整されている。

上部包含層の土器 (第82~89図)

茶褐色砂層・暗茶褐色砂層や縄文時代の遺構以外から出土した土器である。

有文鉢1D類 (36) 膨らんだ胴部から頸部を介して口縁部が緩やかに外反する鉢で、やや太めの沈線で施文される。口縁部端は面取りされ、波頂部下には縦方向の短沈線がみられる。

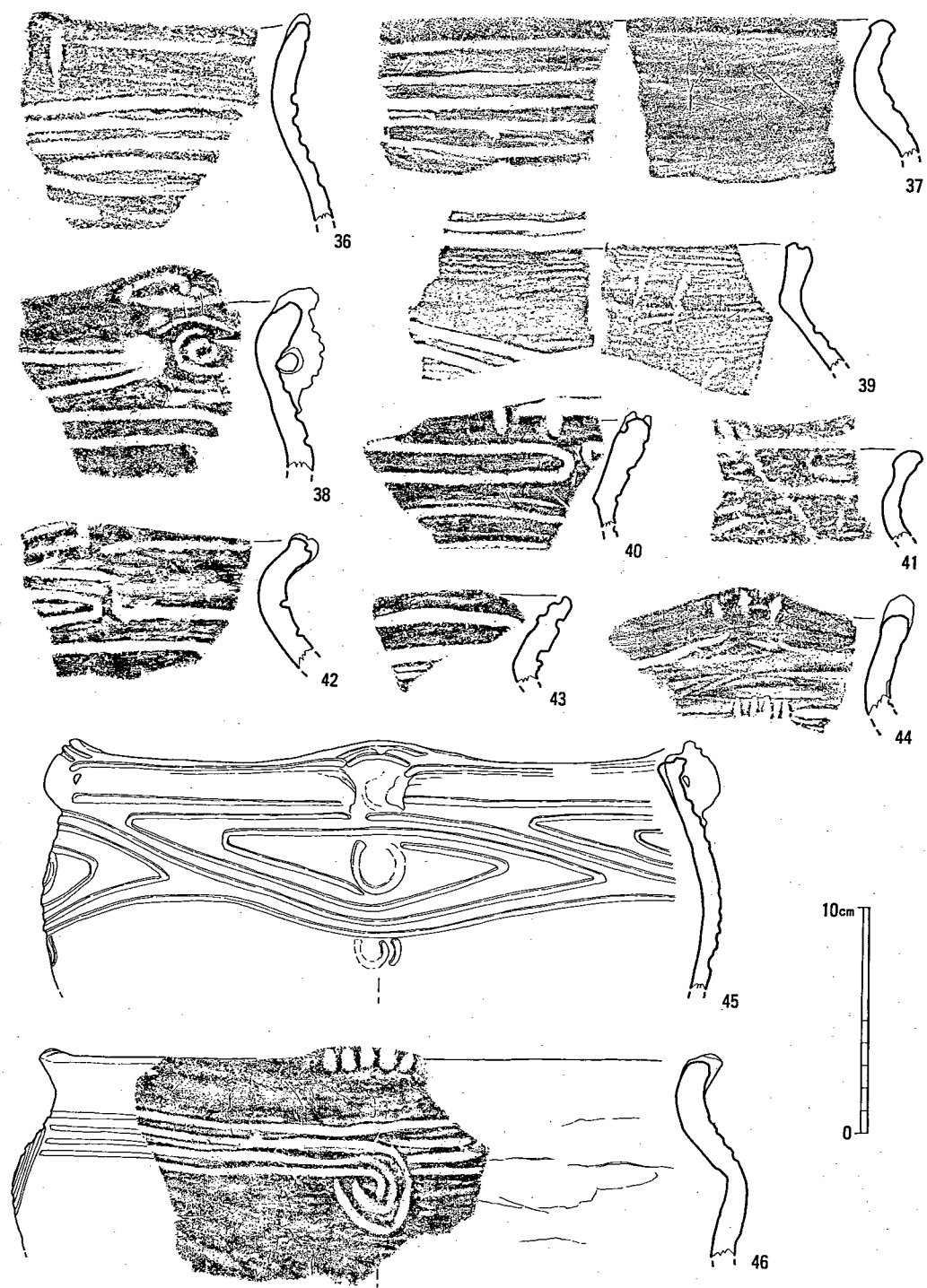
有文鉢1a類 (37・38・40~44) 膨らんだ胴部から頸部を介して口縁部が緩やかに外反する鉢で、口唇部内面に段を有するもの。沈線で描かれた文様がある。38は橋状把手に渦卷文、把手の下に蕨状文らしい文様が平行沈線に続いて描かれている。40・41・43は蛇行文あるいは折り返しの沈線文が、42は鈎形文が描かれている。44は波頂に刻み目があり、頸部に縦方向の刻み目の可能性のある短沈線がみられる。

有文鉢1d類 (70) 外面に格子模様が描かれる波頂部片で、頂部に上側からの凹点が付される。

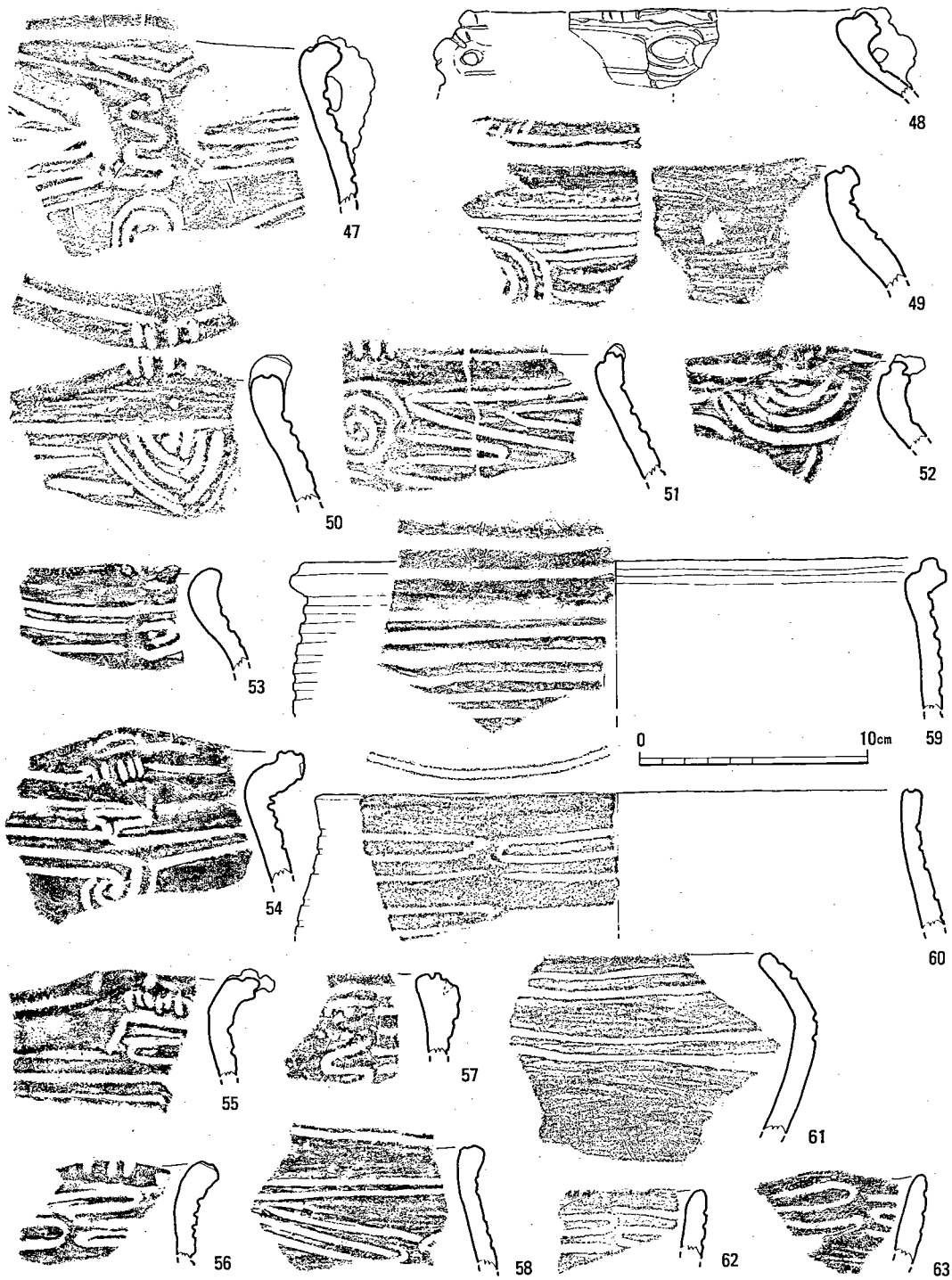
有文鉢2a類 (52) 胴部から括れた頸部を介して口縁部は上側に立ち上がるが、波頂部は外面に引き出したように拡張される。重弧半円文が波頂部下に描かれている。

有文鉢2b類 (39・56・58・60) 口縁部が直に立ち上がる鉢で、口唇部上面に沈線が巡る。胴部の文様は平行沈線で描かれ、折り返し文や蛇行文が用いられている。56では波頂部下に蛇行文が描かれる。60は復原口径27.0cmの大きさと、文様は横長の蛇行文が連結されている。

有文鉢2d類 (46) 膨らんだ胴部から頸部を介して口縁部が緩やかに外反する鉢で、口唇部が



第83图 包含层出土土器实测图5 (1/3)



第84图. 包含層出土土器実測图 6 (1/3)

丸くおさまるもの。胴部の文様は沈線で描かれている。波頂部には刻み目があり、重弧の蕨状文とそれに続いて横走する平行沈線が胴肩部にみられる。復原口径29.0cmの大きさ。

有文鉢 3 a類 (45・47・48・54・55・64～68) 膨らんだ胴部から頸部に括れるが、口縁部が肥厚して短く外反する鉢で、口唇部内面に凹みがある。文様は沈線で描かれるが、縄文・疑似縄文は使用されない。45は復原口径27.0cm、胴最大径30.0cmの大きさで、波頂部に橋状把手が付く。把手と把手下の渦巻状の文様は欠損して分からないが、渦巻文を中心に菱形の渦巻が左右に展開して繋がる文様が描かれている。47は口縁部外面の沈線が橋状把手の蛇行文に続き、蛇行文の下に渦巻文、把手裾から左右に折り返しの沈線が横に延びて、三角形の空間を作っている。波頂部が外側に引き出したように拡張される54・55は、胴部文様は波頂部下に鈎形と蕨手文が、横走する平行沈線を挟んで上下に配されている。

64～68は小形でやや浅めの鉢であろう。64・65は口縁部外面に沈線が1条巡り、波頂部に渦巻文と胴部に蕨状文が描かれる。66は波頂部に鈎文がみられ、68の内面の段には刻み目が付されている。

有文鉢 3 b類 (49～51・69) 膨らんだ胴部から頸部に括れるが、口縁部が肥厚して短く外反する鉢で、口唇部上面に沈線が巡る。50・51は波頂部に刻み目があり、波頂下の胴肩部に付けた刺突点を中心に重弧線や渦巻文を描き、左右には折り返し文などを配している。

有文鉢 3 d類 (53) 膨らんだ胴部から口縁部が肥厚して短く外反する鉢で、口唇部は丸くおさまる。文様は沈線で描かれるが、縄文・疑似縄文は使用されない。胴部に刺突点を囲む重弧文と平行沈線がみられる。

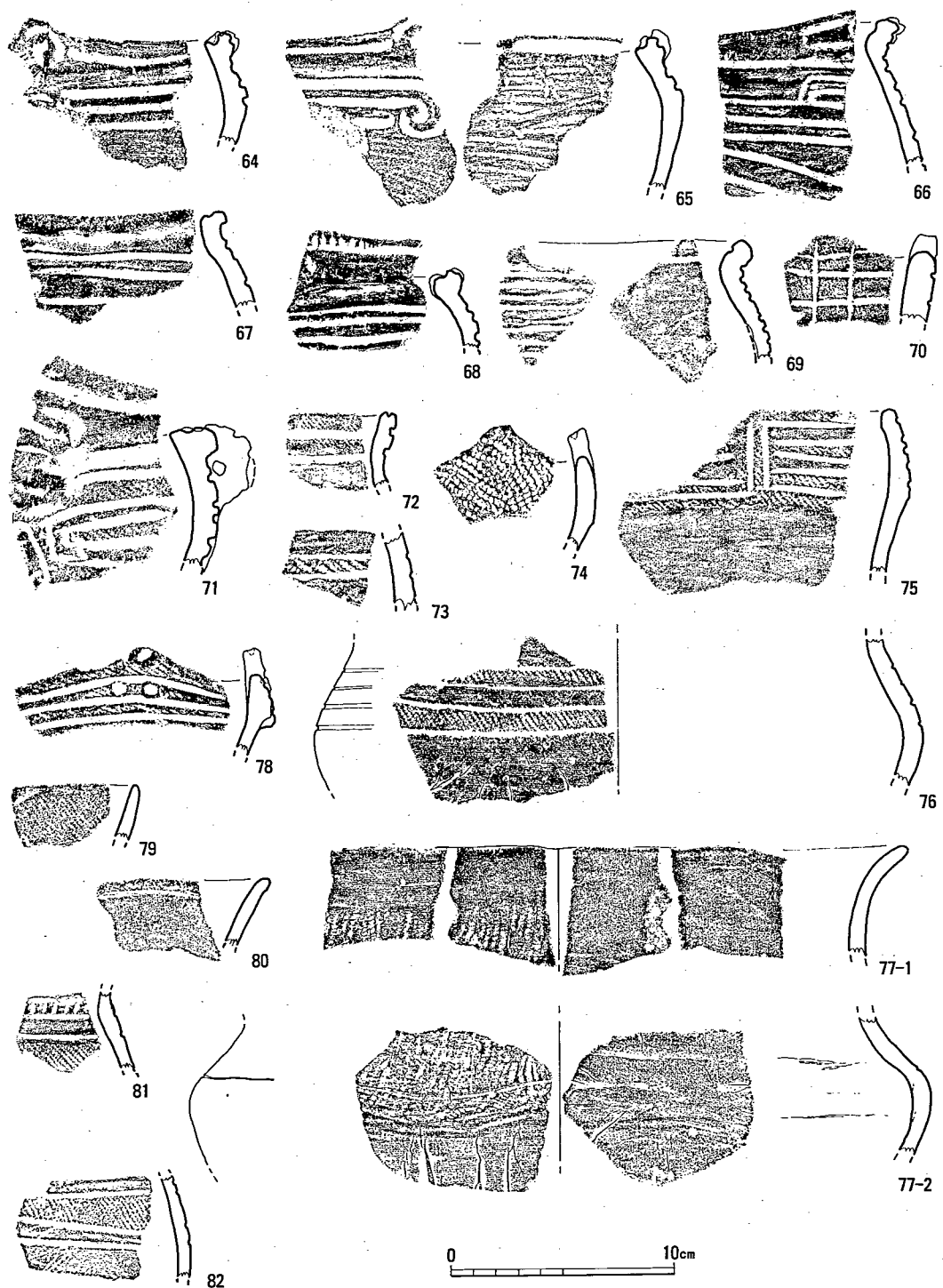
有文鉢 5 d類 (57・59・61) 口縁部が直線的に立ち上がるものの内彎する鉢で、口唇部は丸くおさまる。沈線で文様が描かれている。57は瘤状に肥厚する波頂部片で、刺突点を伴ったS字状蛇行文があり、脇には平行沈線が伸びる。61はかなり内側に傾くが、口縁に沿って2段に平行沈線が巡る。

有文鉢 6 c類 (126・127) 頸部から外反して開いた口縁部が端部で屈折して内傾する鉢で、器面は研磨調整されている。口縁部文様帯には沈線が巡る。後期末ないし晩期初頭頃の所産である可能性が高い。

有文鉢 8 a類 (109) 口縁部が直線的に開く鉢で、口唇部が面取りされる。波頂部下にS字状蛇行文が配されて、左右に折り返す沈線が口縁部を巡る文様が描かれている。内外面ともに研磨調整されて、復原口径25.5cm程で、器高は12.0cm前後であろう。

有文鉢 8 d類 (119・120) 口縁部が直線的に開く鉢で、口唇部は丸くおさまるが、沈線で文様が描かれるもの。119は口縁部に沿って平行沈線が多条に巡るが、120は2条の沈線で巡り重弧の半円文が下側に付いている。120は研磨調整されて、復原口径22.0cmの大きさ。

有文鉢 9 d類 (62・63・110) 口縁部が内彎する鉢で、口唇部は丸みをもつ。62・63は小形の



第85图 包含層出土土器実測图 7 (1/3)

鉢であろうか。S字状蛇行文が横に並ぶ文様がみられる。110は波状口縁で、波頂部に穿孔された丸穴を軸にした渦文があり、その下に重弧の蕨状文が2段に配されて、平行沈線が横に伸びる。内面に縦方向の研磨痕がみられ、復原口径26.0cm程の大きさのボウル状になる可能性がある。

有文鉢13c類 (128) 底部から直線的に開いた体部から口縁部が屈曲して上側に立ち上がる器形の鉢で、器面は板ナデ・研磨調整されている。口縁部文様帯には凹線が巡る。後期末の三万田式系の鉢であろう。

有文鉢14c類 (129・130) 黒色研磨の浅鉢形土器である。129は外反して開く波状口縁だが、口縁部内面に段があり、外面に沈線が数条巡る。130は算盤玉のように屈曲する胴部片だが、胴部が誇張気味に膨れるタイプの浅鉢であろう。晩期前葉の所産と考えられる。

有文鉢15d (131) く字形に屈曲する体部の深鉢の口縁部破片であろう。彎曲しながら立ち上がる口縁部の直下に、指頭で刻んだ刻み目突帯が貼り付けられ、胴部屈曲部には突帯の剝落したような痕跡がみられる。内外面ともに板状原体でナデたような調整痕がみられる。晩期後葉の所産と考えられる。

有文脚台付鉢 (125) 台付きの角形鉢であろう。体部は直線的に開き、幅広で肉厚の口縁部が屈折して内傾するが、外面にS字形蛇行文と垂線・横走する平行沈線がみられる。

有文鉢1dJ類 (80) 口縁部が緩やかに外反して開く鉢で、口縁端部は殆ど肥厚しない。口縁部に巡る1条の浅い沈線より端部側に縄文が施文されている。

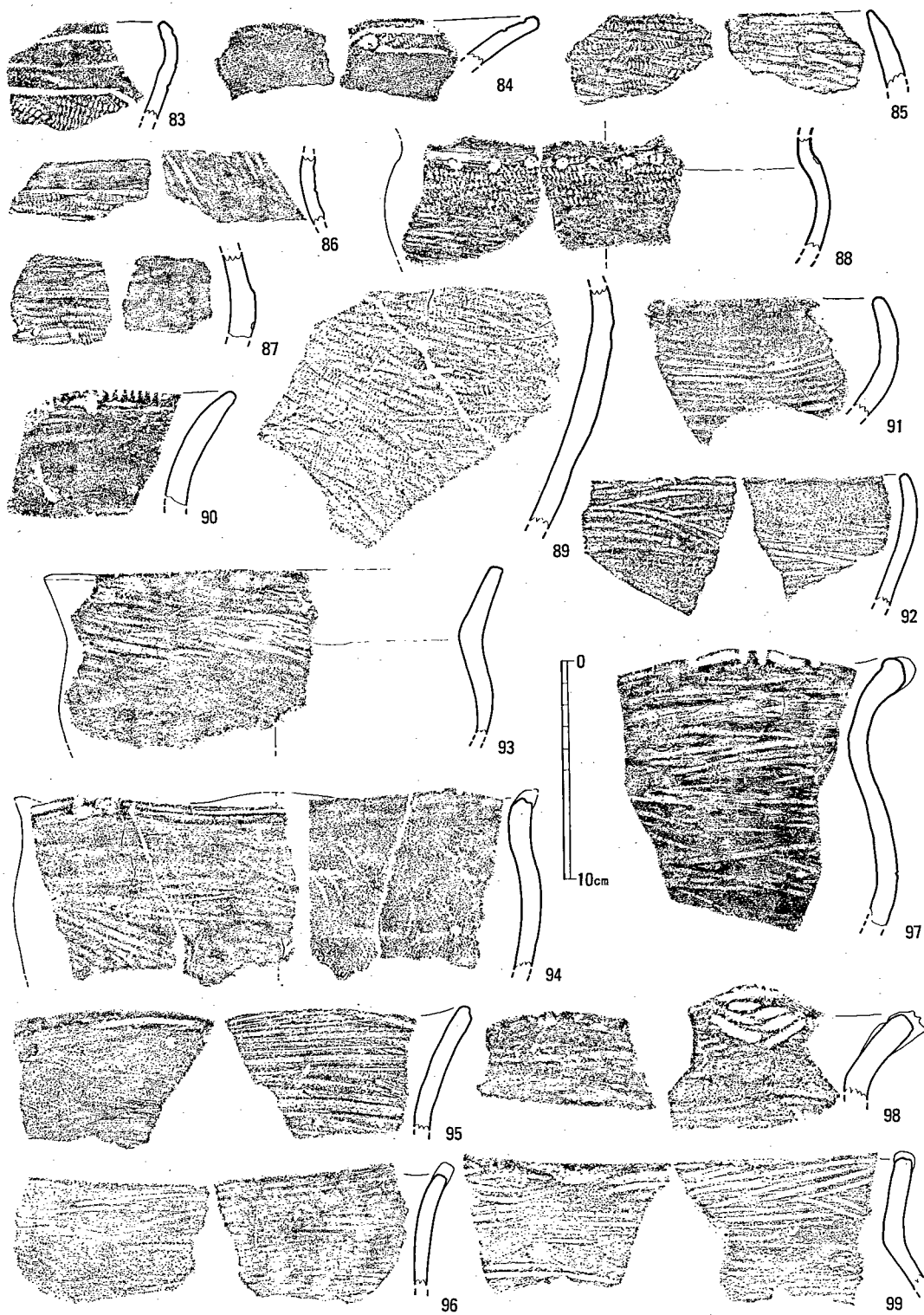
有文鉢1dG類 (77・90) 口縁部が緩やかに外反して開く鉢で、口縁端部は殆ど肥厚せず、胴部は膨らむ。沈線と縄文あるいは疑似縄文で施文されている。77は口縁部と胴部がうまく接合しないが、復原口径31.5cm程の大きさであろう。胴肩部に巡る1条の沈線を境に、頸部側は縦方向、胴最大径側は横方向にへナタリ疑似縄文が施文されている。90は口縁端部に刻み目のようにへナタリ疑似縄文が施文されている。

有文鉢3aJ類 (71・73) 膨らんだ胴部から頸部が括れ、口縁部は肥厚して短く外反する器形の鉢。口唇部上に段があり、外面の文様は磨消縄文の手法で描かれている。71は橋状把手が小振り、浅めの鉢かも知れない。

有文鉢4bJ類 (72) 口縁部が緩やかに外反して、口縁部文様帯は肥厚して縄文RLが施文される縁帯文土器の類である。口縁部上面と外面に沈線が巡り、頸部は研磨調整されている。

有文鉢5bJ類 (74) 口縁部が外反する頸部側から屈曲して内彎する口縁部片で、波頂には刺突点が付されている。口縁部文様帯には縄文RLが幅広く施文されている。

有文鉢5dJ類 (75・76) 同一個体の可能性もある。70は緩やかに外反する頸部から屈曲して口縁部が内彎する。幅広の口縁部文様帯には縄文RLが施文され垂線と横走する平行沈線で区画された文様で交互に沈線間を研磨で磨消している。76は胴部上側を平行沈線が巡り、沈線間



第86图 包含層出土土器实测图8 (1/3)

が磨消される。復原胴最大径27.0cmの大きさである。

有文鉢 6 cG類 (85~89) 膨らんだ胴部と、括れて外反する頸部から屈曲して口縁部が内傾する鉢で、口唇部は丸くおさまる。口縁部と胴部に分かれるが、幅広くヘナタリ疑似縄文が施文された文様帯がみられる。胴部文様帯と研磨調整される頸部との境に沈線が巡る例(86)と刺突列点が施される例(87・88)がある。

有文鉢 6 dJ類 (78・81・82) 膨らんだ胴部をもち、緩やかに外反する頸部から屈折して、肥厚気味に口縁部が内傾する。口縁部文様帯と胴部文様帯は平行沈線を用いた磨消縄文がみられ、刺突点や、刺突列点も用いられている。78は波状口縁の口縁部破片で、波頂部に上側から刺突点が入つと、外面の沈線間に刺突点が入つ並ぶ。81では胴部と頸部の境に刺突列点がある。

有文鉢 9 dJ類 (79) 直線的に開く口縁部は口唇部が丸くおさまり、外面に縄文RLが施文されている。

有文鉢 9 dG類 (83) 内彎して開く口縁部は口唇部が丸くおさまり、沈線とヘナタリ疑似縄文で文様が描かれ、磨消縄文のな効果を得ている。

有文鉢 12 dG類 (84) 直線的に開く口縁部は口唇部が丸くおさまり、内面側に沈線とヘナタリ疑似縄文、貝殻による刺突点で文様が描かれ、磨消縄文のな効果を得ている。皿形に近い浅鉢であろう。

無文鉢 1 a類 (97) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が外反する鉢で、口縁部内面に段がある。器面調整の条痕が半研磨のようで、波頂部に短沈線が縦横に刻まれている。

無文鉢 1 b類 (93) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が外反する鉢で、口縁部上に沈線が巡る。復原口径21.0cmの大きさだが、波状口縁か否かは分からない。

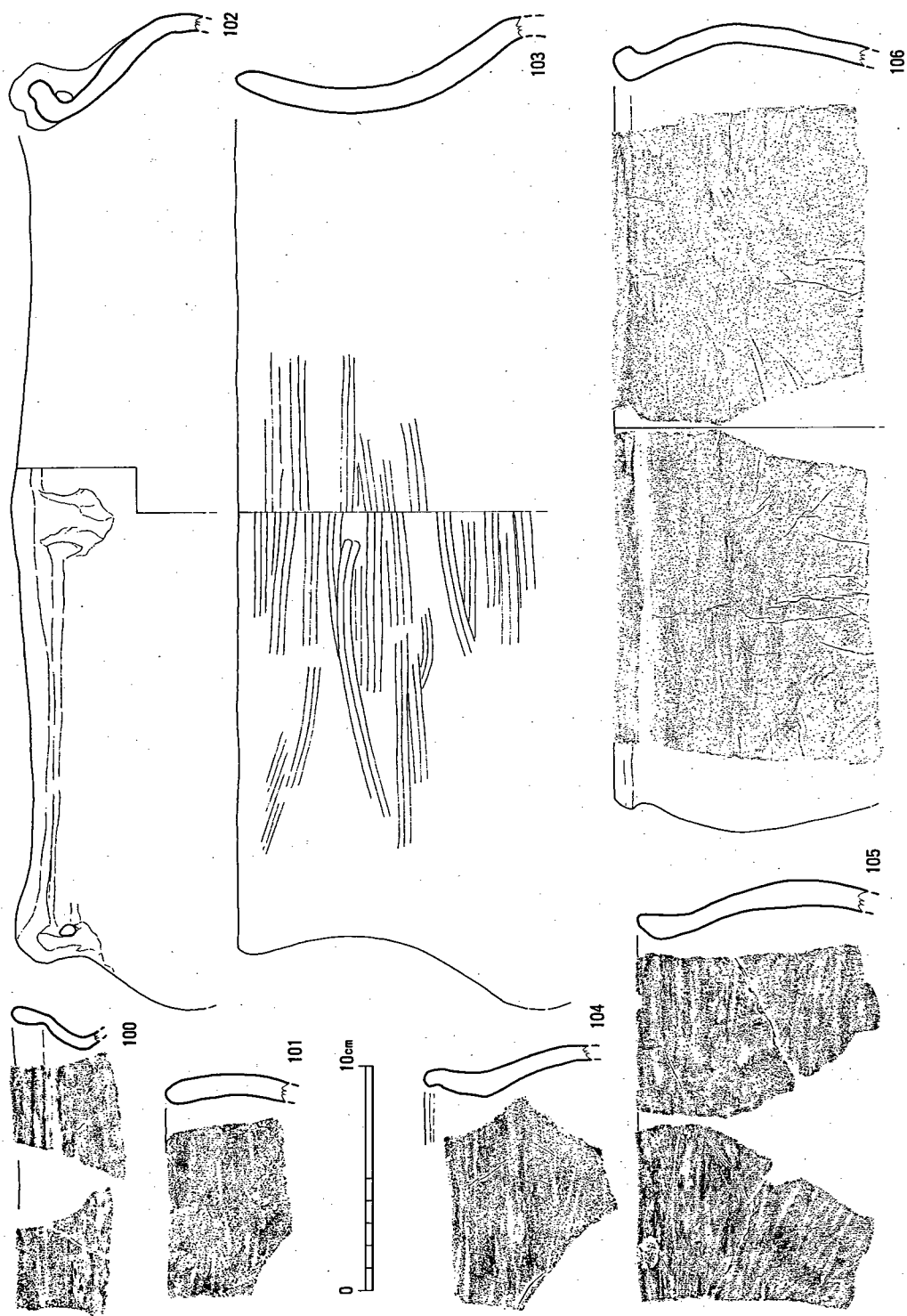
無文鉢 1 c類 (94~96・98・99) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が外反する鉢で、口唇部は面取りされている。94は復原口径24.0cm程の大きさで、口唇部に沈線が巡り、波頂部には刻み目があったらしい痕跡がみられる。98は波頂部の内面側と端面に短沈線で渦文を略したような文様を刻んでいる。99は口縁部が直立気味に立ち上がる。

無文鉢 1 d類 (103) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が外反する鉢で、口唇部は面取りされず丸い。復原口径39.0cmの大きさで、波状口縁にならない可能性が高い。

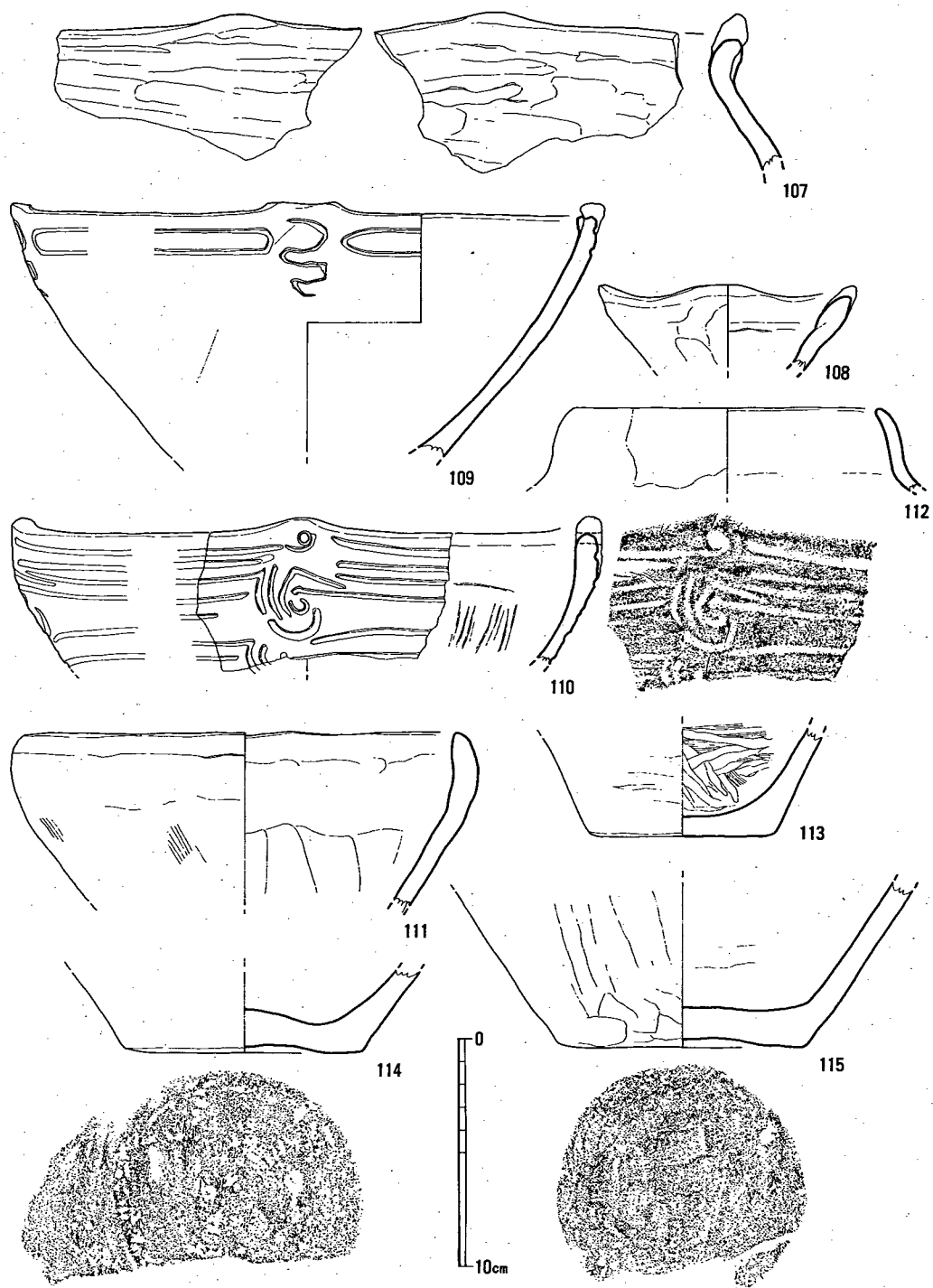
無文鉢 2 a類 (104) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して、口縁部が直に立ち上がる鉢で、口縁部内面に段がある。

無文鉢 2 d類 (105) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して、口縁部が直に立ち上がる類の鉢で、口唇部は丸くおさまる。内外面ともに条痕の後にナデ調整される。

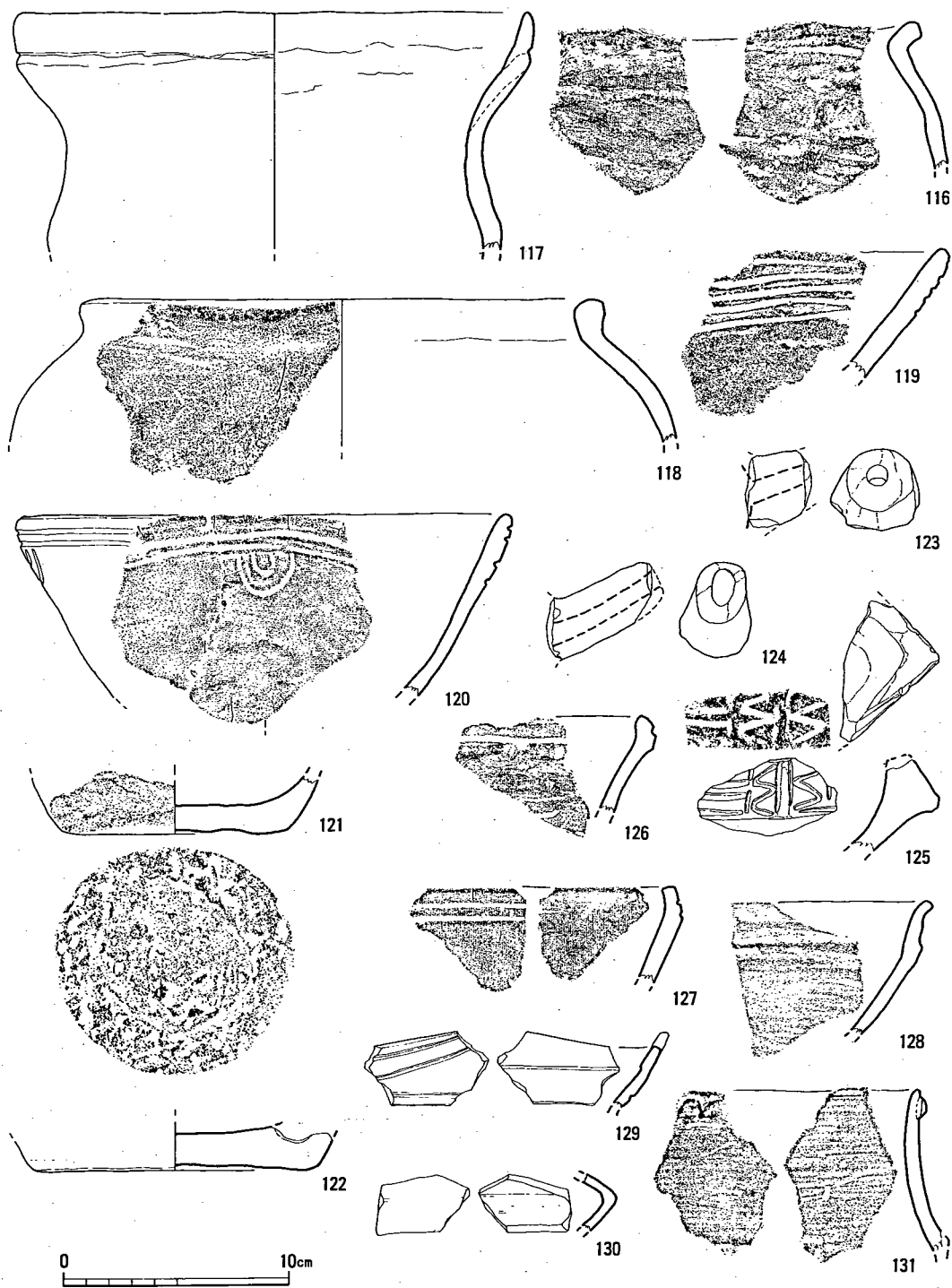
無文鉢 3 a類 (102) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して、口縁部が肥厚しながら短く外反する鉢で、口縁部内面に段がある。復原口径39.0cm程の大きさで、波頂部に橋状把手が付されている。



第87图 包含层出土器实测图9 (1/3)



第88图 包含層出土土器実測図10 (1/3)



第89图 包含層出土土器実測図11 (1/3)

無文鉢 3 c 類 (118) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して、口縁部が肥厚しながら短く外反する鉢で、口唇部は平らに整えられている。

無文鉢 3 d 類 (106・107・116) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して、口縁部が肥厚しながら短く外反する鉢で、口唇部は丸くおさまる。内外面ともに条痕の後にナデ調整される106と、板状原体による削りに近いナデ調整の107・116がある。波状口縁の107では波頂部はつまみ上げたような形状である。

無文鉢 4 d 類 (117) 復原口径23.0cm程の大きさで、括れた頸部から口縁部へ外反して開くが、口縁部は上側に継ぎ足したように伸びて、内彎の屈曲部外面に沈線状の段が生じたままである。板状原体による削りに近いナデで調整されている。

無文鉢 5 d 類 (91・92・101・112) 口縁部が内彎して立ち上がる鉢で、口唇部は面取りもなく丸い。112は胴部径よりも口径が小さい器形で、器壁はやや薄い。

無文鉢 6 d 類 (100) 膨らんだ胴部から括れた頸部を介して口縁部が開くが、口縁部は屈曲してやや肥厚する。

無文鉢 9 d 類 (111) 底部から直線的に開きながら、口縁部が内彎して立ち上がる鉢で、口唇部は面取りもなく丸い。111は復原口径20.0cmで、器高が口径の約半分に近いタイプの鉢であろう。内面には削りに似た板ナデ痕がみられる。

無文鉢 11 d 類 (108) 口縁部が直線的に開き、端部は肥厚するが面取りされていない。波状口縁の浅めな小形の鉢で、復原口径11.0cm、器高4.5cm前後の大きさであろう。

底部 (113~115・121・122) 113は平底で、内外面に研磨調整痕がみられる。他は僅かに上げ底の例で、114と121の外底面には籠状の編み目圧痕が付き、115には削りの痕跡がある。

注口土器 (123・124) いずれも注口部の破片で、僅かに上反りである。丁寧なナデ調整あるいは研磨調整で仕上げられている。

下部包含層出土の土器 (第90図)

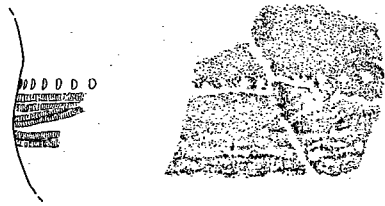
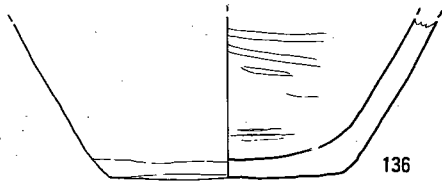
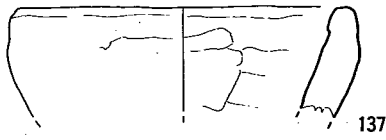
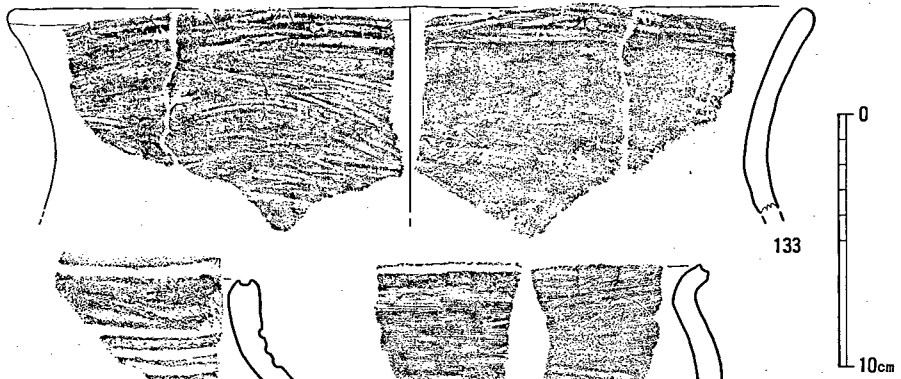
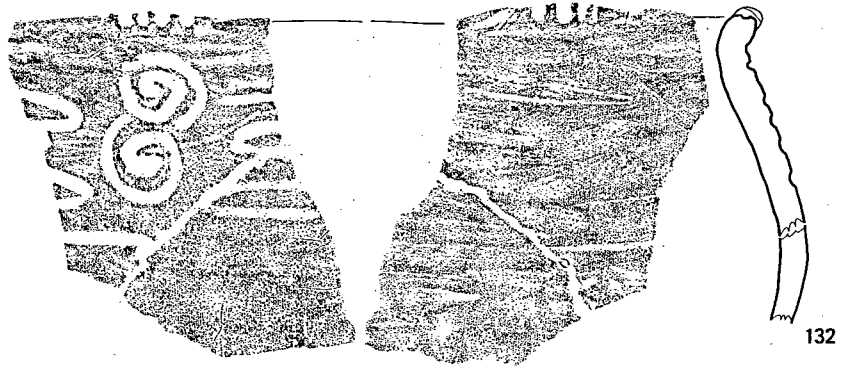
淡茶褐色砂層から出土した土器である。

有文鉢 2 b 類 (134) 口唇部上面に1条、頸部に3条の平行沈線が巡っている。

有文鉢 G 類 (138・139) 膨れた胴部にヘナタリ疑似縄文が施文される。138では蕨状文の崩れたような文様と横方向に波打つ沈線が描かれて、磨消縄文的に充填施文されている。139は頸部との境に刺突列点が巡っている。

無文鉢 1 d 類 (133) 復原口径32.0cmの大きさで、内面の頸部以下は板状原体でナデられる。

無文鉢 3 b 類 (132・135) 132は刻み目が付される波頂部の直下に2段の渦巻の重なる文様が配されて、両横側の胴肩部には蛇行文かも知れないが、折り返しの沈線が続く。波頂部以外の口唇部には沈線が巡っている。135は内外面ともに巻貝条痕の後にナデの加わった調整で仕上げ



第90图 包含層出土土器実測图12 (1/3)

られている。

無文鉢11d類 (137) 復原口径16.0cm程の大きさで、ナデ調整されるが、器壁は厚い。

底部 (136) 平底の底部で、胴部外面は研磨調整、内面は条痕の後にナデ調整されている。

石器 (図版29～35、第91～103図、表12)

打製石斧 (1～54) 1～10は体部にやや厚みを有する打製石斧である。このうち1～3・5は縦方向の剝離面を残し、両側縁を両面から調整剝離した、短冊形を呈するタイプである。4・6～11は横長方向の剝離面を残すが、剝片の背面に厚みを残し、両側面に調整剝離がみられるものの、4・6・7は両側縁に磨耗痕を伴う挟りがみられる。8～10も横長方向の剝片を用いて、比較的体部は細めで厚みも薄い。刃部は丸みをもって細まる。いずれも安山岩製であり、完形に近い4・6の重量は450g以上500g強である。

11～17は、基部側の幅よりも刃部側の幅が広い、撥形のタイプの打製石斧である。11・12は刃部側の幅が僅かに広がるもので、刃部は丸みをもつ。11は風化が幾分進んだ剝片を用い、素材の厚みを利用して、片側の側縁は敲打痕が顕著にみられるものの調整剝離は殆どみられない。12は基部側を失うが、横長剝片を用いて両側縁とも両面に調整剝離を加えていて、片側縁に挟りをもたせている。13は横剥ぎ剝片の周縁全体を調整剝離し、両側縁が刃部側へ直線的に開く均整のとれた形に整形されている。14は扁平な横剥ぎ剝片を用い、周縁を調整剝離している。15は刃部と側縁の一方のみを調整剝離したもので、やはり横剥ぎの剝片を利用している。16は胴部にやや厚みをもち、やはり側縁の一方に原材の面を残す。17は原材の風化面を片面に残し、横剥ぎの剝片の打面側と先端側を調整剝離して石斧の側縁にしている、石斧の基部と刃部は剝片の薄くなった側縁を利用しているが、刃部両面に縦方向の擦過痕が明瞭に残る。

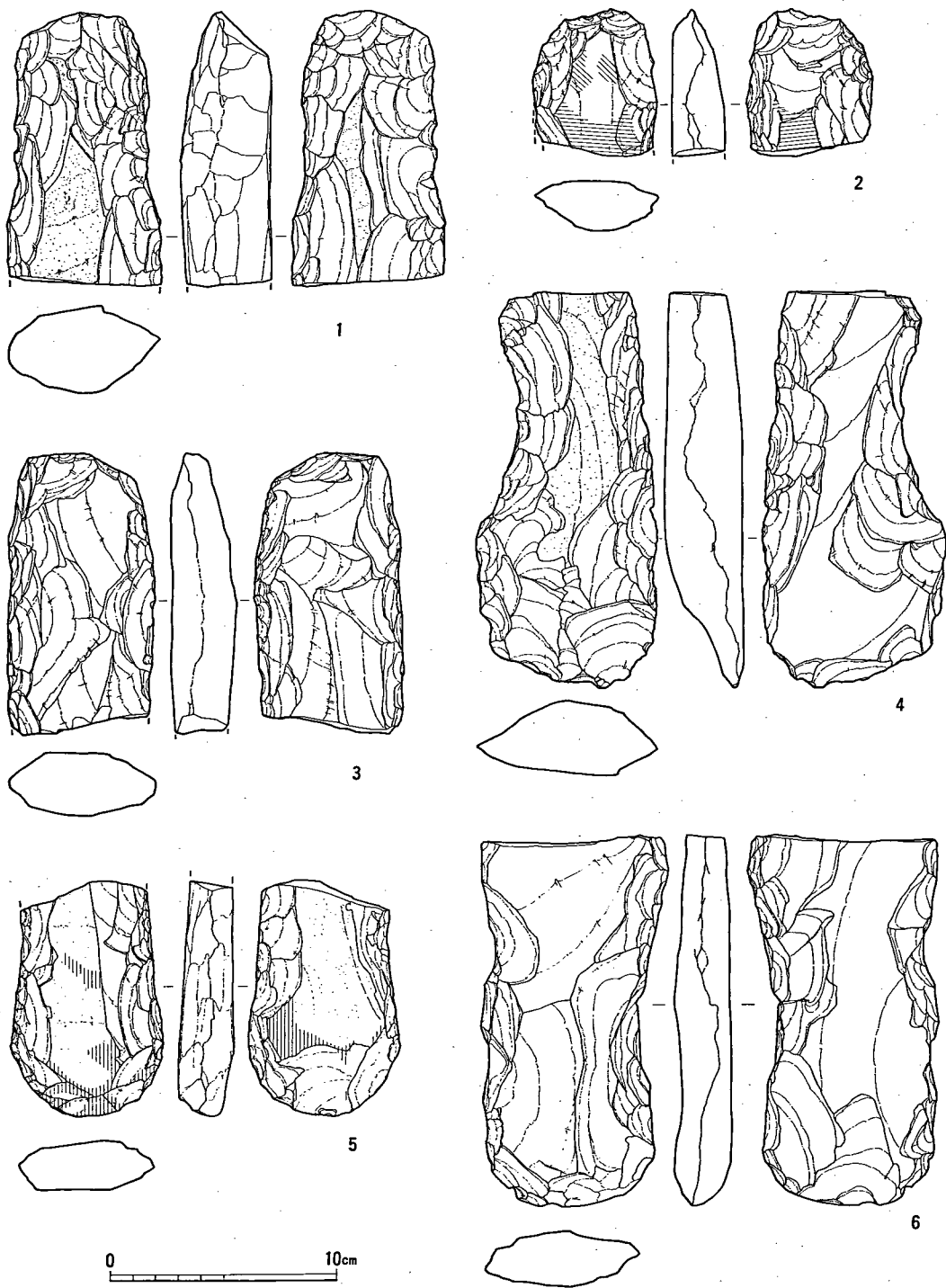
18～22は短冊形の打製石斧で、安山岩の縦剥ぎ剝片を素材にしたものである。扁平な剝片の両側縁を調整剝離している。19は2号土坑の覆土から出土した資料である。

24は安山岩の扁平な川原石を素材に一部調整剝離しているが、刃は摩耗している。

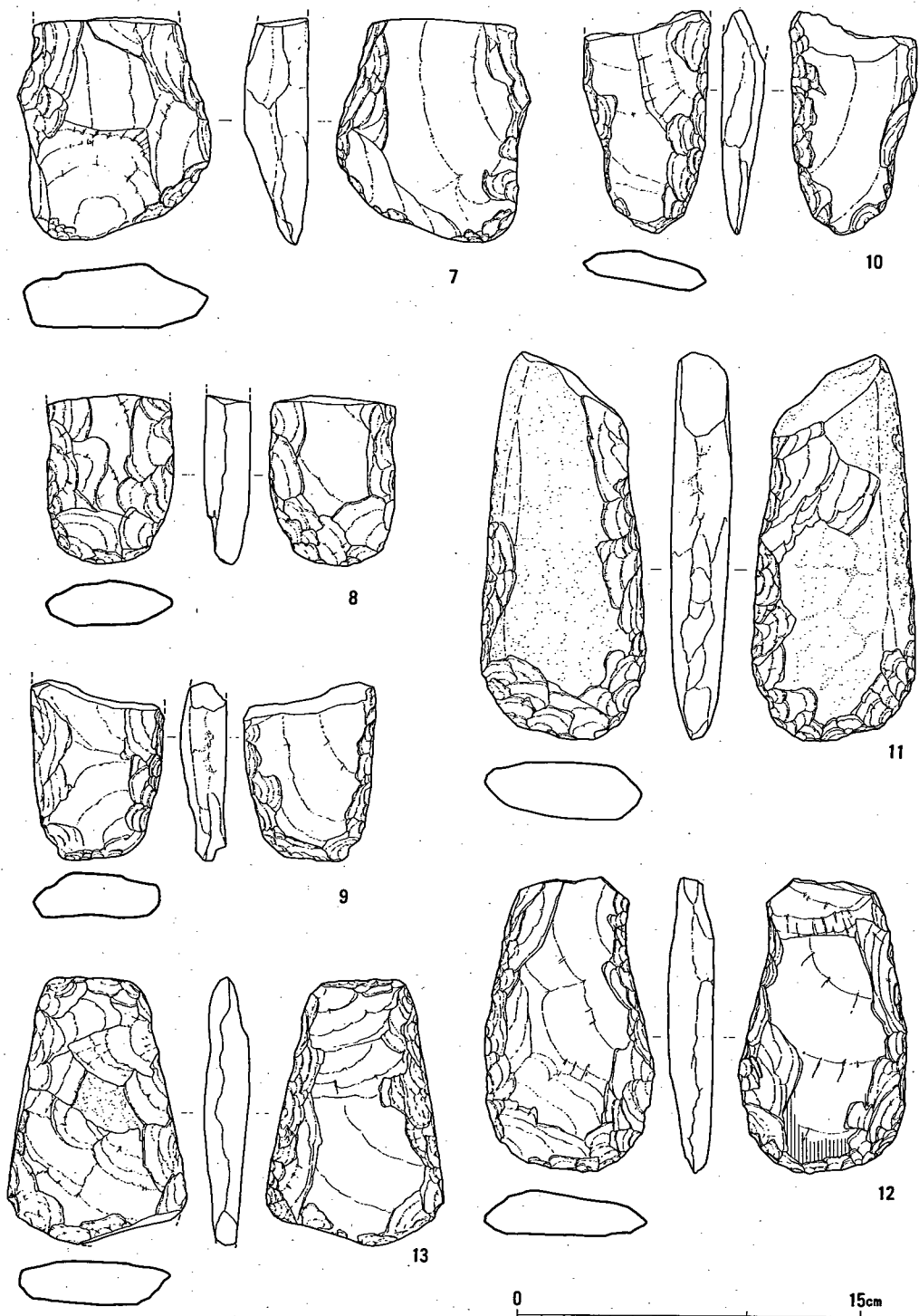
23・25・27～35・40は短冊形の打製石斧で、安山岩の横剥ぎ剝片を素材にしたものである。剝片の端部の薄い部分を刃部に行っている例が多く、尖り気味の例もある。29は基部側の幅が広く刃部側は尖る。34・35・40などは刃部片で胴部や基部の形状は分からず、短冊形に含め難いものもみられる。

26・36～39は安山岩の横剥ぎ剝片を用いていて側縁に挟りのある例で、完形例はないが、短冊形が多く、39の胴部片は分銅形の可能性がある。

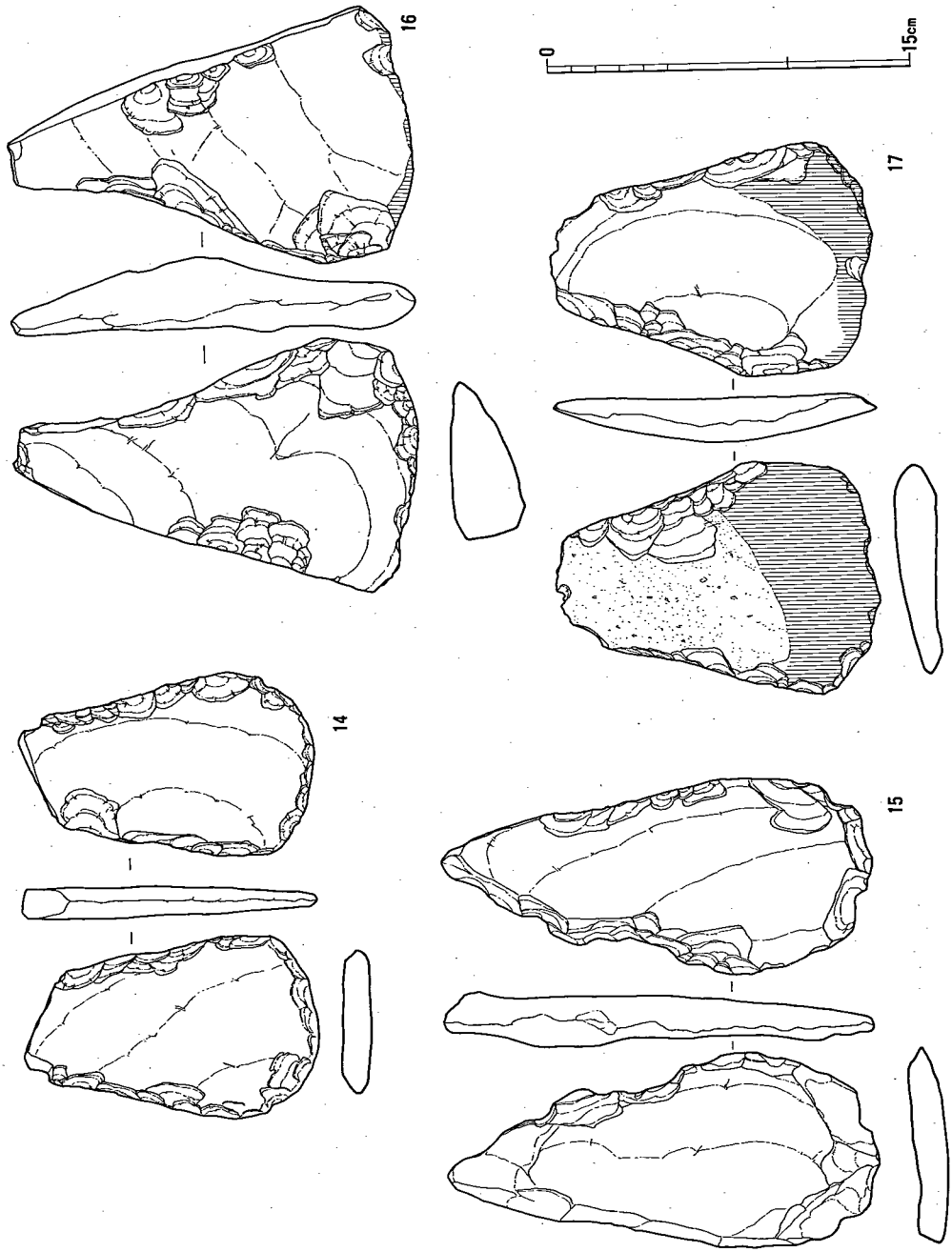
41～54は緑泥片岩製の扁平打製石斧で、41～48・52～54は短冊形、49・50は撥形、51は分銅形に近い例である。このうち42と52は刃部などに調整剝離が殆どみられない半磨製石斧のような形状である。



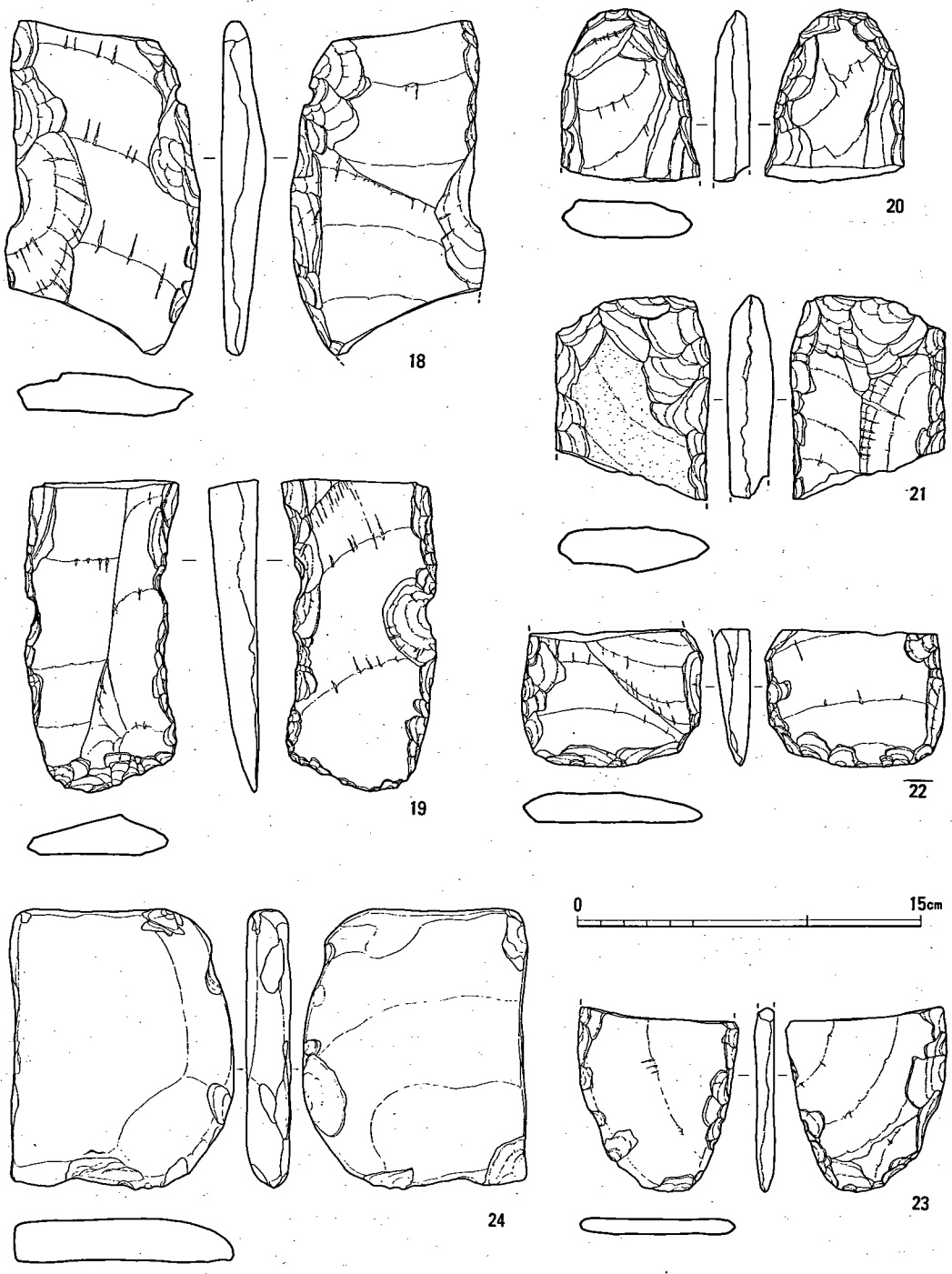
第91图 包含層出土石器实测图1 (1/3)



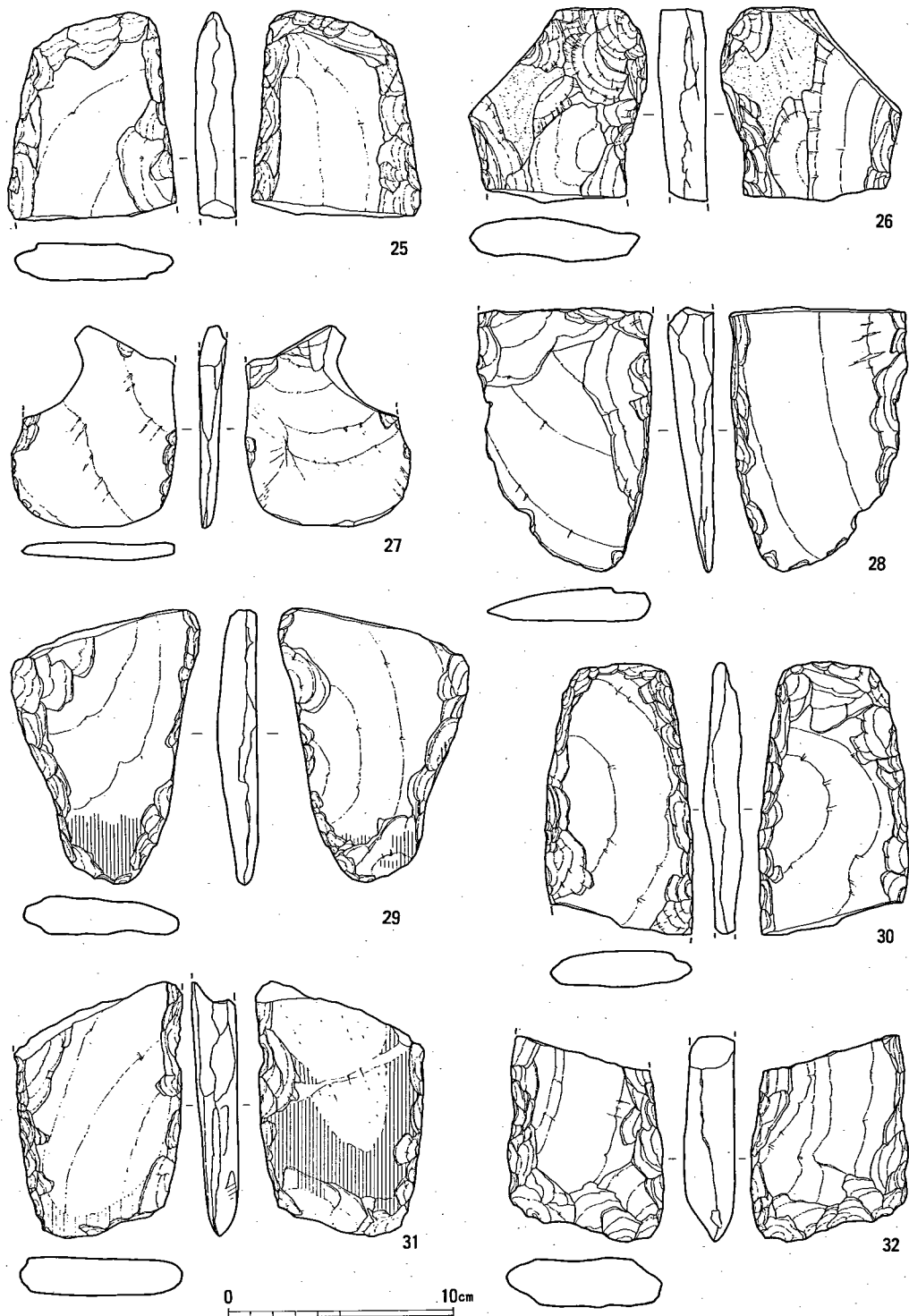
第92图 包含層出土石器实测图2 (1/3)



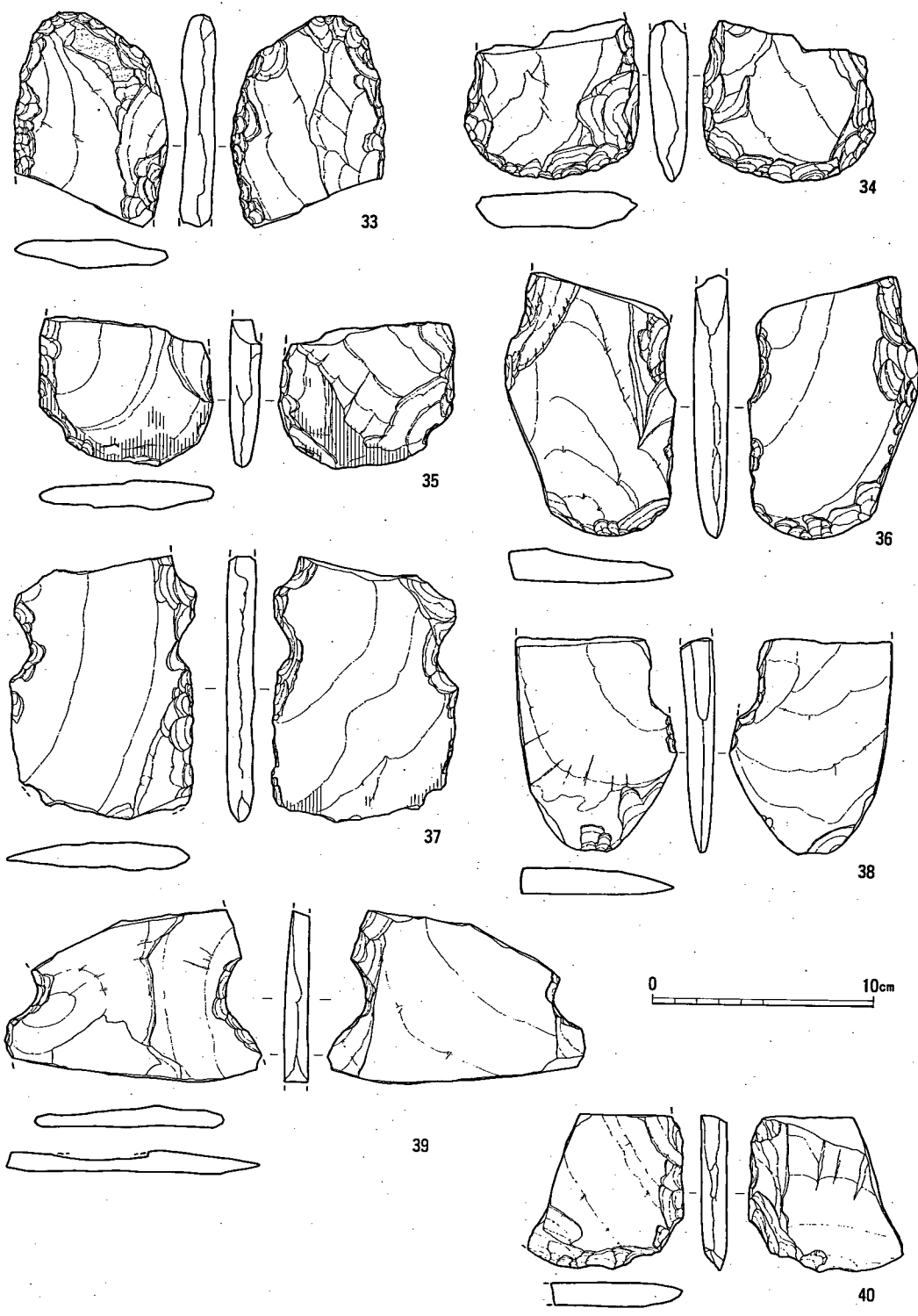
第93图 包舍层出土石器实测图3 (1/3)



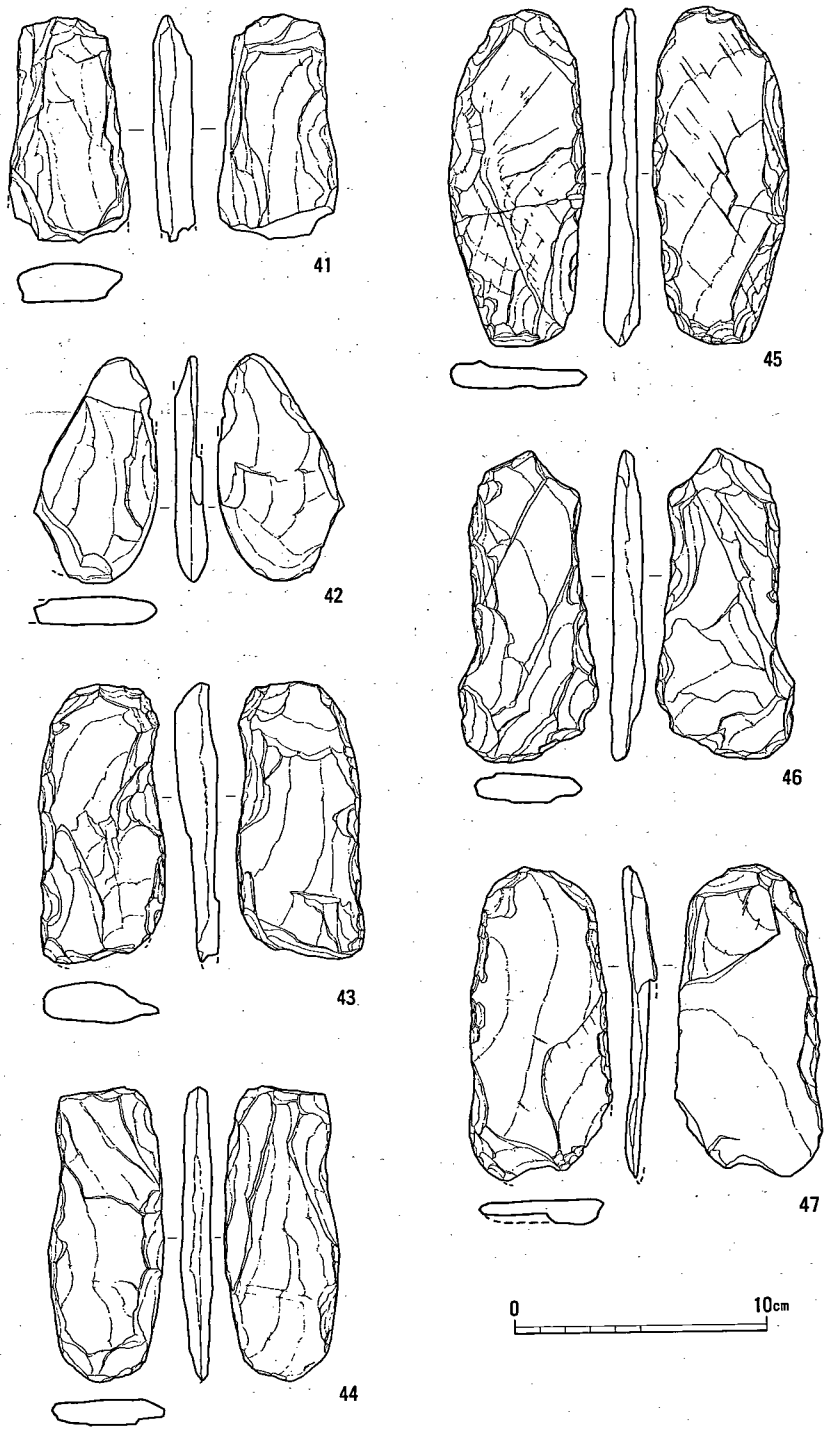
第94图 包含層出土石器实测图4 (1/3)



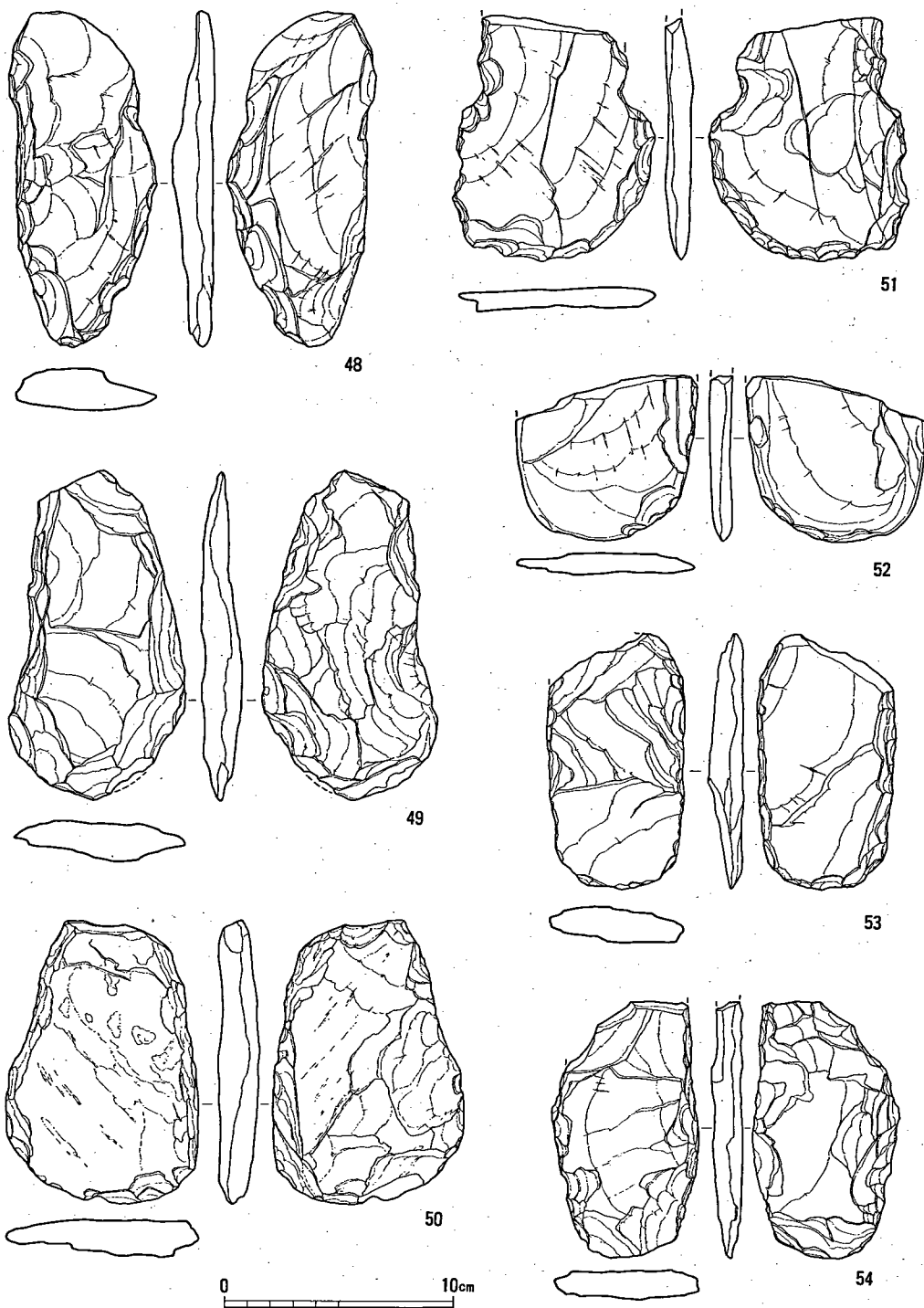
第95图 包含層出土石器实测图 5 (1/3)



第96图 包含層出土石器实测图6 (1/3)



第97图 包含層出土石器实测图7 (1/3)



第98图 包含層出土石器実測图8 (1/3)

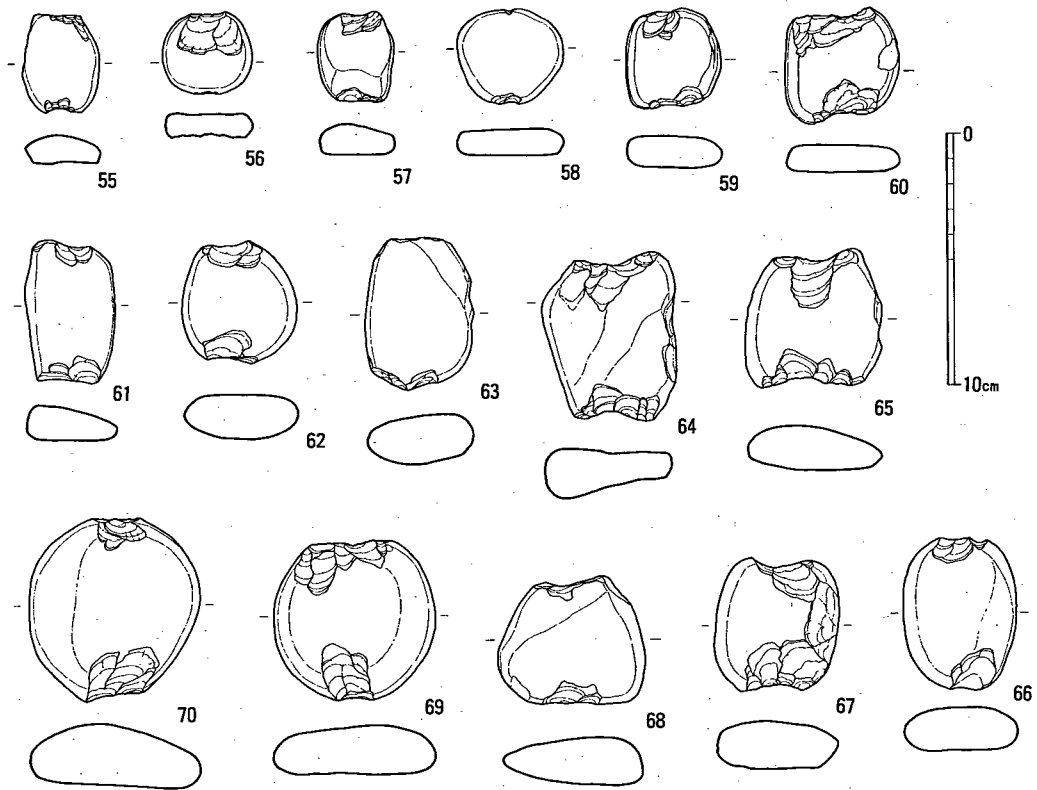
打欠石錘 (55~70) 55・61・66は砂岩、他は安山岩の川原石の長軸側両端を打ち欠いて紐掛けにしたもので、17g前後~180g程の幅をもち、20g~70gの例が多い。

打製石鏃 (71~87) 71~74は黒色黒曜石、75~81は姫島産黒曜石、82~87はサヌカイトの剥片を用いた、平基式に分類される81・86以外いずれも凹基式の石鏃である。71~77は広義の剥片鏃である。78~87は不定形な剥片を用いたもので、79~81・85・87は全面に調整剥離が及ぶタイプである。重量では0.3g~1.4gの幅がみられる。

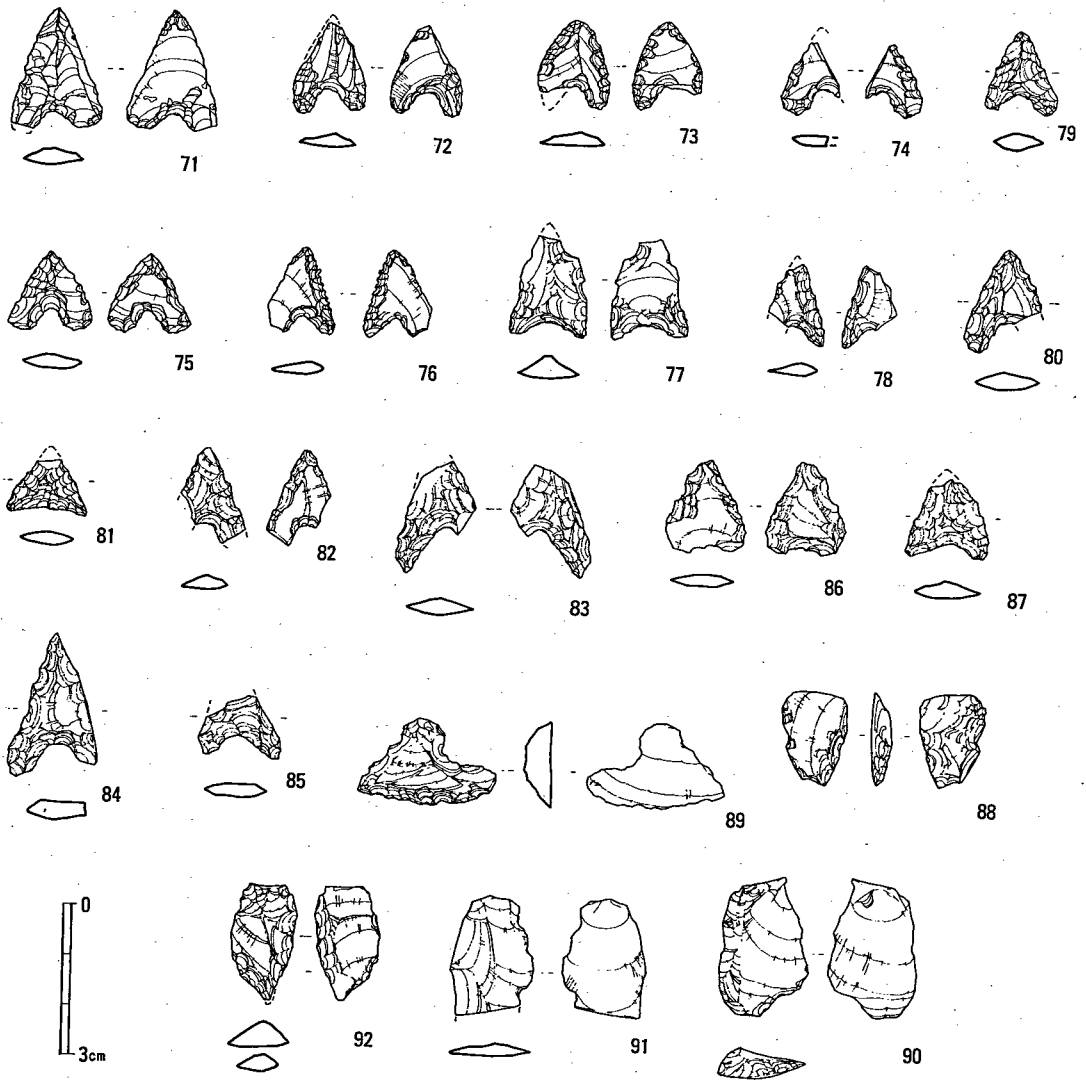
削器 (88) 黒色黒曜石製の縦長剥片を折り取った際の残余である、つまみ形石器の打瘤部を除去して、剥片の片側縁部分だけをそのまま残して調整したものである。

搔器 (89・90) 89は姫島産黒曜石の不定形な剥片を主要剥離面から調整剥離を加えて小形の石匙状に整形したもの、90は黒色黒曜石の先端側を主要剥離面側から調整剥離を加えたものである。

縦長剥片 (91) 姫島産黒曜石を途中で向きを横に変える剥離方法で、縦長に得られた剥片であるが、先端側は欠損している。



第99図 包含層出土石器実測図9 (1/3)

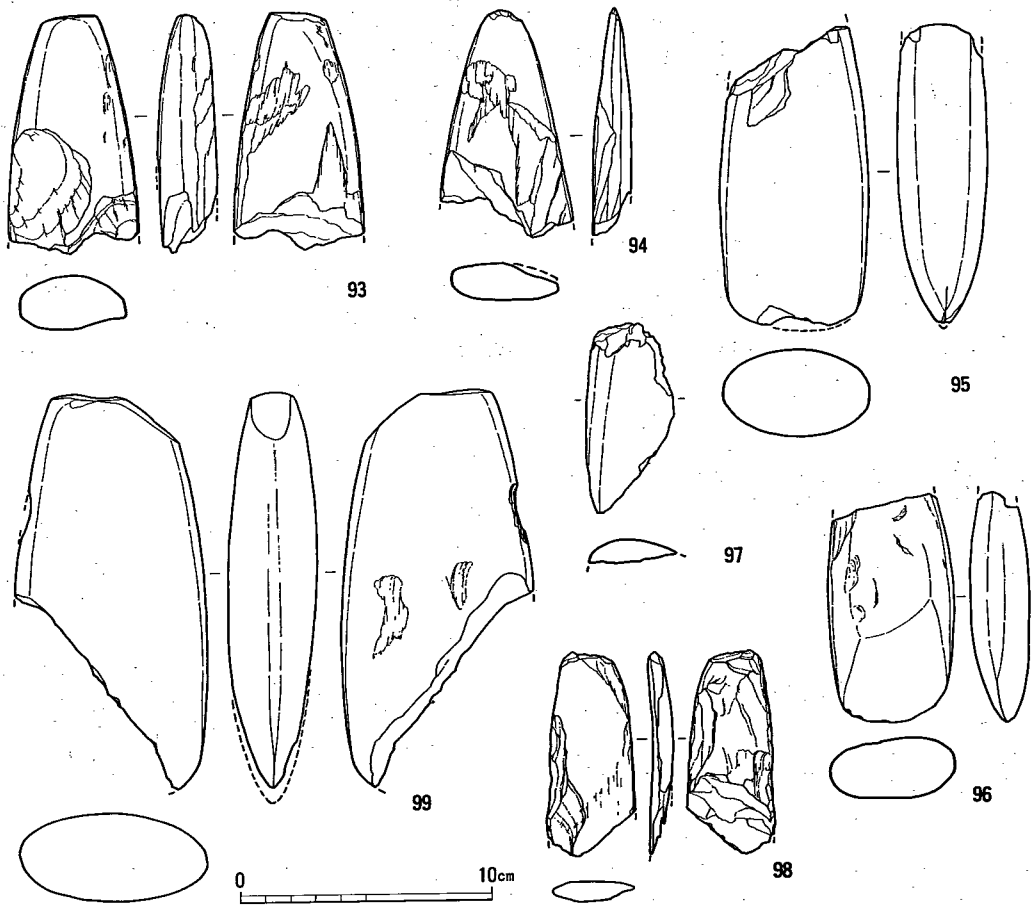


第100図 包含層出土石器実測図10 (2/3)

石 錐 (92) 不定形剥片の打瘤部を除去し、側縁の先端側を調整して尖らせたものである。

磨製石斧 (93~99) 93~97は蛇紋岩、98は緑泥片岩、99は片麻岩質の蛇紋岩製の磨製石斧である。93・94は定角式に近い体部の扁平なタイプの基部側片、95・96は楕円形断面の体部を有するタイプの刃部側片で、97・98は胴部破片である。また99は基部上面の片側に斜方向の面を有していて、現存長15.7cm、重量570gと大振りな磨製石斧である。

敲 石 (100~103) 100・101は丸弾状の敲石で、一部すれた面もみられるが、投擲用の可能

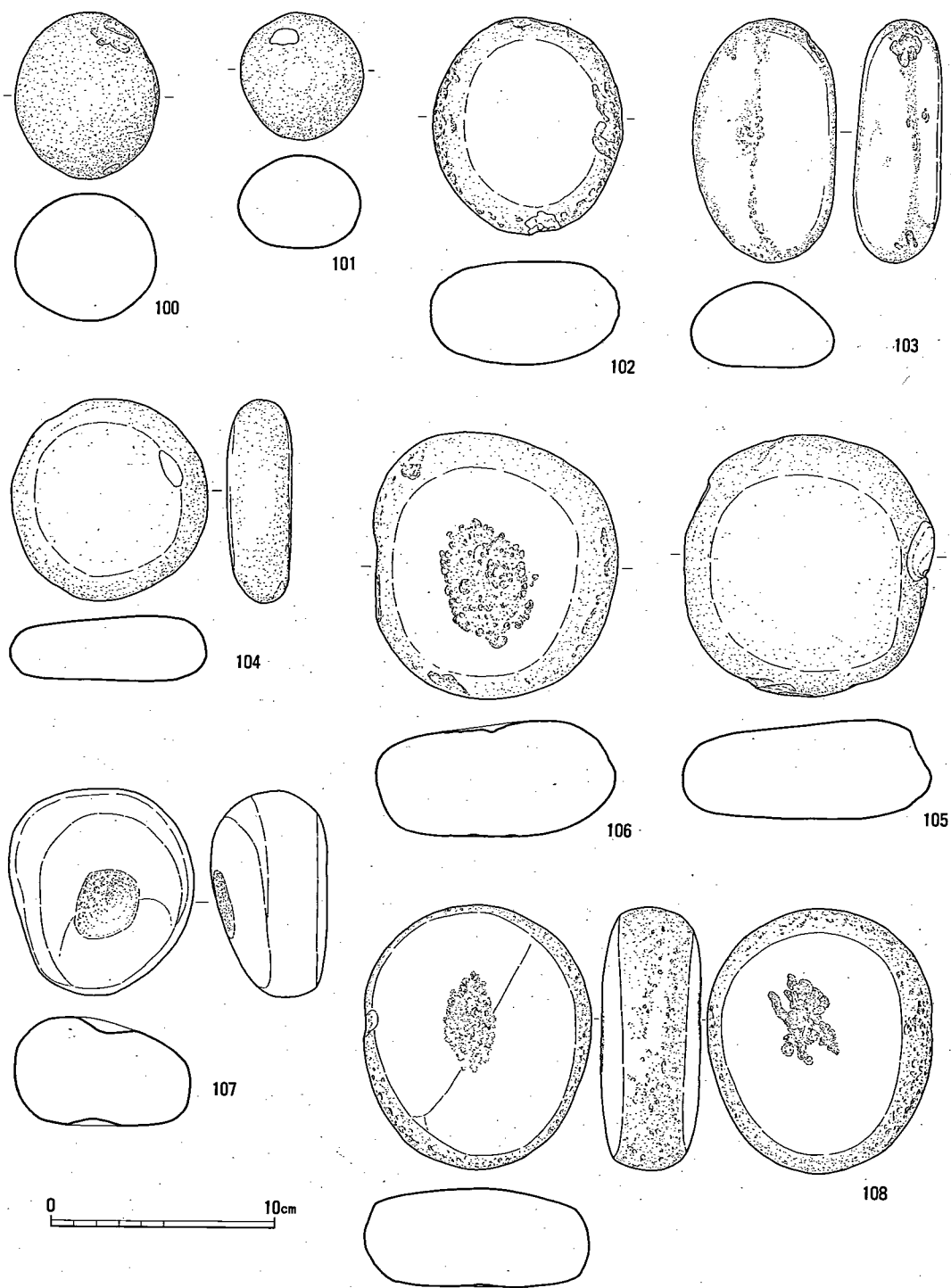


第101図 包含層出土石器実測図11 (1/3)

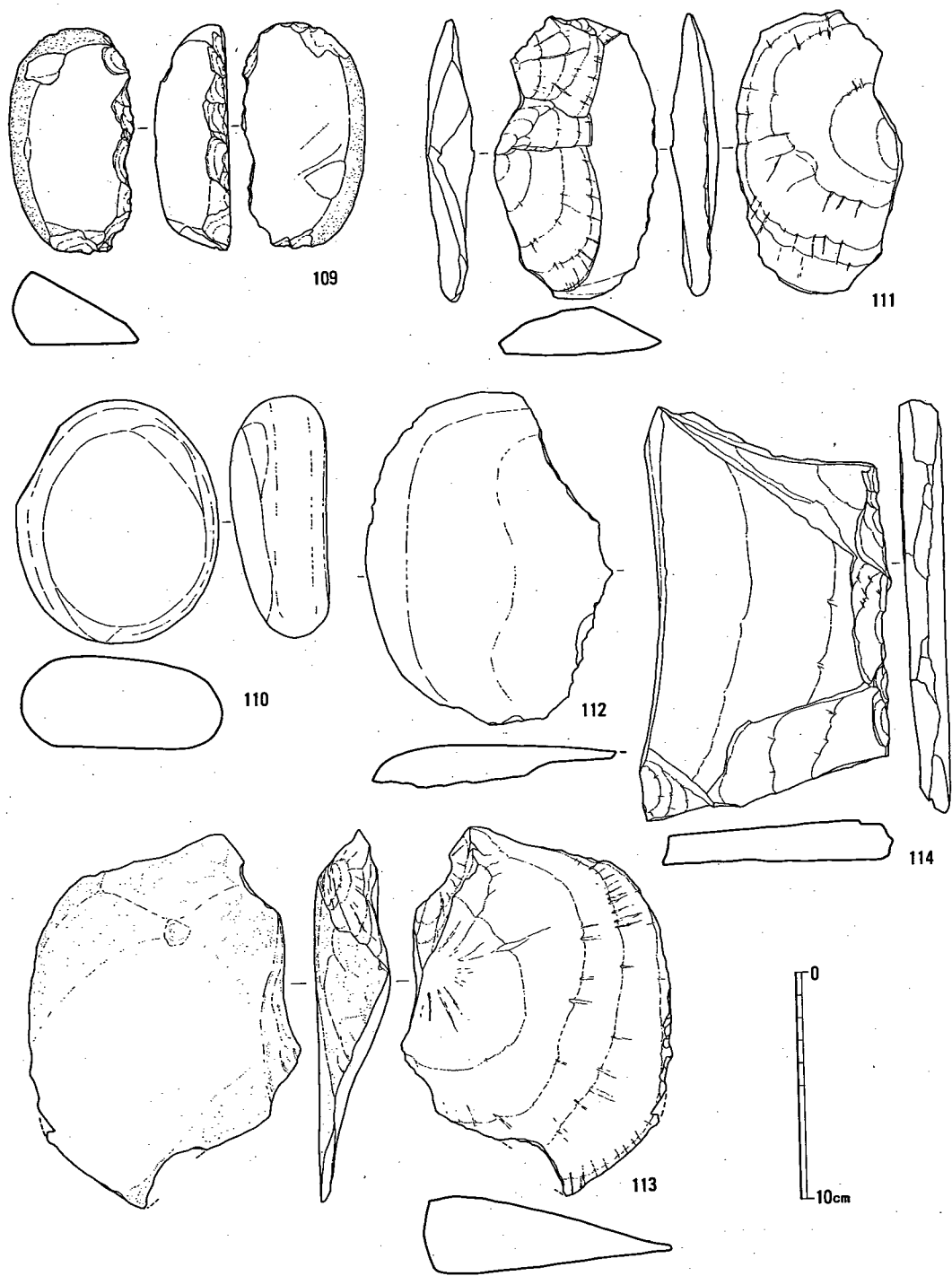
性もある。102は掌におさまり易い大きさで、やや扁平な安山岩の円礫をすり石にしているが、周縁に敲打痕が顕著にみられるもの。103は断面が三角になる長楕円形の円礫の両端と側縁の一部に敲打痕がみられ、一部の面はすれて磨耗している。

すり石 (104~110) 104・105はやや扁平な円礫で、両面ともに使用されてすれているが、105の片面の中央には敲打痕がみられる。106~108は周縁と上下両平坦面の中央部に敲打痕が確認される。平坦面は頻度の使用のためか断面形が長方形や不整長方形になる。また109・110は平坦面に敲打痕がみられないが、使用頻度の高いすり石で、119の断面形は三角形に近い。

石斧素材 (111~114) 111~113は、安山岩の横長な剥片で、横剥ぎに特徴的な翼状剥片の形態である。石皿などに使われた磨耗痕の残る塊から剥ぎ取ったものと思われるが、大きさなどからみて打製石斧の素材であろう。111や113では剥片の先端部縁に刃こぼれらしい痕跡があり、



第102图 包含層出土石器实测图12 (1/3)

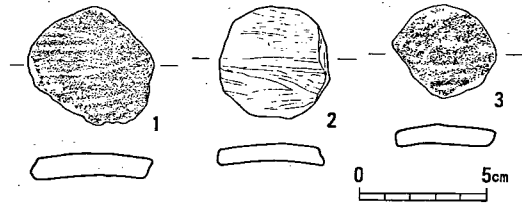


第103图 包含層出土石器实测图13 (1/3)

一時的に削器などに用いられた可能性もある。また114は扁平な板状に割られた素材で、片側の側縁には調整剥離がみられるものの未完成である。

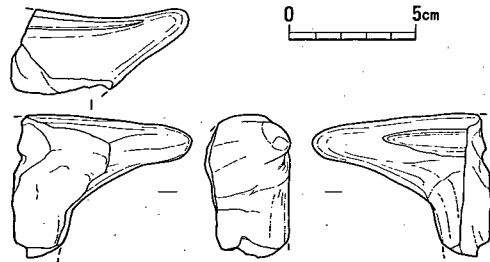
土製品 (第104・105図)

土器片円盤 (第104図1~3、表13) 遺物包含層での土器片円盤については、十分に整理できていない。ここでは3点のみを図示することにした。いずれも外面が巻貝条痕の後にナデ調整の加わる調整の土器片を打ち欠いて、円形に近い形に整形した直径4~5cm大の円盤状を呈している。周縁は打ち欠いた後に研磨を加えられていないが、やや磨耗する。



第104図 包含層出土土製品実測図1 (1/3)

土偶? (第105図) 弥生時代終末~古墳時代初頭頃の土器類が集積されていた、IV区の1号土器溜り部分から出土した。縄文時代か否かの判断にはやや躊躇するが、砂粒・褐色粒・角閃石を含む胎土で砂粒の粗さや量などから、弥生終末期以降の製品とするには問題点が多い。とはいえ、住居跡出土の縄文土器



第105図 包含層出土土製品実測図2 (1/3)

などよりは良質な胎土である。形態は土偶の腕部にみれないでもないもので、先端側に尖り、裏面側は浅い溝状に凹む。残存長7.0cm、高さ5.8cm、幅3.3cmの大きさ。胴体部や頭部は残らないが、これを左腕とすれば、腕を後ろに反らせ気味で、胸側に膨らむ。頭部の幅を考慮にいれば、両手を広げた幅が20cm前後の大きさになり、大形の例になろう。

上唐原遺跡の縄文時代遺物包含層では、1・2号住居跡などと同様に鐘崎Ⅲ式に含まれる縄文土器を中心とした土器類が出土した。これらは縄文後期前半の新しい段階から後期中頃にかけての所産とされている。輪郭などを検出しえなかったが、この時期の土器片が多く出土したI20区付近も住居跡などの遺構であった可能性があり、住居跡を中心とした集落が調査区の北側に展開する可能性が高いといえよう。また後期後半から末頃の土器や、晩期に含まれる土器片も若干出土した。これらの例は、I区など東南側の包含層にやや多くみられることから、時期の下降に従って、集落が東南側に移った可能性も想定しておきたい。

表11 包含層出土土器観察表

No.	文様の特徴と器面調整		色調	内面	分類	胎土				位置	備考	
	外面					砂	角	雲	褐			英
1	へ条痕→半研磨→沈線	鈎形蛇行	茶褐色	ナデ	1d	○	○	○	○	I20	茶褐	554
2	ナデ→沈線	蕨状?	黄褐色	ナデ	3d	○	○			I20	茶褐	527
3	ナデ→沈線	蕨状?	淡茶褐色	条痕→ナデ	2b	○	○			I20	淡茶	127
4	へ条痕→研磨・ナデ→沈線	蕨状・重弧	暗茶褐色	へ条痕・ナデ	3a	○	○		○	I20	淡茶	494
5	へ条痕→ナデ→沈線		暗茶褐色	板ナデ・ナデ	1d	○	○		○	I20	淡茶	126
6	へ条痕→ナデ→沈線	蕨状	茶褐色	ナデ・研磨	3d	○	○		○	I20	茶褐	555
7	ナデ→沈線		暗黄褐色	へ条痕・ナデ	胴部	○	○		○	I20	暗茶	480
8	ナデ→沈線		茶褐色	ナデ	5d	○	○		○	I19	淡茶	118
9	ナデ→沈線		淡茶褐色	ナデ	3a	○	○	○	○	I20	淡茶	128
10	ア条痕→ナデ→沈線	蕨状	茶褐色	ア条痕	3a	○	○		○	I20	淡茶	129
11	ナデ・研磨→沈線		黄褐色	ナデ	3a	○	○			I20	淡茶	
12	縄文→沈線→研磨	鈎手状	茶褐色	条痕→ナデ	3aJ	○	○		○	I20	淡茶	120・403
13	研磨→縄文		淡茶褐色	研磨	3aJ	○	○		○	I20	淡茶	155
14	縄文→沈線→研磨	蕨状?	灰茶褐色	研磨	1cJ	○	○			I20	淡茶	124
15	研磨→縄文		暗茶褐色	研磨	5cJ	○	○			I20	茶褐	556
16	へ条痕→ナデ→へ疑縄文		暗茶褐色	ナデ	4cG	○	○		○	I20	茶褐	567
17	へ条痕→ナデ→沈線・へ疑		暗茶褐色	ナデ	1cG	○	○			I20	茶褐	
18	研磨→疑縄文		暗茶褐色	研磨	11dG	○	○		○	I19	淡茶	551
19	へ条痕→ナデ→沈線・へ疑		淡黄褐色	研磨	9cG	○	○		○	I20	淡茶	
20	ナデ		暗茶褐色	ナデ	5d	○	○		○	I20	茶褐	
21	条痕→ナデ		茶褐色	ナデ	5d	○	○			I20	淡茶	121
22	条痕→ナデ		淡明褐色	条痕→ナデ	5d	○	○	○	○	I20	茶褐	280
23	へ条痕		淡茶褐色	へ条痕→ナデ	5d	○	○			I20	茶褐	
24	へ条痕		茶褐色	へ条痕	1c	○	○			I20	淡茶	
25	ナデ		淡茶褐色	ナデ	底部	○	○		○	I20	淡茶	563
26	へ条痕・ナデ		明茶褐色	条痕→ナデ	底部	○	○		○	I20	淡茶	599
27	ナデ		淡茶褐色	ナデ	底部	○	○		○	I20	淡茶	616
28	ナデ		暗灰茶褐色	ナデ	12d	○	○			I20	淡茶	
29	研磨		淡明茶褐色	研磨	13b	○	○		○	I20	淡茶	552・627
30	条痕→研磨		明茶褐色	研磨?	12d	○	○		○	I20	淡茶	566
31	研磨		暗黄褐色	ナデ	8d	○	○			I20	淡茶	
32	へ条痕→ナデ		暗黄褐色	へ条痕→研磨	11c	○	○		○	I20	淡茶	
33	へ条痕→ナデ		茶褐色	板ナデ	11d	○	○		○	I20	淡茶	185
34	ア条痕→ナデ		淡茶褐色	ア条痕→ナデ	2d	○	○		○	I20	茶褐	
35	研磨、刺突痕あり		暗茶褐色	ナデ	注口	○	○		○	I20	淡茶	267
36	ナデ→沈線		暗茶褐色	ナデ?	1d	○	○		○	I18	茶褐	548
37	ナデ→沈線		明茶褐色	条痕→ナデ	1a	○	○		○	G15		170
38	ナデ→沈線		暗茶褐色	条痕→ナデ	1a	○	○		○	F18		541
39	ア条痕→ナデ→沈線		茶褐色	ア条痕→ナデ	2b	○	○		○	D10	上層	26
40	ナデ→沈線		暗灰茶褐色	条痕→ナデ	1a	○	○	○	○	D22		549
41	ナデ→沈線		淡茶褐色	ナデ	1a	○	○		○	I22		234
42	へ条痕→ナデ→沈線		黄褐色	へ条痕→ナデ	1a	○	○		○	I22		537
43	ナデ→沈線		茶褐色	ナデ	1a	○	○		○	I18	暗茶	540
44	条痕→ナデ→沈線		茶褐色	条痕→ナデ	1a	○	○		○	G13	淡茶	168
45	条痕→ナデ→沈線		暗茶褐色	条痕→ナデ	3a	○	○		○	I22		477
46	条痕→ナデ→沈線		茶褐色	条痕→ナデ	2d	○	○		○	I18	茶褐	545
47	ナデ→沈線	把手上蛇行	暗黄褐色	ナデ	3a	○	○			CD-11	茶褐	435
48	ナデ→沈線		暗黄褐色	ナデ	3a	○	○			I22		532
49	ナデ→沈線		茶褐色	条痕→ナデ	3b	○	○		○	F18	暗茶	605
50	ナデ→沈線		暗黄褐色	条痕→ナデ	3b	○	○		○	E11	茶褐	81
51	条痕→ナデ→沈線	渦巻	黒褐色	ア条痕→ナデ	3b	○	○		○	C15	暗茶	119
52	ナデ→沈線	重弧	暗黄褐色	ナデ	2a	○	○		○	C16	茶褐	535
53	条痕→ナデ→沈線	蕨状?	暗灰色	条痕→ナデ	3d	○	○		○	F18		519
54	ナデ→沈線	蕨状・逆J字	赤褐色	ナデ	3a	○	○		○	E17・18		544

No.	文様の特徴と器面調整				分類	胎土			位置		備考	
	外	面	色調	内面		砂	雲	褐	英	区		層位
55	ナデ→沈線		茶褐色	条痕→ナデ	3 a	○	○		○	I 18	茶褐	538
56	ナデ→沈線	蛇行	灰黄褐色	条痕→ナデ	2 b	○	○		○	D22		525
57	ナデ→沈線	蛇行	褐色	ナデ	5 d	○	○		○	D 9		117
58	ナデ→沈線		暗茶褐色	条痕→ナデ	2 b	○	○			I 19		526
59	条痕→ナデ→沈線		暗黄褐色	板ナデ・ナデ	3 a	○	○			C15	茶褐	222
60	条痕→ナデ→沈線		茶褐色	板ナデ・ナデ	2 b	○	○		○	I 22	茶褐	
61	へ条痕→ナデ・研磨→沈線		茶褐色	へ条痕→板ナデ	5 d	○	○			E11	茶褐	199
62	ナデ→沈線	蛇行	茶褐色	ナデ	9 d	○	○		○	B 9		219
63	条痕→ナデ→沈線	蛇行	茶褐色	条痕→ナデ	9 d	○	○		○	C21		543
64	ナデ→沈線		暗茶褐色	へ条痕→ナデ	3 a	○	○		○	E11	茶褐	201
65	へ条痕・ナデ→沈線	蕨状	茶褐色	へ条痕	3 a	○	○			E11	茶褐	93
66	条痕→ナデ→沈線	鈎状蛇行	暗黄褐色	条痕→ナデ	3 a	○	○	○		I 19		520
67	ナデ→沈線		灰黄褐色	ナデ	3 a	○	○			I 19		539
68	ナデ→沈線		暗茶褐色	ナデ	3 a	○	○	○		I 18		524
69	条痕→ナデ→沈線		茶褐色	板ナデ	3 b	○	○		○	E15		657
70	ナデ→沈線	格子	淡褐色	ナデ	1 d	○	○		○	D22		531
71	縄文→沈線→研磨		淡黄褐色	ナデ	3 a J	○	○		○	G13	暗茶	
72	縄文→沈線→研磨		茶褐色	ナデ	4 b J	○	○		○	B 9	茶褐	654
73	縄文→沈線→研磨		暗黄褐色	ナデ	J	○	○			G15		164
74	縄文・研磨		茶褐色	研磨	5 d J	○	○		○	G21		573
75	縄文→沈線→研磨		茶褐色	研磨	5 d J	○	○		○	F17	茶褐	505
76	縄文→沈線→研磨		茶褐色	研磨	J	○	○	○		E16		547
77	研磨→へ疑縄文・沈線		暗灰茶褐色	研磨	1 d J	○	○		○	C15		
78	縄文→沈線→研磨	刺突	淡茶褐色	ナデ	6 d J	○	○			F23・24	暗茶	521
79	縄文		茶褐色	ナデ	9 d J	○	○		○	C 6		
80	研磨・縄文→沈線		暗茶褐色	研磨	1 d J	○	○		○	B 8		634
81	縄文→沈線→研磨	列点	暗茶褐色	ナデ	J	○	○		○	B 9	茶褐	655
82	縄文→沈線→研磨		暗茶褐色	研磨	J	○	○		○	B 8		113
83	研磨→沈線→へ疑縄文		暗黄茶褐色	ナデ	9 d G	○	○			G23		522
84	研磨		灰茶褐色	研磨→沈線→へ疑縄	12D G	○	○		○	F15		
85	へ疑縄文		淡茶褐色	へ条痕	6 c G	○	○		○	G20		
86	研磨・へ疑縄文		淡茶褐色	へ条痕→研磨	G	○	○			I 22		228
87	研磨・へ疑縄文→刺突		茶褐色	へ条痕→研磨	G	○	○		○	I 22		229
88	研磨・へ疑縄文→刺突		暗茶褐色	へ条痕→研磨	G	○	○		○	D16・17	茶褐	
89	へ疑縄文		暗茶褐色	条痕→ナデ	G	○	○		○	F17		556
90	研磨・へ疑縄文		黄茶褐色	条痕→ナデ	1 d G	○	○		○	E16		542
91	ア条痕・ナデ		茶褐色	ナデ	5 d	○	○		○	D15	暗茶	220
92	へ条痕・ナデ		褐色	へ条痕・ナデ	5 d	○	○	○		I 19		
93	へ条痕・ナデ		茶褐色	条痕→ナデ	1 c	○	○		○	F16	暗茶	506
94	ア条痕・ナデ		暗茶褐色	板ナデ	1 b	○	○		○	E10	茶褐	94
95	ア条痕→ナデ		淡茶褐色	ア条痕	1 c	○	○		○	E10	茶褐	114
96	ア条痕→ナデ		淡灰茶褐色	ア条痕→ナデ	1 c	○	○		○	E 5		647
97	へ条痕→研磨・ナデ		暗灰褐色	条痕→ナデ	1 a	○	○			I 18		546
98	へ条痕→ナデ		黄灰色	へ条痕→ナデ→沈線	1 c	○	○		○	I 18		529
99	ア条痕		明褐色	ア条痕・板ナデ	1 c	○	○	○		G13	暗茶	182
100	ナデ		淡茶褐色	条痕→ナデ	6 d	○	○		○	GH-18		233
101	条痕→ナデ		暗黄褐色	条痕→ナデ	5 d	○	○	○		I 19		409
102	ナデ		暗茶褐色	板ナデ	3 a	○	○		○	E13・14	茶褐	514・607
103	へ条痕		茶褐色	へ条痕	1 d	○	○		○	H17		560
104	条痕→ナデ		暗茶褐色	ナデ	2 a	○	○	○		I 19		408
105	へ条痕・ナデ		暗灰茶褐色	へ条痕→ナデ	2 d	○	○		○	H14		95
106	へ条痕→ナデ		茶褐色	へ条痕→ナデ	3 d	○	○		○	CD-11	茶褐	144
107	板ナデ・ナデ		暗黄褐色	板ナデ・ナデ	3 d	○	○		○	H 9	暗	21
108	ナデ		淡茶褐色	ナデ	11 d	○	○		○	CD-15	暗茶	
109	研磨→沈線	蛇行	暗黄褐色	研磨	8 a	○	○			E10	茶褐	459
110	研磨→沈線	重弧J字渦	淡茶褐色	研磨	9 d	○	○	○				

No.	文様の特徴と器面調整				胎土				位置		備考			
	外	面	色調	内	面	分類	砂	角	雲	褐		英	区	層位
111	ナデ・板条痕?		暗茶褐色	板ナデ・ナデ	9 d	○	○	○				B 6		609
112	ナデ		淡褐色	ナデ	9 d	○	○		○			C15		
113	へ条痕→ナデ・研磨		暗黄褐色	へ条痕→半研磨	底部	○	○					I 18		576
114	ナデ	外底筥圧痕	茶褐色	ナデ	底部	○	○	○				C15		643
115	板ナデ・ナデ		淡茶褐色	ナデ	底部	○	○		○			I 18	茶褐	621
116	ナデ・研磨		暗茶褐色	ナデ・板ナデ	3 d	○	○	○				E10	茶褐	80
117	ナデ		暗茶褐色	ナデ	4 d	○	○					I 18		578
118	板ナデ・ナデ		暗灰茶褐色	板ナデ・ナデ	3 c	○	○		○			E10	茶褐	75
119	ナデ→沈線		暗黄茶褐色	ナデ	8 d	○	○		○			I 18		518
120	研磨→沈線	重弧	淡茶褐色	研磨	8 d	○	○	○				I 22		437
121	ナデ	外底筥圧痕	灰黄褐色	ナデ	底部	○	○		○			I 22	茶褐	517
122	へ条痕→ナデ		茶褐色	ナデ	底部	○	○					I 22		565
123	研磨?		茶褐色	ナデ	注口	○	○		○			D15・16	暗茶	269
124	研磨?		茶褐色	ナデ	注口	○	○			○		C16	暗茶	270
125	研磨→沈線	垂線・蛇行	茶赤褐色	研磨	脚鉢	○	○	○				I 18	茶褐	523
126	研磨→沈線		暗黄褐色	研磨	6 c	○	○					B 9	茶褐	653
127	研磨→沈線		暗黄褐色	研磨	6 c	○	○	○				B10		650
128	研磨・板ナデ		暗茶褐色	研磨	13 c	○	○			○		C13		635
129	研磨→沈線		暗茶褐色	研磨	14 c	○	○					C 9		
130	研磨		暗茶褐色	研磨	胴部	○	○			○		C13		
131	板ナデorア条痕	刻目突帯	灰茶褐色	板ナデorア条痕	15 d	○	○					B6		
132	ナデ→沈線	渦巻2段	明褐色	ナデ	3 b	○	○		○			G12・13	淡茶	429
133	ア条痕		淡茶褐色	板ナデ	1 d	○	○	○				CD-12	淡茶	419
134	条痕→ナデ→沈線		明褐色	条痕→ナデ	2 b	○	○		○			G12・13	淡茶	175
135	へ条痕→ナデ		黄褐色	へ条痕→ナデ	3 b	○	○		○			G13?	淡茶	112
136	研磨・ナデ		淡黄褐色	条痕・ナデ	底部	○	○					E10	淡茶	564
137	ナデ		淡茶褐色	板ナデ・ナデ	11 d	○	○		○			G13	淡茶	
138	へ半研磨→沈線・へ疑縄文		暗赤褐色	研磨	G	○	○	○	○			H13	淡茶	450
139	研磨・へ疑縄文・刺突列点		淡茶褐色	研磨?	G	○	○			○		H14	淡茶	96・451

表のなかで扱う、器面調整で、へ条痕はへナタリ条痕、ア条痕はアナグラ条痕、板ナデは板状原体によるナデの略である
また、ア疑縄文はアナグラ疑似縄文、へ疑縄文はへナタリ疑似縄文の略である。

表の胎土のうちで、砂は砂粒、角は角閃石、雲は雲母、褐は褐色粒、英は石英粒の略である。

表12 包含層出土石器一覧表

(単位cm・g)

登録番号	出土位置	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
80	D17	暗茶褐砂	刃部欠	打製石斧	安山岩	12.2	6.8	4.0	444.2	第91図1
11	D13		基部片	打製石斧	安山岩	6.6	5.5	2.3	103.3	2
98	D17	暗茶褐砂	刃部欠	打製石斧	安山岩	12.5	6.5	2.8	313.5	3
	E15		完形	打製石斧	安山岩	17.5	8.0	3.5	505.7	4
30	D9	茶褐色土	基部欠	打製石斧	安山岩	10.4	6.7	2.4	230.4	5
89	E18		完形	打製石斧	安山岩	16.4	8.3	2.5	477.5	6
31	C15	茶褐色砂	刃部片	打製石斧	安山岩	9.9	8.2	2.8	279.5	第92図7
28	E10		刃部片	打製石斧	安山岩	7.5	5.6	2.0	135.5	8
49	E34		刃部片	打製石斧	安山岩	7.9	5.8	2.0	120.5	9
75	I 20	茶褐色砂	基部欠	打製石斧	安山岩	9.8	5.5	1.9	90.6	10
81	I 20	茶褐色砂	完形?	打製石斧	安山岩	17.0	7.1	2.6	463.7	11
119	I 18		完形?	打製石斧	安山岩	12.9	7.3	2.0	251.8	12
(H2)	DE-29・30		完形	打製石斧	安山岩	1.4	7.8	2.0	215.5	13
50	G8	茶褐色砂	完形	打製石斧	安山岩	12.3	7.6	1.3	168.6	第93図14
88	F17	暗茶褐砂	完形	打製石斧	安山岩	17.9	8.1	2.1	327.2	15

登録番号	出土位置	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
123	F23		完形	打製石斧	安山岩	16.9	10.5	3.0	434.2	16
87	E19		完形	打製石斧	安山岩	13.4	9.5	1.9	229.8	17
48	V区		刃部欠	打製石斧	安山岩	14.2	8.4	1.9	296.6	第94図18
18	2号土坑		完形	打製石斧	安山岩	13.6	6.5	2.2	184.6	19
96	D18	暗茶褐色砂	基部片	打製石斧	安山岩	7.5	6.0	1.6	113.7	20
20	C15・16	暗茶褐色砂	基部片	打製石斧	安山岩	8.9	6.7	2.0	154.8	21
83	C16	暗茶褐色砂	刃部片	打製石斧	安山岩	6.0	7.7	1.6	109.1	22
43	D9		刃部片	打製石斧	安山岩	8.1	7.0	0.8	59.6	23
136	F18		完形	打製石斧?	安山岩	12.3	9.8	2.0	368.3	24
103	D18		刃部欠	打製石斧	安山岩	9.2	7.5	1.8	190.4	第95図25
113	E17	暗茶褐色砂	基部片	打製石斧	安山岩	8.6	8.4	2.0	160.6	26
109	E5		刃部片	打製石斧	安山岩	9.5	7.3	1.1	74.8	27
85	C16	暗茶褐色砂	基部欠	打製石斧	安山岩	11.7	7.7	2.0	213.6	28
74	F26付近		完形	打製石斧	安山岩	12.2	8.6	1.6	190.4	29
77	G22・23		刃部欠	打製石斧	安山岩	12.1	6.6	1.7	187.4	30
79	D16	暗茶褐色砂	基部欠	打製石斧	安山岩	11.4	7.2	1.7	217.7	31
84	D19	暗茶褐色砂	刃部片	打製石斧	安山岩	9.2	6.9	2.2	200.0	32
111	32号住		刃部欠	打製石斧	安山岩	9.7	7.0	1.5	121.6	第96図33
108	F18		刃部片	打製石斧	安山岩	7.3	7.8	1.7	129.2	34
86	D16		刃部片	打製石斧	安山岩	6.7	7.8	1.4	93.6	35
60	I20	茶褐色砂	基部欠	打製石斧	安山岩	11.9	7.5	1.5	161.8	36
35	H11		基部欠	打製石斧	安山岩	12.0	8.3	1.3	174.6	37
51	D18		基部欠	打製石斧	安山岩	9.7	6.9	1.4	142.0	38
70	I19・20	茶褐色砂	胴部片	打製石斧	安山岩	7.8	1.6	1.1	123.0	39
53	C15		刃部片	打製石斧	安山岩	7.0	7.0	1.2	82.9	40
45	IV区		胴部片	打製石斧	緑泥片岩	8.9	4.7	1.6	97.4	第97図41
91	E19	暗茶褐色砂	刃部片	打製石斧	緑泥片岩	9.0	5.0	1.1	68.0	42
93	D17	茶褐色砂	刃部欠	打製石斧	緑泥片岩	11.1	4.9	1.6	114.5	43
44	C15	茶褐色砂	完形	打製石斧	緑泥片岩	11.7	4.6	1.3	95.6	44
118	F17		完形	打製石斧	緑泥片岩	13.4	5.4	1.4	117.0	45
97	E18	暗茶褐色砂	完形	打製石斧	緑泥片岩	12.4	5.5	1.3	105.9	46
(H3)	E F-25・26		一部欠	打製石斧	緑泥片岩	12.5	5.5	1.0	81.4	47
102	F17	暗砂褐色砂	完形	打製石斧	緑泥片岩	14.7	6.1	1.9	191.0	第98図48
(H5)	G27・28		ほぼ完形	打製石斧	緑泥片岩	14.4	7.7	1.6	210.7	49
(H4)	E F-25・26		ほぼ完形	打製石斧	緑泥片岩	12.4	8.3	1.8	254.8	50
73	I22		基部欠	打製石斧	緑泥片岩	10.5	8.6	1.2	148.7	51
92	C16	暗茶褐色砂	刃部片	打製石斧	緑泥片岩	7.2	7.8	1.0	86.8	52
94	F18	茶褐色砂	一部欠	打製石斧	緑泥片岩	11.2	6.0	1.5	137.0	53
99	G14		基部欠	打製石斧	緑泥片岩	12.2	6.3	1.4	133.8	54
58	D11	茶褐色砂	一部欠	打欠石錘	砂岩	4.0	3.1	1.2	16.6	第99図55
208		表採	完形	打欠石錘	安山岩	3.2	3.6	1.0	18.9	56
55	E9		完形	打欠石錘	安山岩質	3.7	3.0	1.2	20.4	57
202	I14	淡茶褐色砂	完形	打欠石錘	安山岩	3.7	4.2	1.1	25.4	58
56	AB-7・8	茶褐色砂	完形	打欠石錘	安山岩	4.0	3.8	1.3	29.1	59
	HI-20	茶褐色砂	完形	打欠石錘	安山岩	4.6	4.5	1.1	29.1	60
177	E19	暗茶褐色砂	完形	打欠石錘	砂岩?	5.7	3.5	1.4	43.4	61
171	E10	淡茶褐色砂	完形	打欠石錘	安山岩	4.9	4.5	1.8	51.9	62
174	C21		完形	打欠石錘	片岩質	6.0	4.3	2.0	61.4	63
175	D15	暗茶褐色砂	完形	打欠石錘	安山岩	6.7	5.1	2.0	66.0	64
169	C17		完形	打欠石錘	安山岩	5.5	5.3	1.8	68.8	65
176	E17	暗茶褐色砂	完形	打欠石錘	砂岩?	6.1	4.4	1.7	70.4	66
168	D15		完形	打欠石錘	安山岩	5.3	5.0	1.9	75.0	67
172	E10	茶褐色砂	完形	打欠石錘	安山岩	5.2	5.8	1.9	86.4	68
54	AB-7・8	茶褐色砂	完形	打欠石錘	安山岩	6.3	6.5	1.9	117.1	69
199		表採	完形	打欠石錘	安山岩	7.3	6.8	2.4	179.8	70
62	C8	茶褐色砂	一部欠	打製石鏃	黒色黒曜石	2.4	1.8	0.4	1.0	第100図71

登録番号	出土位置	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
(A 2)	E 7	茶褐色砂	先端欠	打製石鏃	黒色黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.8	72
	D16	茶褐色砂	片脚欠	打製石鏃	黒色黒曜石	1.7	1.4	0.3	0.5	73
	FG-17	暗茶褐色砂	半欠	打製石鏃	黒色黒曜石	1.6	1.2	0.2	0.3	74
	CD-11	茶褐色砂	完形	打製石鏃	姫島黒曜石	2.1	1.7	0.3	0.5	75
	E18		完形?	打製石鏃	姫島黒曜石	1.7	1.3	0.2	0.4	76
	Ⅲ区		先端欠	打製石鏃	姫島黒曜石	2.0	1.5	0.5	1.3	77
	H17	淡茶褐色砂	端部欠	打製石鏃	姫島黒曜石	1.7	1.1	0.3	0.3	78
	E20		完形	打製石鏃	姫島黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.6	79
	D17	茶褐色砂	片脚欠	打製石鏃	姫島黒曜石	2.1	1.5	0.4	0.7	80
	E 8	淡茶褐色砂	先端欠	打製石鏃	姫島黒曜石	1.1	1.6	0.3	0.3	81
	E17	暗茶褐色砂	基部欠	打製石鏃	サヌカイト	1.8	1.3	0.3	0.5	82
	C 6	茶褐色砂	端部欠	打製石鏃	サヌカイト	2.2	1.7	0.3	0.8	83
	E17	暗茶褐色砂	完形	打製石鏃	サヌカイト	2.8	1.8	0.4	1.4	84
	Ⅲ区		先端欠	打製石鏃	サヌカイト	1.3	1.5	0.3	0.5	85
	Ⅲ区		完形	打製石鏃	サヌカイト	1.8	1.6	0.2	0.6	86
	Ⅲ区		先端欠	打製石鏃	サヌカイト	1.5	1.6	0.4	0.7	87
	Ⅲ区		完形	削器	黒色黒曜石	1.8	1.3	0.4	1.0	88
	E10	茶褐色砂	完形	搔器	姫島黒曜石	2.8	1.7	0.6	2.1	89
	D17	茶褐色砂	完形	搔器	黒色黒曜石	2.8	1.8	0.6	2.8	90
	E 8	淡茶褐色砂	先端欠	縦長剝片	姫島黒曜石	2.4	1.6	0.3	1.3	91
	D16	暗茶褐色砂	先端欠	石錐	姫島黒曜石	2.3	1.3	0.5	1.3	92
125	D 9	茶褐色砂	刃部欠	磨製石斧	蛇紋岩	9.4	5.2	2.4	146.6	第101図93
242	J 19	暗茶褐色砂	刃部欠	磨製石斧	蛇紋岩	9.0	5.2	1.6	81.4	94
132	I 19		端部欠	磨製石斧	蛇紋岩	11.8	5.9	3.5	413.8	95
130	F17	暗茶褐色砂	基部欠	磨製石斧	蛇紋岩質	9.0	4.9	2.4	175.7	96
127	H17	茶褐色砂	胴部破片	磨製石斧	蛇紋岩	7.5	3.5	0.9	26.9	97
131	H17	茶褐色砂	刃部欠	磨製石斧	緑泥片岩	8.1	3.5	0.8	34.3	98
134	B11	淡茶褐色砂	刃部欠	磨製石斧	蛇紋岩質	15.7	7.6	3.6	569.9	99
152	F17	暗茶褐色砂	完形	敲石	安山岩	7.5	6.4	5.7	334.9	第102図100
155	D19	暗茶褐色砂	完形	敲石	安山岩	5.6	5.5	4.2	159.6	101
160	E 7		完形	敲石	安山岩	9.6	8.4	4.6	486.6	102
140	E 8		完形	敲石	安山岩	10.9	6.4	3.8	409.0	103
161	E17	暗茶褐色砂	完形	すり石	安山岩	9.0	8.8	2.9	297.2	104
153	F28		完形	すり石	安山岩	11.6	11.2	4.5	937.6	105
167	F18	暗茶褐色砂	完形	すり石	安山岩	11.9	10.8	5.2	926.6	106
165	C19	茶褐色砂	完形	すり石	安山岩	9.2	7.9	4.9	548.7	107
159	D15・16	茶褐色砂	完形	すり石	安山岩	11.9	10.0	4.4	836.4	108
137	E19		完形?	すり石	安山岩	10.0	5.7	2.9	170.2	第103図109
154	F17	暗茶褐色砂	完形	すり石	砂岩	10.7	8.9	4.1	586.3	110
104	E F-16	暗茶褐色砂	完形	石斧素材	安山岩	12.5	7.3	2.1	175.4	111
82	E18	暗茶褐色砂	完形	石斧素材	安山岩	14.3	10.8	1.8	268.0	112
5	H17	茶褐色砂	完形	石斧素材	安山岩	16.9	12.2	3.5	530.0	113
76	I 20	茶褐色砂	完形	石斧素材	安山岩	18.3	11.0	1.8	505.0	114
46	D 7・8	茶褐色砂	刃部片	打製石斧	緑泥片岩	3.8	6.3	0.7	20.8	不掲載
48	C 8	暗茶褐色砂	刃部片	打製石斧	安山岩	8.0	6.1	2.4	84.6	不掲載
147	C14	上層	刃部片	打製石斧	安山岩	9.7	4.5	1.7	87.4	不掲載
6	B12		刃部片	打製石斧	緑泥片岩	4.6	6.4	0.8	33.0	不掲載
51	A 9		刃部片	打製石斧	緑泥片岩	7.7	4.6	0.7	38.2	不掲載
46	CD-11	茶褐色砂	基部片	打製石斧	安山岩	9.7	6.3	1.2	109.4	不掲載
	F15		刃部片	打製石斧	安山岩	7.4	5.6	0.8	35.7	不掲載
27	F15		刃部片	打製石斧	安山岩	4.7	7.0	1.1	49.9	不掲載
44	F10付近		完形	打製石斧	緑泥片岩	18.7	5.9	2.8	346.0	不掲載
	H 8		刃部片	打製石斧	安山岩	6.2	5.7	1.0	60.7	不掲載
32	C15	暗茶褐色砂	基部片	打製石斧	安山岩	6.5	7.2	1.9	99.4	不掲載
13	C15		基部片	打製石斧	安山岩	10.8	3.7	1.2	75.5	不掲載
61	C16	茶褐色砂	刃部片	打製石斧	緑泥片岩	7.4	6.4	1.1	64.5	不掲載
64	C15		刃部片	打製石斧	緑泥片岩	8.3	8.8	1.6	171.6	不掲載

登録番号	出土位置	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
12	E18		刃部片	打製石斧	安山岩	8.0	6.8	1.2	73.0	不掲載
112	E17	暗茶褐色砂	基部片	打製石斧	安山岩	8.9	7.8	1.0	103.6	不掲載
117	E20	暗茶褐色砂	基部片	打製石斧	安山岩	5.4	5.2	0.7	31.9	不掲載
107	D16	暗茶褐色砂	胴部片	打製石斧	安山岩	8.5	6.7	1.0	65.7	不掲載
110	D22		胴部片	打製石斧	安山岩	5.8	6.5	1.8	86.4	不掲載
115	F17	暗茶褐色砂	刃部片	打製石斧	安山岩	5.8	6.6	0.7	41.3	不掲載
116	F17	暗茶褐色砂	胴部片	打製石斧	安山岩	8.9	7.4	1.5	140.8	不掲載
120	F17	暗茶褐色砂	刃部片	打製石斧	安山岩	8.8	6.6	1.0	76.7	不掲載
90	E20	暗茶褐色砂	刃部片	打製石斧	緑泥片岩	5.9	7.7	1.0	68.9	不掲載
101	I20	暗茶褐色砂	胴部片	打製石斧	緑泥片岩	9.6	4.8	0.9	74.1	不掲載
106	I20	暗茶褐色砂	胴部片	打製石斧	緑泥片岩	9.6	5.6	0.9	70.9	不掲載
66	I19・20	茶褐色砂	一部欠	打製石斧	緑泥片岩	9.1	4.4	0.8	46.5	不掲載
4	I20	淡茶褐色砂	刃部片	打製石斧	安山岩	6.5	7.2	1.1	64.5	不掲載
62	H21		刃部片	打製石斧	安山岩	5.0	7.6	0.9	41.2	不掲載
100	H23		刃部欠	打製石斧	安山岩	7.4	6.3	1.1	82.2	不掲載
65	GH-22		胴部片	打製石斧	緑泥片岩	6.1	5.1	1.1	49.5	不掲載
67	FG-22		胴部片	打製石斧	緑泥片岩	7.6	6.0	1.0	64.0	不掲載
68	GH-22		基部片	打製石斧	安山岩	7.3	6.4	1.7	80.0	不掲載
122	I19		刃部片	打製石斧	安山岩	4.9	8.5	1.0	61.2	不掲載
72	FG-20・21	暗茶褐色砂	基部片	打製石斧	安山岩	9.4	7.3	1.4	123.7	不掲載
232	G23	暗茶褐色砂	胴部片	打製石斧	安山岩	4.8	6.8	1.5	62.4	不掲載
114	E27	暗茶褐色砂	刃部欠	打製石斧	安山岩	8.4	5.0	1.0	43.2	不掲載
71	GH-27・28	上層	刃部片	打製石斧	安山岩	8.4	8.2	1.1	91.1	不掲載
78	E36		刃部片	打製石斧	安山岩	11.2	11.7	2.4	393.1	不掲載
69			基部片	打製石斧	安山岩	8.4	6.6	1.4	86.0	不掲載
45	I18	茶褐色	基部片	打製石斧	緑泥片岩	7.3	4.0	1.2	51.9	不掲載
47			刃部片	打製石斧	安山岩	6.7	6.0	1.3	61.9	不掲載
19	D1		基部欠	打製石斧	安山岩	10.7	7.6	2.3	267.3	不掲載
	Q58		胴部片	打製石斧	緑泥片岩	9.6	6.2	1.8	127.2	不掲載
218	EF-16	暗茶褐色砂	完形	すり石	砂岩	5.0	2.5	1.9	33.1	不掲載
222	H19	茶褐色	完形	すり石	砂岩	7.3	3.1	2.4	45.2	不掲載
60			完形	すり石	安山岩	8.9	8.7	3.6	393.1	不掲載
166	D15	暗茶褐色砂	完形	敲石	安山岩	8.1	7.7	3.3	270.6	不掲載
164	E15		完形	敲石	安山岩	7.6	7.0	3.6	227.7	不掲載
158	F22	暗茶褐色砂	完形	敲石	安山岩質	8.0	7.5	4.3	331.0	不掲載
259	DE-29・30	上層	完形	敲石	安山岩	4.6	4.2	3.7	96.1	不掲載
156	F17	暗茶褐色砂	完形	敲石	安山岩	5.7	5.3	4.8	181.6	不掲載
139	F19	暗茶褐色砂	完形	敲石	安山岩	7.9	3.5	3.0	132.0	不掲載
616	I19・20	茶褐色砂	完形	敲石?	安山岩	8.0	6.0	4.8	274.8	不掲載
143	E18	暗茶褐色砂	完形	丸弾	安山岩	5.3	4.6	3.5	85.9	不掲載
214	E7	茶褐色砂	半欠?	端部磨耗	砂岩	9.2	4.2	2.7	140.6	不掲載
147	C9		破片	石皿	安山岩	12.2	2.8	4.3	120.3	不掲載
59	E9付近	上層	破片	石皿	安山岩	7.9	7.1	2.7	164.6	不掲載
37	H14		破片	石皿	安山岩	9.3	6.1	1.4	61.1	不掲載
121	I19		破片	石皿	安山岩	8.6	5.4	1.4	66.0	不掲載
283	I26		破片	石皿	安山岩	8.0	7.3	8.5	778.7	不掲載
291	F16	暗茶褐色砂	破片	石皿	安山岩	7.7	6.6	7.2	650.1	不掲載
	I20	淡茶褐色砂	完形	削器	姫島黒曜石	7.6	2.2	1.6	22.9	不掲載

表13 包含層出土土器片円盤一覧表

(単位cm・g)

登録番号	出土位置	層位	遺存状況	形態	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
242	I18	茶褐色砂	完形	B-2	条痕	4.9	4.8	0.8	25.0	第104図1
334	I18	茶褐色砂	完形	A-2	条痕	4.4	4.4	0.7	20.9	2
333	D15	暗茶褐色	完形	B-2	ナデ	4.1	3.7	0.7	13.3	3

IV 上唐原遺跡試料の灰像分析

松谷 暁子

(東京大学総合研究資料館)

1 はじめに

灰像とは、動植物の灰を顕微鏡で観察した際の組織像であるが、遺跡の炉やカマドの灰、焼土などからしばしば植物の表皮細胞に由来すると思われる形態の灰像が観察される。イネ科植物の表皮細胞には珪酸が多く含まれており、そのため燃焼後にも珪酸の含まれていた部分が残っているのである。弥生時代以降の遺跡の灰や焼土を観察すると、イネの籾殻や藁の灰像が認められることがきわめて多い。

しかし、福岡県山崎遺跡から採取された古墳時代のカマド試料から検出されたのは、イネの灰像ではなく、イネ科に由来すると考えられる灰像でもなく、樹木葉由来と考えられる珪酸体であり、現生試料と比較したところ、ブナ科のシイの葉の珪酸体に似ていた(松谷1992)。樹木葉由来と考えられる珪酸体は九州や沖縄などに多く、北海道、東北、関東では見いだされないという指摘がある(近藤1976)。福岡県上唐原遺跡から採取された試料について灰像分析を行った結果、樹木葉由来と考えられる珪酸体が得られたので以下に報告する。

2 試料

上唐原遺跡の試料は、以下の5点である。

- 1) 縄文1号住居跡炉跡の焼土
- 2) 縄文1号住居跡炉跡の堆積土
- 3) 縄文1号住居跡炉跡敷石間の焼土
- 4) 古墳時代33号住居跡カマド内焼土
- 5) 古墳時代3号溝出土土器内焼土

この他参考試料として、以下の2試料がある。

- 6) 山崎遺跡縄文後期7号住居堆積土
- 7) 弥生前期牛頭天王遺跡201号土坑堆積土

3 方法

希塩酸処理後、時計皿に移して鉱物を分離し、水洗3回、アセトンによる洗浄後、封入剤(オイキット)によりプレパラートを作成し、光学顕微鏡で観察した。

4 結果

上唐原遺跡の縄文時代後期住居跡の炉跡の試料、すなわち試料1-3から、不定形の珪酸体が検出された(写真1-3)。山崎遺跡の試料から見いだされた不定形珪酸体に比べると形態が異なり、樹木の種類が異なるのではないかと考えられるが、どういう種類なのかは今のところ不明である。炉跡上部の試料の方が珪酸体が少なく、炉跡敷石間の焼土からの方が多かった。

上唐原遺跡の古墳時代の試料では、カマド内焼土である試料4の方からは、不定形の珪酸体は認められなかったが、タケカササに由来するのではないかと考えられる珪酸体が観察された(写真4)。試料5すなわち溝から出土した土器内焼土の方からは不定形の珪酸体が認められた(写真5)。珪酸体の量も試料4よりはやや多い。これについても樹木の種類は今の所不明である。

参考試料のうち、山崎遺跡縄文7号住居炉跡堆積土からは、不定形の珪酸体が観察された(写真6)。縄文2住および3住の炉跡からすでに報告済み(松谷1992)のと同類かと考えられるが、量は少なかった。

ところが、弥生前期の牛頭天王遺跡201号土坑の試料は、他の試料とまったく異なり、イネの穎、すなわち籾殻の灰像が主体であった(写真7a)。イネの葉や茎に存在するクロス型の珪酸体の連続した部分の気孔も認められ(写真7b)、イネが存在したことは確かである。

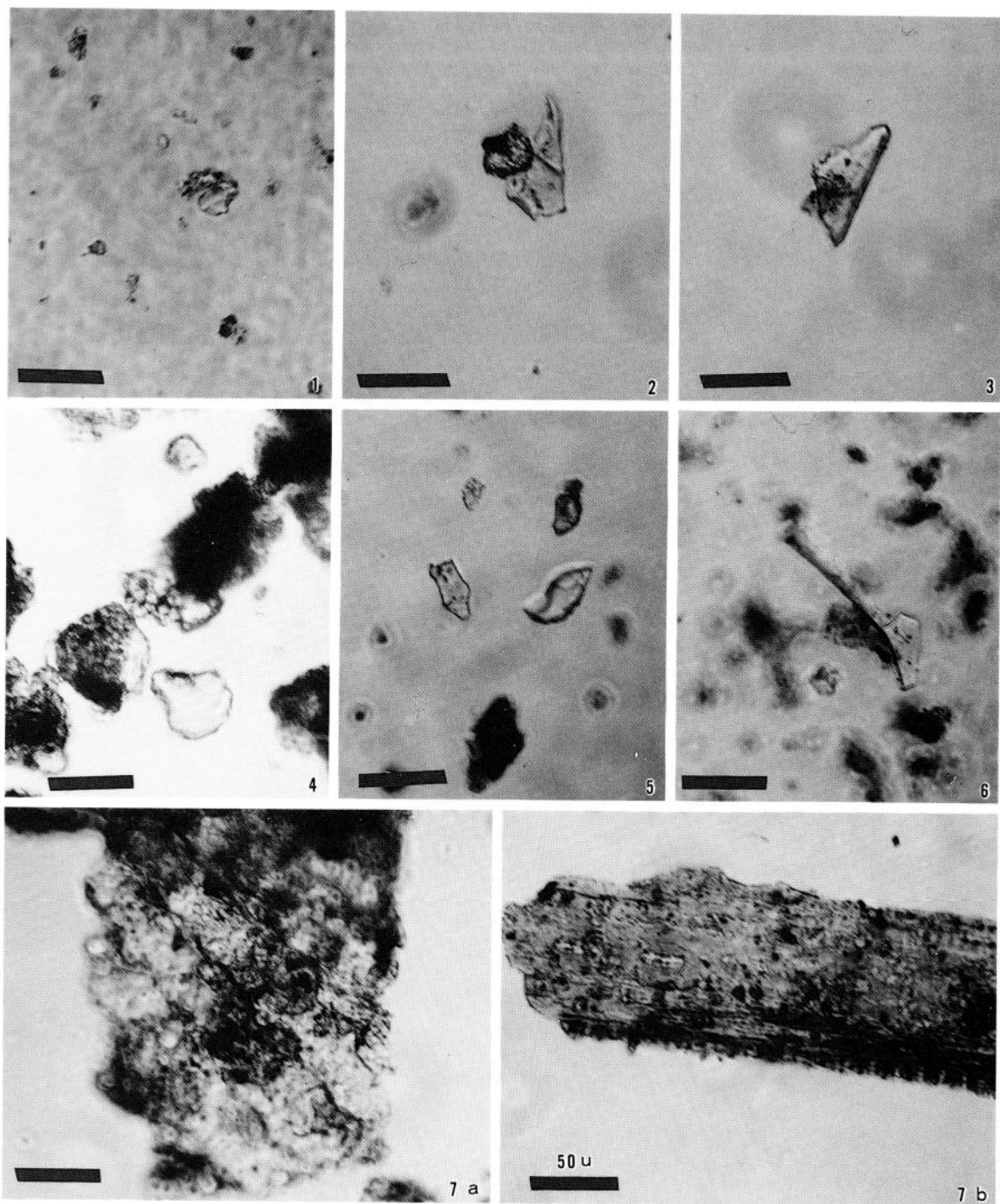
以上、上唐原遺跡(縄文後期と古墳時代)、山崎遺跡(縄文後期)、牛頭天王遺跡(弥生前期)の3遺跡について灰像分析の結果を述べた。これらの遺跡は距離的にも比較的近いが、検出された珪酸体は遺跡毎に異なる傾向が認められる。上唐原遺跡と山崎遺跡からは、樹木起源と考えられる不定形の珪酸体が見いだされたが、それらを供給した樹木の種類はブナ科と推定されるが今の所種名は判明していない。また、上唐原遺跡と牛頭天王遺跡は同じ山国川沿いにあり、距離もきわめて近いのに、前者では古墳時代になってもイネが認められないのに対し、少し下流域の後者ではイネの存在が明かであるという差異が顕著であった。

文献

近藤鍊三 1976 樹木起源の珪酸体について。ペドロジスト20-2、70-84。

松谷暁子 1992 山崎遺跡出土試料の灰像分析および炭化材の樹種について。

「権田バイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集」福岡県教育委員会、213-217。



- 1 試料1から検出された不定形の珪酸体。
- 2 試料2から検出された不定形の珪酸体。
- 3 試料3から検出された不定形の珪酸体。
- 4 試料4から検出された機動細胞珪酸体。

- 5 試料5から検出された不定形の珪酸体。
- 6 試料6から検出された不定形の珪酸体。
- 7 a 試料7から検出されたイネ殻類似の灰像
- 7 b 試料7から検出されたイネ藁類似の灰像

なお、写真の倍率はどれも同じである。松谷（1992）の山崎遺跡の写真のスケールの数字は間違っていて、上唐原遺跡と同じく50μである。この場を借りておわびと訂正をさせていただきたい。

V おわりに

上唐原遺跡で発見した2軒の縄文時代住居跡は、中央部に石囲炉を有する、隅丸方形あるいは隅丸方形に近いプランの竪穴住居跡で、縄文後期中頃に近い前半期の土器が出土する。

周防灘南岸の特に豊前地域の縄文後期の住居跡は、10年足らずの間の発掘調査で発見例が急増し、群をなした住居跡の時期も近接した例が多い。住居跡群は当時の集落形態を窺える貴重な資料であり、広範囲に調査された遺跡はまさに好条件であると言える。しかし、今回の上唐原遺跡の報告が発掘調査から既に7ヶ年を過ごしているように、正式な発掘調査報告書を刊行できないまま時間だけが経っているという焦燥も感じざるを得ない。このような状況のなか、筆者も豊前地域で住居跡群の調査にかかわる機会を得て、住居跡形態の変遷などについて概略的に触れたことがある^(註1)。

上唐原遺跡の縄文時代住居跡

上唐原遺跡の縄文1・2号住居跡をみたとき、2号住居跡を完掘していないために、特徴を十分に検討出来ないかも知れないが、床面の状況などからその性格をみてみたい。

床面の中央部に施設された遺構としては柱穴・石囲炉などがあげられる。柱穴は2号住居跡では検出できなかったが、1号住居跡ではP1～P6で炉を囲むように発見された。

石囲炉は、1・2号住居跡ともに、床面中央より西側あるいは南西側に少し偏って施設されていて、1号は敷石を伴う石囲炉だが、2号は敷石を伴わない。山崎・石町遺跡での住居跡の石囲炉^(註2)と比較してみると、上唐原1号住居跡の炉は、山崎3号住居跡の炉に近い規模であるが、敷石は小さい。また山崎1・7号の炉よりも囲み石は小振りですえ方は浅めである。そして上唐原2号住居跡の炉はさらに囲み石が粗雑な組み方で構築されているような印象がある。

さらに炉・柱穴のほかにも注目したい施設がある。2軒の住居跡とともにみられる川原石を立てて据えた立石である。炉から1m以内の場所の床面に、半分埋め込むようにして据えられているが、石の軸線が炉に向かうことから、単に炉の火熱を利用して乾燥あるいは焼く際に立て掛けたり、上に架けたりするような施設とは考え難い。突出した上面が若干磨耗することから、調理をする施設の可能性もある。炉からは北東側に位置することが、二つの住居跡で共通していて、おそらく住居入り口と反対側、すなわち奥側である可能性が高い。住居内で奥側に石柱や石壇を施設した住居跡については、祭祀的な機能をもち、司祭者家屋とみる説^(註3)がある。上唐原遺跡で発見された住居跡内のこの施設が祭祀的な性格を有しているか否かの判断は類例を待って検討したい。いまは、石柱・石壇を施設する住居跡が、中部山岳地方を中心に分布し、中期中葉に出現して中期終末期に衰退するという変化^(註4)に注目しておきたい。石囲炉を伴った

住居跡が後期前半以前の九州島内周辺地域に類例をみないことから、石囲炉が独自に成立したか、九州島外から伝播してきたものと考えざるを得ないが、該期にみられる東日本の文化複合体^(註5)に伴って伝播してきた可能性が高く、中部山岳地方が故地であるとしても大きな違いがないであろう。

このような施設を有する住居跡の例としては、大分県朝地町田村谷遺跡2号住居跡^(註6)がある。鐘崎Ⅲ式期の隅丸方形プランで石囲炉を有する住居跡であり、上唐原遺跡例と共通するところがある。この他にも豊前地域では鐘崎Ⅲ式土器を伴う住居跡に類例がある^(註7)。自然堤防上に立地した砂地の地山や、粘土の地山の場合では床面に立石があれば容易に発見できるであろう。しかし山崎遺跡や節丸西遺跡などのように、谷底平野が開けた扇状地などの立地で土石流の跡のように石塊が無数にみられる地山の場合では、床面での立石を確認し難い側面をもっていて、見落とす危惧もある。床面の精査によって、今後の類例が増加することに期待し、立石のもつ性格についての検討も今後の課題にしておきたい。

隅丸方形プランで石囲炉を有する住居跡は、山崎遺跡の1・3・7号住居跡などに類例を知ることができ、山崎遺跡出土土器の時期でいうⅡ期とⅢ期にあたるが、上唐原1・2号住居跡はⅢ期の土器が主に出土していて、住居跡の形態にも共通する要素が多いことからみて、時期的には近接して構築・使用されたものと推定したい。

上唐原縄文1号住居跡では、いわゆる鐘崎Ⅲ式に含まれる土器が主体をなしている。2号住居跡では鐘崎Ⅲ式が主体を占めるものの、口頸部が長めに開いて口縁部が屈曲しない器形の有文鉢の存在や、沈線の細線化と平行沈線からなる文様の直線化・疑似縄文手法を用いた北久根山式併行期の土器を若干含んでいる。また先行する土器の出土も、2号住居跡より1号住居跡出土土器に出現率が高いようで、1号住居跡の廃絶の時期が2号住居跡の廃絶よりも古いものと考えられる。P.75で前述したように、2号住居跡出土土器が京都府桑飼下遺跡出土土器^(註8)と近いことに注意しておきたい。

住居跡以外の遺構

不整形竪穴は、後世の住居跡と重複していたこともあり、検出したプランよりも本来大きな遺構であったと推定される。また土坑やI20区付近の土器集中部分は、住居跡ではないが集落内で付随した役割を担っていた施設であった可能性もあろう。出土土器からは住居跡と大きな時期差は考えられず、住居跡構築期から廃絶後の時期幅で含まれていて、時期的に大きく遅れるものはみられない。

包含層出土土器では、先行形式の鐘崎Ⅱ式を若干含むが、鐘崎Ⅲ式が主体的である。後続する土器群として北久根山式併行期を含み、西平式も続くが、三万田式・晩期前半・晩期後半の土器はそれぞれ僅かにみられる程度である。

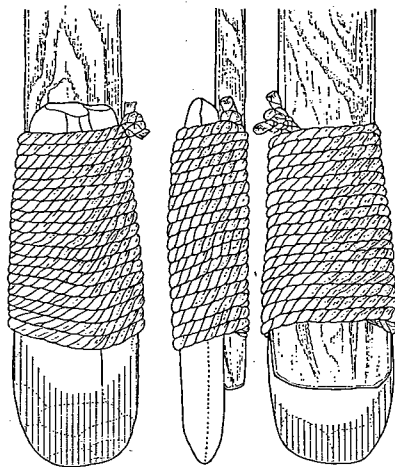
石器類の様相

上唐原遺跡出土の石器類をみると、打製石斧の素材をはじめ石皿・すり石・敲石などの素材では、安山岩製が圧倒的に多い。これは遺跡の横を流れる山国川流域の上流に安山岩の露頭があり、現在の河川敷にもかなりの安山岩の大きな礫塊がみられるなど、付近に石材が豊富にみられることに起因するであろう。

打製石斧の場合、土掘り具とみられるが、磨耗痕が片面の刃部に偏る傾向があることや、基部側の端部にも刃部と同様な痕跡がみられて磨耗する例があり、上下の区別に迷うものもある。上下を入れ替えての使用の可能性や、折損時などに応急的に基部側が用いられることも考慮する必要がある。

形態的には、刃部が基部よりも幅広な撥形や、いくらか撥形に似た例を含むものの、大半は短冊形である。両側縁に抉りを設けて分銅形に似た形になる例もある。刃部は膨らんだ側の面の刃部に、土を掘った際に擦れた線条痕が残されるものや、滑らかな面になる例もみられた。いわゆる磨痕である。また石斧を着柄した際の磨耗痕については、基部側の平坦な面に水平方向などの擦痕がみとめられる例は僅かに1点であった。しかし幾つかの資料では、抉り部分の側縁に敲打痕とは異なる磨耗痕がみられる。水平方向の擦痕などは、桑飼下遺跡で鈴木忠司が想定したような着柄方法^(註8)(第106図)の場合にみられるとすることに異論はないが、平坦面よりもむしろ抉り部の側縁に負担のかかるような使用方法を考える必要もあろう。鋏としての機能をもたせた着柄方法も考えられ、その際には磨製石斧を用いた横斧の柄のようにかえりのある柄を使用することになろう。またふぐしとしての使用法も想定される。いずれにせよ、堅固に固定するために、単純に水平方向のみならず、斜め方向に緊縛することもありうるとみておきたい。抉り部の幅は5cmを下回る例や8cm前後の例も若干あるものの、6cm前後に集中する。このことは柄の側の着柄部幅も6cm前後であるものと推定される。石斧自体の重量が500g前後であろうと、刃部の幅が10cm前後であろうと、着柄部の幅を6cm前後に抑えて着柄を堅固にするために抉りを設けるか、撥形に近い形態の石斧が多用されているように看取される。

縄文1号住居跡で使用痕剥片として報告した(7)、縄文2号住居跡で敲石として報告したこまかな敲打使用痕のある横剥ぎの安山岩剥片(15)、包含層出土の石斧素材とした安山岩の翼状に似た剥片(111・112)など



第106図 打製石斧の着柄想定図
(渡辺誠編1975より引用)

は、先端側の縁が薄く鋭利であるために収穫具としての使用も可能であり、なかには小形ながらも打製石斧と同様に使用することも可能である。打製石斧を製作する際の剥片を含めて、安山岩の剥片が横剥ぎ剥離される例が多い。形態的には旧石器時代の国府型ナイフなどの瀬戸内技法^(註9)に似ていて、翼状剥片を大形化したようなもので、反りがある。またなかには背側に自然面を残すものもみられる。このように石斧素材に横剥ぎ剥片を用いている例としては香川県永井遺跡^(註10)などにもみられる。

すり石では、上下両面が平坦で断面形が長方形や三角形を呈する例が幾つかみられる。

磨製石斧では、縄文1号住居跡の例が2点ともに小形扁平な木材細部加工用とみられる種類の磨製石斧である。縄文2号住居跡や不整形竪穴の例ではそれぞれ1点は伐採斧に使用しうるが、もう1点は鑿状の細い石斧や薄めの石斧で細部加工用であろう。

石器類の組成

上唐原遺跡では総数302点の石器類が出土した。縄文1・2号住居跡、不整形竪穴、土坑、包含層からそれぞれ出土した、石器類の器種の数量と構成比を表に示すが、打製石斧と石皿、すり石・敲石の類で半数以上を占めている。これらの石器は植物質食料採集活動および植物の加工調理に用いられる道具である。また不整形竪穴で出土した打欠石錘の量が比率としてはめだっているが、全体的には打欠石錘は2割前後を占めることになる。打製石鏃は1割前後で、姫島産黒曜石を素材にする例が大半である。伊万里湾産の可能性のある黒色黒曜石の量は極めて少ない。山崎遺跡での伊万里湾産黒曜石の含まれる割合よりも低率であることから、西北九州的な生産活動とはより疎遠であったことを物語っているといえよう。

また上唐原遺跡での打欠石錘の出現率が他遺跡よりも高いことと、打製石鏃の低率さは山国川に近接した自然堤防上の立地が関係しているのかも知れないが、打欠石錘の重量が100g以下に留まる例の多さからみて、漁網錘としての利用を考慮せざるを得ない。加えて、用途の不明な土器片円盤についても、漁網錘への利用が可能であろう。

このことは狩猟と漁撈を比較したときに、やや漁撈の方に比重の高い生活が想定されることになるものの、植物質食料採集活動を上回るものではないと考えている。一方、木材伐採や木材加工に使用される磨製石斧の量は全体で5%と低率であり、各遺構別でも10%以下である。

豊前地域の後期の遺跡で、石器類の組成のわかる遺跡での組成を表14に示すが、各遺跡をみると、山崎・石町遺跡のⅢ期以降の住居跡で磨製石斧が徐々に増加していく傾向はみられるものの、全体的には豊前地域の該期遺跡では低率であることにはかわりはない。

佐知遺跡^(註11)やボウガキ遺跡^(註12)では、石器組成にばらつきがみられ、ボウガキ遺跡では打製石鏃の比率が高めで、その他の石器の占める割合も多い。佐知遺跡では打製石鏃の占める割合はボウガキ遺跡よりも低い、石皿・すり石などの割合は低率である^(註13)。

表14 上唐原遺跡と周辺遺跡出土石器の器種構成比

上唐原遺跡出土石器の器種構成比

	1号住	構成比	2号住	構成比	不整形	構成比	土坑1	構成比	包含層	構成比	総計	構成比
打製石斧など	7	17.5%	15	26.3%	6	18.2%			97	57.7%	125	41.4%
石皿・すり石など	7	17.5%	13	22.8%	1	3.0%			27	16.1%	48	15.9%
打欠石錘	10	25.0%	17	29.8%	20	60.6%	1	25.0%	16	9.5%	64	21.2%
打製石鏃	5	12.5%	6	10.5%	2	6.1%	3	75.0%	17	10.1%	33	10.9%
磨製石斧	2	5.0%	4	7.0%	2	6.1%			7	4.2%	15	5.0%
削器・搔器・他	9	22.5%	2	3.5%	2	6.1%			4	2.4%	17	5.6%
計	40	100.0%	57	100.0%	33	100.0%	4	100.0%	168	100.0%	302	100.0%

山崎遺跡出土石器の器種構成比

	4号住	構成比	1号住	構成比	7号住	構成比	2号住	構成比	6号住	構成比	包含層	構成比	総計	構成比
打製石斧	2	18.2%	3	23.1%	7	33.3%	33	31.4%	18	29.5%	275	46.9%	338	41.9%
石皿・すり石・敲石	3	27.3%	6	46.2%	4	19.0%	29	27.6%	12	19.7%	45	7.7%	100	12.4%
打欠石錘		0.0%		0.0%		0.0%	6	5.7%		0.0%	2	0.3%	8	1.0%
打製石鏃	3	27.3%	1	7.7%	3	14.3%	13	12.4%	13	21.3%	144	24.6%	179	22.2%
磨製石斧	1	9.1%	1	7.7%	3	14.3%	7	6.7%	5	8.2%	49	8.4%	67	8.3%
削器・搔器・他	2	18.2%	2	15.4%	4	19.0%	17	16.2%	13	21.3%	71	12.1%	114	14.1%
計	11	100.0%	13	100.0%	21	100.0%	105	100.0%	61	100.0%	586	100.0%	806	100.0%

石町遺跡出土石器の器種構成比

	1号住	構成比	2号住	構成比	4号住	構成比	包含層	構成比	総計	構成比
打製石斧など	6	54.5%	44	51.2%	6	33.3%	23	59.0%	88	52.4%
石皿・すり石など		0.0%	6	7.0%	5	27.8%	2	5.1%	13	7.7%
打欠石錘		0.0%	1	1.2%		0.0%		0.0%	1	0.6%
打製石鏃		0.0%	11	12.8%	2	11.1%	7	17.9%	22	13.1%
磨製石斧	3	27.3%	6	7.0%	3	16.7%	3	7.7%	15	8.9%
削器・搔器・他	2	18.2%	18	20.9%	2	11.1%	4	10.3%	29	17.3%
計	11	100.0%	86	100.0%	18	100.0%	39	100.0%	168	100.0%

佐知遺跡出土石器の器種構成比

	4号遺	構成比	16号遺	構成比	40号遺	構成比	その他	構成比	総計	構成比
打製石斧など	8	34.8%		0.0%	3	60.0%	34	55.7%	45	48.9%
石皿・すり石など	1	4.3%		0.0%	1	20.0%		0.0%	2	2.2%
打欠石錘	4	17.4%	3	100.0%	1	20.0%	16	26.2%	24	26.1%
打製石鏃	7	30.4%		0.0%		0.0%	8	13.1%	15	16.3%
磨製石斧		0.0%		0.0%		0.0%	3	4.9%	3	3.3%
削器・搔器・他	3	13.0%		0.0%		0.0%		0.0%	3	3.3%
計	23	100.0%	3	100.0%	5	100.0%	61	100.0%	92	100.0%

ボウガキ遺跡出土石器の器種構成比

	1号住	構成比	2号住	構成比	その他	構成比	総計	構成比
打製石斧など	10	33.3%	1	4.0%	5	14.7%	16	19.5%
石皿・すり石など	4	13.3%	3	12.0%	2	5.9%	8	9.8%
打欠石錘	1	3.3%	2	8.0%		0.0%	3	3.7%
打製石鏃	8	26.7%	12	48.0%	7	20.6%	27	32.9%
磨製石斧		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%
削器・搔器・他	7	23.3%	7	28.0%	20	58.8%	28	34.1%
計	30	100.0%	25	100.0%	34	100.0%	82	100.0%

豊前地域においては、上唐原遺跡例から山崎・石町遺跡例の頃の石器組成からみて、植物質食料採集活動に主体をおいて、狩猟・漁撈が従の状態の生産経済基盤にあるものと推定され、桑飼下型経済類型^(註14)に近いと思われる。

- 註1 小池史哲 1993 豊前地域の縄文後期住居跡 古文化談叢 第30集(下)
- 2 福岡県教育委員会 1992 山崎遺跡I 付. 石町遺跡 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告—7—
- 3 水野正好 1969 縄文時代集落研究への基礎的操作 古代文化 第21巻3・4号
- 4 山本暉久 1994 石柱・石壇をもつ住居址の性格 日本考古学 第1号 なお、山本はこのような住居址が、特殊な祭祀家屋ではなく一般家屋であって、祭祀的な施設を必要とする社会構造の変化に起因するとみている。
- 5 渡辺 誠 1968 九州地方における抜歯の風習 帝塚山考古学No.1
- 6 朝地町史談会 1986 朝地田村遺跡 大分県大野郡朝地町田村所在遺跡発掘調査報告書Ⅲ
- 7 未報告資料であるが、上唐原遺跡と山国川を挟んで位置する大分県三光村佐知久保知遺跡の縄文時代住居跡(大分県教育委員会1994 大分県埋蔵文化財年報2に写真が掲載されている)や、安心院町飯田二反田遺跡の1号住居跡の写真(大分県教育委員会1992 遺跡が語る大分の歴史)では立石があるようにみえる。また平成6年度に圃場整備事業に伴って調査された豊前市狭間天神前遺跡の住居跡に類例がある。
- 8 渡辺 誠編 1975 桑飼下遺跡発掘調査報告書 舞鶴市教育委員会
- 9 芹沢長介 1960 石器時代の日本
- 10 香川県教育委員会 1990 永井遺跡 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第9冊
- 11 大分県教育委員会 1989 佐知遺跡 大分県文化財調査報告書 第81輯
- 12 三保の文化財を守る会・中津市教育委員会 1992 ボウガキ遺跡
- 13 石器類の組成では、調査時における調査担当者の着眼点の差によって抽出される石器類が異なるなどの差が生じる危険性もある。今後の調査においては、土器類のみならず石器類も正確かつ公平に抽出して具体的に報告されることに期待したい。
- 14 前掲の註8文献と同じ

付編 福岡県椎田町山崎遺跡の 複式炉使用土器

はじめに

福岡県築上郡椎田町大字越路字山崎所在の山崎遺跡は、椎田道路建設に先だって1986年度に発掘調査された遺跡で、隣接する大字越路字石町所在石町遺跡とともに既に調査報告書は刊行されている^(註1)。しかし、報告時には2号住居跡の複式炉に使用されていた土器が紛失していて、収録できていない。その後、椎田道路・豊前バイパスなどの北大道路関係の諸遺跡の遺物整理作業が進行し、他遺跡の遺物に混入していた山崎遺跡2号住居跡の炉跡使用土器が確認できたので、ここに紹介することにする。

山崎遺跡2号住居跡(図1~3)

山崎遺跡は、英彦山塊を刻んで流下する岩丸川の右岸、標高21m位に位置する。岩丸川谷底平野から開ける扇状地で、河岸に近接して立地しているが、縄文後期の住居跡群が発見された。隣接する石町遺跡と併せると、隅丸方形ないし方形に近い例が4軒、円形ないし円形に近い例が5軒、楕円形が1軒などがあり(図1)、これらの住居跡からは小池原上層式から三万田式の

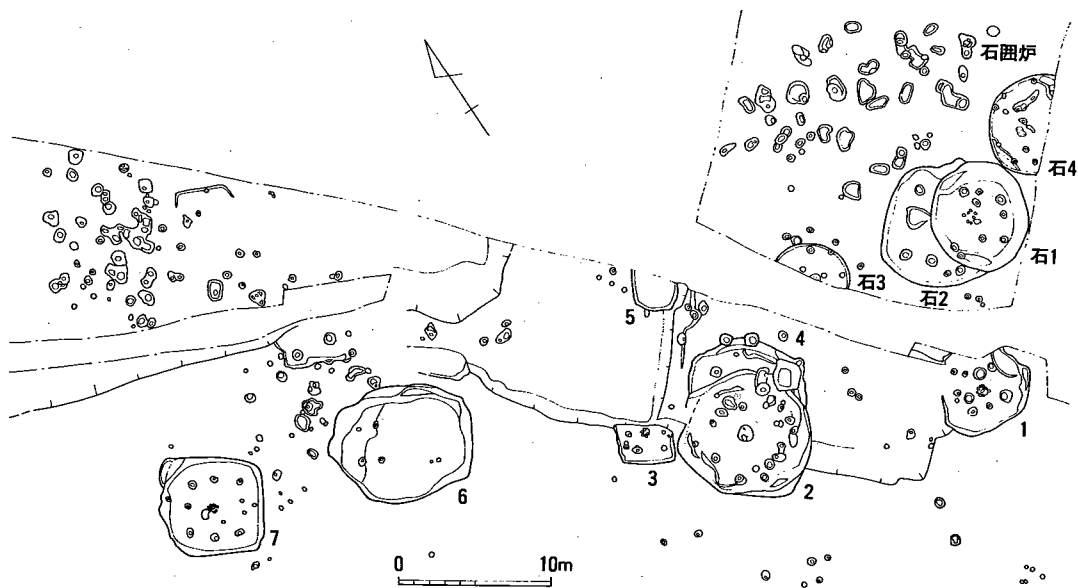


図1 山崎・石町遺跡の縄文時代住居跡群(1/500)

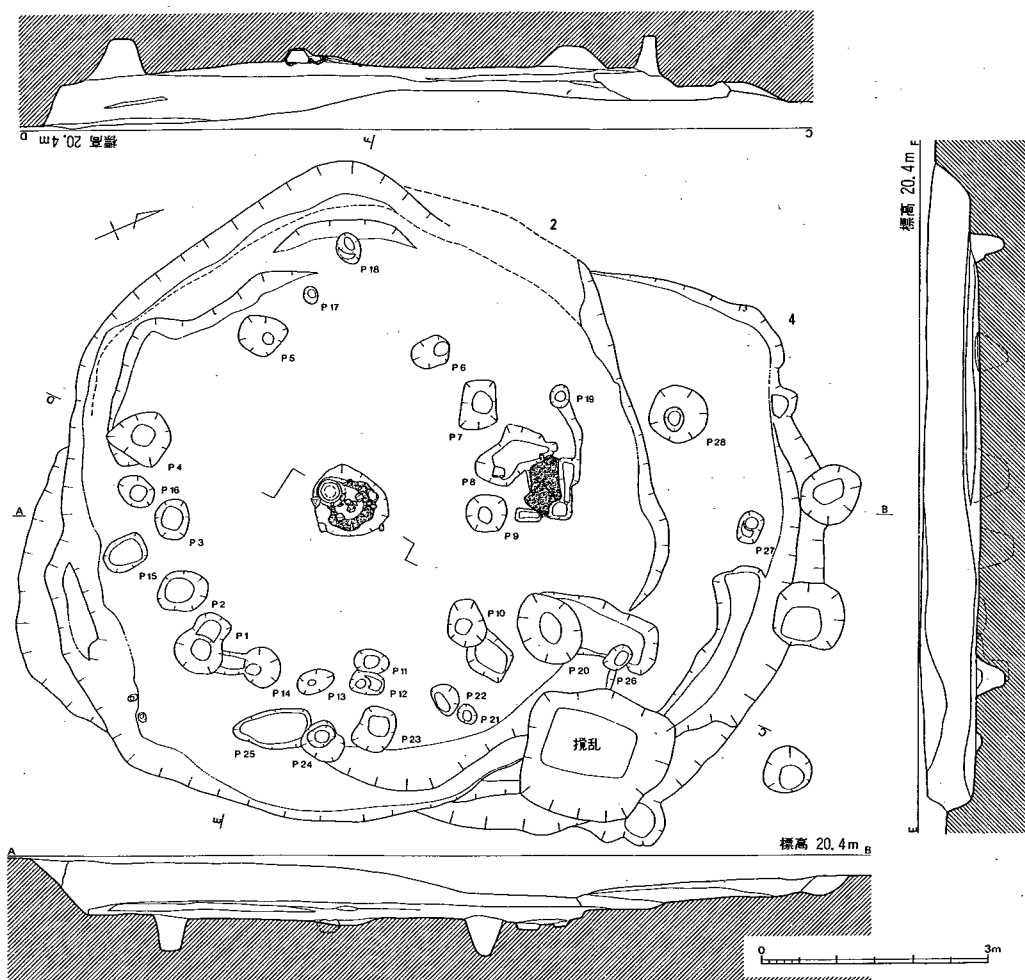


図2 山崎遺跡2号住居跡実測図 (1/100)

時期幅に考えている土器が出土している。

2号住居跡は、4号住居跡と重複するが、直径8.0~8.5mの不整円形プランで、周壁は最大高0.7m程度に残るが、礫堆積層に掘り込んでいるためか緩傾斜の部分もある。床面は約42.5㎡の広さで、地床炉に埋設土器を伴う複式炉が中央にある。柱穴は周壁と炉の間に巡る(図2)。なお、複式炉の北北東側にある石囲炉の抜き跡は4号住居跡の炉跡である。

炉は、長径105cm、短径90cm、深さ10cm程の皿状の凹みのなかに、径70cm程の馬蹄形に焼土が広がる地床炉がある。さらに焼土の南西側脇には、口縁部を打ち欠いた鉢形土器が埋設されて

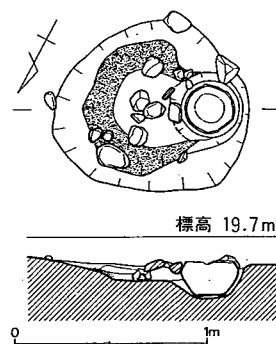


図3 2号住居跡複式炉実測図 (1/40)

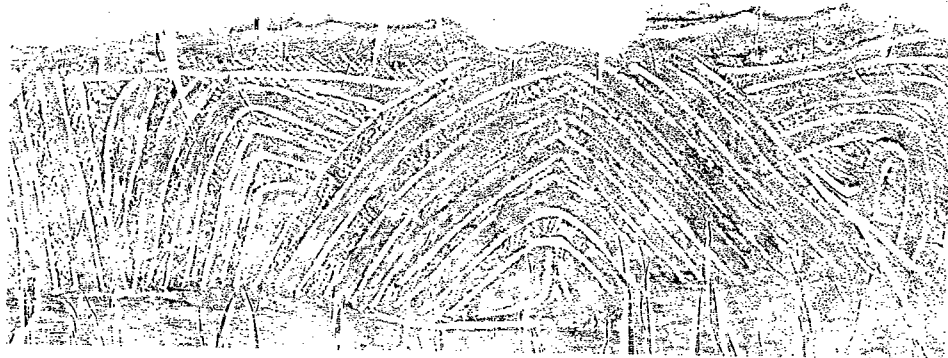
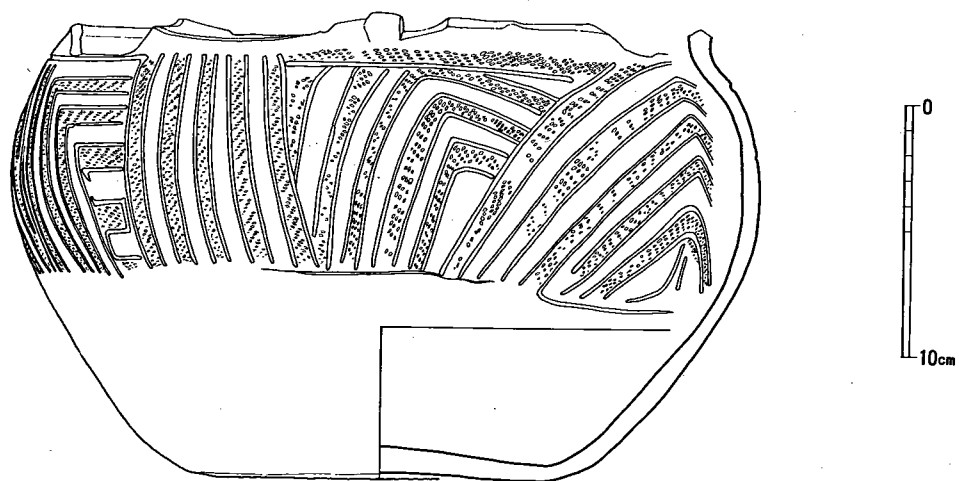


图4 複式炉使用土器実測図・拓影(1/3)

いる。したがって形態的には地床炉と埋設土器からなる複式炉である(図3)。

住居跡からは、パンコンテナ20箱満杯の土器片が土器塚のように堆積していて、打製石斧・石鏃・磨製石斧・石皿・すり石・土器片円盤なども出土した。土器は後期中葉の北久根山式期のもので、他の住居跡などと比較すると打製石斧や石皿の量が突出する。打製石斧は扁平なタイプで、石皿の使用面は平坦である。

複式炉使用土器(図4)

頸部で打ち欠かれて口縁部は残らない。残存器高18.2cm、胴最大径29.8cm、底部径14.2cmの大ききで、頸部は径25.3cmを測る。底部は僅かに上げ底気味で、胴部は丸く膨らむ。胴部最大径の部分を中心に縄文R Lが施文され、山形や垂線・鈎形に多重の平行沈線模様を描いて、沈線間を一つ隔てに研磨で磨消している。なお山形や鈎形の核の部分にはL字や己字形蛇行の文様が使用されている。また外面の頸部や胴部下半部と、内面は横方向に研磨調整されている。胎土に細砂・砂粒・雲母・石英・角閃石を含み、良好な焼成で、明褐色ないし淡褐色の色調を呈するが、内面の胴部から頸部にかけては褐色の色調を呈する。

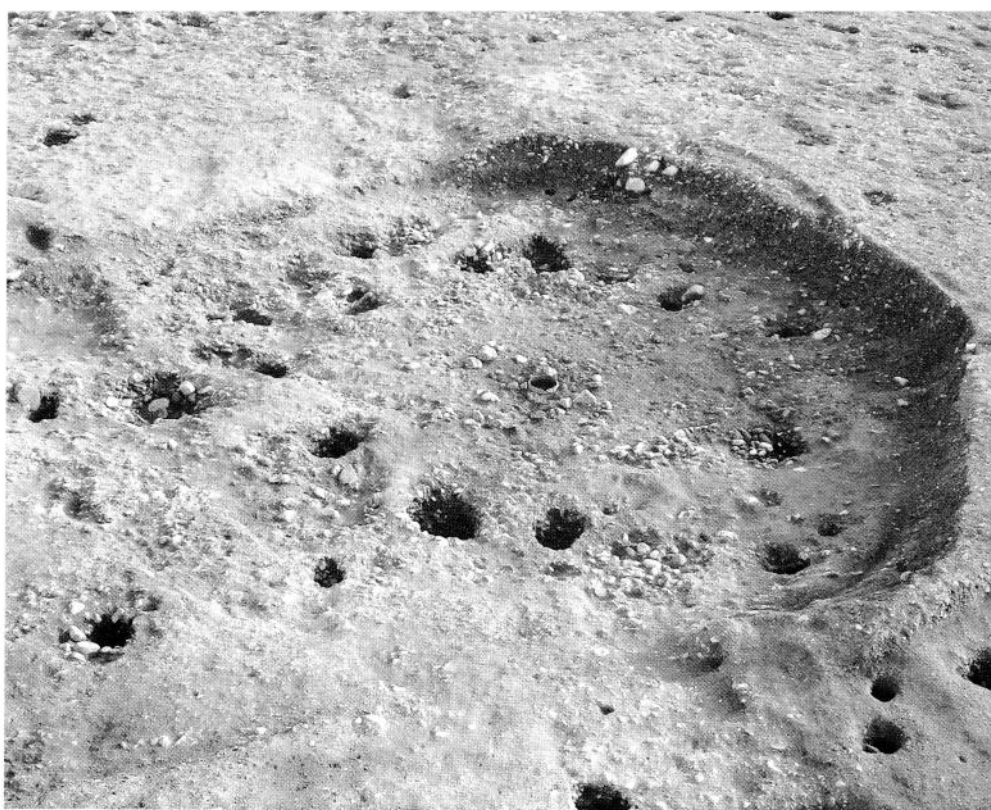
土器の時期と類例

胴部文様帯に平行沈線で鈎形に折れる文様を用いた磨消縄文の土器は、山崎2号住居跡や石町2号住居跡の口縁部が内彎気味に立ち上がる縁帯文の鉢にも文様構成で通じるものがある。北九州市下吉田遺跡の1号住居跡・2号住居跡にも平行区画文様の例^(註2)があり、口縁部は短く内彎して立ち上がる。築上郡大平村上唐原遺跡ではこのような例はみられないが、重弧の半同心円文や平行斜線文が沈線で描かれる例があり、これらの文様から山形や鈎形の多重文様に変質した可能性もある。上唐原の例などは縄文を伴わない例であり、山崎2号などの磨消縄文手法の例とは出自が異なる可能性が高いとはいえ、時期的にみて近接し僅かに形式的に遅れるであろうことは間違いのないであろう。

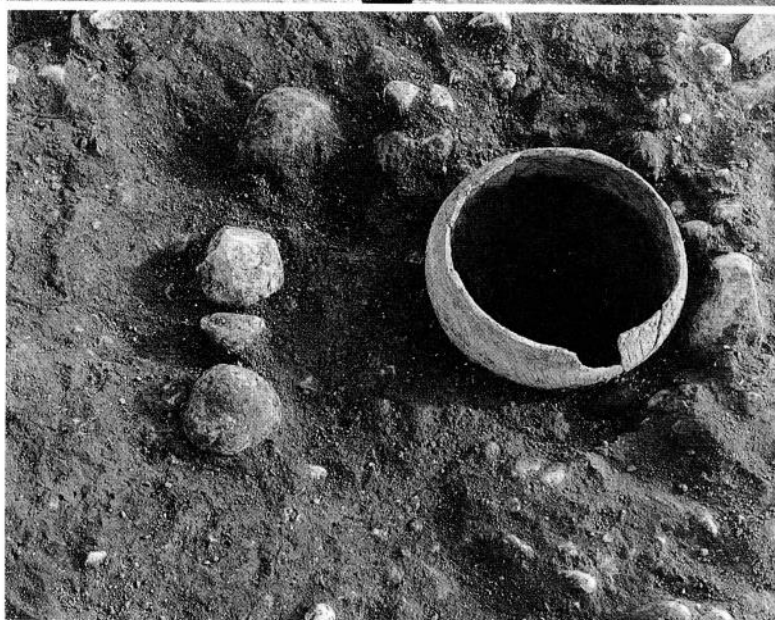
胴部文様で、縄文施文と鈎形文様あるいは7字文様と呼ばれるような沈線文様の描かれる鉢形土器は、後期前葉に位置づけられる福井県右近次郎遺跡例^(註3)や、大阪府仏並遺跡^(註4)・縄手遺跡^(註5)などにみられる。後期中葉に近い京都府桑飼下遺跡にも類似した文様をみることができ、蛇行文様や人字形の沈線文様もある^(註6)。いま酷似するような文様の例を近畿・瀬戸内などの地域で捜し得ていないが、中部山岳や北陸・飛騨地域などで今後発見しうる可能性があるかも知れない。

複式炉の類例

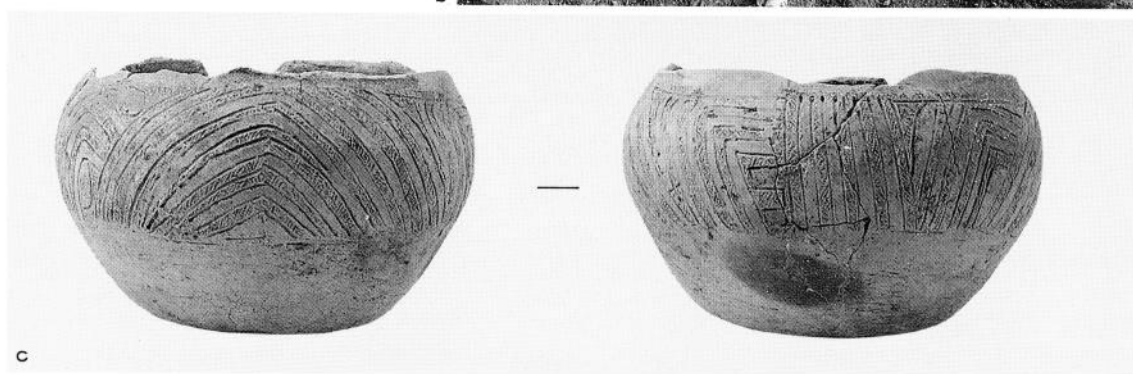
山崎遺跡2号住居跡のような複式炉は、隣接する石町遺跡1号住居跡^(註7)、豊前市小石原泉遺



a



b



c

a 山崎遺跡2号住居跡

b 2号住居跡の複式炉

c 炉使用土器

跡1号住居跡^(註8)に類例がある。

いまのところ、瀬戸内・近畿地方では複式炉の類例を知らない。複式炉は北関東から新潟・富山県地方などの大木系土器文化圏にみられ、中期中葉頃から後期初めにかけて盛行する。したがってこれらの地域から伝播した可能性が高いと言えよう。これらの地域では柄鏡住居址が盛んになったり、石柱・石壇をもった住居が現れて、住居跡の形態に変化が起これるとともに、人口の減少化現象があるなど社会構造に変化が起これている、という意見がある^(註9)。九州東北部の豊前地域は、地理的特性から、これらの影響を受けた人の移動と文化の伝播をいち早く受ける所であろう。また旧来の採集活動であった地域に、桑飼下型経済類型などの植物質食料採集活動に主体をおいた経済類型を携えた人々にとっては、英彦山塊から派生する丘陵と谷底平野は豊富な資源を与える地に写ったに違いない。

註1 福岡県教育委員会 1992 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 ー7ー 上巻 山崎遺跡(I)付、石町遺跡

2 北九州市教育文化事業団 1985 下吉田遺跡 北九州市埋蔵文化財調査報告書 第39集

3 大野市教育委員会 1985 右近次郎遺跡II 大野市文化財調査報告書 第3冊

4 大阪府埋蔵文化財協会 1986 仏並遺跡発掘調査報告書

5 東大阪市教育委員会 1971 縄手遺跡1 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報9

6 舞鶴市教育委員会 1975 桑飼下遺跡発掘調査報告書

7 註1 前掲書に同じ

8 小池史哲 1993 豊前地方の縄文時代遺跡 豊前市史 考古資料 豊前市

9 山本暉久 1994 石柱・石壇をもつ住居址の性格 日本考古学 第1号

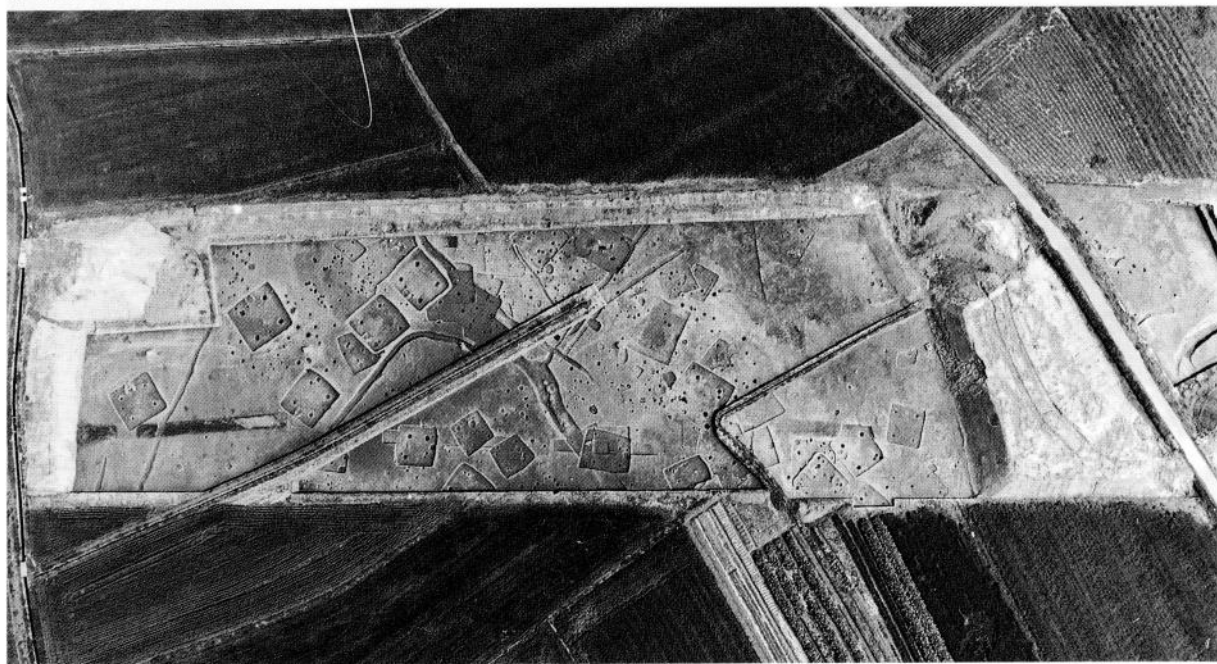
図 版



上唐原遺跡周辺航空写真（国土地理院提供、KU-92-2XC5-11）

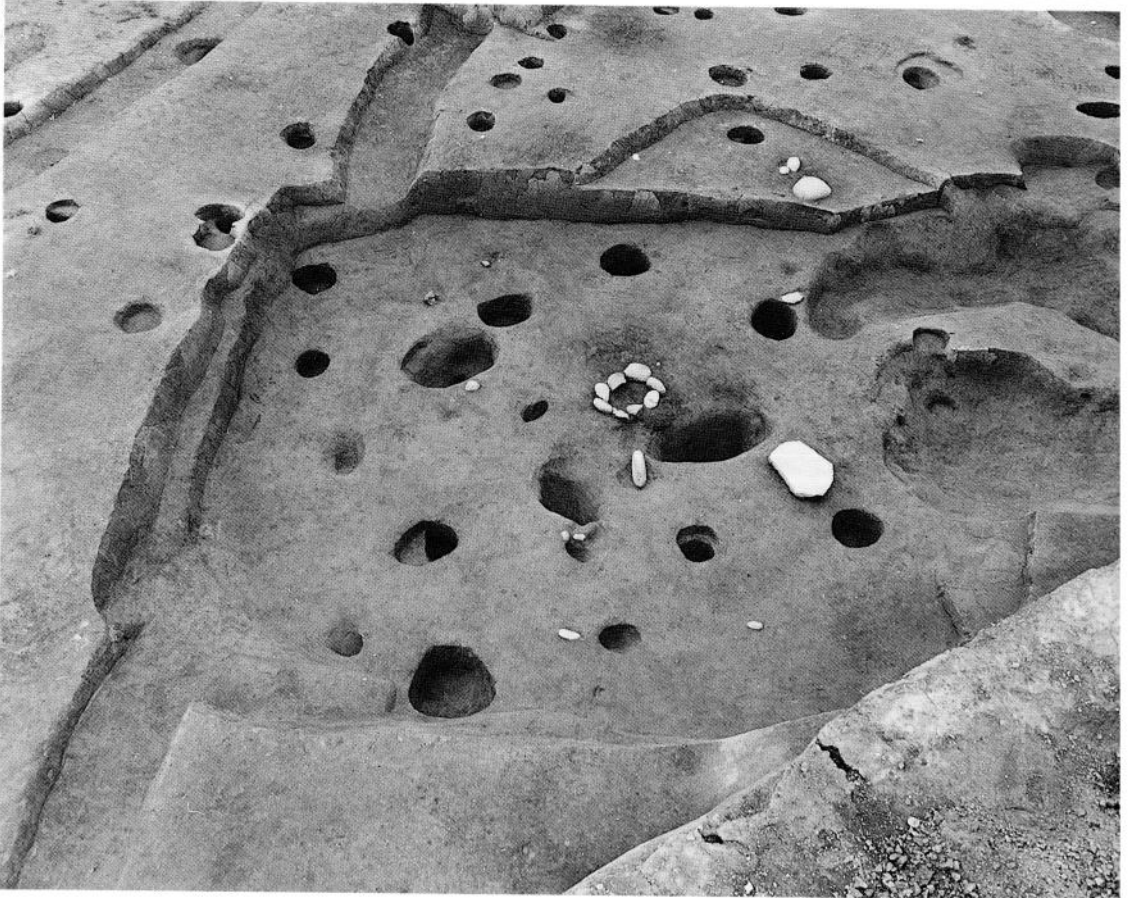
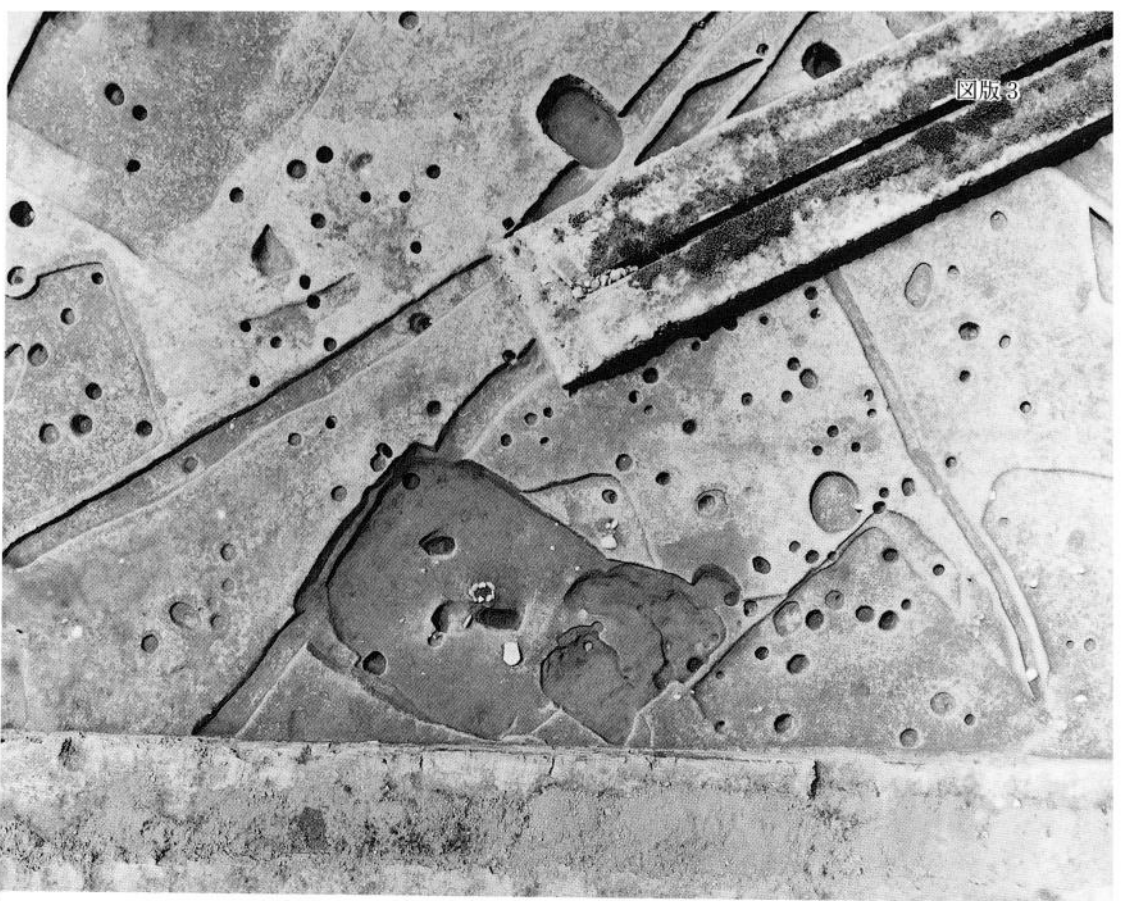


1



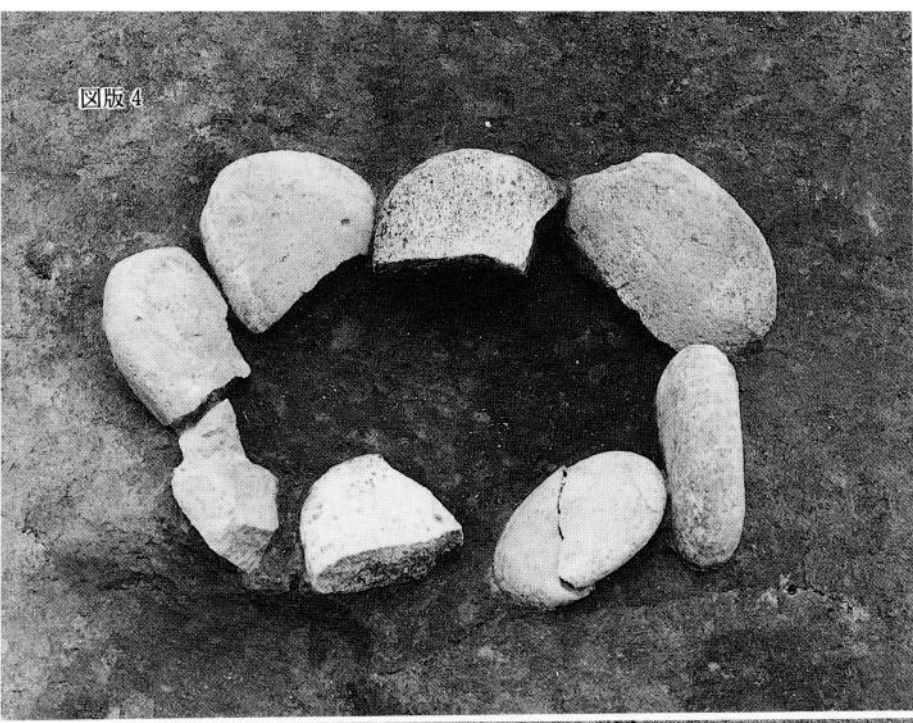
2

1 上唐原遺跡東半部全景空中写真（西上空から） 2 東半部全景（南上空から）



1 縄文1号住居跡全景（北上空から）

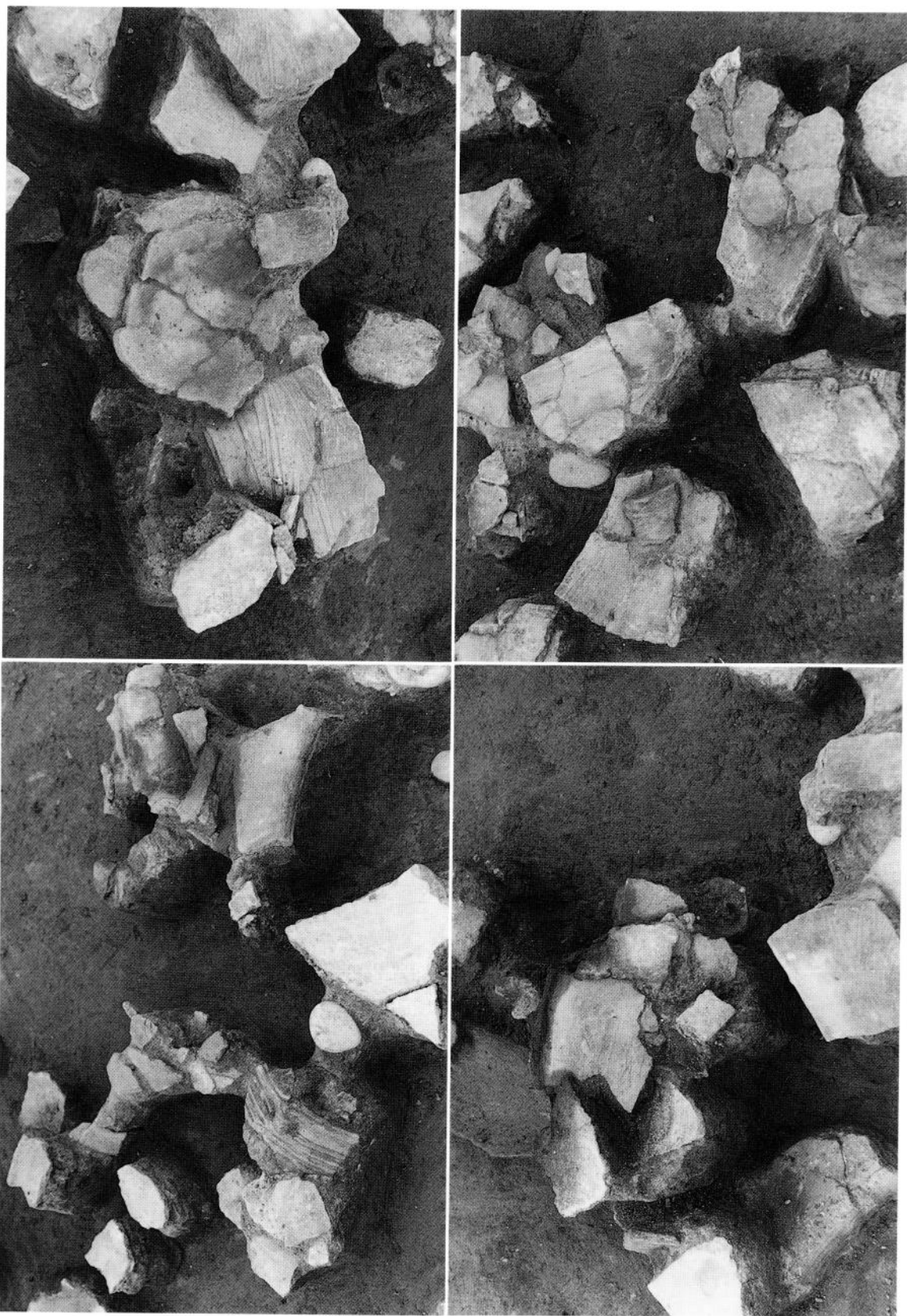
2 縄文1号住居跡全景（北東から）



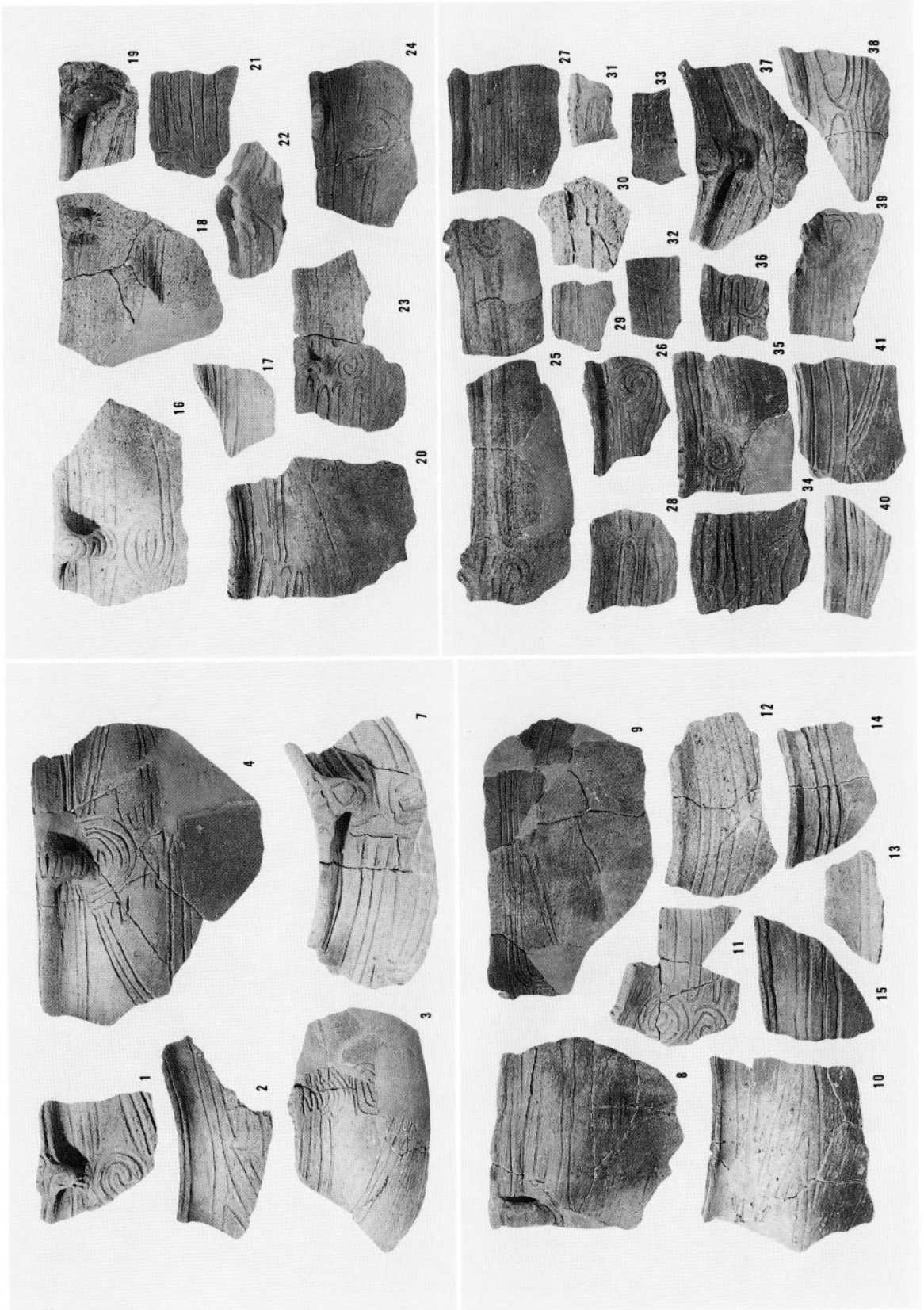
- 1 縄文1号住居跡石囲炉
- 2 縄文1号住居跡石囲炉下部敷石
- 3 縄文1号住居跡遺物出土状況1

2

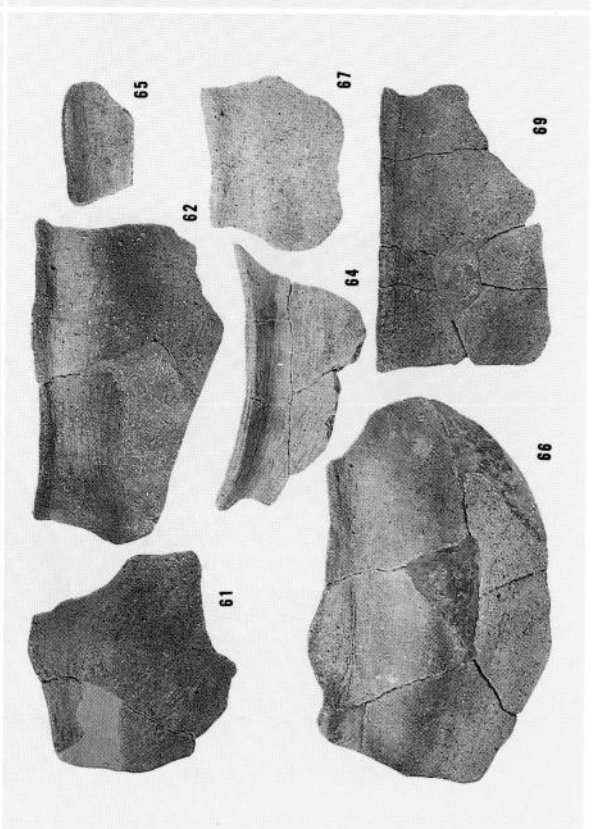
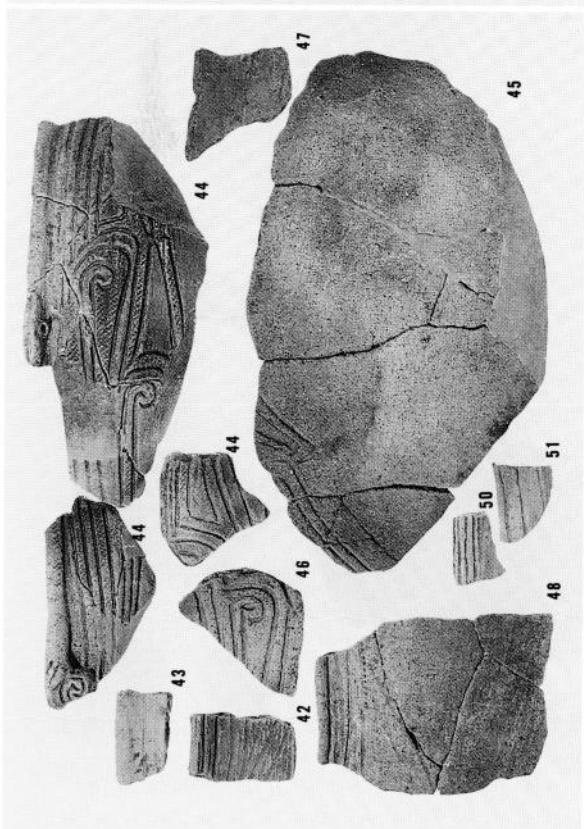
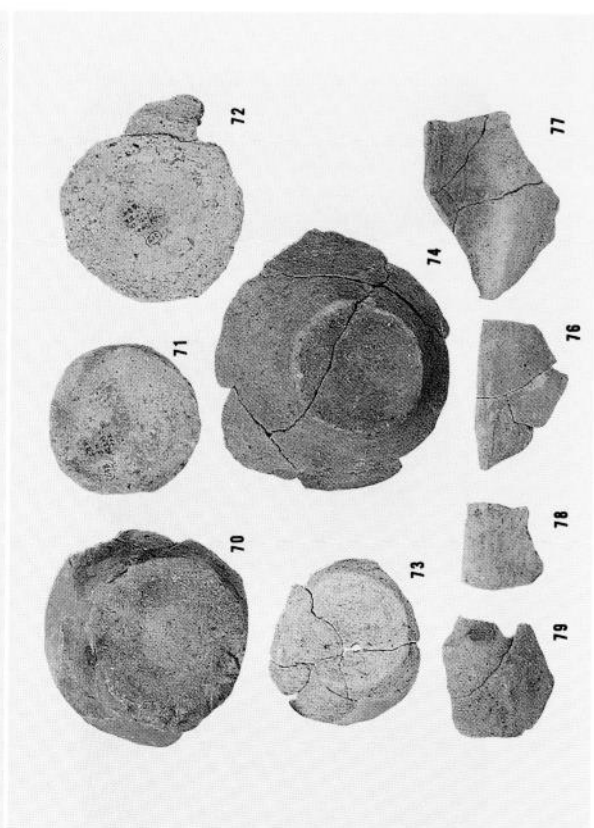
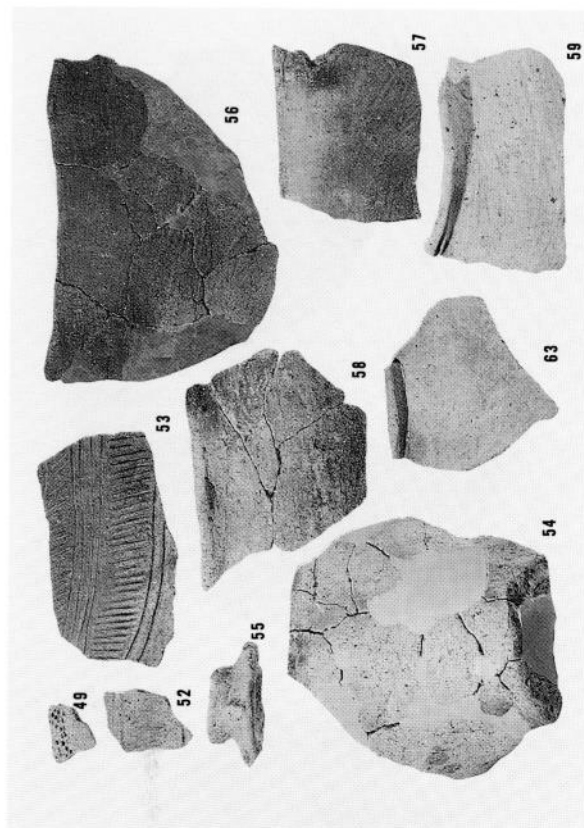
3



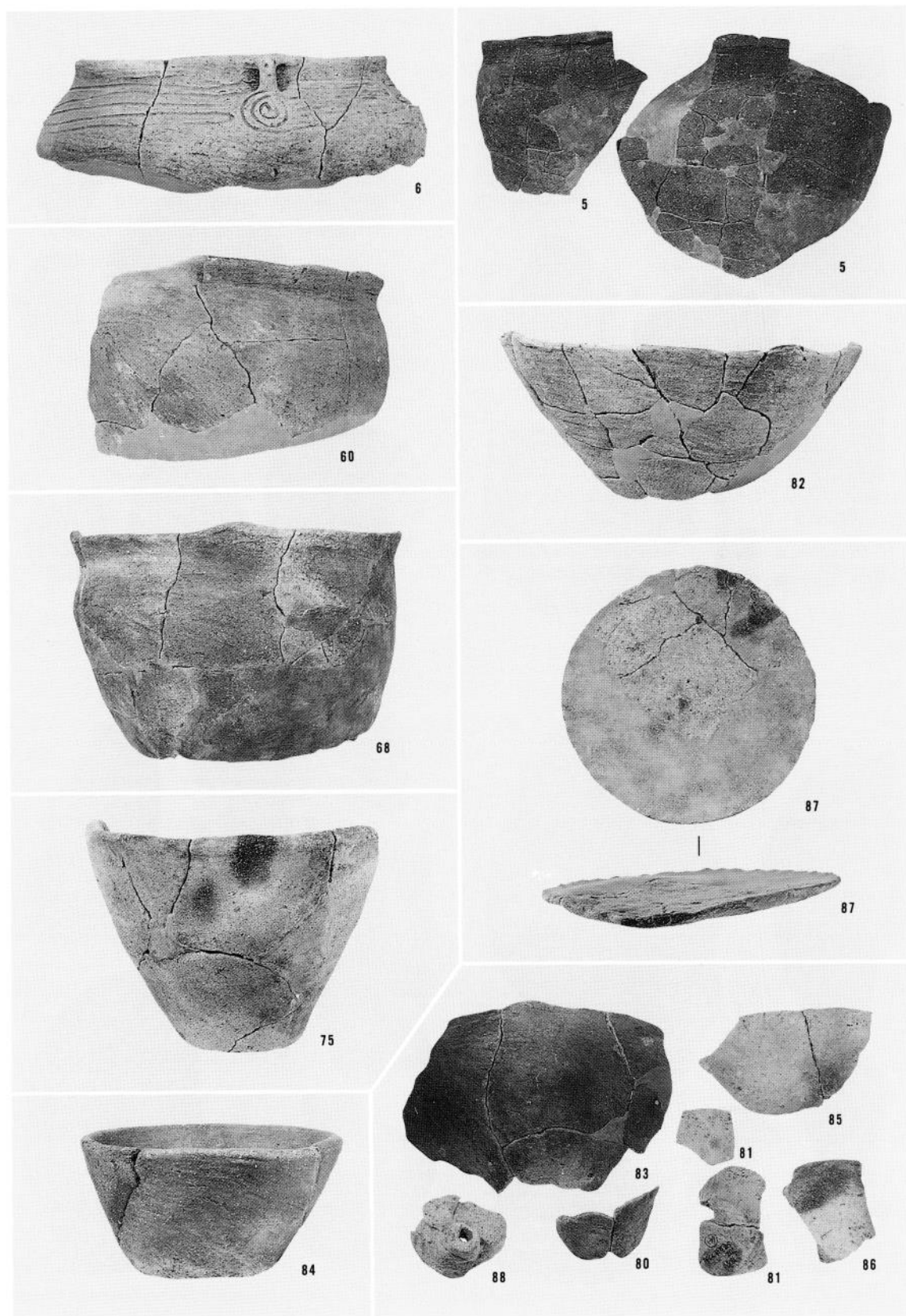
繩文1号住居跡遺物出土状況2



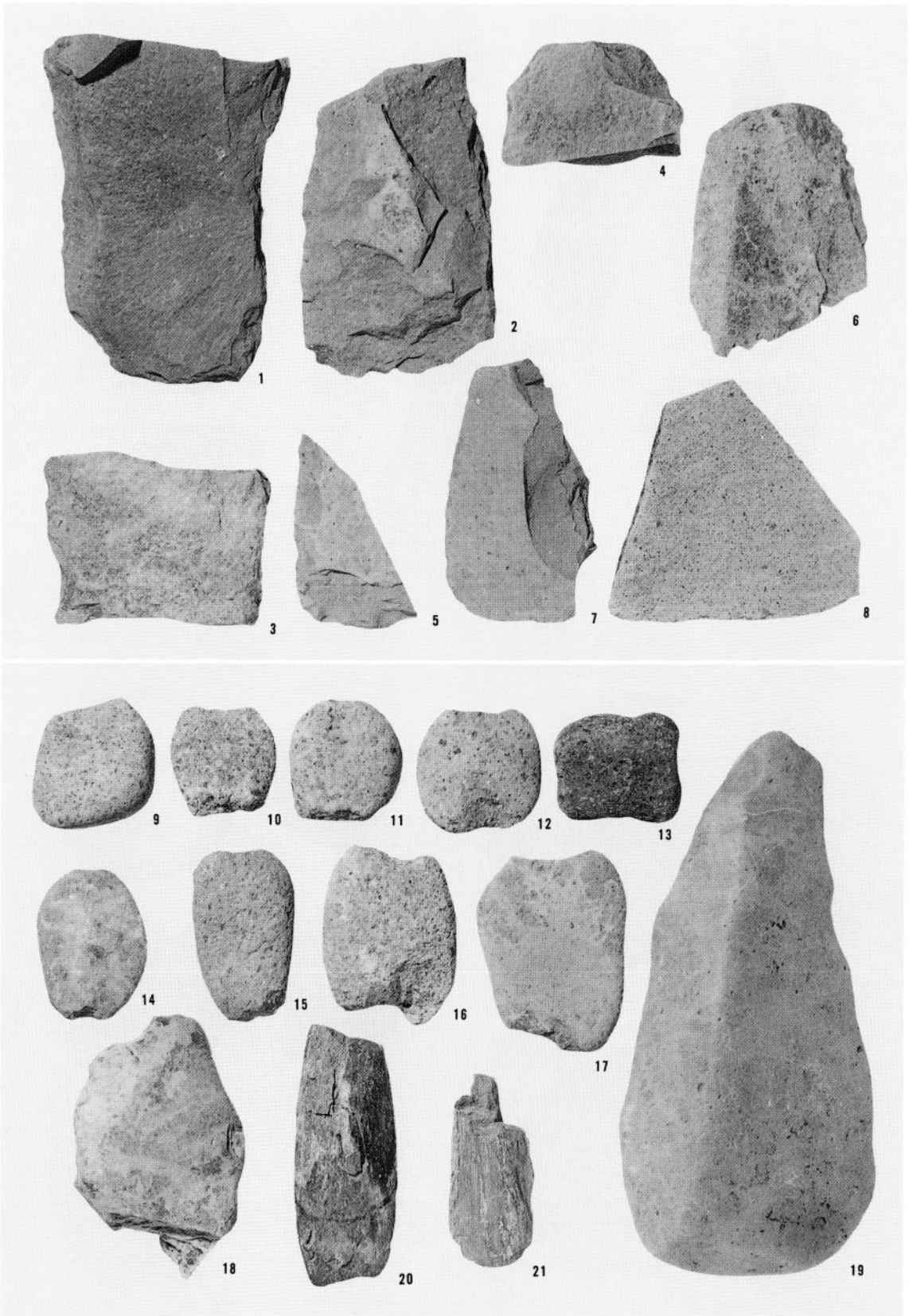
縄文1号住居跡出土土器1



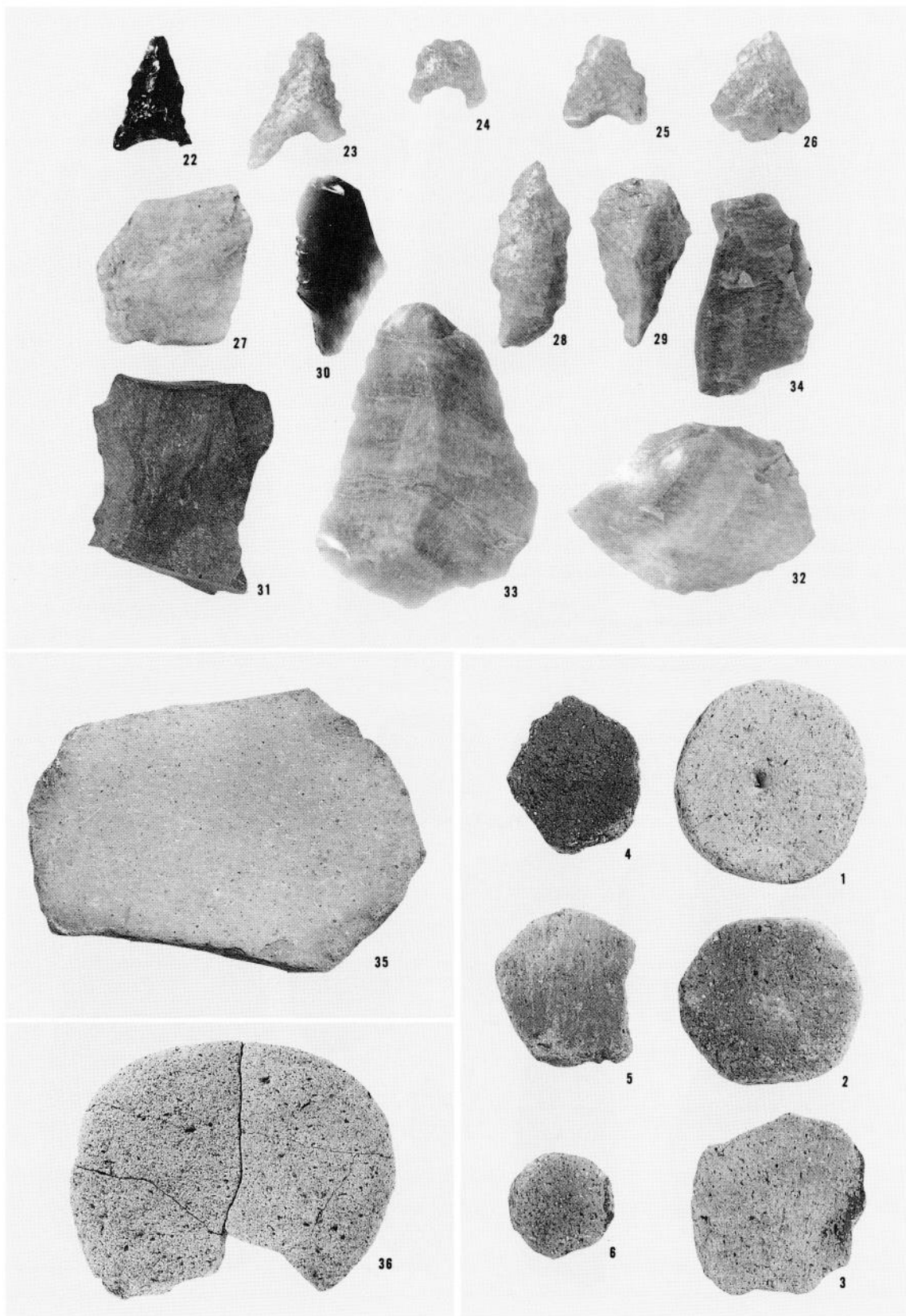
縄文1号住居跡出土土器 2



縄文 1 号住居跡出土土器 3



縄文1号住居跡出土石器 1



縄文1号住居跡出土石器2・土製品

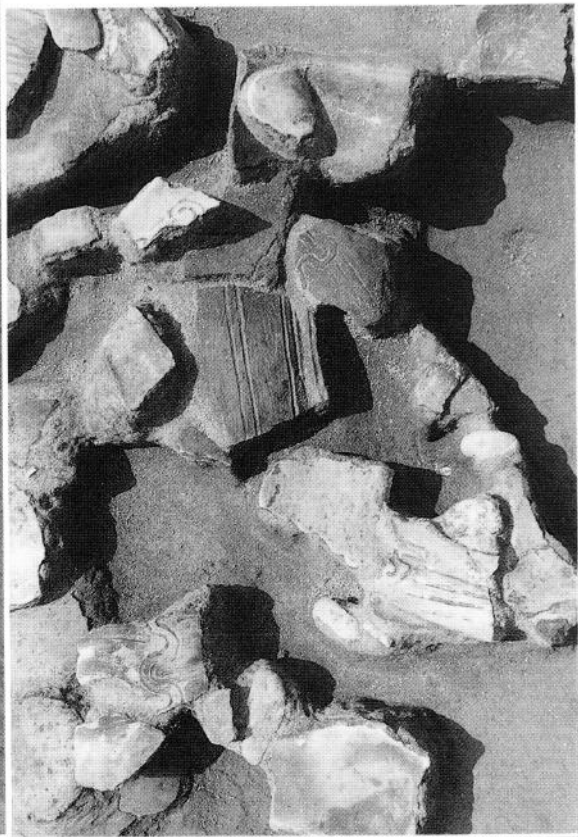
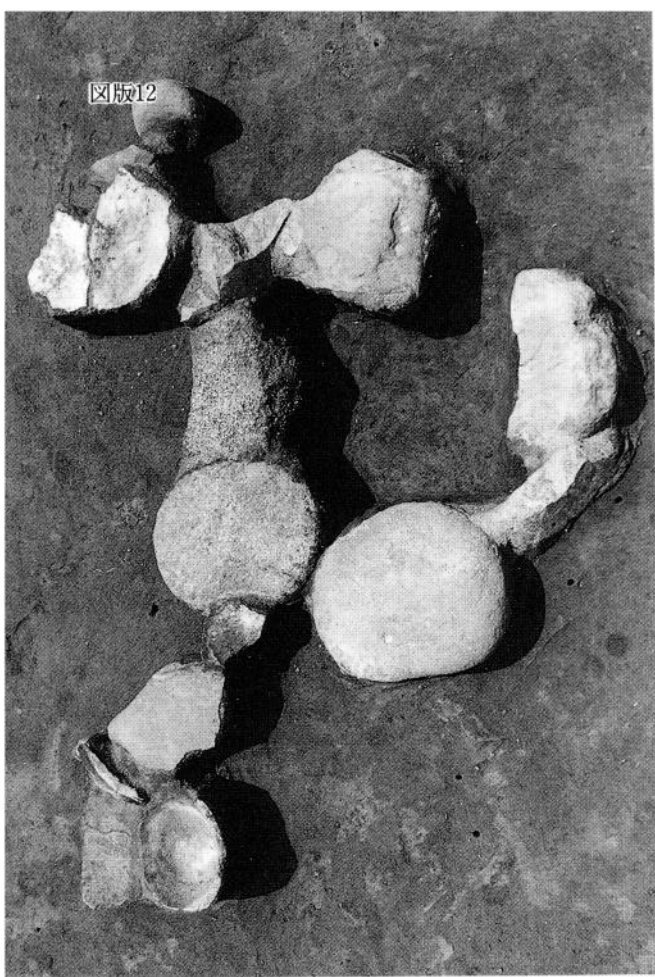


1



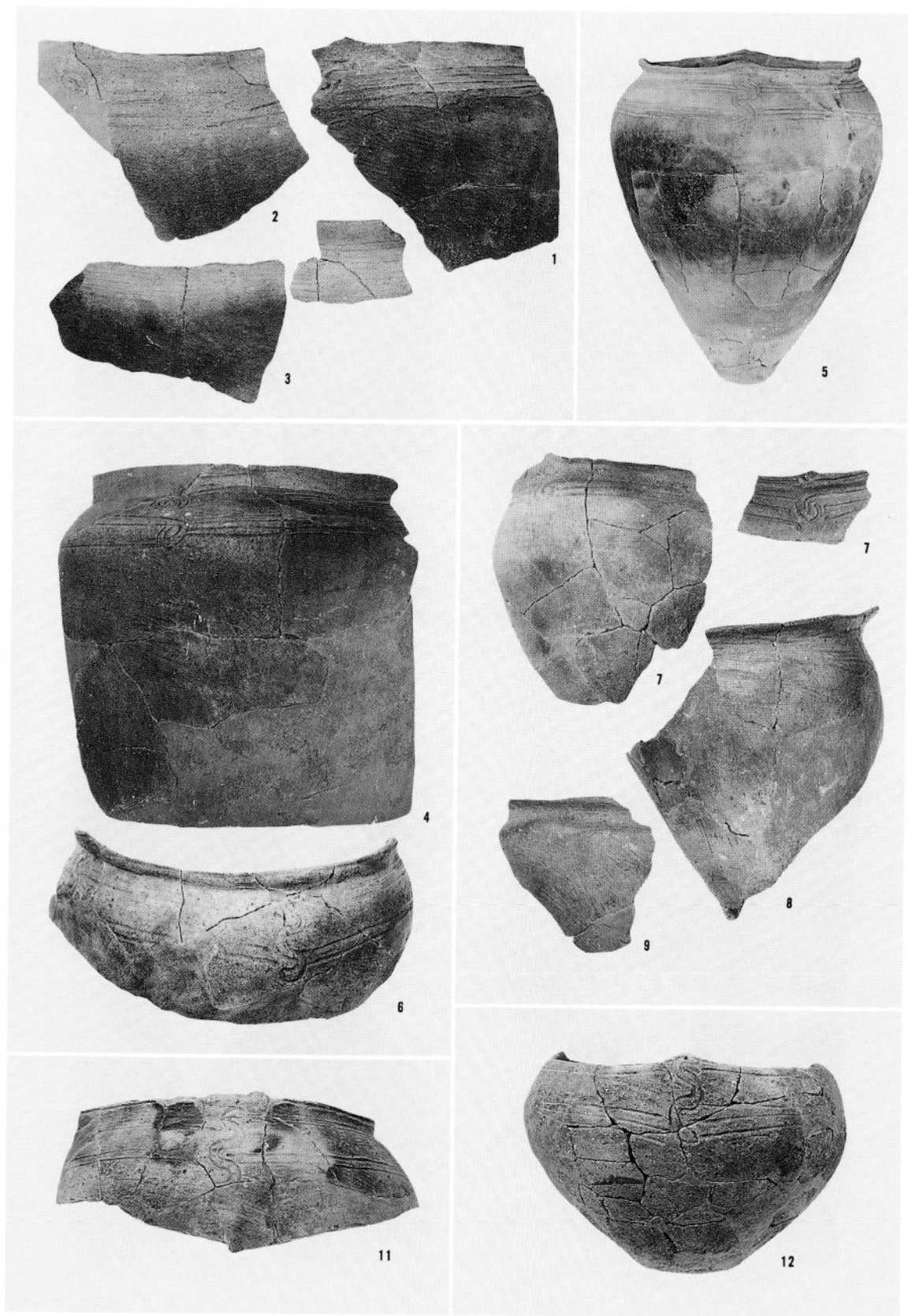
2

1 縄文2号住居跡（北から） 2 縄文2号住居跡遺物出土状況1

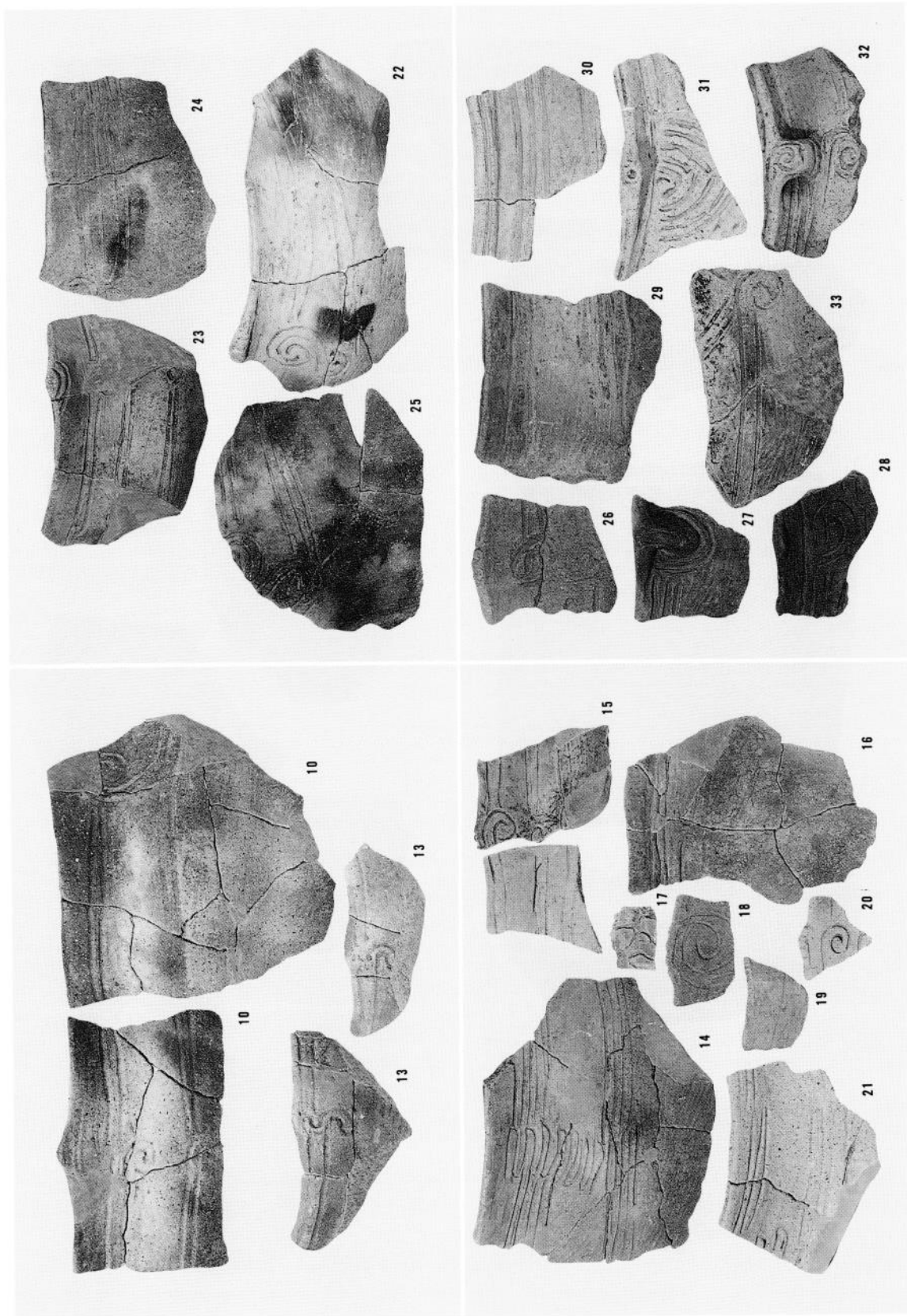


1 縄文2号住居跡石囲炉 (北から)

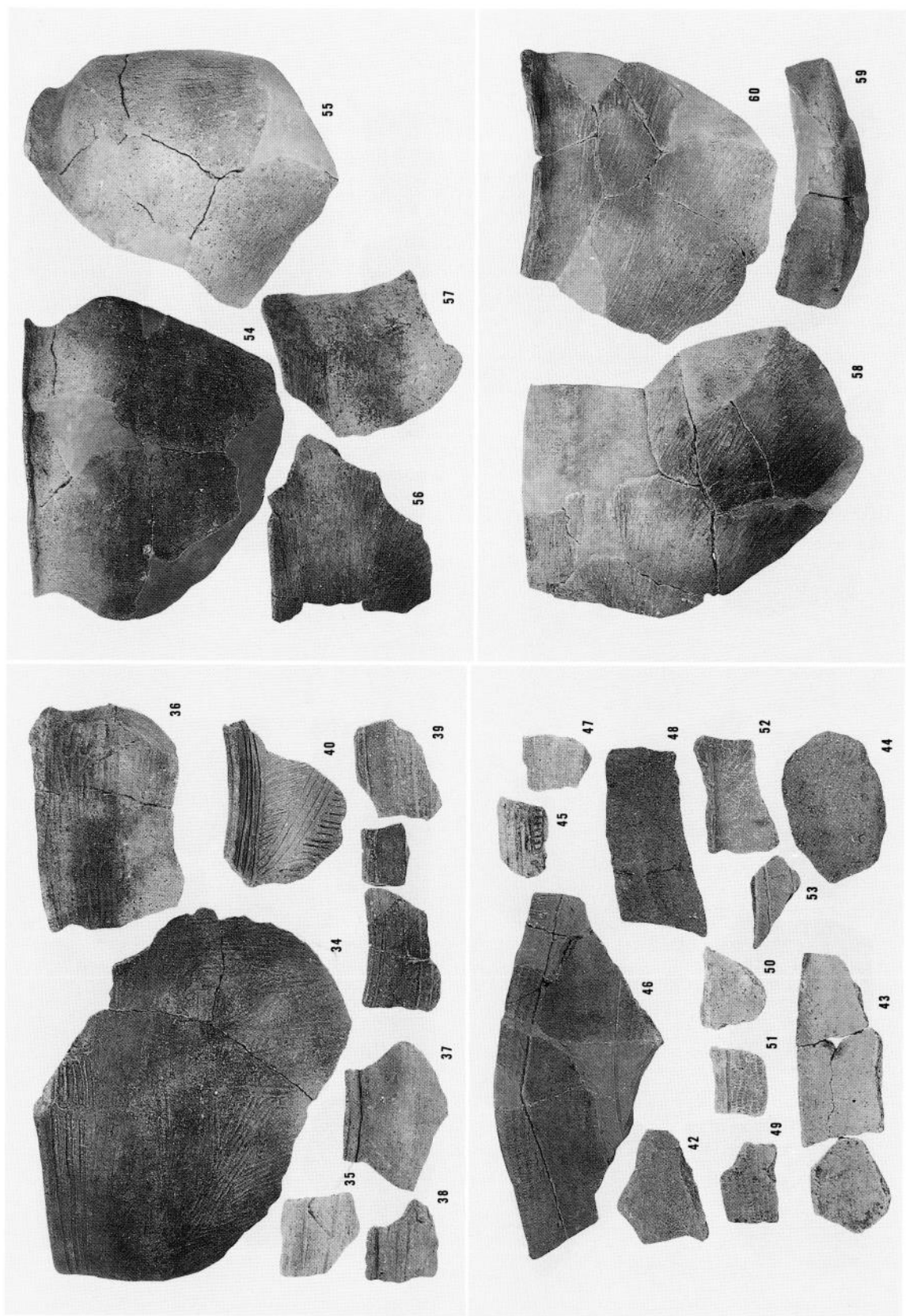
2 縄文2号住居跡遺物出土状況2



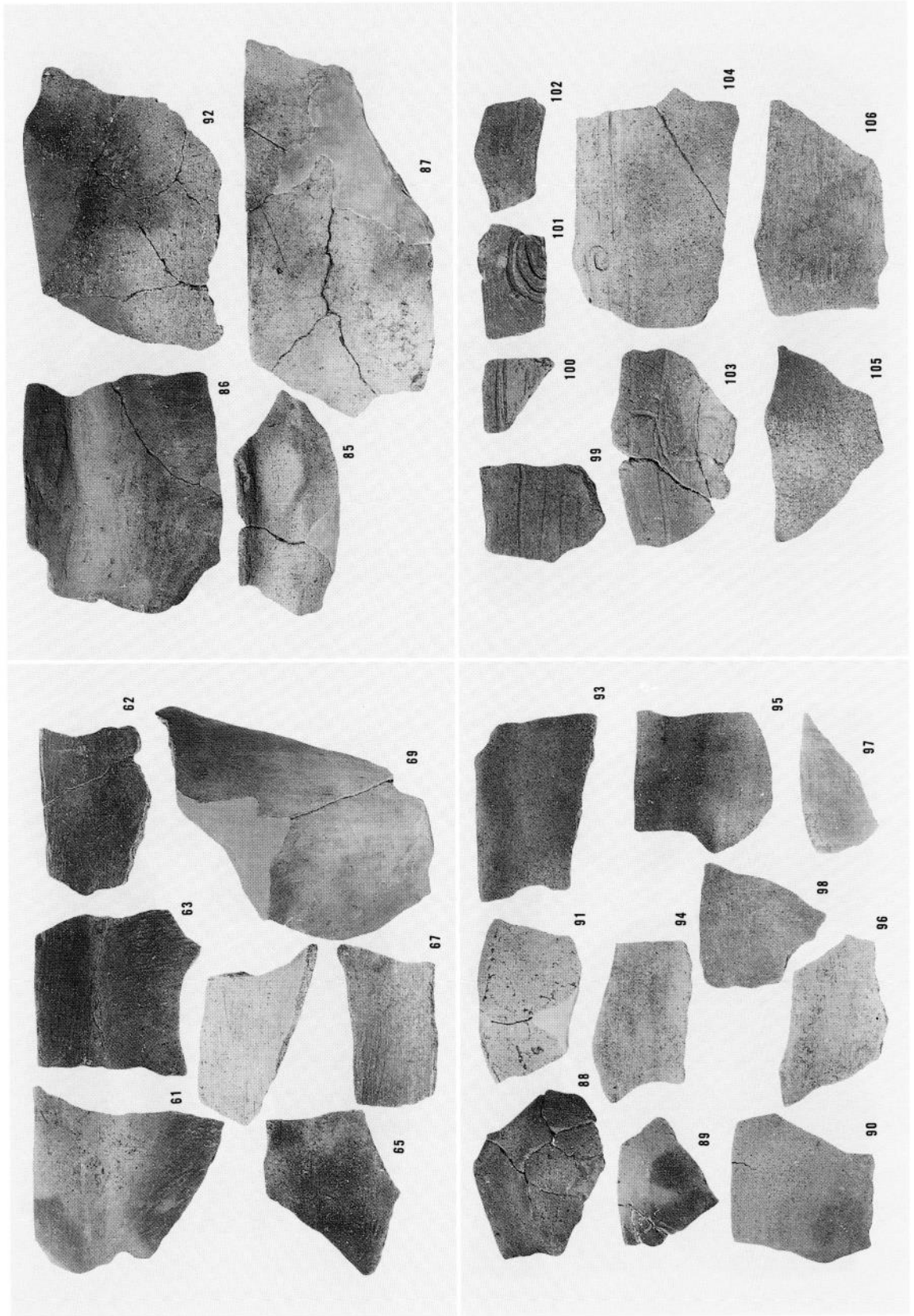
縄文2号住居跡出土土器1



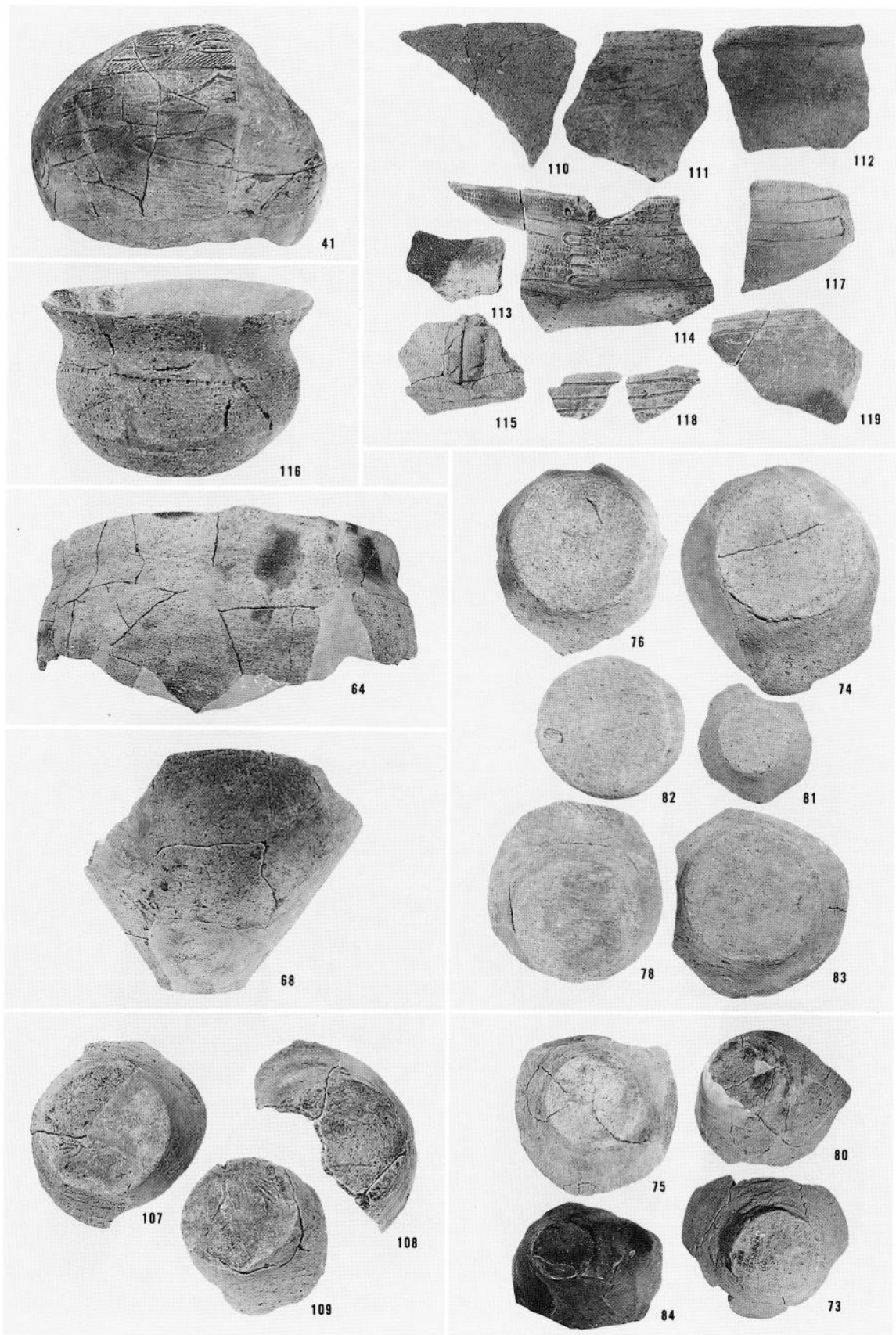
繩文2号住居跡出土土器2



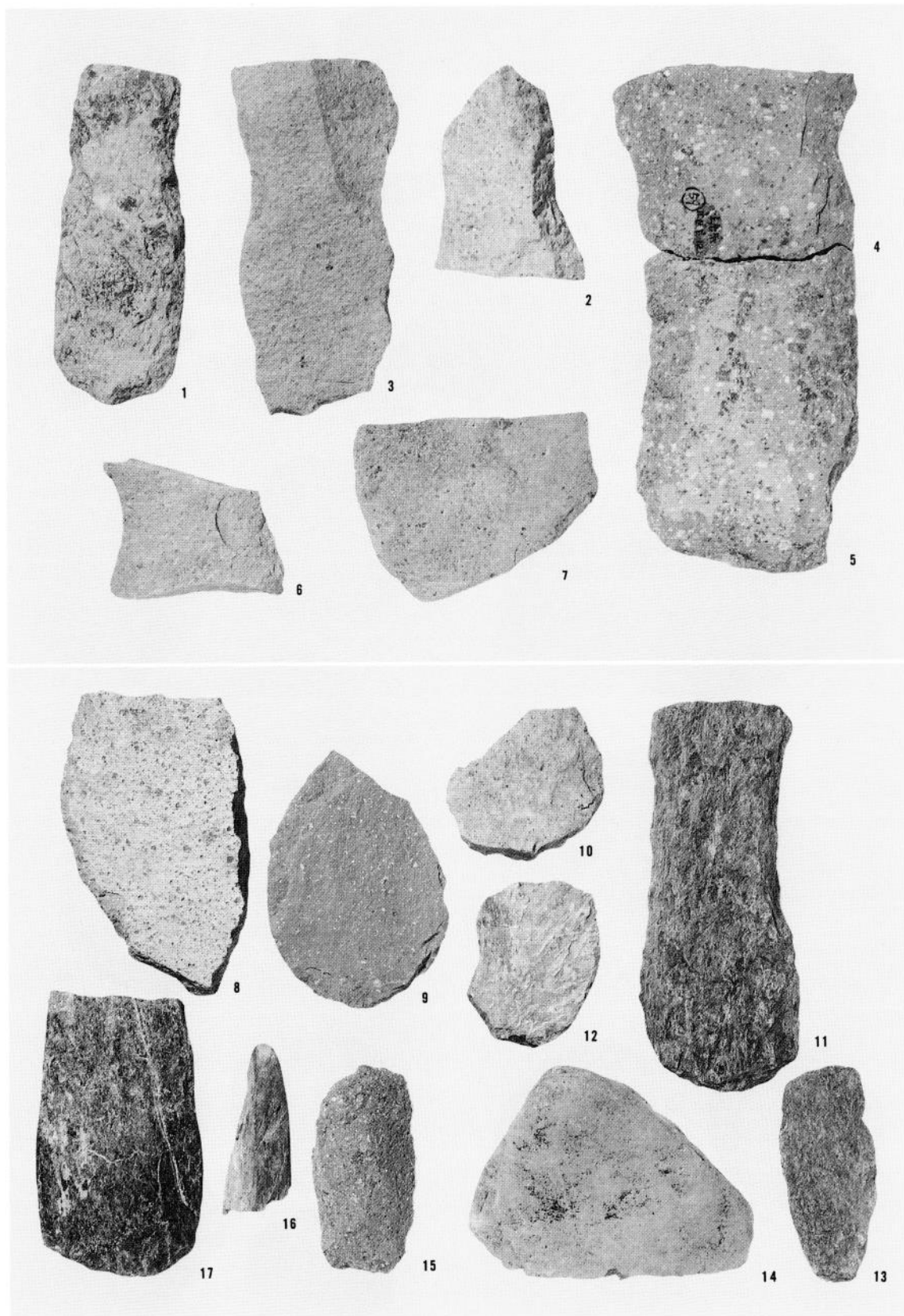
縄文2号住居跡出土土器 3



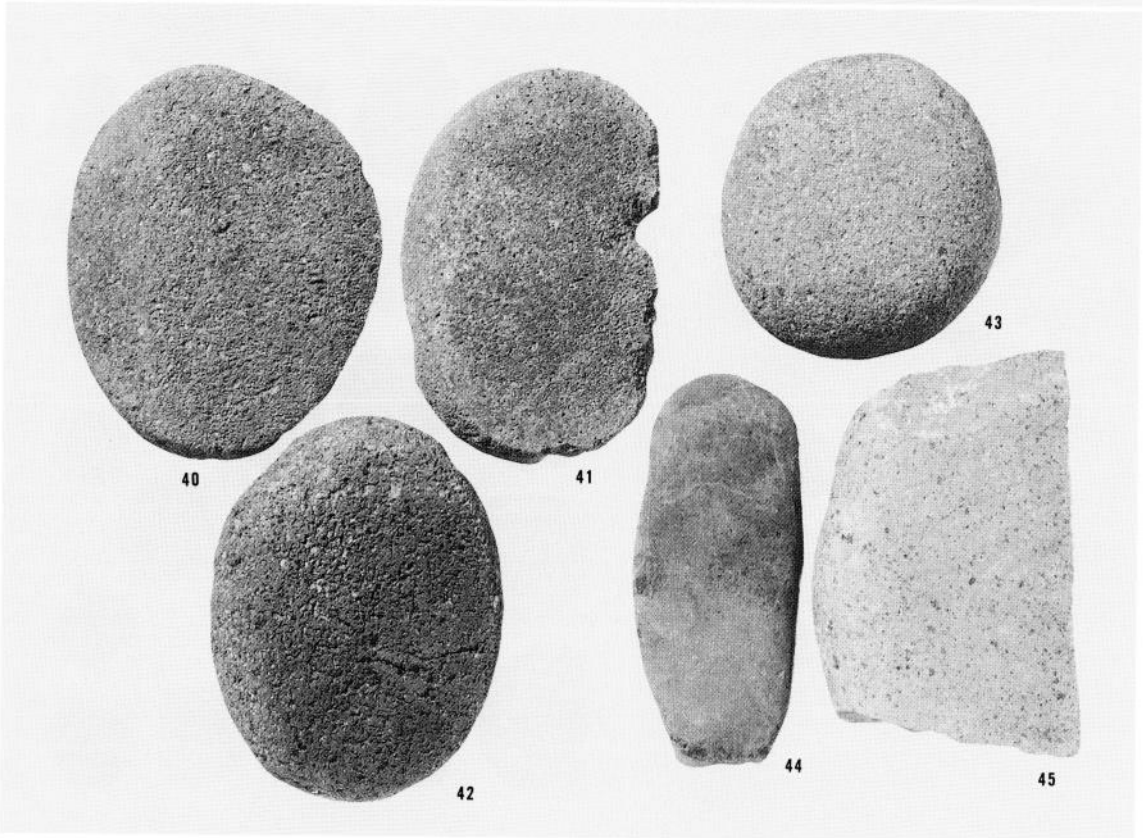
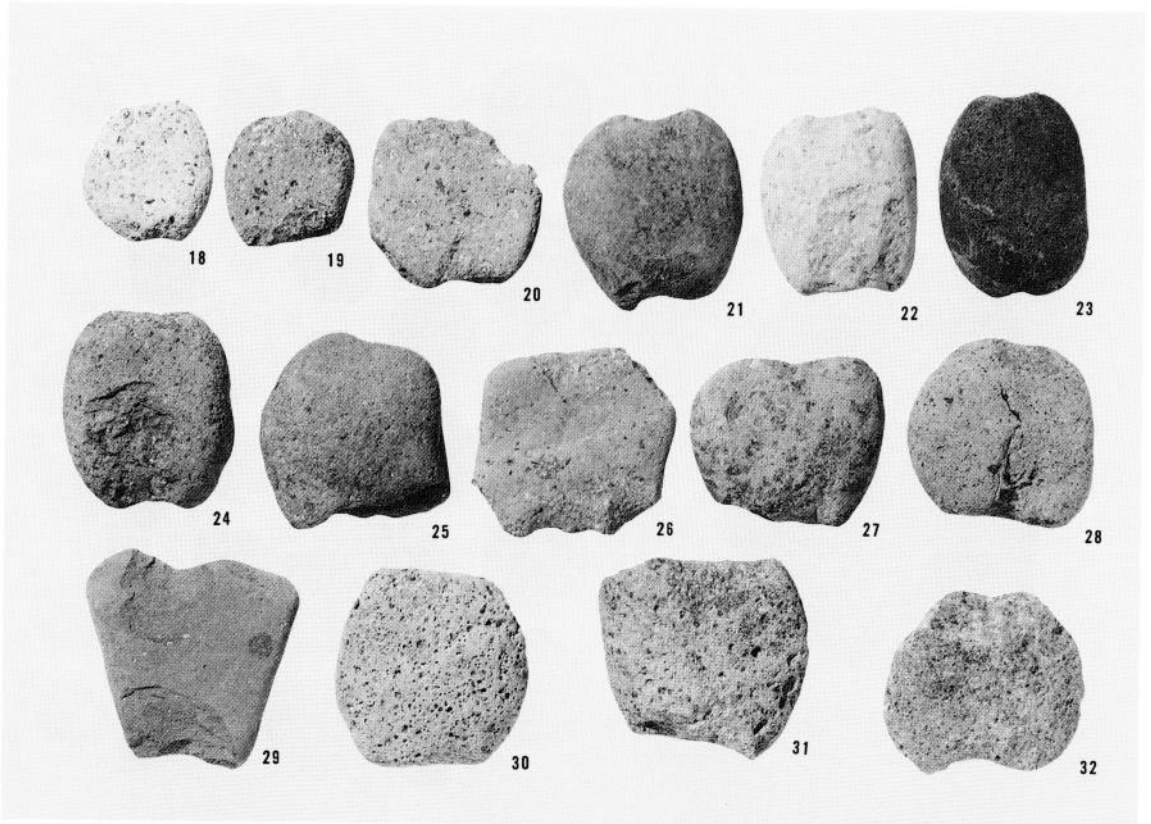
繩文2号住居跡出土土器4



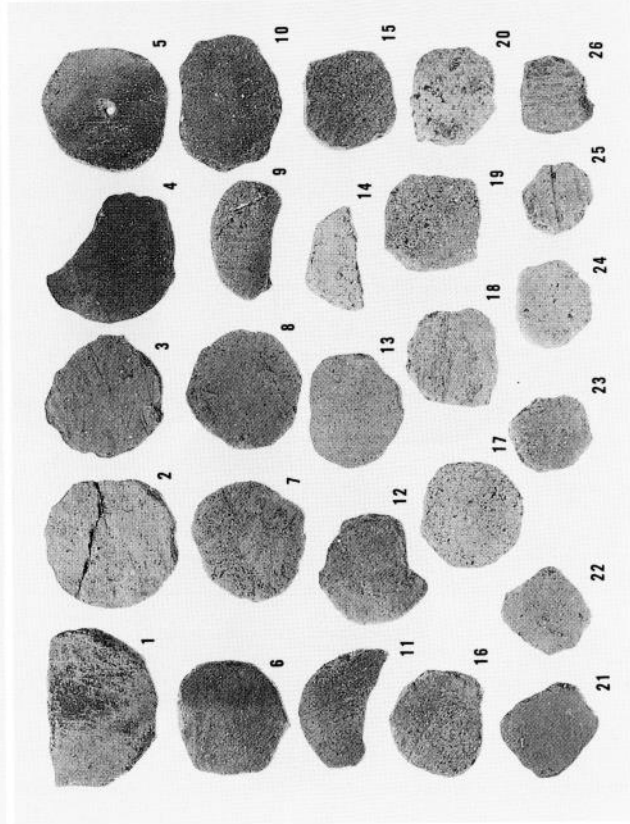
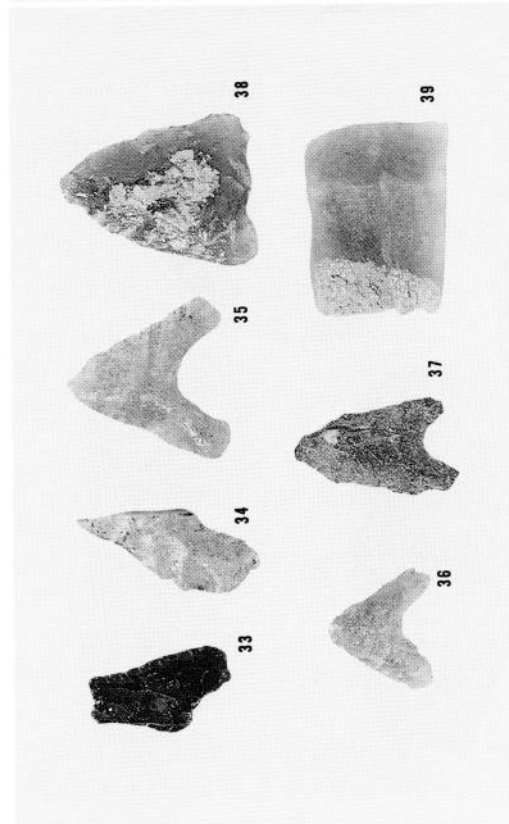
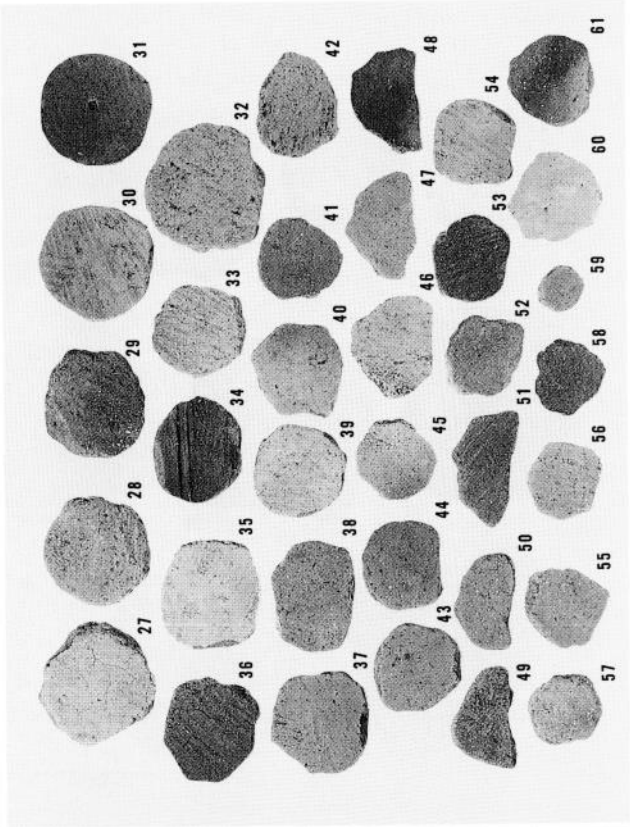
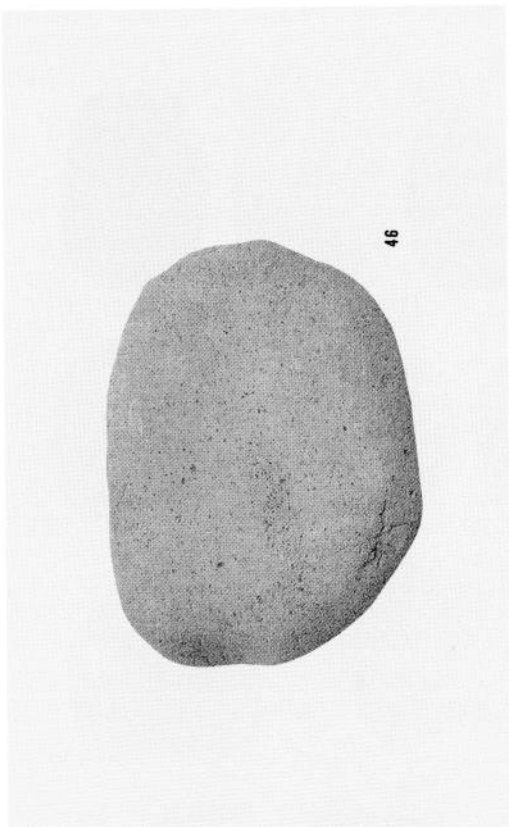
縄文2号住居跡出土土器5



縄文2号住居跡出土石器1



縄文2号住居跡出土石器2

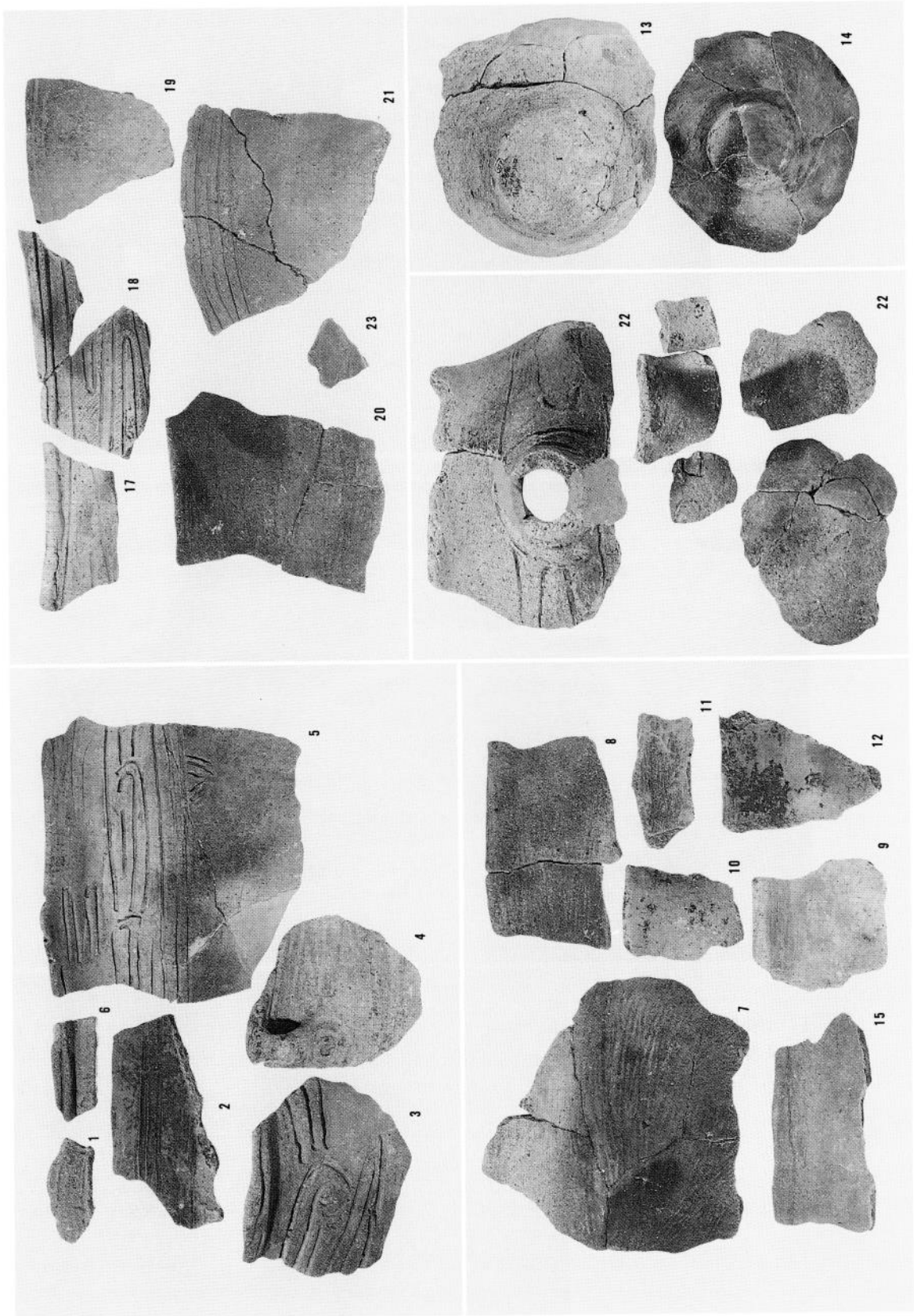


縄文2号住居跡出土石器3・土製品

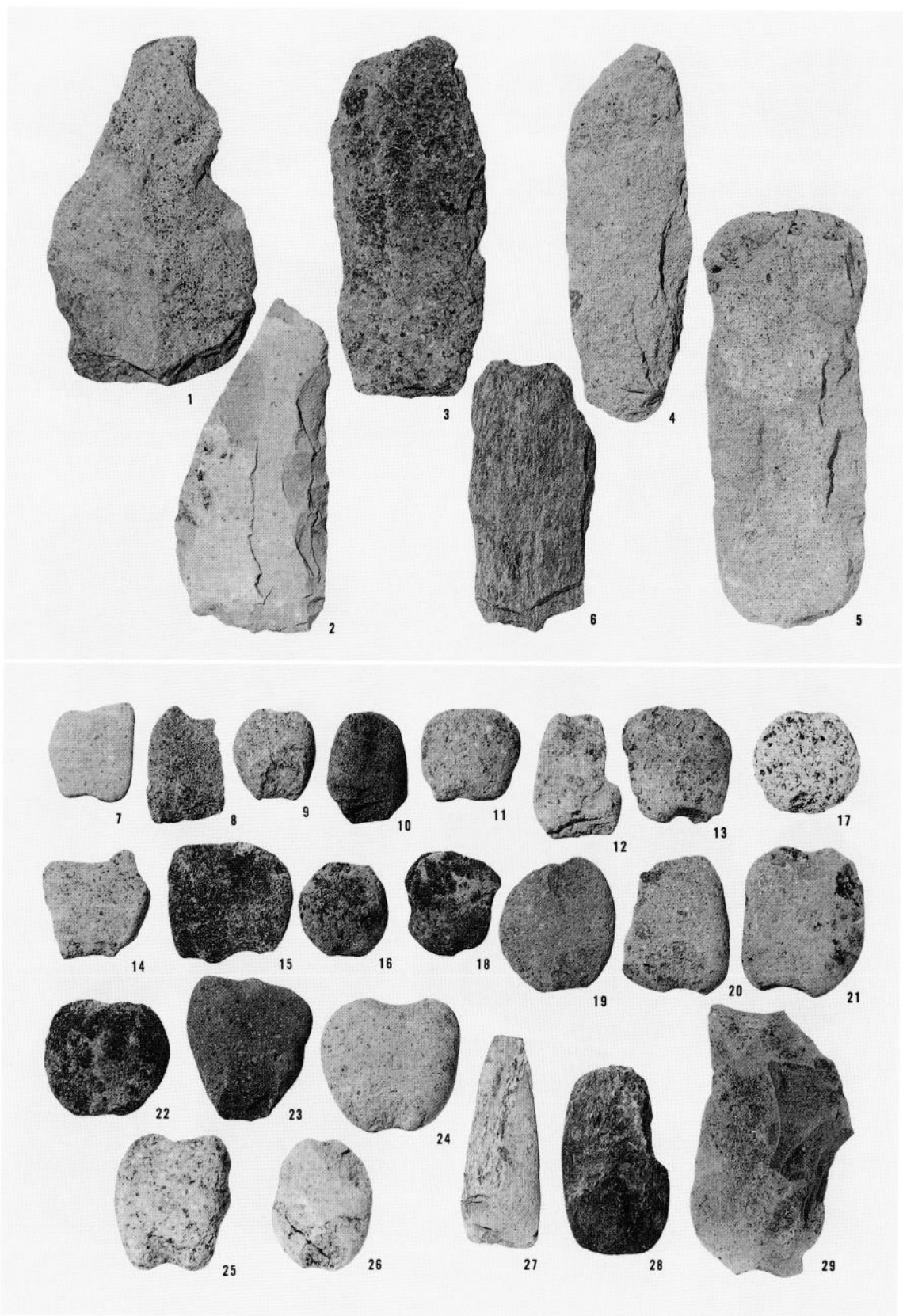


- 1 不整形竪穴（南西から）
- 2 1号土坑（北西から）
- 3 1号土坑土製品出土状況

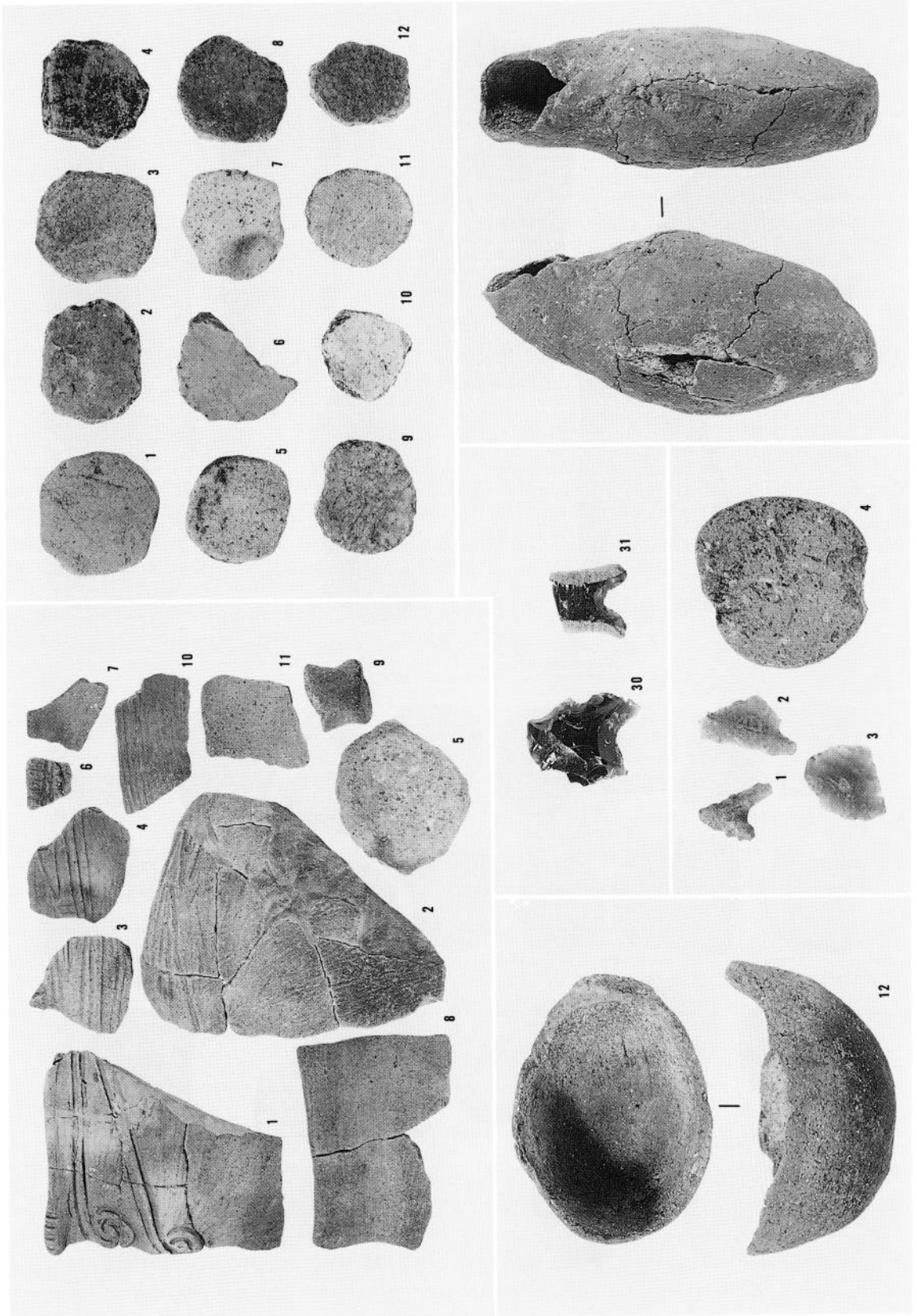




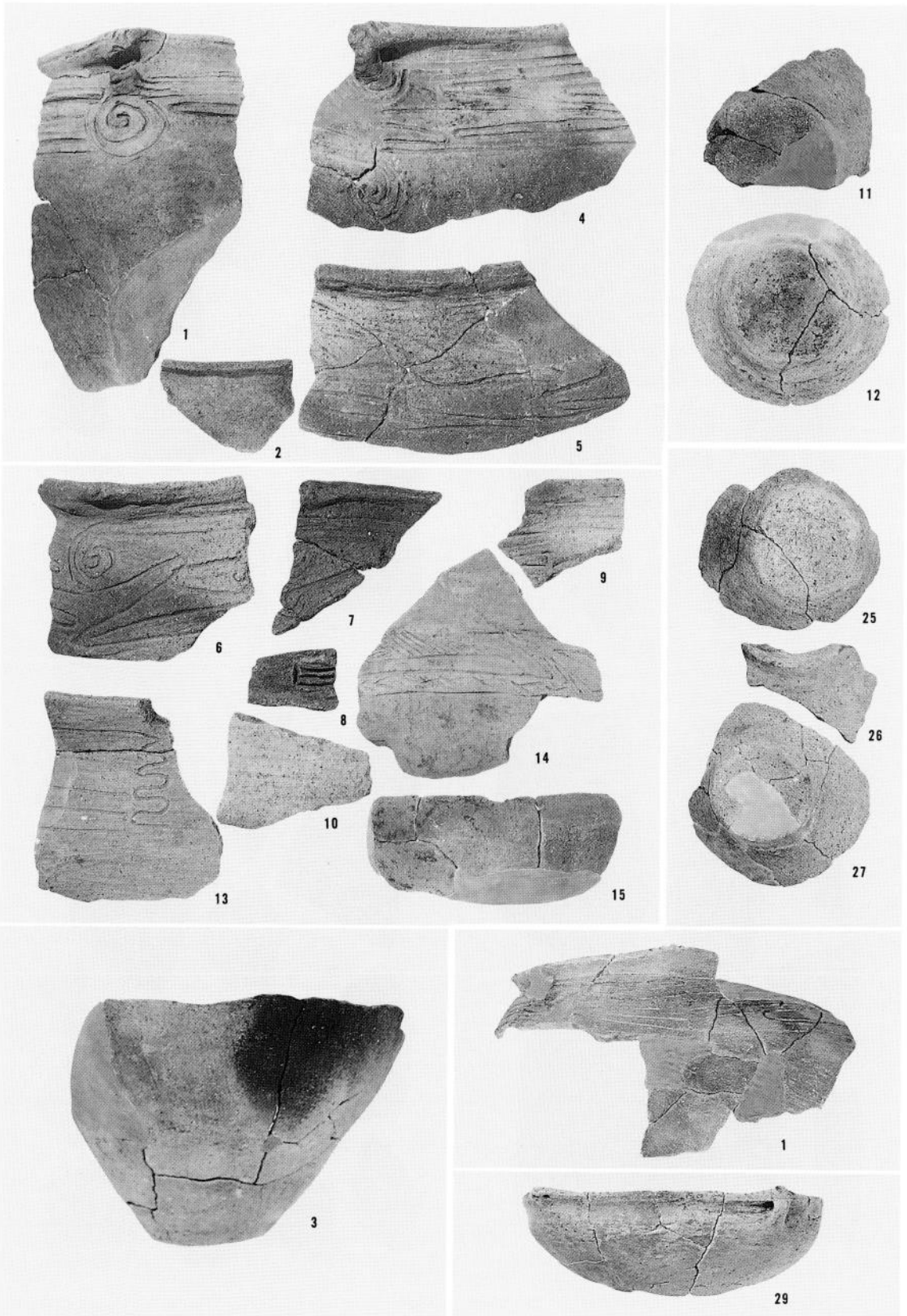
不整形豎穴出土土器



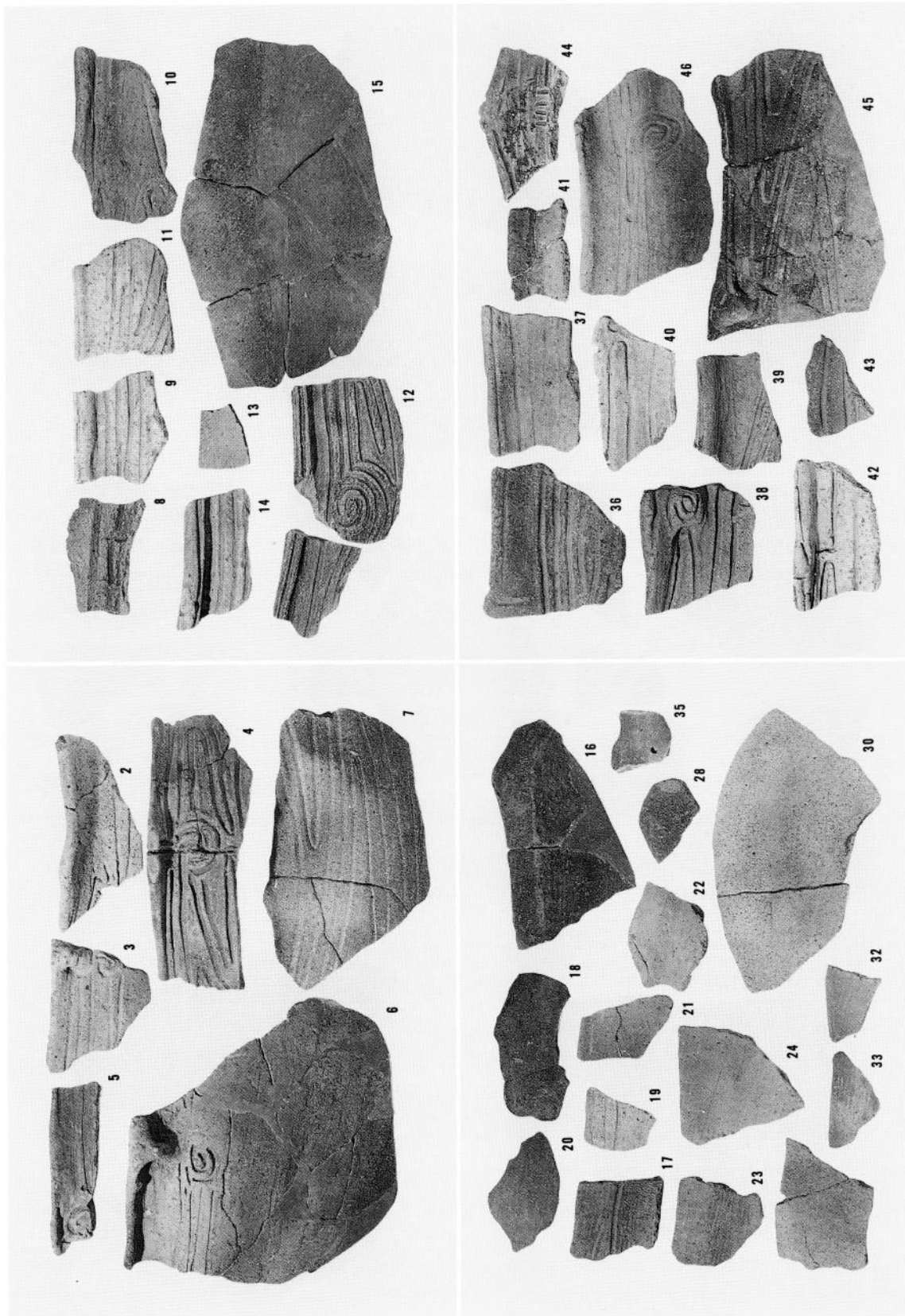
不整形竖穴出土石器 1



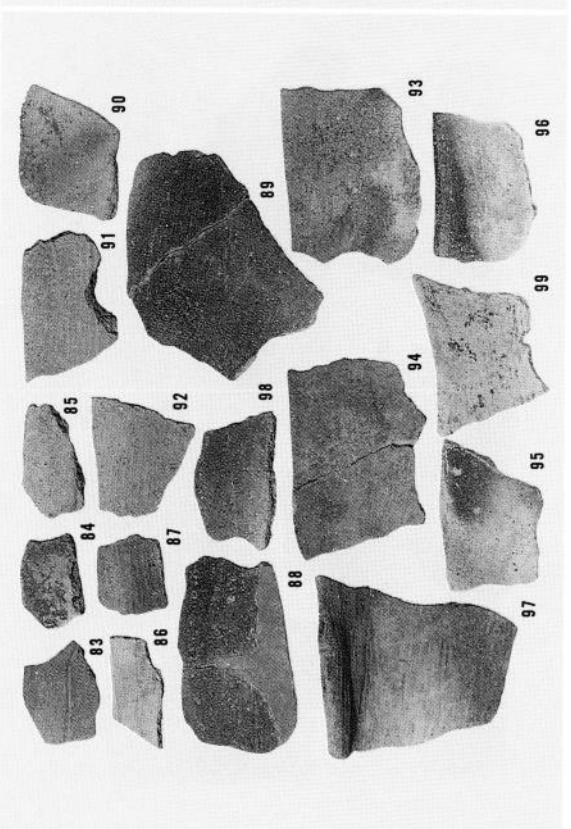
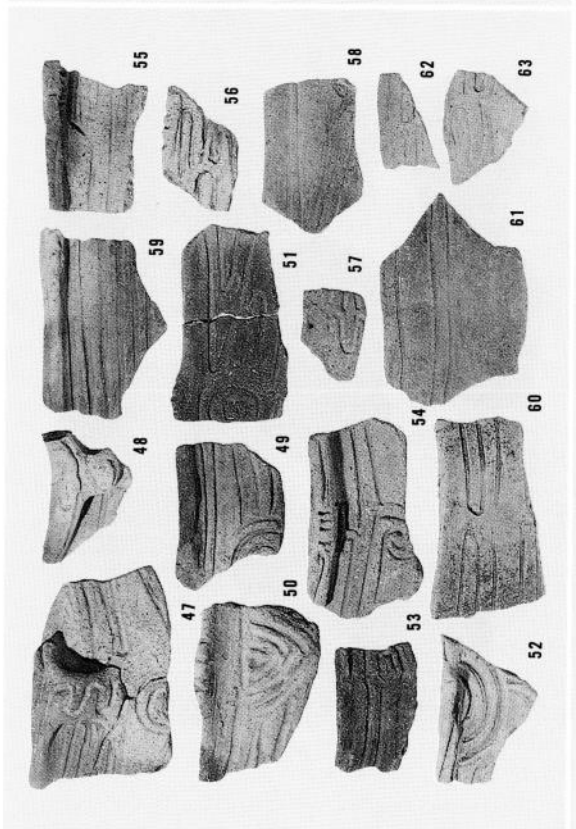
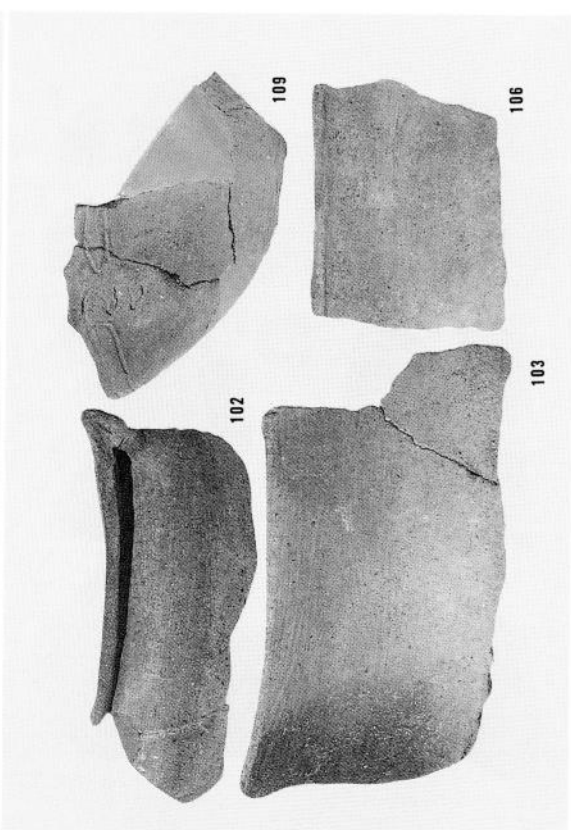
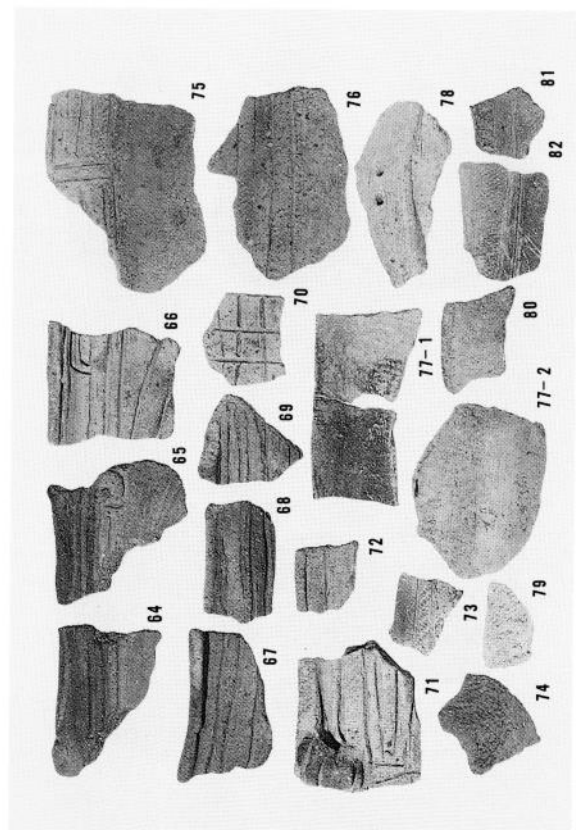
不整形堅穴出土石器 2、1号土坑出土土器・石器・土製品



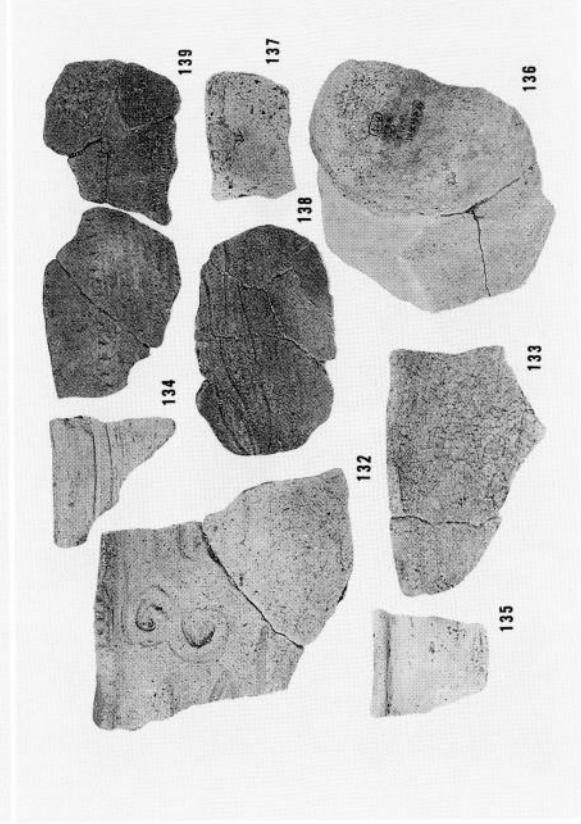
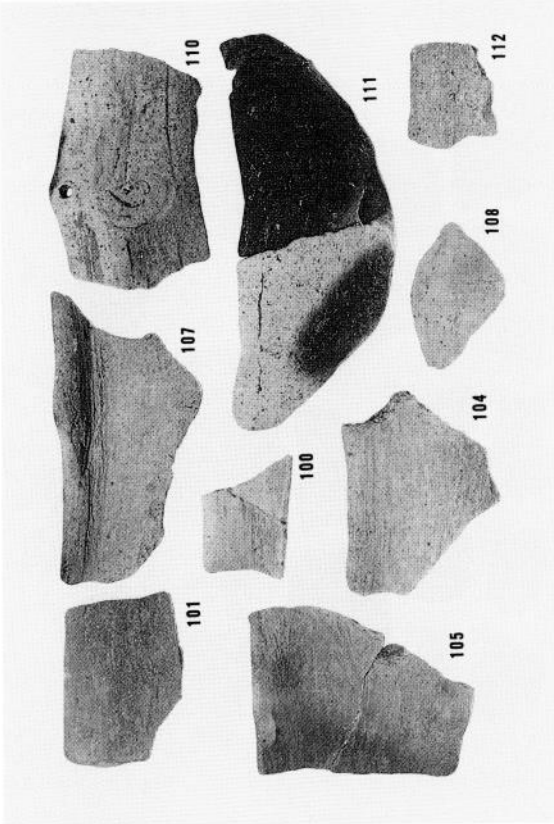
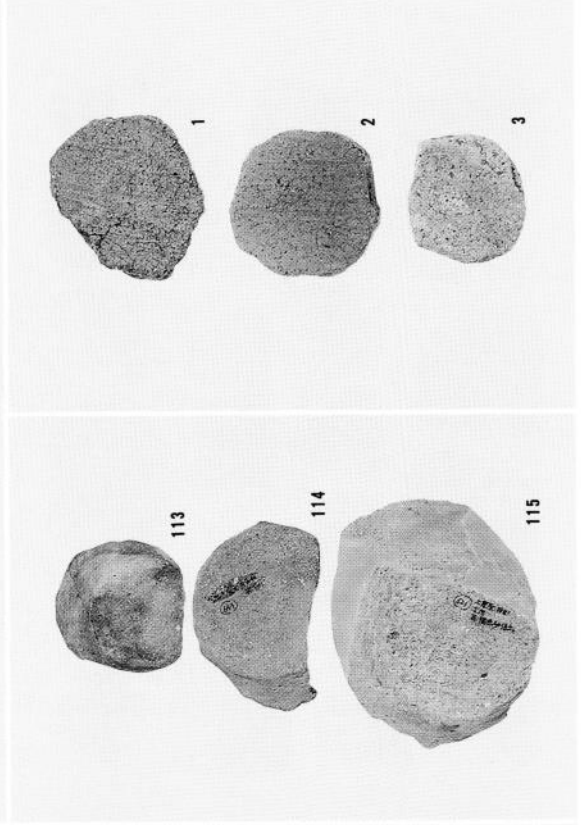
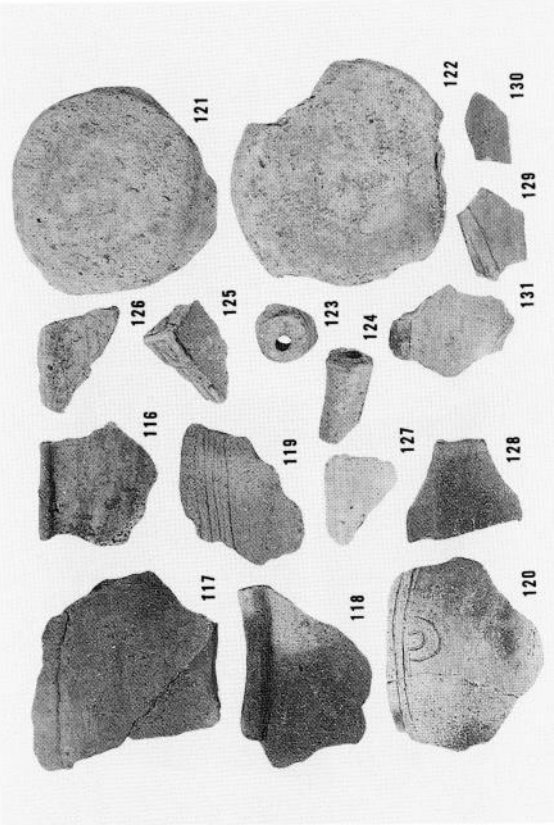
2号土坑出土土器、包含層出土土器I



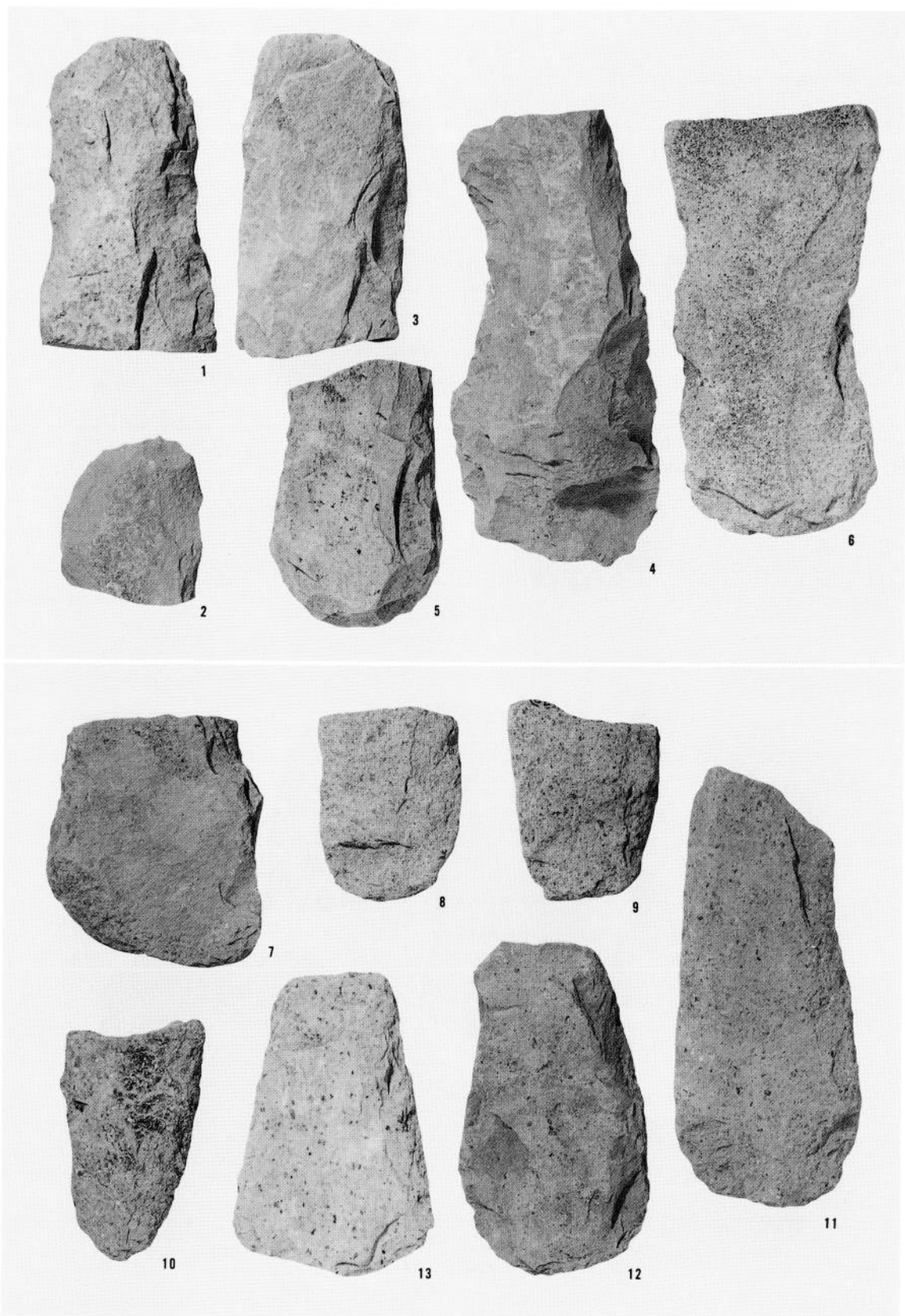
包含層出土土器 2



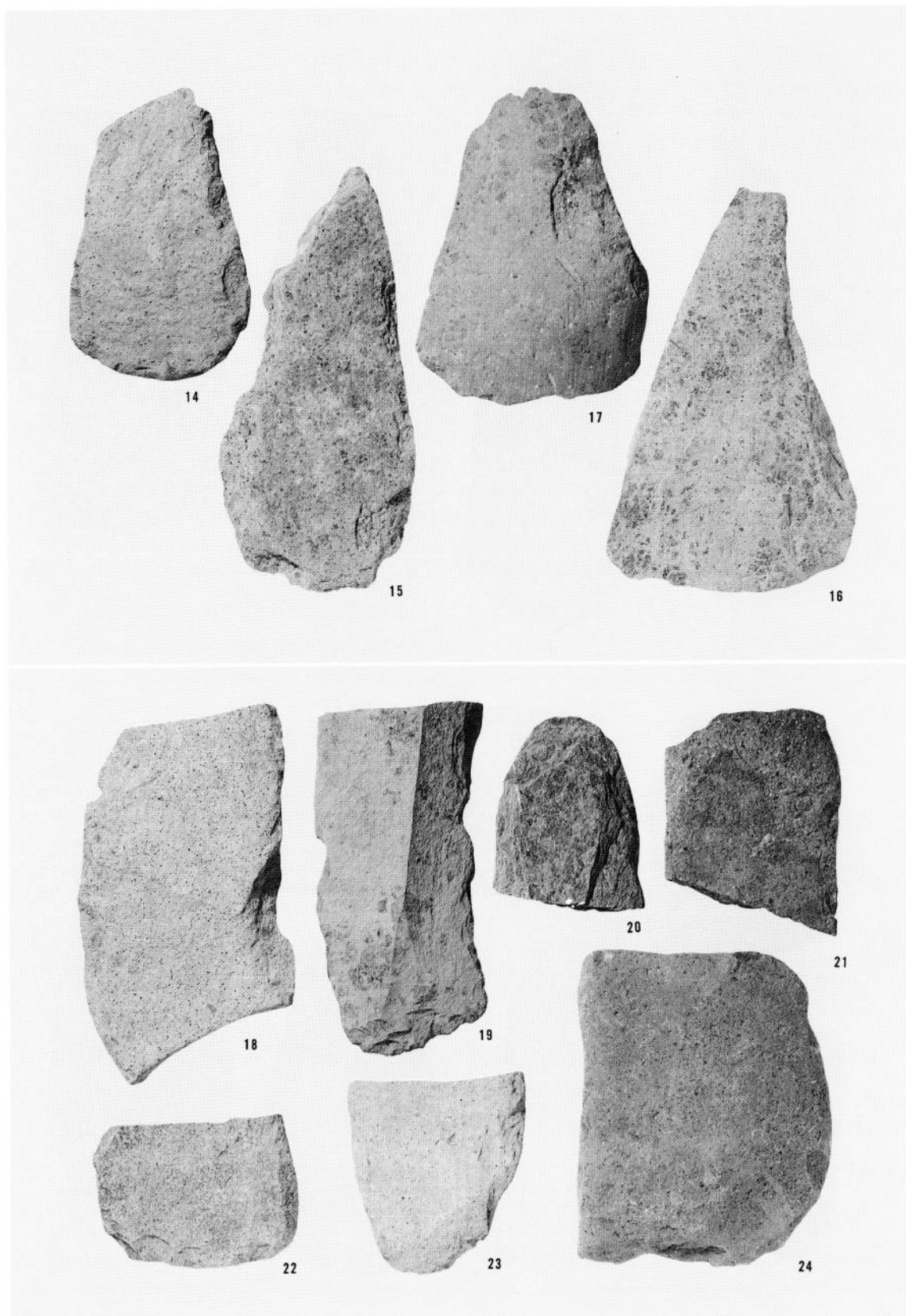
包含層出土土器③



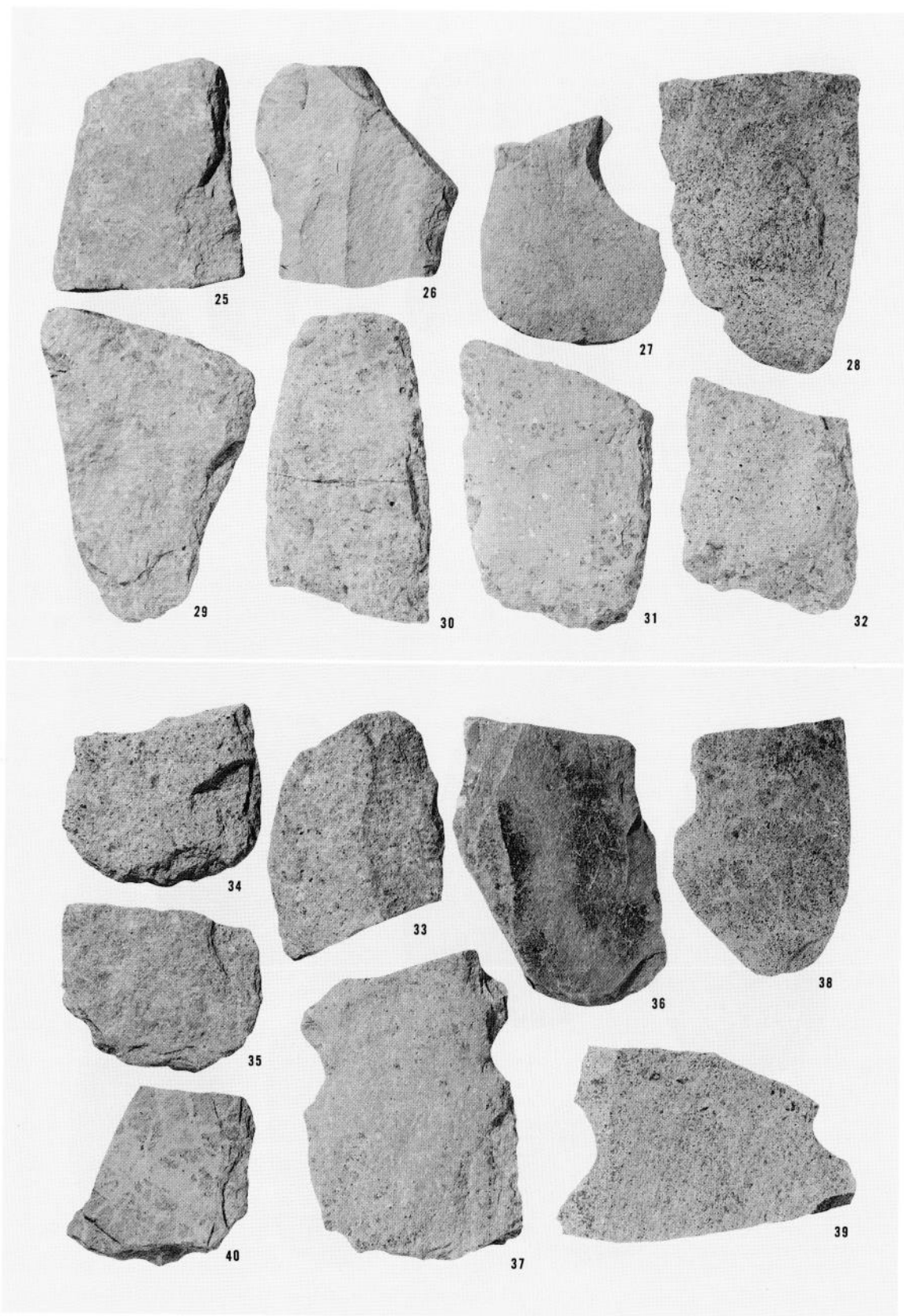
包含層出土土器 4・土製品



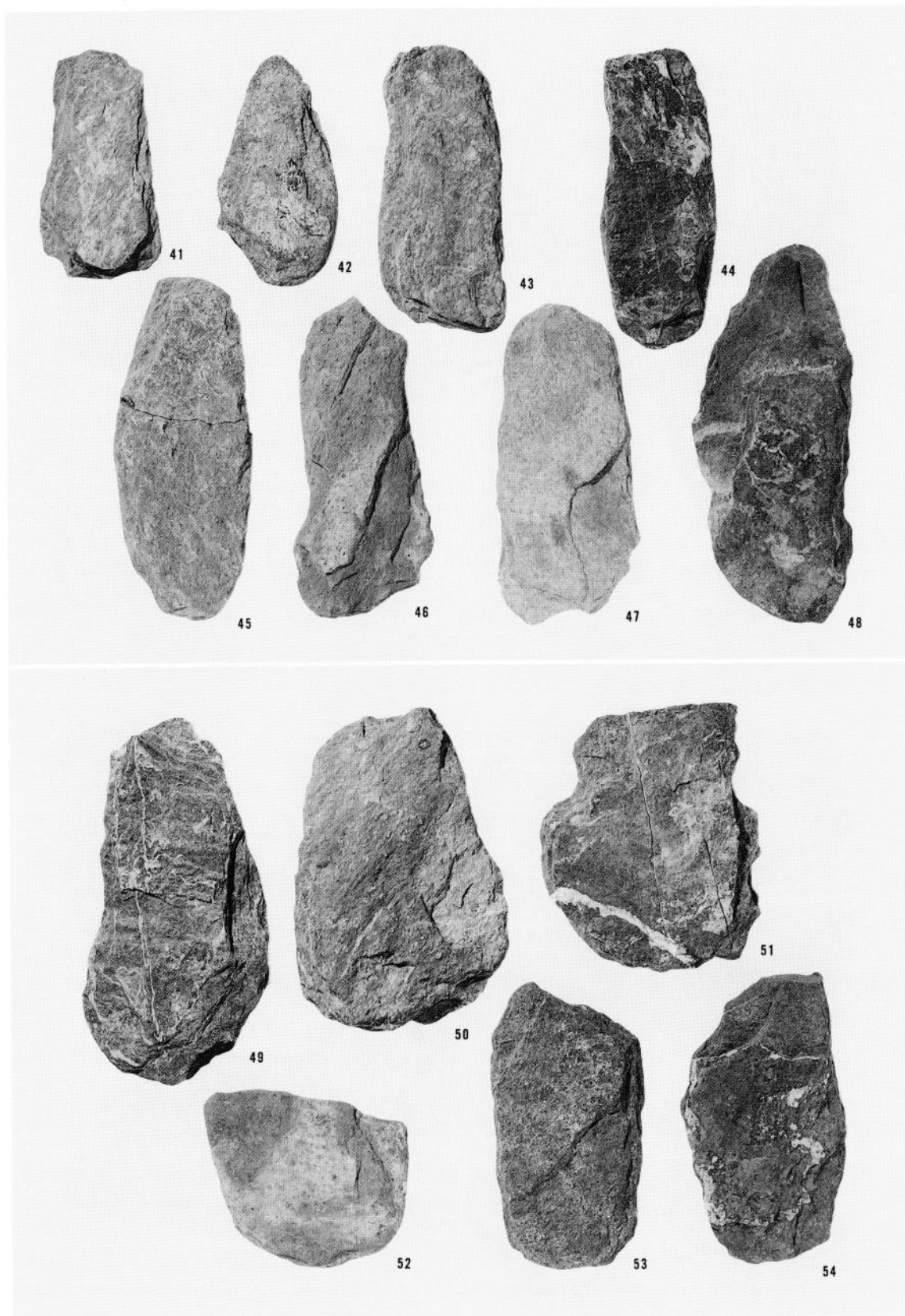
包含層出土石器 1



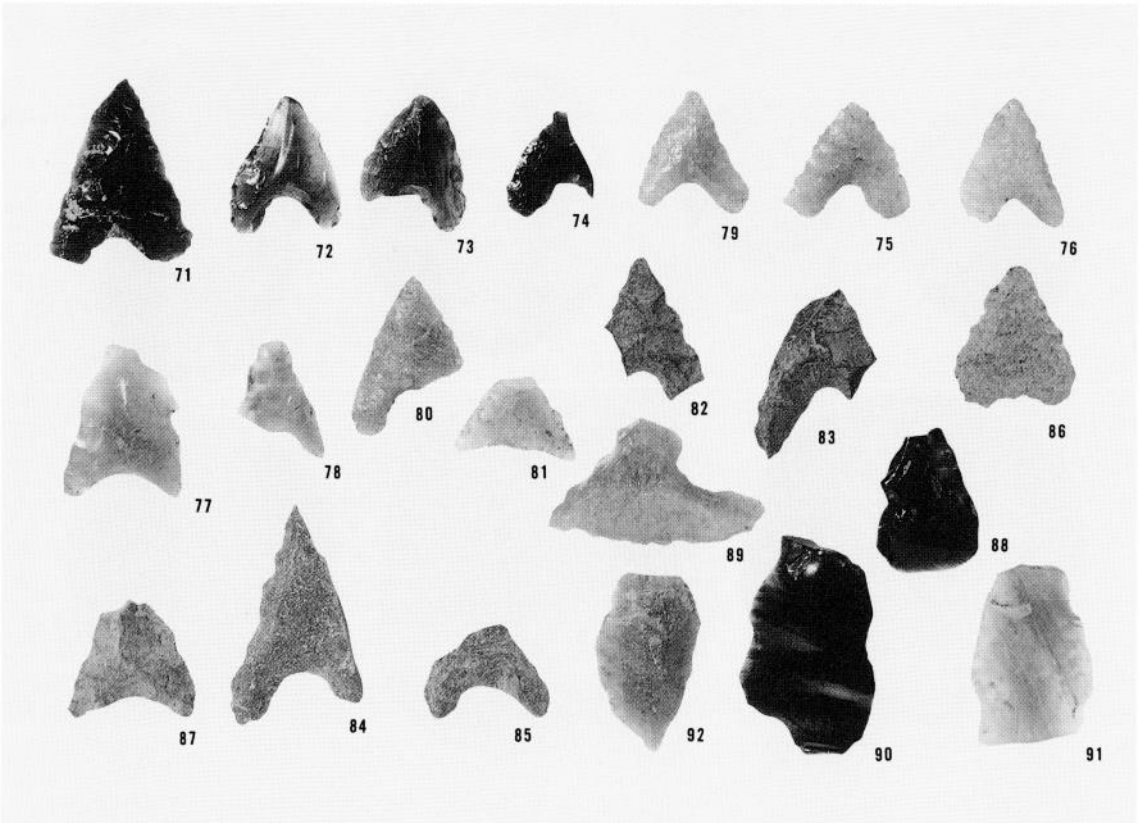
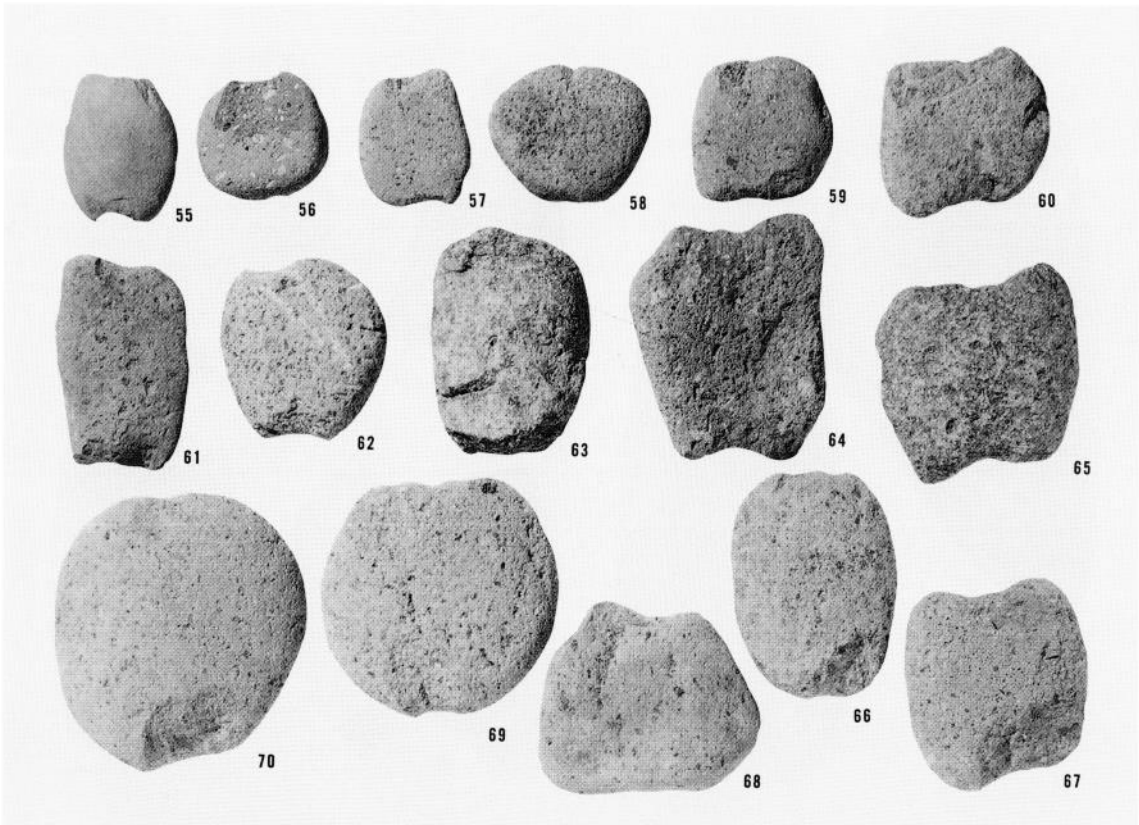
包含層出土石器 2



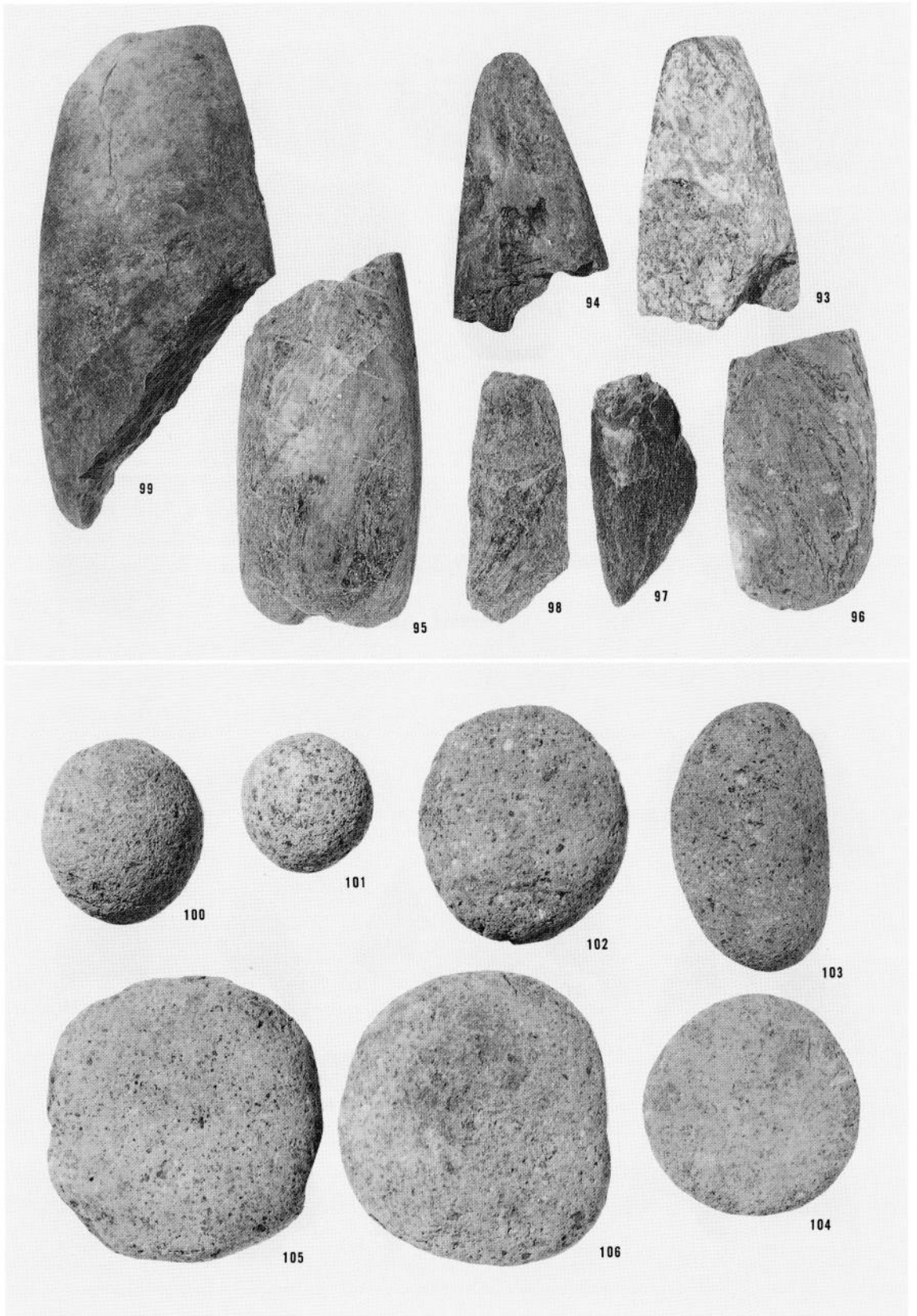
包含層出土石器 3



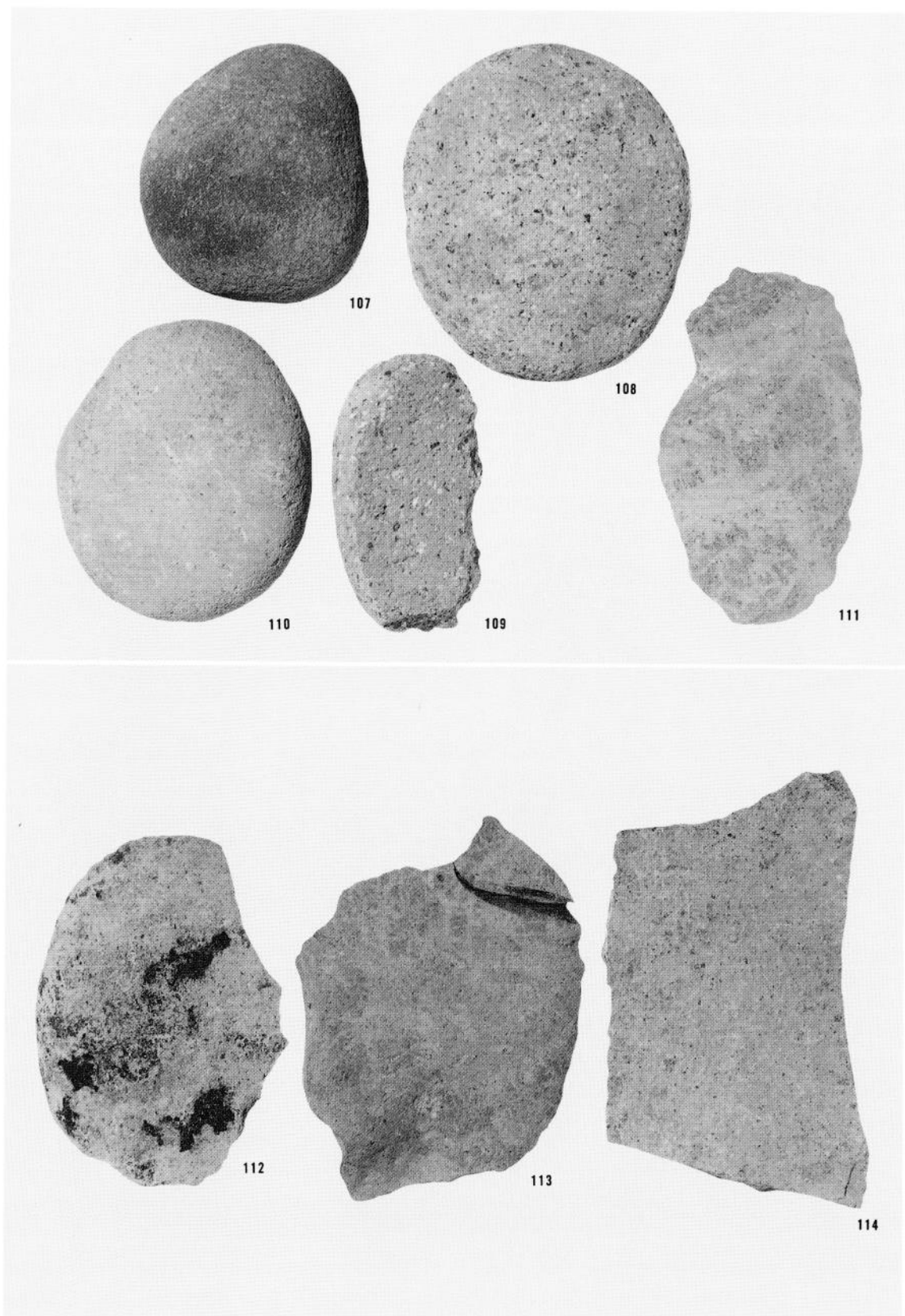
包含層出土石器 4



包含層出土石器 5



包含層出土石器 6



包含層出土石器 7

報 告 書 抄 録

フリガナ	カミトウバルイセキ							
書名	上唐原遺跡							
副書名	福岡県築上郡大平村所在上唐原遺跡の調査							
巻次	II							
シリーズ名	一般国道10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第5集							
編集者名	小池史哲							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812 福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦 1996年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カミトウバル 上唐原	フクオカケンチクジヨウケン 福岡県築上郡 タイヘイムラオオアザカミ 大平村大字上 トウバル 唐原 アザカハジ 字塚畑・田法寺 コイシハラ 小石原・下川原	40645	960179	33° 33' 30"	131° 11' 22"	19871201 19880506	12000	豊前バイ パス建設
ヤマサキ 山崎	フクオカケンチク 福岡県築上郡 シイダ マチオオアザコイジ 椎田町大字越路 アザヤマサキ 字山崎	40641	940082	33° 38' 45"	131° 2' 13"	19861022 19870304	7200	椎田道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
上唐原		縄文時代	住居跡 2 不整形竪穴 1 土坑 2 遺物包含層	縄文土器 石器 土製品				
山崎		縄文時代	縄文2号住居跡	炉内使用土器		椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告 -7- 上巻 山崎遺跡(I)1992. の補足		

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 7	登録番号 15

上唐原遺跡Ⅱ

豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 5 集

1996年(平成8年)3月31日発行

発 行 福岡県教育委員会
812 福岡市博多区東公園7-7
電話 (092) 651-1111

印 刷 大野印刷株式会社
812 福岡市博多区榎田2丁目2番65号
電話 (092) 414-1515